岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 209

総社遺跡
金井戸遺跡
北溝手遺跡

一般国道180号総社・一宮
バイパス建設に伴う発掘調査
1

2007

国土交通省岡山国道事務所
岡山県教育委員会

遺跡遠景（西上空から）

巻頭図版２

総社遺跡

１　土墨と堀（南上空から）

２　目貫　　３　内堀と土墨（北から）

金井戸遺跡

1　調査地遠景（西上空から）

2　炉２（東から）

3　炉３（南から）

巻頭図版 4

金井戸遺跡・北溝手遺跡

1　金井戸遺跡掘立柱建物群（上空から）

2　金井戸遺跡・北溝手遺跡出土古代の土器

3　金井戸遺跡出土石帯

4　北溝手遺跡出土越州窯青磁（左）・緑釉陶器（右）

北溝手遺跡

1　土壙墓１（南から）

2　土壙墓１出土土器

序

一般国道180号総社・一宮バイパスは、総社市及び岡山市西部の交通混雑を解消するとともに、同地域の社会・経済活動を支援することを目的とし計画された岡山市楢津から総社市井尻野に至る延長15.9㎞のバイパスです。

岡山市門前から総社市窪木間の約1.8㎞については、平成８年度までに４車線を供用しており、残る区間について引き続き事業を進めています。

国土交通省岡山国道事務所では、当バイパス整備区間が、備中国府推定地にも隣接するなど多くの遺跡が点在することから、バイパス整備に先立ち遺跡の保護、保存について岡山県教育委員会と協議を重ね、工事によって影響を受ける遺跡について発掘調査を委託してまいりました。

本書は、一連の発掘調査の中で平成13年から平成15年にかけて行われた総社遺跡、金井戸遺跡、窪木遺跡の調査報告書ですが、この発掘調査によって平安時代から戦国時代に至る数々の遺構・遺物が発見されたことは当地域が政治の中枢の一角を占めていたことを物語っており、貴重な資料が得られたと思っています。

これらの遺跡発掘調査の貴重な記録である本書が、埋蔵文化財に対する認識と理解を深める一助となり、また、学術・文化のため広く活用されることを心から期待いたします。

末筆ながら、この発掘調査並びに本書の編集に当たられた岡山県教育委員会をはじめとする関係各位のご尽力に対し、深甚なる謝意を表します。

平成19年３月

国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所
所　長　　長　谷　川　　朋　弘

序

一般国道180号は、岡山市から総社市を経て米子市に至る主要幹線道路の一つで、いわば瀬戸内海と日本海を結ぶ南北の大動脈とも呼べる道路です。このたび国土交通省は総社市及び岡山市西部の交通混雑の解消を画るとともに、同地域の社会・経済活動を促進することを目的として総社・一宮バイパスを建設することとなりました。

一方、建設が予定された地域は古代山城鬼ノ城のお膝元にあたり、備中国府推定地にも隣接するなど古来から重要な位置を占める一帯でもあります。岡山県教育委員会では、今回の工区内に所在する遺跡の保護・保存について関係機関と繰り返し協議を重ねてまいりましたが、遺跡の現状保存が困難な部分については発掘調査を行い、記録保存の措置を講じることとなりました。

本書には、平成13年から平成15年にかけて行われた総社遺跡・金井戸遺跡・窪木遺跡の発掘調査の記録を収載し、総社・一宮バイパス関連遺跡発掘調査報告書の第１冊目となります。

総社遺跡では地元で語り継がれていたとおり、戦国武将国府市正の居館と推定される遺構が見つかり、地域の伝承が発掘調査を通じて実証された好例といえるでしょう。金井戸遺跡では平安時代の役人の居宅もしくは役所と思われる建物群が姿を現し、北溝手遺跡では当時の高級品である青磁を大量に副葬した鎌倉時代の墓が見つかるなど、当地域が政治の中枢の一角を占めていたことを物語っています。以上の発掘調査の成果が過去と現在、そして未来をつなぐ架け橋となり、本書が埋蔵文化財に対する理解を深めるとともに、保護・保存に活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成に際しまして一般国道180号総社・一宮バイパス建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員の先生方から、有益なご指導・ご助言を賜りました。また、国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所をはじめ関係各位、さらに地元の方々から御理解と多大な御助力を賜りました。記して厚くお礼申し上げます。

平成19年３月

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　松　本　　和　男

例　言

1　本書は、岡山県教育委員会が一般国道180号総社・一宮バイパス建設に伴い、建設省中国地方建設局岡山国道工事事務所（現国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所）と岡山県の委託契約に基づき実施した、総社遺跡・金井戸遺跡・北溝手遺跡の発掘調査報告書である。契約事項は文化課（現文化財課）が行い、発掘調査及び報告書作成は岡山県古代吉備文化財センターが担当した。

遺跡名は発掘調査当時の名称を変更し、その照合については表２に明記した。

2　総社遺跡は総社市総社字北国府1766－１ほか、金井戸遺跡は総社市金井戸32ほか、北溝手遺跡は総社市北溝手592－１ほかに所在する。

以上の収載遺跡の位置については、第２図に示す。

3　発掘調査は平成13年度から平成15年度に実施し、本報告書に掲載した発掘調査の面積・担当者・期間等は表１・２に示すとおりである。

4　発掘調査及び報告書作成にあたっては一般国道180号総社・一宮バイパス建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、下記の方々に委員を委嘱した。対策委員各位からは終始有益な御指導と御助言をいただいた。記して深謝の意を表す次第である。

亀田修一（岡山理科大学）
澤田秀実（くらしき作陽大学）＜平成16年度から＞
中田啓司（岡山県遺跡保護調査団）
横田美香（岡山大学）＜平成13～15年度＞
新納　泉（岡山大学）

5　自然科学分野における鑑定・同定等については下記の諸氏・機関に依頼し、有益な教示を受けるとともに、一部の成果については報告文をいただいた。記して感謝の意を表する。

胎土分析	白石　純（岡山理科大学）
緑釉・灰釉鑑定	高橋照彦（大阪大学）
赤色顔料分析	パリノ・サーヴェイ株式会社

6　報告書の作成は平成17年度に実施し、渡邉恵里子が担当した。

7　本文の執筆は、調査と整理を担当した渡邉、調査を担当した宇垣匡雅・物部茂樹・石田爲成が分担して行い、文責は文末に示した。

8　本書の編集は渡邉が担当した。

9　遺物写真の撮影については江尻泰幸が担当した。

10　本書に記載した出土遺物及び図面・写真・マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325－３）に保管している。

凡　例

1　本報告書に用いた高度値は海抜高である。

2　遺跡の調査に用いたグリッドは日本測地系に準拠しており、平面直角座標Ⅴ系による。X＝－145.45km、Y＝－51.55kmを基準として10m間隔でグリッドを設定し、X軸では北から南にA～Vを、Y軸では西から東へ0～160を付した。(第5図参照)

3　図面に用いた方位は特に断りがない限り磁北で表示しており、遺跡付近の磁北は西偏7°6′を測る。

4　本報告書に掲載した遺構及び遺物の縮尺は次のとおり統一しているが、例外については縮尺率を図示または明記している。

〈遺構〉　掘立柱建物・柱穴列：1/60　　土壙墓・土壙：1/30　　堀断面：1/80　　溝断面：1/30

〈遺物〉　土器：1/4　　石製品：1/2、1/3　　木製品・土製品・金属製品：1/3　　銭貨：1/2

5　遺構番号および遺物番号は、遺跡毎に種類に分け、1から通し番号を付した。

6　本報告書の遺構配置図に示す遺構名は、次のように省略している。

掘立柱建物：**建**　　土壙墓：**墓**　　土壙：**土**　　土器溜まり：**溜**　　柱穴列：**柱**　　柱穴：**P**

7　遺物番号のうち、土器以外のものについてはその材質を示すため番号の前に次の略号を付した。

土製品：**C**　　石製品：**S**　　木製品：**W**　　金属製品：**M**

8　土器の実測図の中で中軸線左右に白抜きのあるものは、小片のため口径・底径がやや不確実なものである。

9　遺構図のうち、礫の堆積状況や被熱および炭の分布範囲については次のスクリーントーンで表現し、その他のものについては個別に明記している。羽口の被熱度合いもこれに準拠している。

10　土器観察表の土色は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）によるものであるが、土層断面の土色は各調査員の記述に従った。

11　報告書の時代・時期区分は一般的な政治史区分に準拠しているが、弥生時代及び古墳時代については備中南部の代表的な遺跡である津寺遺跡（「津寺遺跡2～5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98・104・116・127）の調査成果に負うところが大きい。また古代以降については誤解を避けるため、なるべく世紀を併用するよう努めた。

目　次

巻頭図版
序
例言
凡例
目次
第１章　発掘調査および報告書作成の経緯と経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　発掘調査の体制 …… 3
　第３節　発掘調査の経過 …… 4
　第４節　報告書作成の体制と経過 …… 5
第２章　遺跡の位置と環境 …… 8
第３章　総社遺跡 …… 11
　第１節　遺跡の概要 …… 11
　第２節　縄文時代から古墳時代の遺構・遺物 …… 12
　　1　概要 …… 12
　　2　土壙 …… 14
　　3　溝 …… 16
　　4　柱穴 …… 19
　　5　遺構に伴わない遺物 …… 19
　第３節　中世から近世の遺構・遺物 …… 21
　　1　概要 …… 21
　　2　堀 …… 21
　　3　溝 …… 27
　　4　土塁 …… 28
　　5　塚 …… 31
　　6　土壙 …… 38
　　7　下がり …… 39
　　8　遺構に伴わない遺物 …… 41
　第４節　小結 …… 43
第４章　金井戸遺跡 …… 44
　第１節　遺跡の概要 …… 44
　第２節　古代から中世の遺構・遺物 …… 47
　　1　掘立柱建物 …… 47
　　2　柱穴列 …… 56

3　土壙 …… 58
4　炉 …… 64
5　柱穴 …… 65
6　溝 …… 68
7　河道 …… 69
8　その他の遺構・遺物 …… 71
第３節　小結 …… 83
第５章　北溝手遺跡 …… 84
第１節　遺跡の概要 …… 84
第２節　古墳時代以前の遺構・遺物 …… 88
1　概要 …… 88
2　土壙 …… 88
3　河道 …… 89
4　遺構に伴わない遺物 …… 103
第３節　古代から中世の遺構・遺物 …… 104
1　概要 …… 104
2　土壙墓 …… 104
3　土壙 …… 106
4　炉 …… 107
5　柱穴 …… 107
6　溝 …… 108
7　土器溜まり …… 110
8　河道 …… 115
9　遺構に伴わない遺物 …… 126
第４節　近世の遺構・遺物 …… 127
1　概要 …… 127
2　土壙 …… 127
3　遺構に伴わない遺物 …… 127
第５節　小結 …… 129
第６章　まとめ …… 130

付載　自然科学的分野における分析・鑑定
1　金井戸遺跡土壙５出土赤色顔料 …… (パリノサーヴェイ株式会社) 133
2　金井戸遺跡・北溝手遺跡出土須恵器の胎土分析 …… (白石　純) 136

遺構一覧表 …… 138
遺物一覧表 …… 138
新旧遺構名称対照表 …… 148
図版
報告書抄録

図　目　次

＜総社遺跡＞

第１図　遺跡位置図（1/200,000）…… 1
第２図　遺跡位置図および周辺の字名（1/7,500）… 2
第３図　旧調査区配置図（1/5,000）…… 5
第４図　新調査区配置図（1/5,000）…… 5
第５図　グリッド設定図（1/5,000）…… 6
第６図　周辺主要遺跡分布図（1/50,000）…… 10
第７図　調査区配置図（1/2,500）・Ⅱ～Ⅴ区
　　堆積状況模式図（横1/600、縦1/80）…… 11
第８図　Ⅵ区縄文～古墳時代遺構全体図（1/300）… 12
第９図　Ⅶ区縄文～古墳時代遺構全体図（1/300）… 12
第10図　Ⅰ～Ⅴ区縄文～古墳時代
　　遺構全体図（1/300）…… 13
第11図　土壙１（1/30）…… 14
第12図　土壙２（1/60）…… 14
第13図　土壙３（1/60）…… 14
第14図　土壙４（1/30）…… 15
第15図　土壙５（1/30）…… 15
第16図　土壙６（1/30）…… 15
第17図　土壙７（1/30）…… 15
第18図　土壙８（1/60）…… 15
第19図　土壙８出土遺物（1/4）…… 16
第20図　溝１～３（1/30）・出土遺物（1/2）…… 16
第21図　溝４（1/80）・出土遺物（1/2、1/4）…… 17
第22図　溝５・６（1/30）・出土遺物（1/4）…… 18
第23図　溝７（1/30）・出土遺物（1/4）…… 19
第24図　溝８（1/30）…… 19
第25図　柱穴１（1/20）・柱穴1～3出土遺物(1/4) … 19
第26図　遺構に伴わない遺物（1/4、1/2）…… 20
第27図　堀１（1/80）・出土遺物（1/4）…… 21
第28図　Ⅵ区中世～近世遺構全体図（1/300）…… 22
第29図　Ⅶ区中世～近世遺構全体図（1/300）…… 22
第30図　堀２（1/80）…… 23
第31図　堀２出土遺物（1/4、1/3）…… 24
第32図　堀３（1/80）・出土遺物（1/4）…… 25
第33図　堀４（1/30）…… 25
第34図　堀４出土遺物（1/4、1/3）…… 26
第35図　堀５（1/60）・出土遺物（1/4）…… 26
第36図　溝９・10（1/120）…… 27
第37図　溝９（1/60）・出土遺物（1/4、1/3、1/2）　27
第38図　土塁（1/80）…… 29
第39図　土塁南斜面礫検出状況（1/150）…… 30
第40図　土塁関連出土遺物（1/4、1/3、1/2）…… 31
第41図　塚表土除去前の状況（1/200）…… 32
第42図　塚（1/80）…… 33
第43図　塚盛土除去後の状況（1/150）…… 34
第44図　塚関連出土遺物（1/4、1/3、1/2）…… 35
第45図　塚主体部（1/60）…… 36
第46図　主体部内出土遺物（1/4、1/2）…… 37
第47図　土壙９（1/30）…… 38
第48図　土壙10（1/30）…… 38
第49図　土壙11（1/30）…… 38
第50図　土壙12（1/30）…… 39
第51図　土壙13（1/60）…… 39
第52図　Ⅷ区トレンチ配置図（1/1,500）…… 40
第53図　トレンチ断面（上1/80・下1/100）…… 40
第54図　下がり関連出土遺物（1/4、1/3、1/2）…… 41
第55図　遺構に伴わない遺物（1/4、1/3、1/2、1/3）… 42
第56図　居館遺構の復元（1/2,000）…… 43

＜金井戸遺跡＞

第57図　調査区及びトレンチ配置図（1/2,000）
　　・堆積状況柱状模式図 …… 44
第58図　基盤内出土遺物（1/4）…… 44
第59図　遺構全体図（1/300）…… 45・46
第60図　掘立柱建物１（1/60）・出土遺物（1/4）… 47
第61図　掘立柱建物２（1/60）・出土遺物（1/4）… 48

第62図　掘立柱建物３（1/60）・出土遺物（1/4）… 49
第63図　掘立柱建物４（1/60）・出土遺物（1/4）… 50
第64図　掘立柱建物５（1/60）…… 51
第65図　掘立柱建物６（1/60）・出土遺物（1/3）… 52
第66図　掘立柱建物７（1/60）…… 53
第67図　掘立柱建物８（1/60）…… 54
第68図　掘立柱建物９（1/60）…… 55
第69図　掘立柱建物10（1/60）・出土遺物（1/3、1/4） 56
第70図　柱穴列１（1/60）…… 57
第71図　柱穴列２（1/60）・出土遺物（1/4）…… 57
第72図　柱穴列３（1/60）・出土遺物（1/4）…… 57
第73図　土壙１（1/30）・出土遺物①（1/4、1/3）… 58
第74図　土壙１出土遺物②（1/4）…… 59
第75図　土壙１出土遺物③（1/6）…… 60
第76図　土壙２（1/30）・出土遺物（1/4）…… 61
第77図　土壙３（1/20）・出土遺物（1/4）…… 61
第78図　土壙４（1/30）…… 61
第79図　土壙５（1/30）…… 61
第80図　土壙６（1/30）・出土遺物（1/4）…… 62
第81図　土壙７（1/30）・出土遺物（1/4、1/3）…… 62
第82図　土壙８（1/30）・出土遺物（1/4）…… 63
第83図　土壙９（1/30）・出土遺物（1/4）…… 63
第84図　土壙10（1/30）・出土遺物（1/3、1/4）…… 64
第85図　炉１（1/20）…… 64
第86図　炉２（1/20）…… 65
第87図　炉３（1/20）・出土遺物（1/3）…… 65
第88図　炉４（1/20）…… 65
第89図　柱穴１（1/20）・出土遺物（1/4）…… 66
第90図　柱穴２（1/20）・出土遺物（1/4）…… 66
第91図　柱穴出土遺物①（西）（1/4）…… 66
第92図　柱穴出土遺物②（中央）（1/4）…… 66
第93図　柱穴出土遺物③（東）（1/4）…… 67
第94図　柱穴出土遺物④（1/3）…… 67
第95図　溝１（1/30）・出土遺物（1/4）…… 68
第96図　溝２～５（1/60）…… 68
第97図　溝６（1/30）…… 68
第98図　溝７～10（1/60）…… 69
第99図　溝11～13（1/60）…… 69
第100図　溝10・12出土遺物（1/4）…… 69
第101図　河道（1/100）…… 70
第102図　河道出土遺物①（1/4）…… 70
第103図　河道出土遺物②（1/3）…… 71
第104図　土錘出土状況（1/20）…… 71
第105図　出土土錘①（1/3）…… 72
第106図　出土土錘②（1/3）…… 73
第107図　出土土錘③（1/3）…… 74
第108図　遺構に伴わない遺物①（1/4）…… 75
第109図　遺構に伴わない遺物②（1/4）…… 76
第110図　遺構に伴わない遺物③（1/4）…… 77
第111図　遺構に伴わない遺物④（1/4）…… 78
第112図　遺構に伴わない遺物⑤（1/4）…… 79
第113図　遺構に伴わない遺物⑥（1/3）…… 80
第114図　遺構に伴わない遺物⑦（1/3）…… 81
第115図　遺構に伴わない遺物⑧（1/3、1/2）…… 82
第116図　主要遺構の変遷（1/1,200）…… 83

＜北溝手遺跡＞

第117図　調査区配置図（1/2,000）・堆積状況模式図（横1/2,000、縦1/200）…… 84
第118図　Ⅰ～Ⅲ区遺構全体図（1/300）・堆積状況模式図（横1/300、縦1/60）…… 85・86
第119図　Ⅳ・Ⅴ区遺構全体図（1/600）・堆積状況模式図（横1/600、縦1/60）…… 87
第120図　土壙１（1/30）・出土遺物（1/4）…… 88
第121図　土壙２（1/30）…… 88
第122図　土壙２出土遺物（1/4）…… 89
第123図　河道１Ⅲ区出土遺物①（1/4、1/3）…… 90
第124図　河道１Ⅲ区出土遺物②（1/4）…… 91
第125図　河道１Ⅳ区（1/60）…… 91
第126図　河道１Ⅳ区砂層出土遺物①（1/4）…… 92
第127図　河道１Ⅳ区砂層出土遺物②（1/4）…… 93
第128図　河道１Ⅳ区砂層出土遺物③（1/4）…… 94
第129図　河道１Ⅳ区砂礫層出土遺物①（1/4）…… 95
第130図　河道１Ⅳ区砂礫層出土遺物②（1/4）…… 96
第131図　河道１Ⅳ区砂礫層出土遺物③（1/4）…… 97
第132図　河道１Ⅳ区砂礫層出土遺物④（1/4）…… 98
第133図　河道１Ⅳ区砂礫層出土遺物⑤（1/4）…… 99
第134図　河道１Ⅳ区砂礫層出土遺物⑥（1/4）……100
第135図　河道１Ⅳ区砂礫層出土遺物⑦（1/4）……101
第136図　河道１Ⅳ区出土土製品（1/3）……102
第137図　河道１Ⅴ区北壁（1/80）……102
第138図　河道１Ⅴ区出土遺物（1/4、1/3）……103
第139図　遺構に伴わない遺物（1/4）……103
第140図　土壙墓１（1/30）……104
第141図　土壙墓１出土遺物（1/4）……105
第142図　土壙墓２出土遺物（1/4）……105
第143図　土壙３（1/30）……106
第144図　土壙４・５（1/30）・出土遺物（1/4）……106
第145図　炉１（1/20）……107
第146図　炉２（1/20）……107
第147図　柱穴１～６出土遺物（1/3、1/4）……107
第148図　溝１（1/30）・出土遺物①（1/3）……108
第149図　溝１出土遺物②（1/4）……109
第150図　溝２（1/30）……109
第151図　溝２出土遺物（1/4）……110
第152図　土器溜まり１出土遺物（1/4）……110
第153図　土器溜まり２（1/40）・出土遺物①（1/3）111
第154図　土器溜まり２出土遺物②（1/4）……112
第155図　土器溜まり２出土遺物③（1/4）……113
第156図　土器溜まり３（1/30）……113

第157図　土器溜まり３出土遺物（1/4）……114
第158図　河道２　Ⅰ区北壁（1/80）……115
第159図　河道２　Ⅰ区南壁（1/80）……116
第160図　河道２　Ⅰ区出土遺物①（1/4）……116
第161図　河道２　Ⅰ区出土遺物②（1/4）……117
第162図　河道２　Ⅰ区出土遺物③（1/4）……118
第163図　河道２　Ⅰ区出土遺物④（1/4）……119
第164図　河道２　Ⅰ区出土遺物⑤（1/3）……120
第165図　河道２　Ⅰ区出土遺物⑥（1/3）……121
第166図　河道２　Ⅱ区南壁（1/60）……121
第167図　河道２　Ⅱ区出土遺物（1/4、1/3）……122
第168図　河道２　Ⅲ区北壁西端（1/60）……123
第169図　河道２　Ⅲ区出土遺物①（1/4）……123
第170図　河道２　Ⅲ区出土遺物②（1/4、1/3）……124
第171図　河道３（1/80）・出土遺物①（1/4）……125
第172図　河道３出土遺物②（1/4、1/3）……126
第173図　遺構に伴わない遺物（1/4）……126
第174図　土壙６（1/30）……127
第175図　土壙７（1/30）……127
第176図　遺構に伴わない遺物（1/4、1/3、1/2）…128
第177図　主要遺構変遷図（1/4,000）……131
第178図　金井戸・北溝手遺跡土器法量分布図……132

巻頭図版目次

巻頭図版１　遺跡遠景（西上空から）
巻頭図版２　１　土塁と堀（南上空から）
　　２　目貫
　　３　内堀と土塁（北から）
巻頭図版３　１　調査地遠景（西上空から）
　　２　炉２（東から）
　　３　炉３（南から）
巻頭図版４　１　金井戸遺跡掘立柱建物群（上空から）
　　２　金井戸・北溝手遺跡出土古代の土器
　　３　金井戸遺跡出土石帯
　　４　北溝手遺跡出土越州窯青磁（左）・緑釉陶器（右）
巻頭図版５　１　土壙墓１（南から）
　　２　土壙墓１出土土器

図 版 目 次

＜総社遺跡＞

図版１　１　塚（西南から）
　　２　塚断ち割り（南から）
　　３　塚主体部（南東から）
図版２　１　堀１（南東から）
　　２　堀３（西から）
　　３　溝１・２・４（南西から）
図版３　１　溝５・６西半（北東から）
　　２　溝７（西北から）
　　３　Ⅷ区弥生時代全景（北西から）
図版４　１　土壙１（南から）
　　２　土壙３（南西から）
　　３　土壙５（南西から）
　　４　土壙９（南東から）
　　５　土壙10（西から）
　　６　土壙11（南西から）
図版５　１　縄文土器・弥生土器
　　２　石製品
図版６　遺構内出土土器・陶磁器
図版７　１　鉄・青銅製品
　　２　土製品
　　３　木製品

＜金井戸遺跡＞

図版８　１　掘立柱建物１（東から）
　　２　掘立柱建物２（南から）
　　３　掘立柱建物３（南から）
図版９　１　掘立柱建物８（南から）
　　２　掘立柱建物９・柱穴列２（南から）
　　３　掘立柱建物10（南から）
図版10　１　溝１（西南から）
　　２　溝２～５（南東から）
　　３　溝11～13（南東から）
図版11　１　土壙１（南東から）
　　２　土壙２（南から）
　　３　土壙９（南西から）
図版12　１　土壙３（東から）
　　２　土壙５（南西から）
　　３　土壙８（西から）
　　４　柱穴列２－Ｐ２（南から）

5　土錘出土状況（南から）
図版13　1　土壙１出土土器
2　遺構内出土土器・瓦
図版14　1　遺構内出土土器
2　遺構に伴わない遺物①
図版15　1　遺構に伴わない遺物②
2　土錘
3　羽口
図版16　1　鉄製品
2　土製品
3　石製品

＜北溝手遺跡＞
図版17　1　Ⅰ区古代全景（東から）
2　Ⅲ区北半完掘状況（南西から）
3　Ⅴ区完掘状況（南から）
図版18　1　土壙墓１（南東から）
2　土壙１（南西から）
3　土壙２（西から）
図版19　1　溝１（西から）
2　溝２（南東から）
3　土器溜まり２（南から）
図版20　1　土器溜まり３（南から）
2　河道２　Ⅰ区北壁（南東から）
3　河道２　Ⅲ区北壁（南西から）
図版21　弥生時代の土器・土製品
図版22　古墳時代の土器
図版23　1　土壙１・２出土土器
2　遺構内出土土器・土製品
図版24　遺構内出土土器
図版25　1　河道２・３出土瓦
2　河道２・３出土石製品・土製品
図版26　1　土壙墓１出土青磁・青白磁
2　土器溜まり３出土土器
図版27　1　古代～中世の青磁・白磁
2　古代～中世の鉄製品
図版28　1　近世の陶磁器
2　近世の土製品
3　近世の鉄・青銅製品

写真目次

＜総社遺跡＞
写真１　土器23出土状況（西から）…… 20
写真２　堀２西側平坦面の溝状遺構
内礫出土状況（南東から）…… 24
写真３　堀３内杭出土状況（東から）…… 25
写真４　堀４堆積状況（西から）…… 26
写真５　溝９堆積状況（東から）…… 27
写真６　溝10堆積状況（西から）…… 28
写真７　銅銭出土状況（北から）…… 37
写真８　噴砂の状況（西から）…… 41

＜金井戸遺跡＞
写真９　建物８－Ｐ１・12（南から）…… 53
写真10　土壙10遺物出土状況（南から）…… 64
写真11　土器226・245出土状況（西から）…… 78

＜北溝手遺跡＞
写真12　Ⅳ区南壁（北から）…… 89
写真13　土器24・25出土状況（西から）…… 91
写真14　土器66出土状況（西から）…… 93
写真15　河道１　Ⅳ区出土初期須恵器（1/3、1/2）102
写真16　河道１　Ⅴ区出土初期須恵器（1/3）……103
写真17　土器247出土状況 ……103
写真18　土器・骨散布状況（南西から）……105
写真19　遺物出土状況（西から）……108
写真20　405・406出土状況（南から）……108
写真21　溝２内礫検出状況（西南から）……109
写真22　土器溜まり１検出状況（東から）……110

表目次

表１　調査一覧表…… 4
表２　調査区新旧対照表および担当者一覧 …… 5
表３　文化財保護法に基づく文書一覧表 …… 7
表４　掘立柱建物一覧表……138
表５　土器観察表……138
表６　石製品一覧表……144
表７　金属製品一覧表……144
表８　銭一覧表……145
表９　土製品一覧表……145
表10　新旧遺構名称対照表……148

第１章　発掘調査および報告書作成の経緯と経過

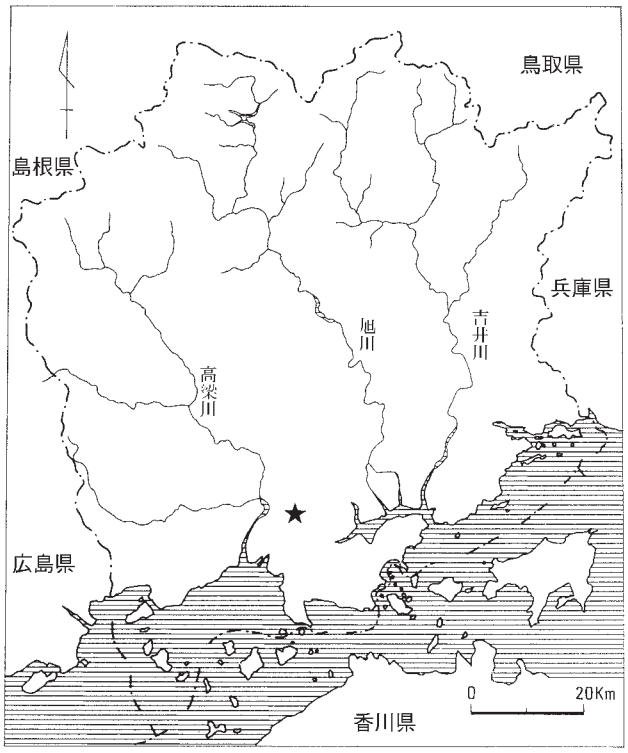
第１節　調査に至る経緯

一般国道180号は、岡山市西部から総社市、高梁市、新見市を経て鳥取県へ至る主要幹線道路で、特に岡山市西部から総社市の間は利用頻度が高く、昭和40年代以降、交通量は飛躍的に増大している。この交通量の増大に対応し、交通渋滞の解消を目的として岡山市楢津から総社市井尻野間の延長15.9㎞のバイパスの建設が計画され、昭和48年に総社市長良～井尻野間の総社地区が事業化された。

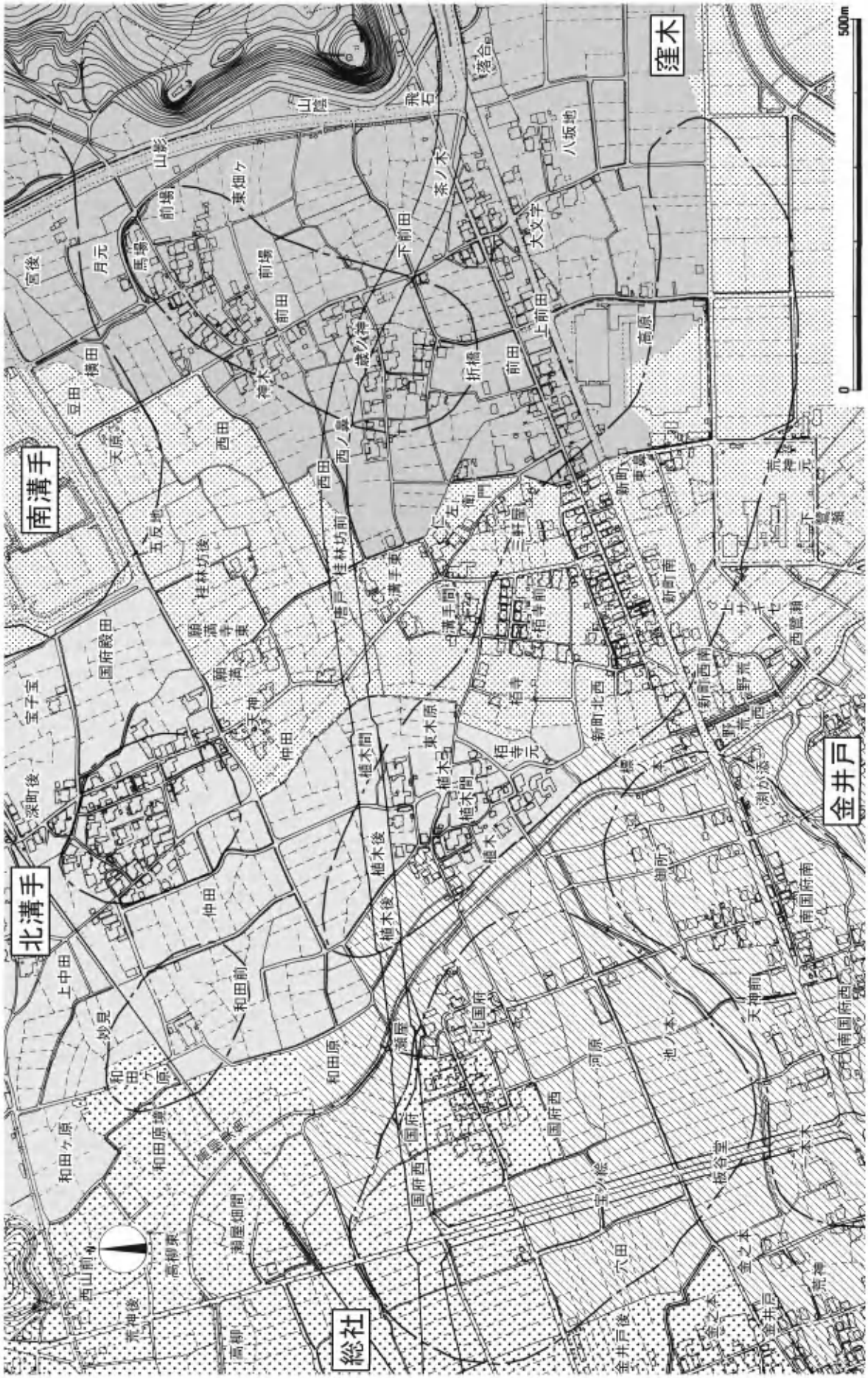
以来、路線内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議が重ねられたが、昭和63年には総社地区の都市計画決定がなされ、平成３年には一部用地買収や工事が着手された。一方、文化課（現文化財課）は協議を続けるとともに計画路線内の現地踏査を行い、バイパス関連事業にかかわる遺跡の把握に努めていた。そのような中で平成４年９月に建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）から総社市長良～窪木間について文化財保護法第57条の３に基づく協議書が岡山県教育委員会に提出され、文化課が立会等の対応を行い、平成８年度までに、現道を拡幅する形で４車線の供用が開始された。

さらに平成10年には総社市窪木～総社の埋蔵文化財包蔵地の有無の照会が行われたが、総社市窪木から総社地区一帯は服部条里が良好に遺存する地域であり、用地内にも周知の遺跡が存在するほか、備中国府推定域にも隣接するなど埋蔵文化財の取り扱いに格段の注意を要する地域であった。そこで埋蔵文化財の保護についてさらに協議、交渉を重ねたが、諸般の事情から現状保存が困難であるとの結論に達し、平成13年２月20日付けで埋蔵文化財発掘の通知（埋蔵文化財保護法第57条の３）を受理し、やむなく用地内全面を対象として発掘調査を開始することとなった。

以上の経緯に基づき、岡山県教育委員会は平成13年度から用地買収等の条件整備の整った部分から発掘調査に着手し、平成15年度までに総社遺跡、金井戸遺跡、北溝手遺跡の調査を完了した。なお、平成18年度現在もバイパス関連の発掘調査は継続中で、平成15年度以降調査を進めている南溝手遺跡・窪木遺跡については調査の終了をまって、あらためて報告書を作成する予定である。　（渡邉）



第１図　遺跡位置図（1/200,000）



第２図　遺跡位置図および周辺の字名（□ありは大字、ほか小字）（1/7,500）

第２節　発掘調査の体制

平成13年度

岡山県教育委員会

教 育 長　宮野正司

岡山県教育庁

教育次長　國貞忠克

文化課

課　　長　松井英治

課長代理（埋蔵文化財係長）　松本和男

課長代理　藤井守雄

主　　任　奥山修司

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　正岡睦夫

次　　長　能登原巧

〈総務課〉

課　　長　安西正則

係　　長　田中秀樹

主　　任　小坂文男

〈調査第一課〉

課　　長　高畑知功

課長補佐（第一係長）　平井泰男

文化財保護主査　宇垣匡雅（調査担当）

文化財保護主任　窪津幸司（調査担当）

文化財保護主事　物部茂樹（調査担当）

平成14年度

岡山県教育委員会

教 育 長　宮野正司

岡山県教育庁

教育次長　三浦一男

文化課

課　　長　西山　猛

課長代理（埋蔵文化財係長）　松本和男

課長代理　宮田正彦

文化財保護主任　尾上元規

主　　事　浜原浩司

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　正岡睦夫

次　　長　藤川洋二

〈総務課〉

課　　長　安西正則

課長補佐（総務係長）　田中秀樹

主　　任　小坂文男

〈調査第一課〉

課　　長　高畑知功

課長補佐（第一係長）　平井泰男

文化財保護主幹　宇垣匡雅（調査担当）

文化財保護主任　窪津幸司（調査担当）

主　　事　石田爲成（調査担当）

平成15年度

岡山県教育委員会

教 育 長　宮野正司

岡山県教育庁

教育次長　三浦一男

文化財課

課　　長　西山　猛

課長代理　田村啓介

課長補佐（埋蔵文化財係長）　平井泰男

文化財保護主任　尾上元規

主　　事　浜原浩司

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　正岡睦夫

次　　長　藤川洋二

文化財保護参事　松本和男

〈総務課〉

課　　長　中田哲雄

課長補佐（総務係長）　笏本弘忠

主　　任　小坂文男

〈調査第一課〉

課　　長　岡田　博

課長補佐（第一係長）　光永真一

文化財保護主査　徳田正紀（調査担当）

文化財保護主任　渡邉恵里子（調査担当）

主　　事　石田爲成（調査担当）

第３節　発掘調査の経過

１　調査の経過

バイパスが施工される範囲は総社市総社字北国府から総社市窪木字茶ノ木にかけての地区で、総延長約1.8㎞に及ぶ。過去の調査から当地域一帯に遺跡が広がっていることが想定され、用地全面が発掘調査対象地となっていた。

発掘調査は平成13年度に調査員３名の体制で開始し、西から東へ総社遺跡・金井戸遺跡・北溝手遺跡と連続する遺跡のうち、最も西に所在する総社遺跡の西端から着手し、順次東へと調査区を広げていった。総社遺跡西部にあたるⅠ～Ⅴ区は遺構密度が低かったため調査の進行は早かったが、調査区の中央を貫通する形となる用水路が存在するため夏期に継続して調査を進めることが困難となり、東半の調査は年度後半に送ることとして、やむを得ず調査区を微高地にあたる北溝手遺跡Ⅳ区に移した。その後、総社遺跡東端部の樹木・竹林の伐採を終えた段階で総社遺跡東半の調査に戻った。東半にあたるⅥ区には後述のように中世の居館遺構や近世の大規模な塚などが存在していたため調査にかなりの期間と労力を要することとなった。また総社遺跡内には墓地が造営されており、移転の必要が生じたため、墓地移転予定地（旧金井戸遺跡Ａ１区）の調査も併せて実施した。墓地部分については墓地移転の実施後平成15年度での対応となった。なお中世の居館遺構は、地域に伝わる国府市正の居館と推定され、堀などの発掘成果について平成14年４月22日に記者発表を実施した。また塚については現在も信仰の対象とされているため、隣接地に移設される運びとなった。

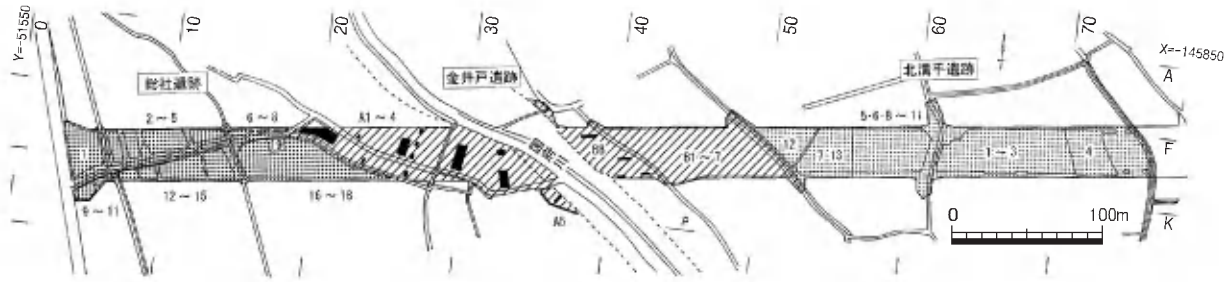
平成14年度には北溝手遺跡の東部にあたるⅤ区（旧４区）から調査に着手し、河道部の調査を行った。その後、隣接地との協議及び環境整備が整った段階で遺跡中央から東部にかけての調査を実施し、北溝手遺跡の調査を完了した。これに引き続いて金井戸遺跡の調査を進めたが、Ⅰ区では古代の建物群が検出され、この調査区の一部については調査を平成15年度に継続して行うこととなった。また国府川西岸に位置する総社遺跡Ⅶ・Ⅷ区のトレンチ調査を行うとともに、南溝手遺跡・窪木遺跡など路線内東側に所在する遺跡の詳細を把握するため一次調査を実施した。その結果、総社遺跡Ⅷ区は低位部および旧流路と判断されたためトレンチをもって調査を終了した。一方、総社遺跡Ⅶ区には弥生時代の微高地が確認されたため、次年度にあらためて全面調査を行うこととした。

平成15年度はまず金井戸遺跡微高地部分の全面調査を継続して行い、６月に調査を完了した。これと並行して国府川東岸部分のトレンチ調査を行ったが、国府川の急流路もしくは氾濫源と判断されたため、トレンチを以て調査を終了した。その後一旦調査はさらに東の南溝手遺跡に移ったが、年度途中で総社遺跡の墓地移転が完了したため墓地跡地及びⅦ区の調査を行い、総社遺跡の調査を完了した。

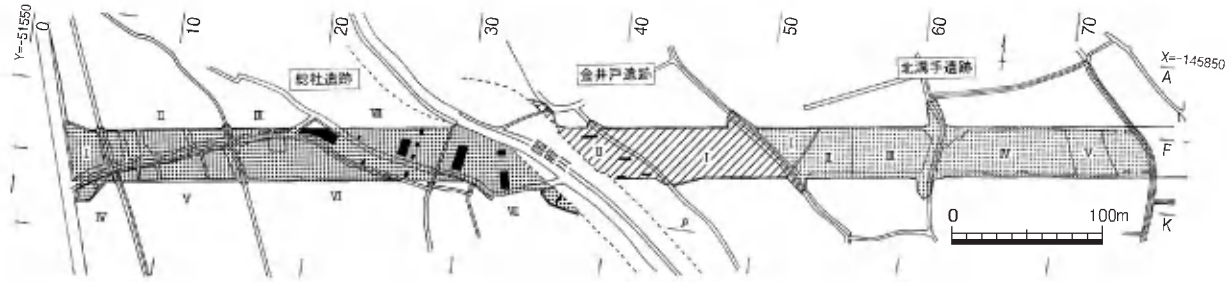
表１　調査一覧表

遺跡名	面積（㎡）	Ｈ１３	Ｈ１４	Ｈ１５
総社遺跡	7,148			
金井戸遺跡	3,265			
北溝手遺跡	7,378			

なお原則として遺跡名は現行の行政区画でいう大字に準じており、調査時点では総社遺跡Ⅶ区は金井戸Ａ遺跡５区、総社遺跡Ⅷ区は金井戸Ａ遺跡２～４区と呼称していた（第２図参照）。しかし調査の結果、前者は周知の総社遺跡の微高地の一部に包括され、後者はその縁辺部にあたることが明らかとなったため、遺跡の実態に則し、両調査区を総社遺跡として報告する。　　（宇垣・渡邉）



第３図　旧調査区配置図（1/5,000）



第４図　新調査区配置図（1/5,000）

表２　調査区新旧対照表および担当者一覧

新遺跡名	新調査区名	旧遺跡名	旧調査区名	調査年度	面積（㎡）	担当者
総社遺跡	Ⅰ　区	総社遺跡	１区	H　13	6,276	宇垣匡雅・物部茂樹・窪津幸司
	Ⅱ　区		２～５区			
	Ⅲ　区		６～８区			
	Ⅳ　区		９～11区			
	Ⅴ　区		12～15区			
	Ⅵ　区		16～18区			
			19区	H　15	74	渡邉恵里子・石田爲成・徳田正紀
	Ⅶ　区	金井戸遺跡	Ａ５区	H　15	218	渡邉恵里子・徳田正紀
	Ⅷ　区		Ａ１～５区	H　14	580	宇垣匡雅・石田爲成・窪津幸司
金井戸遺跡	Ⅰ　区		Ｂ１～５区	H　14	1,526	宇垣匡雅・石田爲成・窪津幸司
			Ｂ６・７区	H　15	1,739	渡邉恵里子・石田爲成・徳田正紀
	Ⅱ　区		Ｂ８区			
北溝手遺跡	Ⅰ　区	北溝手遺跡	12区	H　14	4,376	宇垣匡雅・石田爲成・窪津幸司
	Ⅱ　区		７・13区			
	Ⅲ　区		５・６・８～11区			
	Ⅴ　区		４区			
	Ⅳ　区		１～３区	H　13	3,002	宇垣匡雅・物部茂樹・窪津幸司

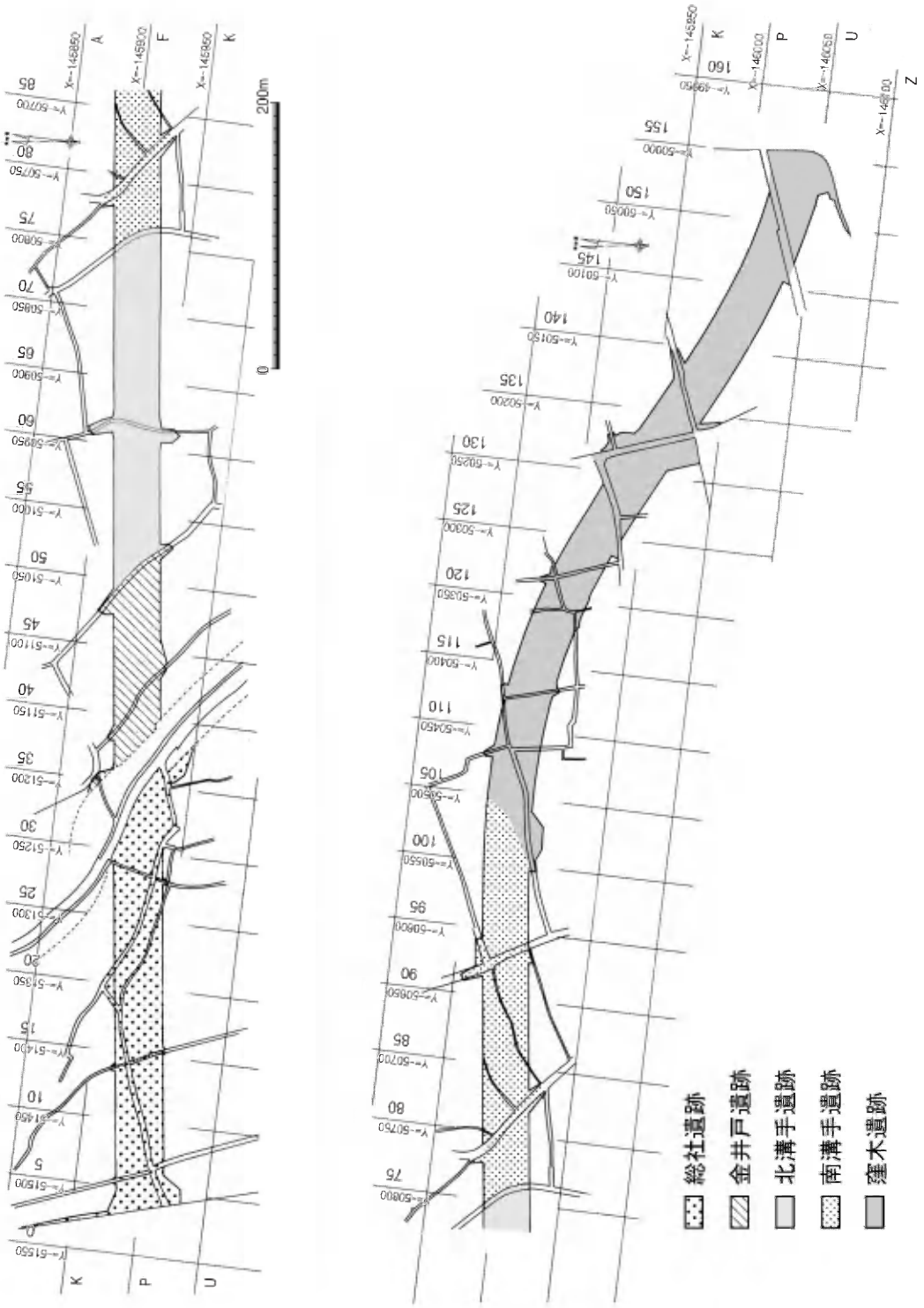
第４節　報告書作成の体制と経過

国道180号総社・一宮バイパス建設に伴う発掘調査の報告書の作成は平成17年度から岡山県古代吉備文化財センターにおいて行うこととなったが、予定路線内の発掘調査は依然継続しており、調査の完了した総社遺跡・金井戸遺跡・北溝手遺跡の３遺跡から着手することとなった。調査員１名が任にあたり、文化財センター職員の協力を得て実施した。

本書に掲載する３遺跡の調査対象地は幅36ｍ、東西700ｍにおよぶ長大な地域である。各遺跡およ

び遺構の絶対的な位置を現すため、国土座標に基づいた10ｍ単位のグリッドを設定し、南北方向にＡ～Ｚ、東西方向に０～160の略号を付した（第５図）。また第１節で述べたように金井戸遺跡として調査された一部を総社遺跡に含め、調査区名も再編した（第３・４図）。

出土遺物は総社遺跡16箱、金井戸遺跡27箱、北溝手遺跡116箱を数える。これらのうち明確な遺構に伴うものは少なく、特に金井戸遺跡や北溝手遺跡の多くが基盤層や包含層として取り上げられたものであったが、出土地点や層位から弥生～古墳時代もしくは古代～中世の河道内堆積層出土と判断し、極力掲載できるように努めた。（渡邉）



第５図　グリッド設定図（1/5,000）

平成17年度

岡山県教育委員会

教 育 長　　宮野正司

岡山県教育庁

教育次長　　釜瀬　司

文化財課

課　　長　　芦田和正

参　　事　　田村啓介

総括副参事（埋蔵文化財班長）

平井泰男

主　　任　　小林利晴

主　　事　　金出地敬一

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　松本和男

次　　長（総務課長）　　内田　猛

参　　事　　平松郁男

参　　事　　高畑知功

〈総務課〉

総括副参事（総務班長）　　若林一憲

主　　任　　小川紀久

〈調査第一課〉

課　　長　　岡田　博

総括副参事（第二班長）　　江見正己

主　　査　　渡邉恵里子（整理担当）

表３　文化財保護法に基づく文書一覧表

埋蔵文化財発掘の通知（第94条／旧第57条の３）

岡山県文書番号　日付	種類及び名称	所在地	面積（㎡）	目的	届出者	期間	処理の内容・理由
教文理第3948号 H4.9.8	散布地・水田跡 鬼畑遺跡・服部条里関連	総社市長良地内	1,500	道路改良	建設省中国地方建設局長　豊田高司	H4.8.1 ～ H5.3.31	・工事施工に際して岡山県教育委員会職員が立ち会う。 ・立ち会いの結果重要な遺構等が発見された場合は別途協議する。
教文理第1556号 H13.2.20	集落跡 総社遺跡ほか	総社市北国府、金井戸、北溝手、南溝手、窪木地内	5,500	道路工事	国土交通省中国地方整備局長	H13.4.1 ～	・工事着手前に発掘調査を実施する。 ・調査の結果重要な遺構等が発見された場合は別途協議する。

埋蔵文化財発掘調査の報告（第99条／旧第58条の２）

文書番号　日付	種類及び名称	所在地	面積（㎡）	原因	報告書	担当者	期間
岡古調第17号 H13.4.5	集落跡・官衙跡・城館跡 総社遺跡	総社市総社字北国府1766－1ほか	5,400	道路工事	岡山県古代吉備文化財センター所長	宇垣匡雅・窪津幸司・物部茂樹	H13.4.1 ～ H14.3.31
岡古調第122号 H13.6.29	集落跡 北溝手遺跡	総社市北溝手	3,002			宇垣匡雅・窪津幸司・物部茂樹	H13.7.2 ～ 9.30
岡古調第38号 H14.4.5	散布地 北溝手遺跡	総社市北溝手628ほか	760			宇垣匡雅・窪津幸司・石田爲成	H14.4.1 ～ H14.5.31
岡古調第39号 H14.4.5	城館跡 金井戸遺跡	総社市金井戸16	330			宇垣匡雅・窪津幸司・石田爲成	H14.4.1 ～ H14.4.30
岡古調第136号 H14.7.3	散布地 北溝手遺跡	総社市北溝手595－1ほか	3,640			宇垣匡雅・窪津幸司・石田爲成	H14.7.3 ～ H15.3.31
岡古調第243号 H14.10.22	散布地 金井戸遺跡	総社市金井戸34ほか	3,167			宇垣匡雅・窪津幸司・石田爲成	H14.10.11 ～ H15.3.31
岡古調第316号 H15.1.23	散布地 金井戸遺跡	総社市金井戸17－1ほか	280			宇垣匡雅・窪津幸司・石田爲成	H15.1.20 ～ H15.3.31
岡古調第26号 H15.4.1	集落跡 金井戸遺跡	総社市金井戸32ほか	3,148			徳田正紀・渡邉恵里子・石田爲成	H15.4.1 ～ H16.3.31

埋蔵文化財発掘の通知（第94条／旧第57条の３）

岡山県文書番号　日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	現保管場所	土地所有者
教文理第1582号 H14.3.28	（総社遺跡）縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・備前焼・陶磁器・石鏃・銅銭・煙管・簪・加工木等9箱	総社市総社1766-1ほか	H13.4.9 ～ H14.3.25	岡山県教育委員会教育長宮野正司	岡山県古代吉備文化財センター	国土交通省
	（北溝手遺跡）弥生土器・須恵器・土師器・瓦等60箱	総社市北溝手621ほか				
教文理　第７号 H14.4.1	（金井戸遺跡）土器2箱、鉄器1点	総社市金井戸128-1	H14.1.7 ～ H14.3.27			
教文理　第1315号 H14.12.26	（金井戸遺跡）石鏃・土師器・須恵器など計10箱	総社市金井戸128-1ほか	H14.4.8 ～ H14.12.25			
教文理第４号 H15.4.1	（北溝手遺跡）弥生土器・須恵器・土師器・瓦・越州窯磁器・緑釉陶器・青磁・転用硯・鋳型・砥石等51箱	総社市北溝手592-1ほか	H13.4.9 ～ H14.3.25			
	（金井戸遺跡）須恵器・土師器・瓦・越州窯磁器・緑釉陶器・青磁・帯飾り・砥石等18箱	総社市金井戸32ほか				
教文理第1206号 H16.3.19	（総社遺跡）土師器・鉄器１箱	総社市総社1766-1ほか	H15.4.7 ～ H16.3.19			
	（金井戸遺跡）弥生土器・須恵器・土師器・陶器・磁器・瓦・石器８箱	総社市金井戸32ほか				

第２章　遺跡の位置と環境

（１）地理的環境

総社遺跡(1)、金井戸遺跡(2)、北溝手遺跡(3)の所在する総社平野は、岡山県の南西部に位置する。北は吉備高原の南端にあたり急峻な山塊が連なる鬼城山や経山に画され、南は福山や仕手倉山からなる緩やかな山塊にはさまれた、南北約2.5㎞、東西約7.5㎞の東西に細長い平野である。総社平野は古高梁川の東分流によって形成された平野で、東分流は平野の東端で南流する古足守川に合流し、現在の岡山市吉備津付近で「吉備の穴海」と呼ばれた内海に注いでいたと考えられる。総社平野をはじめとする、これらの旧河道流域には大小多くの自然堤防や後背湿地が残され、自然堤防などの微高地上には古くから現在に至るまで集落が連綿と営まれている。

（２）歴史的環境

総社平野周辺で確認されている旧石器時代の遺跡は高梁川東岸の台地上に位置する宝福寺裏山遺跡(6)や浅尾遺跡(10)のほか、窪木薬師遺跡(24)出土のナイフ形石器があるのみで、平野内に人々はまだ本格的に進出していないようである。

縄文時代早期においても長良山遺跡(19)、真壁遺跡(43)などが散見できる程度であるが、縄文時代後期以降になると平野の安定化に伴い遺跡が増加する。中でも県立大学の建設に伴って広範囲にわたって調査された南溝手遺跡(17)では後期後葉の籾痕のある土器が出土しているほか、後期中葉の土器胎土中からイネのプラントオパールが検出されており、出土した打製石器群とともに縄文時代の農耕について具体的な資料を提供している。

弥生時代前期から中期中葉にかけての代表的な遺跡は南溝手遺跡、窪木遺跡(18)、真壁遺跡がある。南溝手遺跡では「松菊里型」の住居が見つかっているほか、竪穴住居の一つで玉作りを行っていることが明らかになっている。弥生時代中期後半から後期になると、三須畠田遺跡(46)など新たな遺跡が出現し、また、これまで継続してきた遺跡においても、集落が拡大するなど、飛躍的な発展が顕著に認められるようになる。このような傾向は、県内の多くの地域でも見られるが、弥生社会の成熟、安定化を示すものとして受けとめられる。また、周辺の丘陵上に前山遺跡(56)、鋳物師谷遺跡(59)、宮山墳墓群(61)のような集団墓が営まれるようになるのもこの時期で、やがてその中から隔絶した首長墓として墳丘墓が出現することとなる。

古墳時代前期になると、総社平野周辺には墳長約55ｍの天望山古墳(62)や墳長約70ｍの三笠山古墳(63)のような前方後円墳が築かれるが、大規模な古墳の造営は認められない。しかし中期になると墳長350ｍの造山古墳(31)、墳長286ｍの作山古墳(34)、墳長114ｍの宿寺山古墳(54)といった全国的にみても最大級の前方後円墳が築かれるようになる。また近年、通称御灰山の標高160ｍの尾根上で墳長約55ｍの前方後円墳である久米大池１号墳(14)が発見されている。古墳時代後期になると、周辺の丘陵部では横穴式石室を採用した古墳群が営まれようになり、こうもり塚古墳(51)や江崎古墳(50)、緑山８号墳(49)といった大型の横穴式石室を持つ古墳も築かれている。また、当地域では鍛冶道具一式を副葬した随庵古墳(27)に見られるように、古くから鉄器生産が行われていた。そして、６世紀後半から７世紀前半にかけては、千引かなくろ谷遺跡(26)で製鉄がはじまり、窪木薬師遺跡のように近辺

で生産した鉄を加工する専業化した鍛冶集団の集落が出現する。また、奥ヶ谷窯跡(7)のような初期須恵器の窯跡も存在し、当地域が早くから朝鮮半島と密接な関わりを持ち先進技術を獲得していたことは注目される。

飛鳥時代には、高梁川西岸には秦原廃寺が７世紀前半にいち早く建立されている。周辺でこの時期の遺跡は少ないが、総社市山手の末ノ奥窯跡(58)で生産された瓦が飛鳥の平吉遺跡に運ばれたことがわかっており、畿内政権中枢である蘇我氏との深い関わりが指摘されている。

やや時期が下り７世紀後半になると、遺跡周辺でも栢寺廃寺(21)、三須廃寺(36)などが建立される。当時、当地域は賀夜（賀陽）郡にあたり、遺跡周辺は吉備の有力氏族の賀夜（賀陽）氏の地盤として、賀夜（賀陽）郡衙も周辺に存在したと想定される。また、同時期に総社平野を眼下におく標高約400ｍの鬼城山山頂には、遠くは四国まで眺望が利く古代山城の鬼ノ城(11)が築かれ、当時の緊迫した国際情勢の一端をうかがい知ることができる。古代において、この地域は備中の中枢地域であり、『和名抄』には備中国府が賀夜郡に所在していたことが記されている。総社市金井戸地区には今も「国府」「北国府」「南国府」等の地名が残り、その所在地がいまだ確定的でない国府の有力な推定地の一つである。近年、御所遺跡(23)では国府に関連する可能性のある遺構が発見されており、謎の多い備中国府像の解明の糸口として期待されている。また、窪屋郡にあたる三須丘陵の南側には古代山陽道が整備され、沿道には備中国分寺(52)、備中国分尼寺(53)が建立された。周辺では郡衙に推定される遺跡も調査され、三須河原遺跡(47)では「郡殿」、三須中所遺跡(48)では「賀夜」と記された墨書土器が出土したことから、窪屋郡衙の一部と推定されている。

平安時代になると福山山頂の福山寺や鬼城山周辺には新山廃寺(12)や岩屋寺など山上寺院が建立され、広く信仰を集めている。鎌倉時代末期の永仁６（1298）年以前に作成された「備中国賀夜郡服部郷図」から、周辺は条里で区画された水田を中心とした景観が広がっていたと思われ、基本的にはその景観を現代に至るまで引き継いでいるものと思われる。

南北朝時代になると当地域も動乱に巻き込まれ、福山城に拠る新田方の武将、大江田氏経と足利直義との間で福山合戦が行われ、周辺は焼け野原となり福山寺や備中国分寺も戦火に遭ったと伝えられている。天正５（1577）年には、織田信長の命を受けた羽柴秀吉が中国侵攻をすすめ、著名な備中高松城の水攻めを行うこととなる。信長が本能寺の変で急死したことを知った秀吉は、毛利輝元との和議を急いだ。その結果高松城主清水宗治は自害し、和議の条件に基づき高梁川以西は毛利氏に以東は宇喜多氏の領地となる中国国分けが行われた。この間、周辺には城砦が多く築かれたようで、幾度となく戦禍を受けてきたことは想像に難くない。（石田）

主要参考文献

『岡山県史』考古資料、岡山県、1986
『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』34・86・100・115・120・121・156・162・198・203岡山県教育委員会、1979・1993・1995・1997・2001・2002・2006
『総社市史』考古資料編、総社市、1987
『総社市史』通史編、総社市、1998
『総社市埋蔵文化財調査報告書』1～19総社市教育委員会、1984～2006
『総社市埋蔵文化財調査年報』1～14総社市教育委員会、1991～2005
『山手村史』本編　山手村　2004

1．総社遺跡
2．金井戸遺跡
3．北溝手遺跡
4．鼓田古墳群
5．金黒池東遺跡
6．宝福寺裏山遺跡
7．奥ヶ谷窯跡
8．中山古墳群
9．西山遺跡・西山古墳群
10．浅尾遺跡
11．鬼ノ城
12．新山廃寺
13．経山城跡
14．久米大池１号墳
15．服部遺跡
16．深町遺跡
17．南溝手遺跡
18．窪木遺跡
19．長良山遺跡
20．窪木宮後遺跡
21．栢寺廃寺
22．伝備中国府跡
23．御所遺跡
24．窪木薬師遺跡
25．高松田中遺跡
26．千引かなくろ谷遺跡
27．随庵古墳
28．生石神社弥生墳丘墓
29．高塚遺跡
30．小造山古墳
31．造山古墳
32．榊山古墳
33．千足古墳
34．作山古墳
35．角力取山古墳
36．三須廃寺
37．金井戸天神遺跡
38．金井戸新田遺跡
39．金井戸鴻崎遺跡
40．井手村後遺跡
41．美濃田遺跡
42．天満遺跡
43．真壁遺跡
44．井手天原遺跡
45．井手見延遺跡
46．三須畠田遺跡
47．三須河原遺跡
48．三須中所遺跡
49．緑山古墳群
50．江崎古墳
51．こうもり塚古墳
52．備中国分寺
53．備中国分尼寺
54．宿寺山古墳
55．鎌戸原遺跡
56．前山遺跡
57．山津田遺跡
58．末の奥窯跡
59．鋳物師谷遺跡
60．岩屋遺跡
61．宮山墳墓群
62．天望山古墳
63．二笠山古墳
64．三輪廃寺

第６図　周辺主要遺跡分布図（1/50,000）

第３章　総社遺跡

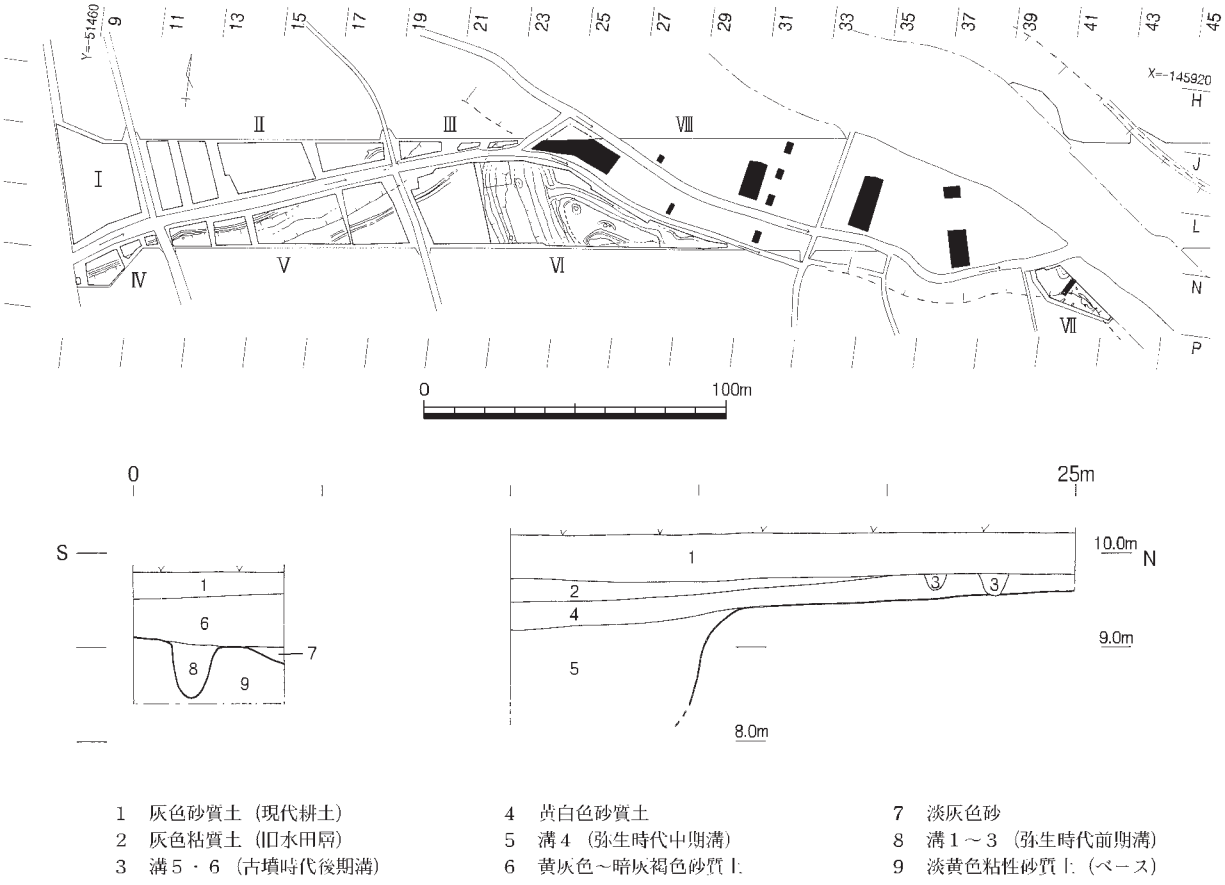
第１節　遺跡の概要

総社遺跡は国府川南西側の微高地上を中心とし、旧河道部に及んでいる。調査区はこの遺跡の北縁部分にあたる。旧河道部は大字金井戸に属し、金井戸遺跡の一部と言えるが、総社遺跡から連続する遺跡であるためここでは総社遺跡に含めて記載する。

調査前はほぼ全域が水田および畑として利用されていたが、調査区中央の中世居館の土塁部分が竹林となり、塚部分には大木が生えた状態であった。

調査区は東半のⅧ区が一段低い旧河道部で、それ以外が微高地である。微高地部分は西半部の中央を用水路が貫流しており、その北側をⅠ～Ⅲ区、南側をⅣ～Ⅵ区、これに続く東端をⅦ区とした。

遺跡の中心は調査区の南側になるため、遺構は各時期とも縁辺部の状況であった。調査区の西側、Ⅲ区～Ⅵ区には弥生時代前期と推定される大溝をはじめとする溝群、Ⅵ区には南側から広がる大規模な中世の居館やその土塁を利用して作られた近世の塚が所在することが明らかになった。　（宇垣）

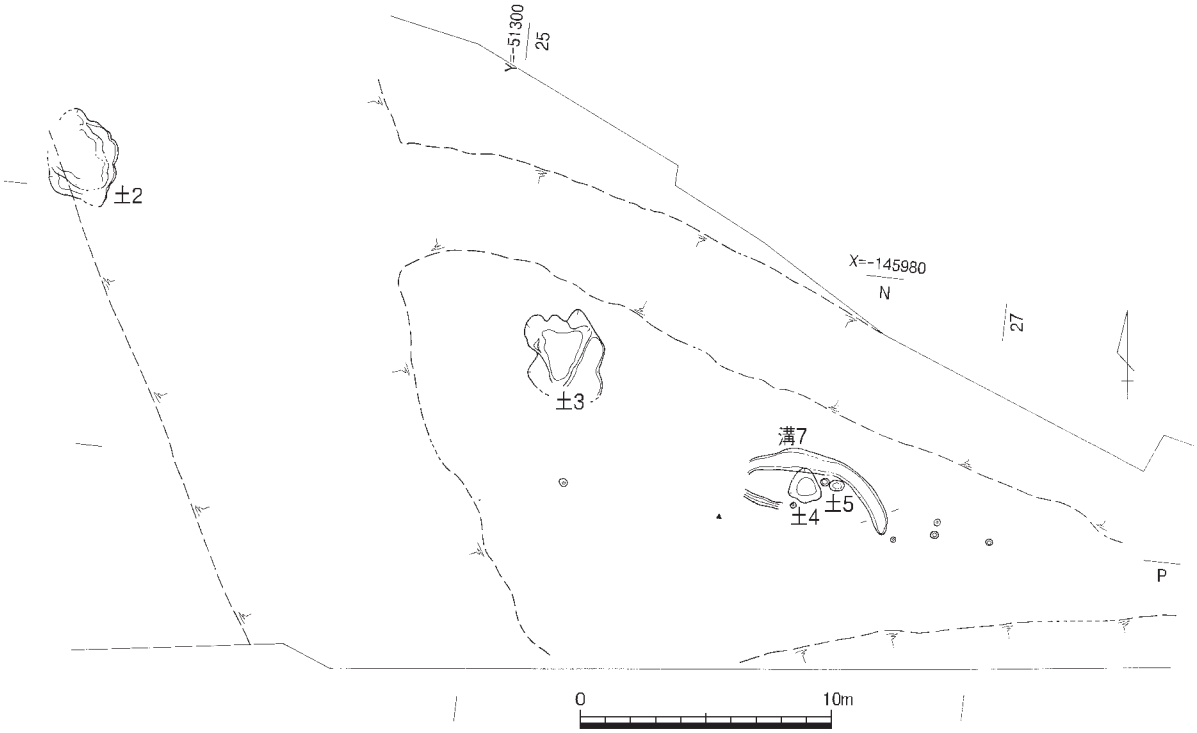


第７図　調査区配置図（1/2,500）・Ⅱ～Ⅴ区堆積状況模式図（横1/600、縦1/80）

第２節　縄文時代から古墳時代の遺構・遺物

１　概要

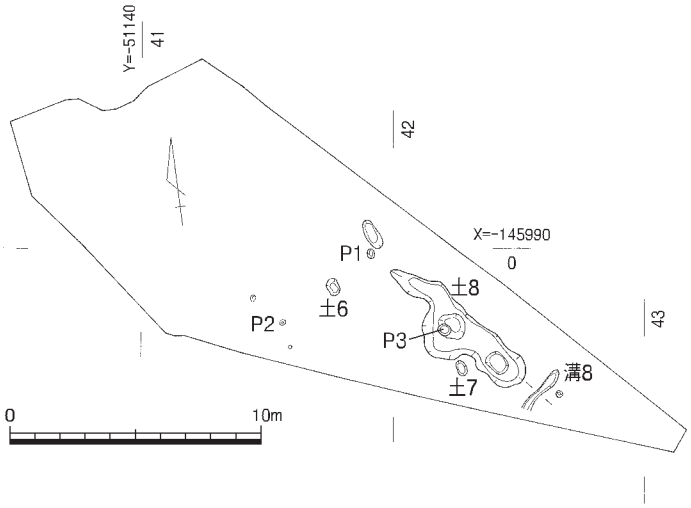
遺構はⅡ区東端からⅥ区にかけて広がっており、北西のⅠ・Ⅱ区には認められない。西半の遺構は溝、東半は土壙や小規模な溝からなる。中央のⅣ区西半も遺構は希薄であるが、削平を受けた結果であり本来は土壙などからなる東半の様相が続いていたと考えられる。東半部で検出した遺構はいずれ



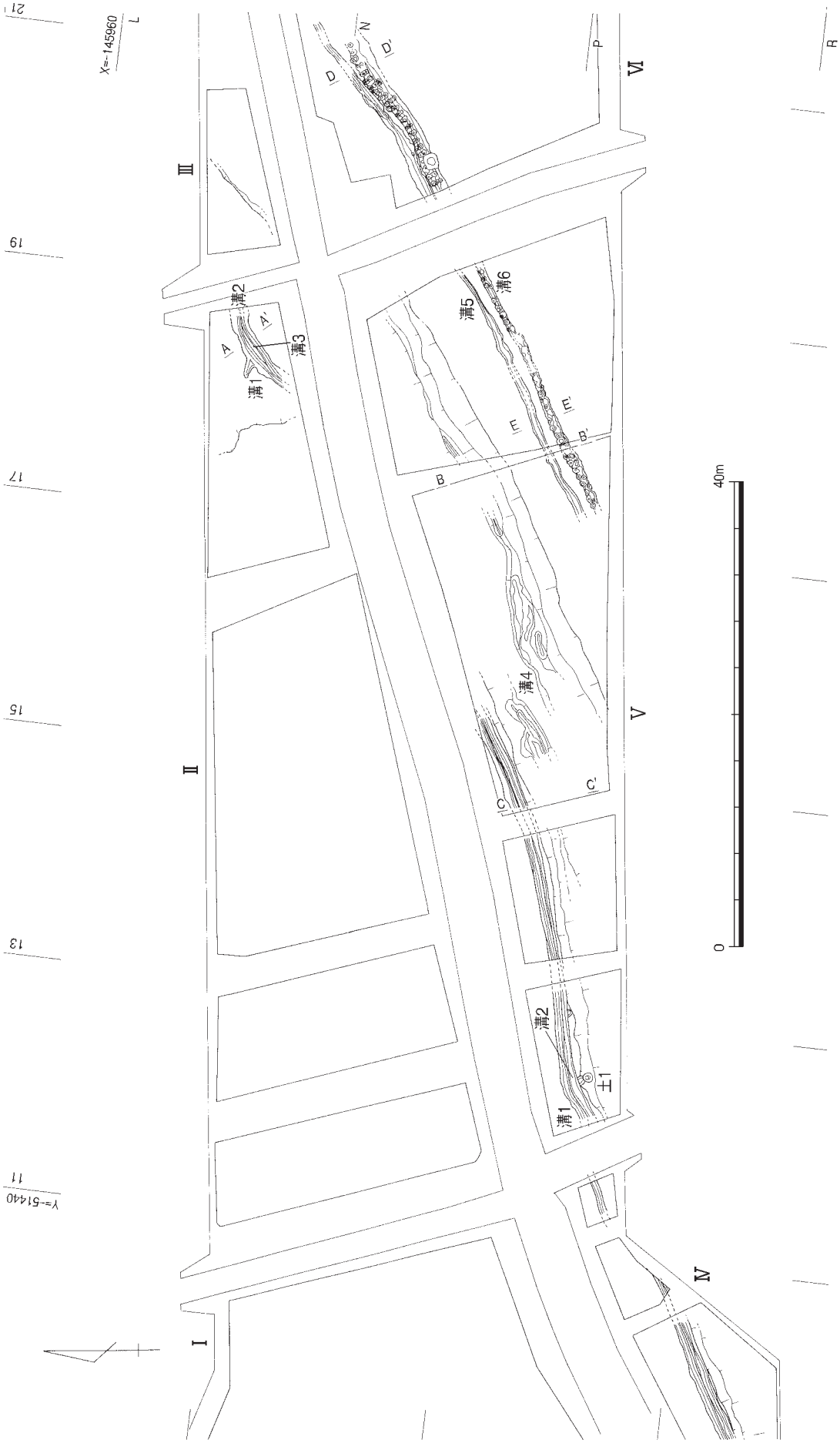
第８図　Ⅵ区縄文～古墳時代遺構全体図（1/300）

も浅く、微高地上部がかなり流出しているとみられるが、それを考慮に入れても遺構の密度は低く、また、土壙は不整形なものが多い。全時期をとおして集落域の縁辺であったとみてよい。

縄文時代晩期の土器が出土しているが、遺構は認められない。弥生時代の遺構は前期・中期には西半に、後期には東半に散在する形となる。古墳時代の遺構は僅少である。　（宇垣）

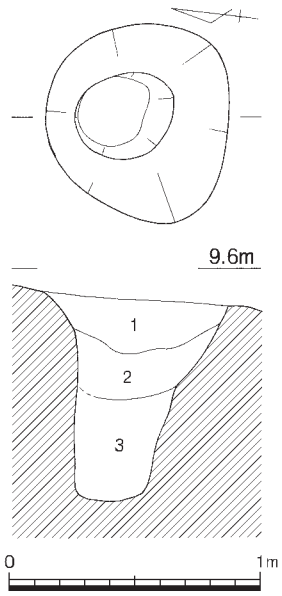


第９図　Ⅶ区縄文～古墳時代遺構全体図（1/300）



第10図　Ⅰ～Ⅴ区縄文～古墳時代遺構全体図（1/300）

２　土壙



1　明褐色微砂質土
2　暗褐灰色粘性砂質土
3　暗灰色粘質土

第11図　土壙１（1/30）

土壙１（第11図、図版４－１）

Ⅴ区西端部で検出した。溝４北岸に位置する。平面形は直径70～80㎝の不整円形を呈し、深さは約80㎝を測る。柱穴の可能性があるが、柱痕は見られず、また、周辺に同様の遺構は確認されない。遺物は無い。検出層位から弥生～古墳時代と考えられる。　（物部）

土壙２（第12図）

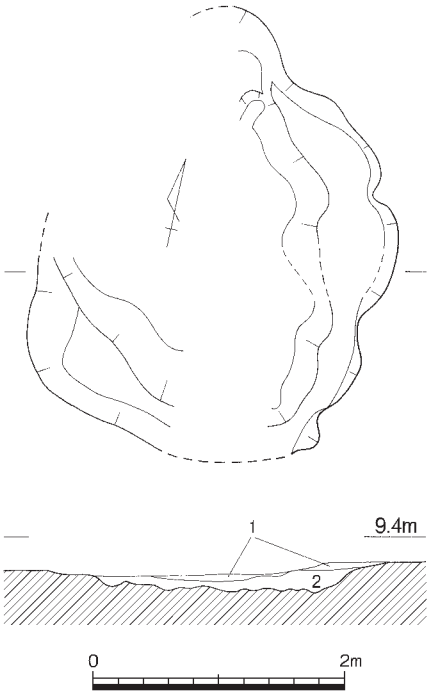
Ⅵ区中央部北寄りに位置する。堀１により上部を削平されている。埋土は基盤層と類似するが、炭粒を含む。埋土中から土器細片が少量出土した。いずれも褐色を呈し胎土は砂粒が多い。斜格子状のヘラ描き沈線が見られ、弥生時代前期後葉と推定する。　（〃）

土壙３（第13図、図版４－２）

Ⅳ区の中央、居館の土塁下側で検出した東西2.96ｍの土壙である。平面規模は大きいが、深さは23㎝と浅い。平面形が整っておらず、人為的な遺構かどうか明確でない。検出面と出土の土器小片から土壙の形成は弥生時代と推定される。　（宇垣）

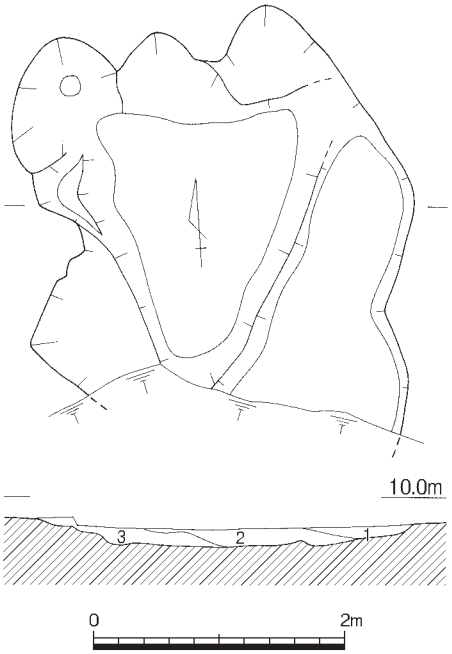
土壙４（第14図）

Ⅳ区の中央部で、土塁盛土下で検出した南北1.36ｍの土壙で、縄文



1　暗黄褐色砂質土
2　暗黄褐色砂質土（黒色土混）

第12図　土壙２（1/60）



1　暗黄褐色粘質土
2　黒褐色砂質土
3　褐黄色砂質土

第13図　土壙３（1/60）

晩期の土器小片が出土したが図化するには至らない。

出土遺物からここで取り扱ったがこれは遺構の年代の上限であって形成時期は後であるとしたほうがよいとも思われる。

(宇垣)

土壙５（第15図、図版４－３）

上記土壙と同様にⅣ区の中央部で検出した土壙である。土塁盛土下に広がる旧表土の下での検出で、溝７の南に所在する。

長径60㎝、短径42㎝、深さ48㎝を測り、東よりの部分には長さ20㎝弱の礫が入っていた。縄文晩期土器小片を含むが時期の確定はむずかしい。　（〃）

土壙６（第16図）

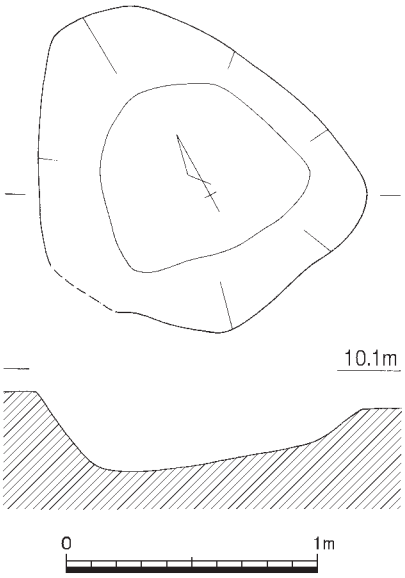
Ⅶ区の中央付近に位置し、東側約２ｍには土壙８が存在している。平面形は楕円形で、断面形はⅢ状をなしている。規模は長軸59㎝、短軸46㎝、検出面からの深さ17㎝を測り、底面の海抜高は8.65ｍである。出土遺物には弥生土器片があったが、図示できなかった。時期は弥生時代後期と考えられる。　(石田)

土壙７（第17図）

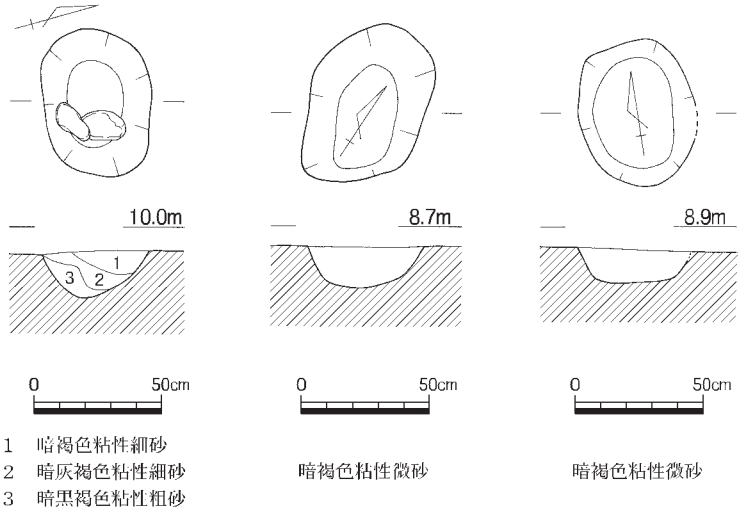
Ⅶ区の南東に位置し、すぐ北側には土壙８が存在する。平面形は楕円形で、断面形は逆台形を呈している。規模は長軸58㎝、短軸47㎝、検出面からの深さ14㎝を測り、底面の海抜高は8.67ｍである。出土遺物等はなかったが、埋土は土壙６・８と同一であった。時期は弥生時代後期に属すると考えられる。　（〃）

土壙８（第18・19図）

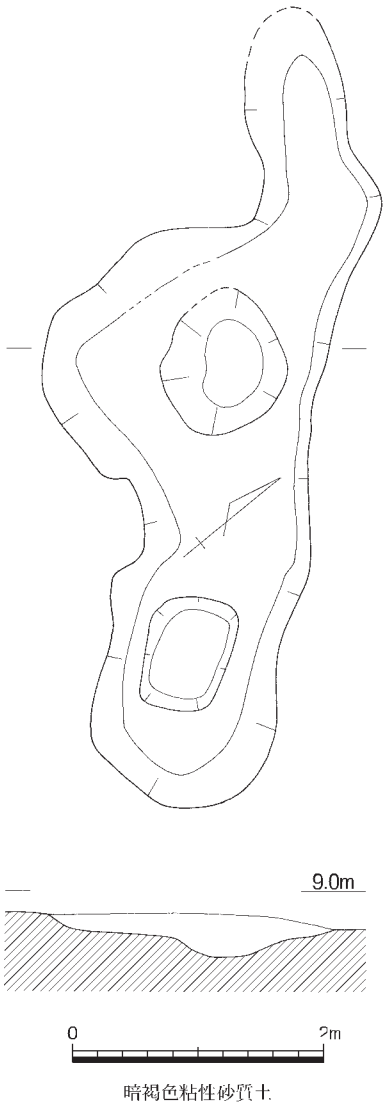
Ⅶ区の南東に位置している。平面形は不整形を呈し、規模は長軸638㎝、短軸215㎝、検出面からの深さ34㎝を測り、底面の海抜



第14図　土壙４（1/30）

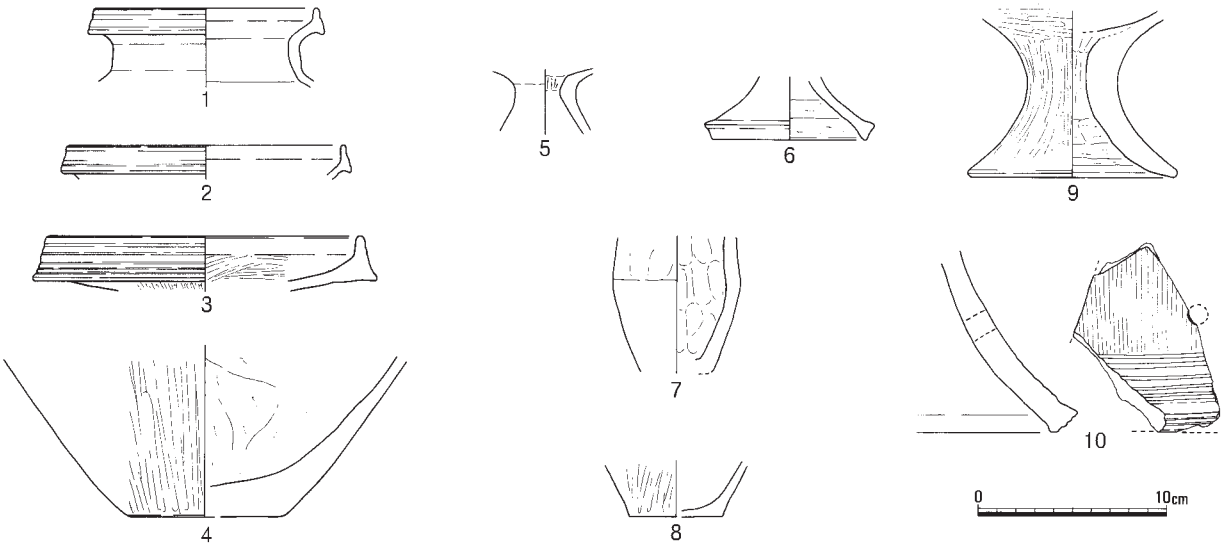


第15図　土壙５（1/30）第16図　土壙６（1/30）第17図　土壙７（1/30）



第18図　土壙８（1/60）

高は8.48ｍである。土壙の中央部と南東部の２か所には皿状の落ち込みが認められた。埋土中より弥生土器の壺１・４、小壺７、甕２・８と、高杯５・６、台付鉢９、器台の口縁部３と方形の透かし孔と円孔の一部が認められる器台の脚部片10が出土している。時期は弥生時代後期前半である。(石田)

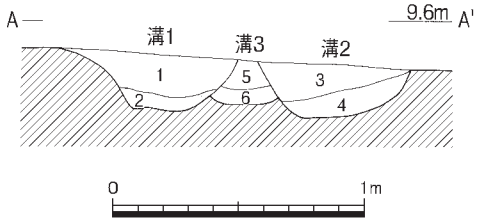


第19図　土壙８出土遺物（1/4）

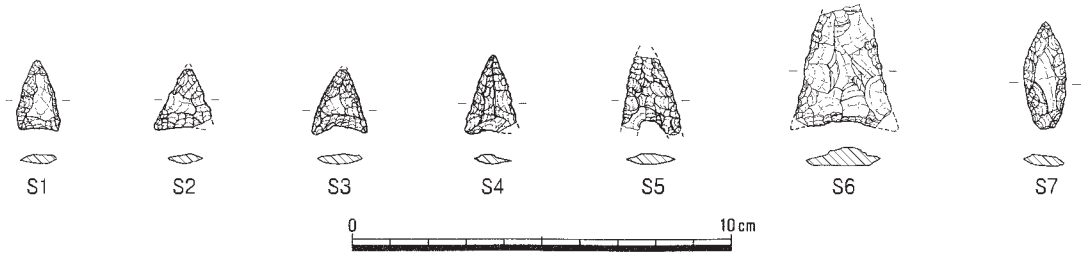
３　溝

溝１～３（第20図）

Ⅱ区東端からⅤ区まで、延長106ｍにわたる弥生時代の溝である。後述の溝４の北側肩にそっており、溝４の埋没に伴い掘削されたと考えている。溝１は幅68㎝、深さ22㎝を測り、溝２もほぼ同規模である。Ⅱ区ではこれらに先行して両肩を掘削される溝３が所在するが、これはこの区だけの状況で、Ⅳ・Ⅴ区では溝１と２が平行し溝３は所在しない。溝１と２はしばしば重複し溝１が２を切る。１条の溝が溝３、溝２、溝１と位置を変えていったとみられる。出土遺物は石鏃のみでＳ１・５～７が溝１、Ｓ２～４はⅡ区東端の溝１～３埋土上部からの出土である。Ｓ５・７をのぞく５点がⅡ区東端からの出



1　暗灰色砂質土
2　暗灰色粘性砂質土
3　灰色弱粘性砂質土
4　灰色粘性砂質土
5　灰褐色砂質土
6　灰褐色砂質土

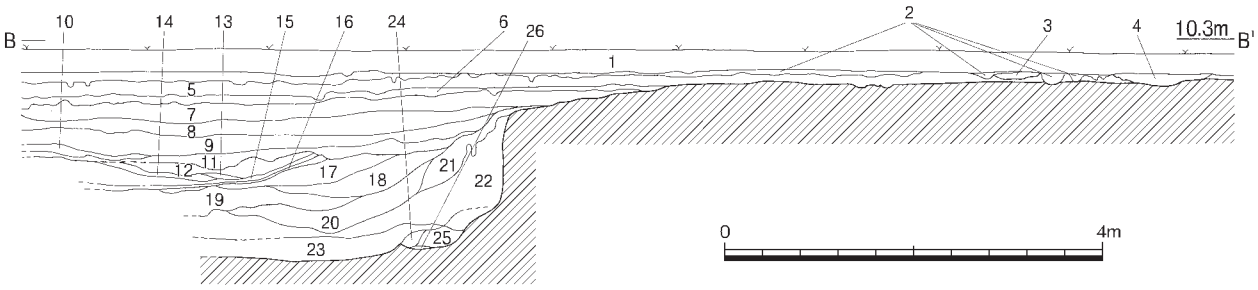


第20図　溝１～３（1/30）・出土遺物（1/2）

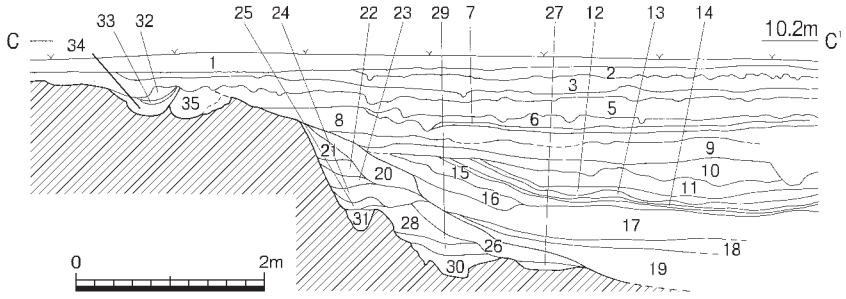
土で、この部分に石鏃が集中する。溝の時期は中期の前半という以上には限定はむずかしい。（宇垣）

溝４（第21図、図版２－３）

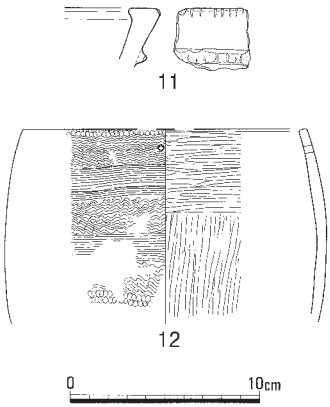
Ⅲ区からⅣ区までの延長119ｍにわたって検出した大溝であるが、遺構が調査区に斜交しこれに一部用水路等が重複するため掘り下げが底面に達した部分は必ずしも多くない。溝の幅は9.0ｍ、深さ1.8



1　耕作土
2　灰色粘質土
3　灰色砂質土
4　灰色砂質土
5　黄白色砂質土
6　褐灰色粘性砂質土
7　褐色砂質土
8　暗褐色砂質土
9　灰褐色砂質土
10　灰褐色弱粘性砂質土
11　灰褐色砂質土
12　暗褐色砂質土
13　灰色弱粘性砂質土
14　褐灰色弱粘性砂質土
15　灰色粘性砂質土
16　灰色粘性砂質土
（青灰白色粘質土含）
17　褐灰色弱粘性砂質土
18　灰色砂質土
19　灰白色粗砂
20　灰色粘性砂質土
21　灰褐色砂質土
22　灰色砂質土
23　灰色粗砂
24　暗灰色砂質土
25　灰色粘質土
26　灰色砂



1　耕土
2　黄褐色砂質土
3　黄白色砂質土
4　灰色粘性砂質土
5　灰褐色砂質土
6　黄褐色砂質土
7　灰褐色弱粘性砂質土
8　褐色弱粘性砂質土
9　褐色砂質土
10　褐灰色砂質土
11　灰色弱粘性砂質土
12　褐灰色弱粘性砂質土
13　灰色粘性砂質土
14　灰色粘性砂質土
（青灰白色粘質土塊含）
15　灰色粘質土
16　灰色砂質土
17　黄灰色粗砂
18　灰色粘性砂質土
19　灰色粗砂
20　灰色粘性砂質土
21　褐色粘性砂質土
22　褐灰色粘質土
23　灰色粘質土
24　灰色砂まじり粘質土
25　灰色粘質土
26　灰色粘性砂質土
27　灰色粘質土
28　灰色粘質土
（灰色砂を少量含）
29　灰色粘質土
30　灰色粘質土（黒色土多含）
31　暗灰色粘質土
32　暗褐灰色砂質土（溝１）
33　暗褐灰色砂　　（〃）
34　暗褐灰色粘性砂質土（〃）
35　暗褐灰色砂質土（溝２）



第21図　溝４（1/80）・出土遺物（1/2、1/4）

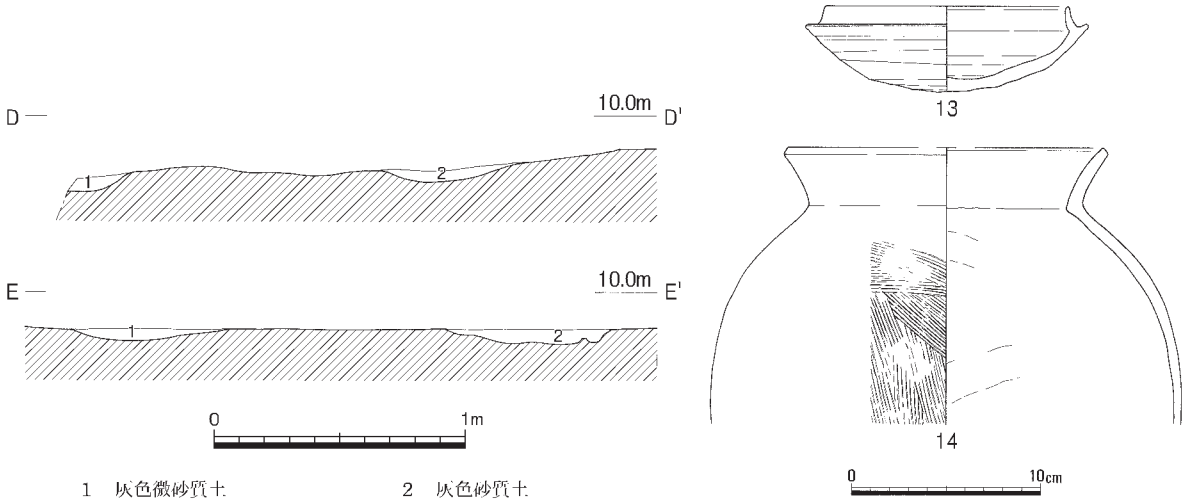
ｍを測る。側面の傾斜は強く断面形は箱形に近い。

出土遺物が僅少であるため遺構の年代推定がむずかしい。堆積土の中層、おおむね第15層付近から弥生中期前葉の無頸壺**12**が、堆積土上部から中期中葉の壺口縁部**11**が出土している。これらは溝の埋没が進行する年代を示しているが、溝が掘削され機能を果たしていた年代を示すものではない。溝が開掘されたのは中期前葉以前と言わざるをえないが、弥生前期にさかのぼる可能性が強いと考えている。溝は微高地を貫通するとみられ、微高地上に水田を営むために設けられた水路であり、調査区付近は微高地外側への排水を担った部分と考える。石鏃**Ｓ８**は堆積土上層からの出土である。（宇垣）

溝５・６（第22図、図版３－１）

Ⅴ区からⅥ区にかけて検出した並走する溝である。溝４の南約４ｍに位置し、溝１～４の弥生時代の溝と主軸を同じくする。溝幅は両者とも60㎝前後で、検出長は約50ｍを測る。溝６は底面に柵列状遺構のような小穴が連続している。

出土遺物には須恵器と土師器がある。**13**は須恵器杯身で、溝６から出土した。口径12.8㎝、器高4.6㎝。**14**は土師器甕で溝５から出土した。色調は浅黄色を呈し、口縁部はわずかに外湾しながら外傾して伸び、端部は面を持って終わる。溝５・６の時期は、遺物が少なく、その前後関係も不明であるが、須恵器の特徴から６世紀後葉と推定され、溝５はさらに遡るかもしれない。（物部）



第22図　溝５・６（1/30）・出土遺物（1/4）

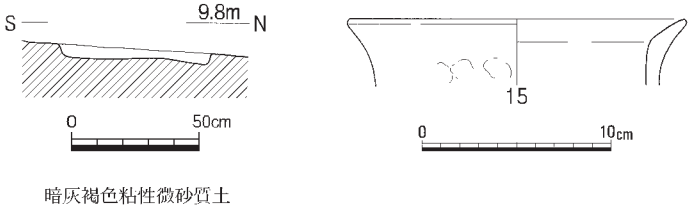
溝７（第23図、図版３－２）

Ⅳ区の中央、居館土塁下方の基盤層で検出した溝である。幅60㎝と広いが深さは４㎝とごく浅く、断面形は浅い逆台形をなす。溝の延長は約６ｍで、弧を描いているため当初住居跡の可能性を考えたが、それに伴う柱穴はなくその可能性は低い。出土の甕**15**は古墳時代後半以降の土師器と思われるが、小片であるため時期は確定しがたい。（宇垣）

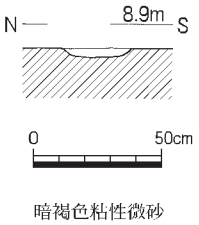
溝８（第24図）

Ⅶ区の南東隅に位置する溝で全長約２ｍ、幅20㎝程度、検出面からの深さは３㎝程度と浅く、断面形は皿状をなしている。出土遺物としては弥生土器片があるが図示できるものはなかった。

時期は弥生時代後期に属すると考えられる。（石田）



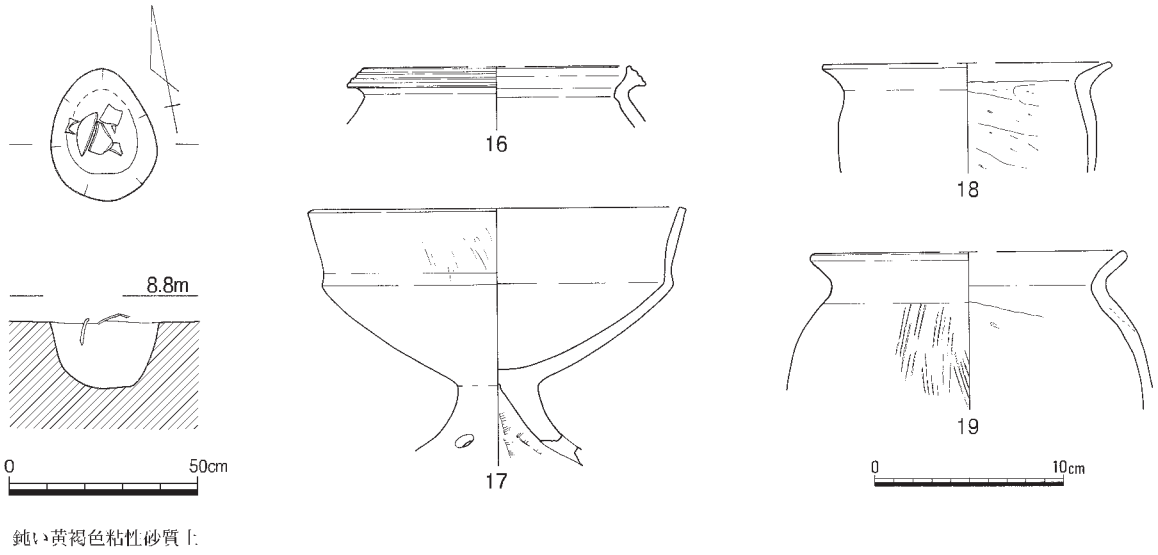
第23図　溝７（1/30）・出土遺物（1/4）



第24図　溝８（1/30）

4　柱穴（第25図）

Ⅶ区中央付近では弥生時代後期に属すると考えられる柱穴を検出している。調査区が狭小であることにも起因して、掘立柱建物を構成するようなまとまりを把握できるものは無かった。柱穴はいずれも小規模なもので直径30㎝程度、検出面からの深さ20㎝程度のものである。柱穴内の遺物としては弥生土器がある。柱穴１からは短脚で直立気味の口縁部をもつ高杯17が、柱穴２からは甕18が、柱穴３からは端部が拡張し凹線文を施す甕16と「く」の字状の口縁部をもつ甕19が出土している。（石田）



第25図　柱穴１（1/20）・柱穴1～3出土遺物（1/4）

5　遺構に伴わない遺物（第26図）

縄文～弥生時代の土器、石鏃を中心とした石器類がある。

縄文土器のうち後期の20は溝４から、晩期の深鉢21・22はⅡ区東端の溝２およびⅥ区の溝６と、後世の遺構からの出土である。23は第８図に位置を表示したが、Ⅵ区の居館土塁の旧表土下方からの出土で、破片がまとまり小規模な土器溜まりの状態をなしていた。後期前葉の土器片24・25および石包丁Ｓ21はⅦ区からの出土である。石鏃は縄文時代晩期から弥生時代中期にわたるとみられるが、時期の限定はむずかしい。また、出土位置は調査区のほぼ全域にわたり傾向は見出しにくい。　（宇垣）

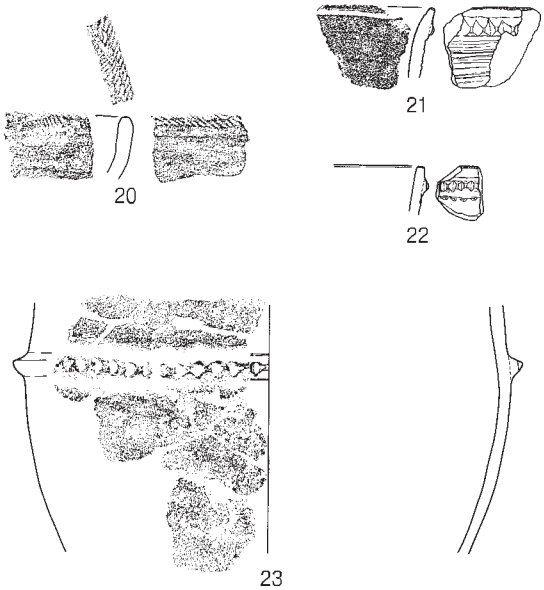
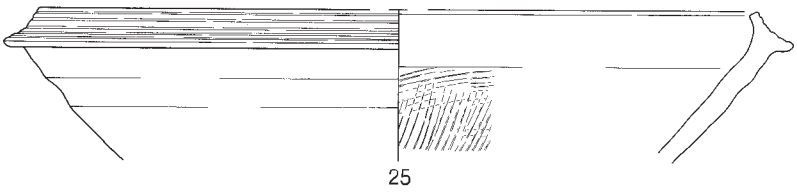
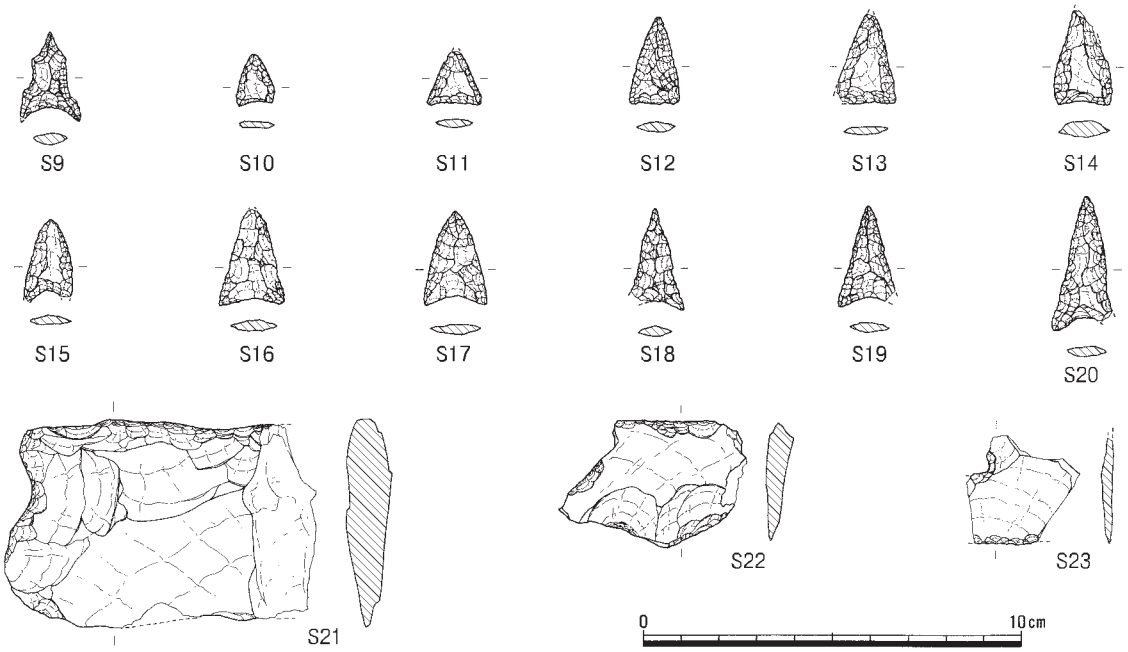


写真１　土器23出土状況（西から）





第26図　遺構に伴わない遺物（1/4、1/2）

第３節　中世から近世の遺構・遺物

１　概要

遺跡の中央部、Ⅵ区を中心に中世居館遺構を検出した。調査区内で東西70ｍの広がりをもつ。調査区は居館遺構の北縁部にあたっており、居館そのものは南側に広がる。

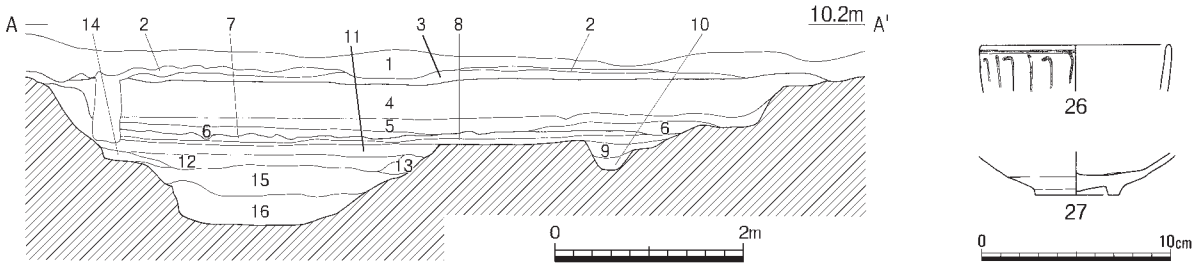
居館遺構は堀と土塁からなり、大きくは西辺となる２条の堀、北辺となる堀と土塁からなる。北辺の外側は旧河道で、これを天然の堀として利用したとみられ、河道側の斜面は切岸となっていた可能性があるが、現水路が所在しているため調査は実施できなかった。

近世には土塁の高まりを利用して大規模な塚が設けられる。居館遺構の西半部は堀が埋め立てられ水田として利用される。　(宇垣)

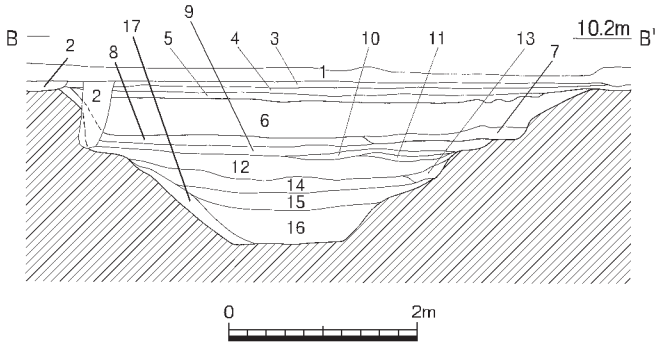
２　堀

堀１（第27・28図、図版２－１）

居館遺構の西辺をなす大規模な堀で、検出延長は33ｍを測る。南半部はほぼ直線をなすが中ほどで若干折れをもって調査区と直交する角度となり、さらに北端では緩やかなカーブを描く。調査区の北外側付近で河道に接続するとみられ、そのため軸線が東側に振れると推定される。

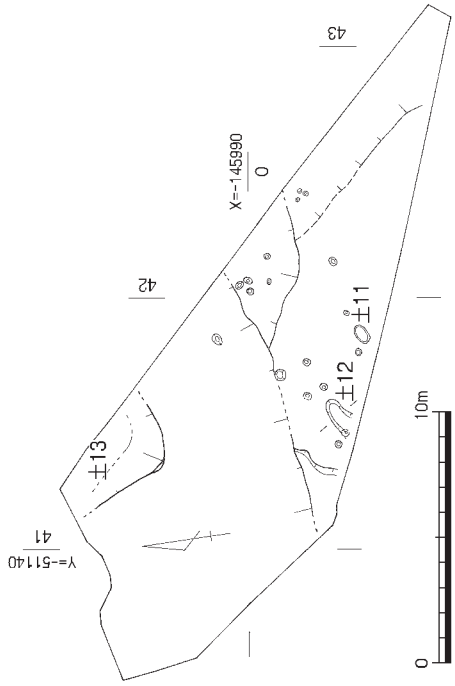


1　耕土
2　黄褐色砂質土
3　褐色砂質土
4　暗褐色・黄白色・褐色土塊混合層（埋め土）
5　褐色砂質土（埋め土）
6　黄褐色砂質土
7　褐灰色弱粘性砂質土
8　淡褐色弱粘性砂質土
9　淡黄褐色弱粘性砂質土
10　淡褐色弱粘性砂質土
11　灰褐色弱粘性砂質土
12　灰色粘質土
13　暗褐色砂質土
14　褐色砂質土
15　青灰色粘質土
16　青灰色粘質土（微砂含）

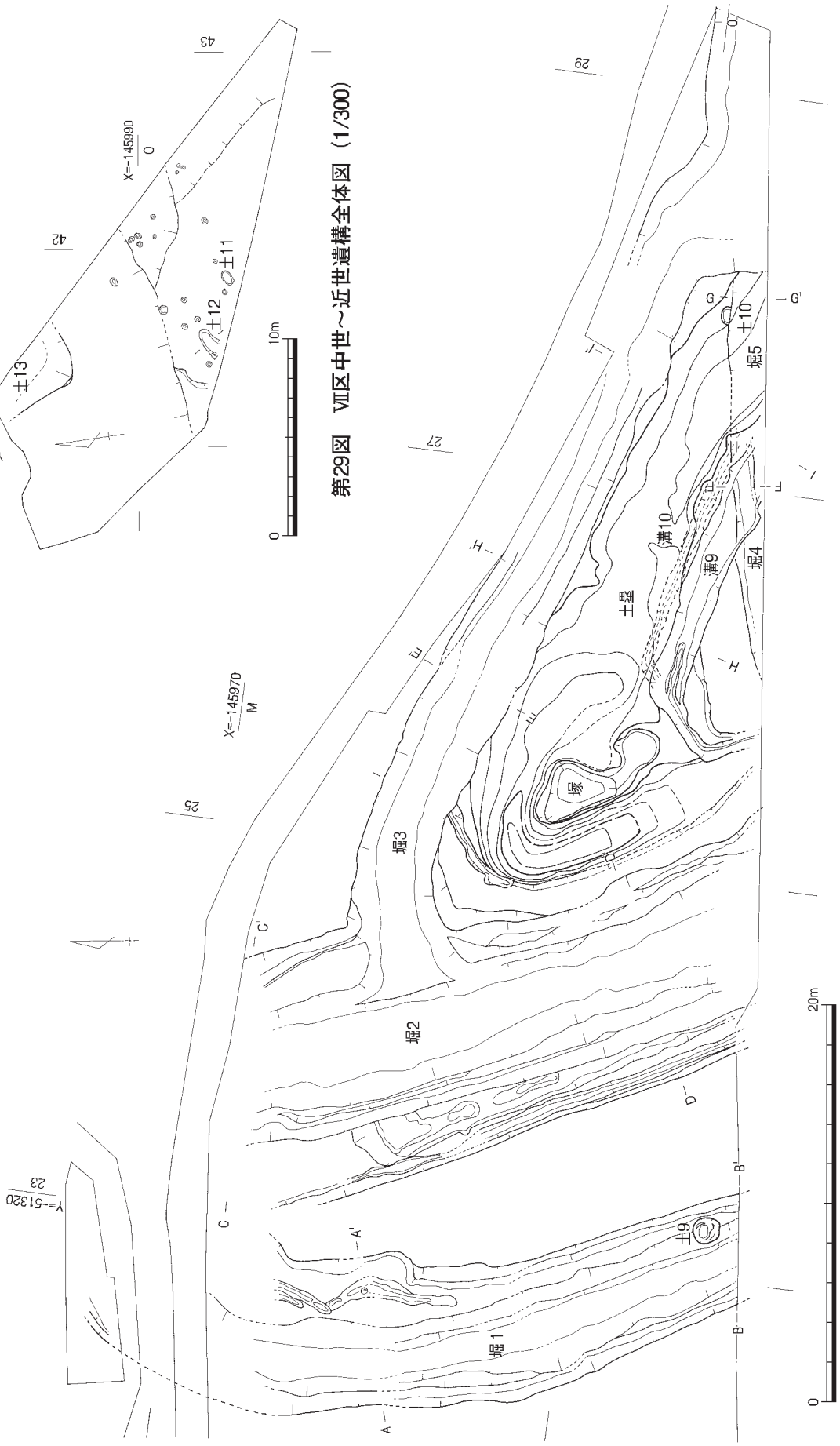


1　耕土
2　攪乱
3　黄灰色砂質土
4　黄灰色砂質土
5　暗灰色砂質土
6　褐色粘質土と黄白色砂質土と黒褐色砂質土塊混合層（埋め土）
7　６と同じで塊の大きさが小さい（埋め土）
8　灰色粘性砂質土
9　白灰色粘性砂質土
10　灰色粘性砂質土
11　灰色粘性砂質土
12　褐灰色粘性砂質土
13　褐色砂質土
14　灰色粘質土
15　灰色粘質土（粘性強）
16　灰色粘質土（砂含）
17　褐色砂質土

第27図　堀１（1/80）・出土遺物（1/4）



第29図　Ⅶ区中世～近世遺構全体図（1/300）



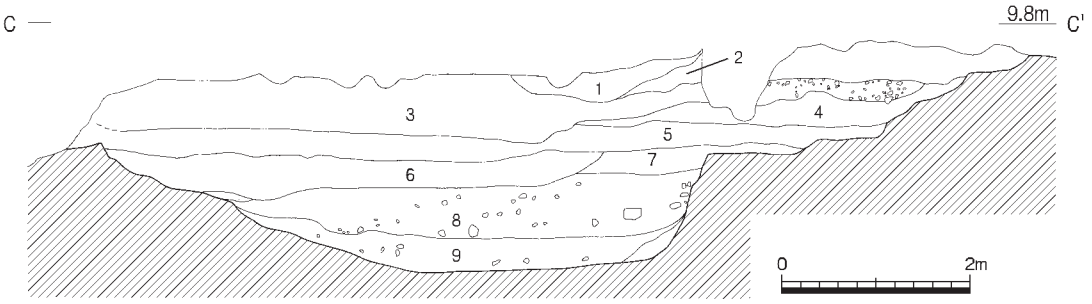
第28図　Ⅵ区中世～近世遺構全体図（1/300）

南端ではほぼ逆台形の断面形をなし、上面幅5.4ｍ、深さ1.75ｍ、底面幅1.2ｍを測る。西側斜面では中ほどの位置に幅20㎝の狭いテラスが形成される。東側斜面にも同様なテラスがありこれは北部では幅2.2ｍと広くなり、その面には幅50㎝、深さ30㎝の溝が形成されている。この東西のテラス上を埋める堆積土、Ａ断面第４・５層、Ｂ断面第６・７層は基盤層に由来する黒褐色土のブロックを多く含んでおり埋め土とみてよい状況であった。したがって、江戸時代に堀の埋没が進んだ段階で水田として利用され、その際に堀側面が削られてテラスが形成され、さらに後に、この部分を埋め立てて現在の広い水田が形成されたとみられる。

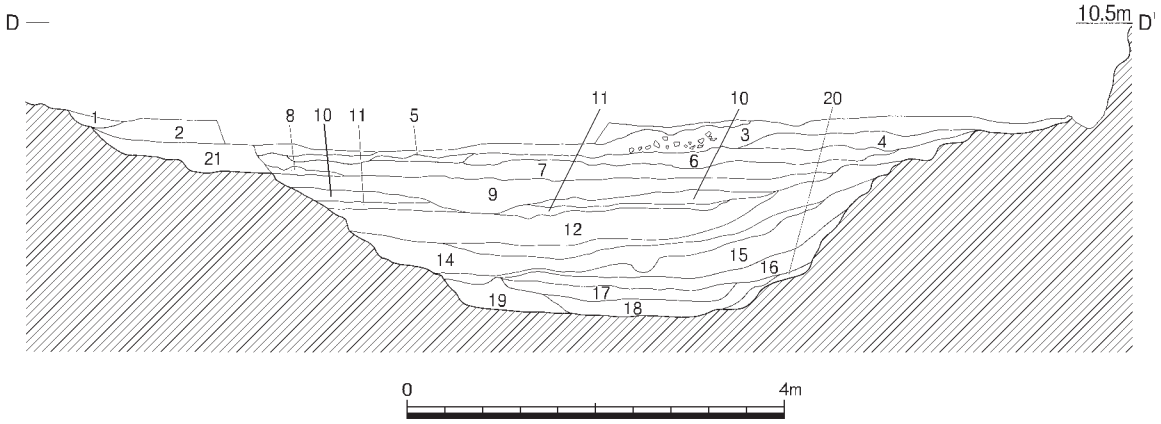
堀の埋土のうち最下層は灰色粘質土で砂を多く含む。粘質は強いが、水濠で常時滞水していたかどうかは不明と言わざるをえない。染付碗**26**、唐津皿**27**はＢ断面14・15層からの出土で、**26**が17世紀中葉、**27**は17世紀前葉に位置づけられ、堆積層の年代の一端を示す。　　(宇垣)

堀２（第28・30・31図、巻頭図版２－１・２）

堀１に平行する南北方向の堀で、検出延長は26ｍである。東側には土塁が遺存し、北東部では堀３



1　灰褐色粘質土
2　明黄色粘質土
3　暗褐色砂質土（埋め土）
4　黄色粘質土
5　黄灰色砂質土
6　明灰色砂質土
7　灰色粘性砂質土
8　灰褐色砂質土
9　暗褐色粘質土
10　暗褐色シルト



1　黄色粘性砂質土
2　黒褐色弱粘性砂質土（埋め土）
3　褐色弱粘性砂質土（埋め土）
4　褐色砂質土
5　灰色粘質土
6　黄褐色砂質土
7　暗黄褐色砂質土
8　暗黄灰色弱粘性砂質土
9　灰色粘質土
10　褐灰色粘質土
11　青灰色粘質土
12　青灰色砂混じり粘質土
13　暗褐色粘質土
14　青灰色粘質土
15　暗青灰色粘質土（黒色土塊多く含）
16　青灰色粘質土
17　黒褐色粘質土（植物遺体含）
18　暗灰色粘質土
19　青灰色粘質土
20　暗灰色粘土
21　灰白色弱粘性砂質土

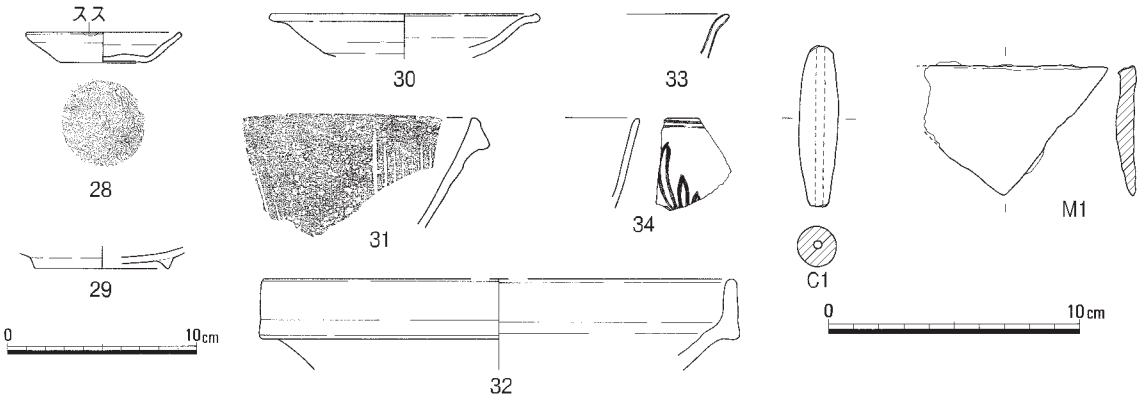
第30図　堀２（1/80）

が接続する。断面形は逆台形をなし、検出面の最大幅9.8ｍ、深さ2.2ｍ、底面幅3.0ｍを測る。埋土のうち上層となるＣ断面第３層、Ｄ断面第２・３層は堀１の場合と同様、江戸時代の埋め土で、Ｄでは第４～７層もその可能性がある。土塁に近接した側の肩は埋没の過程で肩が広がっており、外縁から80㎝内側の傾斜変換付近が本来の肩とみられる。堀３接続部よりも北側では幅2.0ｍのテラスがある。江戸時代の埋め土よりもかなり深い部分に位置しており、これは当初から設けられていたとみられる。また、西側斜面上部にも幅0.8～3.0ｍのテラスがある。この部分の堆積土（Ｄ断面第21層）に埋め土や堆積土上層が乗っており、それらよりも早い段階に埋まったと考えるが、堀２に先行する浅い堀の可能性もある。したがって、堀の上面幅は南半ではこれを含めた場合9.4ｍ、別とすれば7.8ｍとなり、北部は東側にテラスがあるため広くなり13ｍ、西側のテラスを含めなければ9.8ｍである。壁面の傾斜は外側にあたる西側よりも内側の東側のほうが急角度となる。最下層になるＣ断面第９層は有機物を含む暗褐色の粘質土、Ｄ断面の第17層も同様であり、堀の下部は滞水していたとみられる。

なお、西側肩部には礫が入る幅70㎝の溝が設けられていた（D断面第１層）。この溝は江戸時代の埋め土を掘削して設けられている。

写真２　堀２西側平坦面の溝状遺構内礫出土状況（南東から）

遺物はきわめて少なく、またその大部分が上層あるいは最上層からの出土であり、備前焼すり鉢**32**は15世紀末ごろに位置づけられるが、遺跡全体の年代を示す遺物としか言えない。染付**34**は埋め土下面からの出土で、埋め立ての時期が17世紀前半以降であったことをを示す。下層にあたるＣ断面第８・９層からの出土は土師器皿**28**と青磁碗**33**のみであり、堀の年代を求めるにはやや困難と言わざるをえない。（宇垣）



第31図　堀２出土遺物（1/4、1/3）

堀３（第28・32図、巻頭図版１・２、図版２－２）

居館北辺を形成する堀で、土塁外側に設けられている。西端は堀２に直角に接続しており、その部分からややカーブをもって方向を変えて北西－南東方向となり長さ35ｍの直線をなす。東端部では短い折れをもって屈曲する。

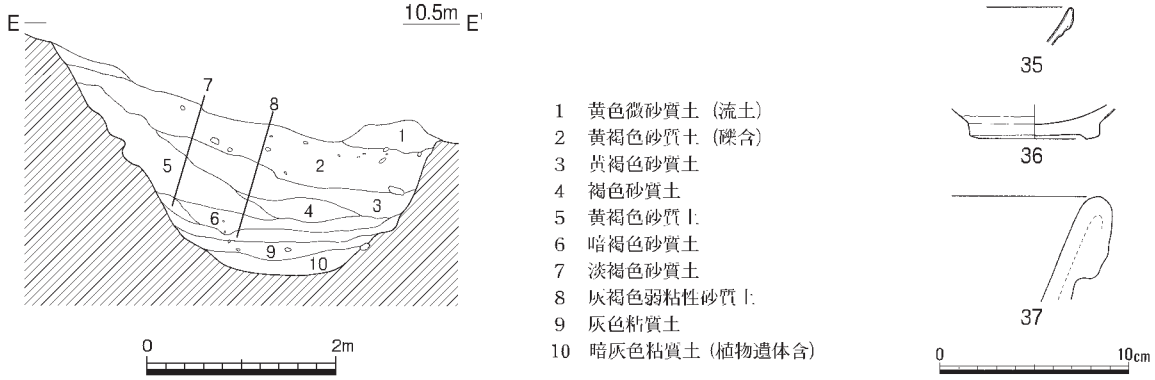
堀の断面形は上開きのＵ字形で、底面は丸みをもつ。上面幅4.0ｍ、底面幅1.2ｍ、深さは南の土塁

側で2.48ｍ、外側から1.44ｍを測る。壁面の傾斜は南側が60°、北側が40～70°である。

堆積土上層～中層は、西部～中央部では確実に埋め土とみられるものではなかったが、東端部付近では人為的に埋められた状態を示していた。最下層は暗灰色粘質土で小枝、葉などの植物遺体を含んでおり、底面近くには水がたまっていたとみられる。出土遺物は底面から出土した木材１点のみで、土器等で図化できるものは出土しなかった。木材は長さ1.33ｍ、太さ18㎝で枝を取った加工材であるが、それ以上の加工はなされていない。

この堀の特徴は東部の形状にある。東端の状況からさらに東にのびるとみられ、一方、南～西の内側肩の形状からは堀が南にのびると判断できる。南側は用地外となるため推定の域を出ないが、この箇所で堀が分岐して東と南にのびると考えている。　（宇垣）

写真３　堀３内杭出土状況（東から）



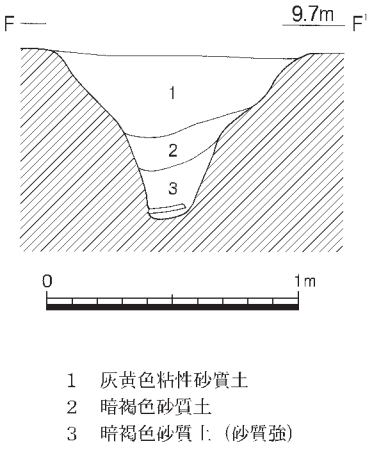
第32図　堀３（1/80）・出土遺物（1/4）

堀４（第28・33・34図）

調査区の南縁に所在する東西方向の堀で、堀５と一連の遺構とみられるが深さ・幅がかなり異なるため別に扱った。

幅95㎝、深さ64㎝を測る。埋土のうち第１層は埋め土、第２・３層は堆積土であり、堀５と一連に埋められたとみてよい。後述の堀５の西部が規模をかなり縮小してのびているのか、堀５はやや南にふれて調査区南西外にのび、それに斜めに接続する形になるかのいずれかであるが、大木の根が所在したため調査できなかった。

底面に接して亀山系とみられるすり鉢38が出土している。橙色を呈し火を受けている可能性がある。時期の限定はむずかしいが、同様のものが甫崎天神山城からも出土しており16世紀代とみても支障ないと考える。　（宇垣）



第33図　堀４（1/30）

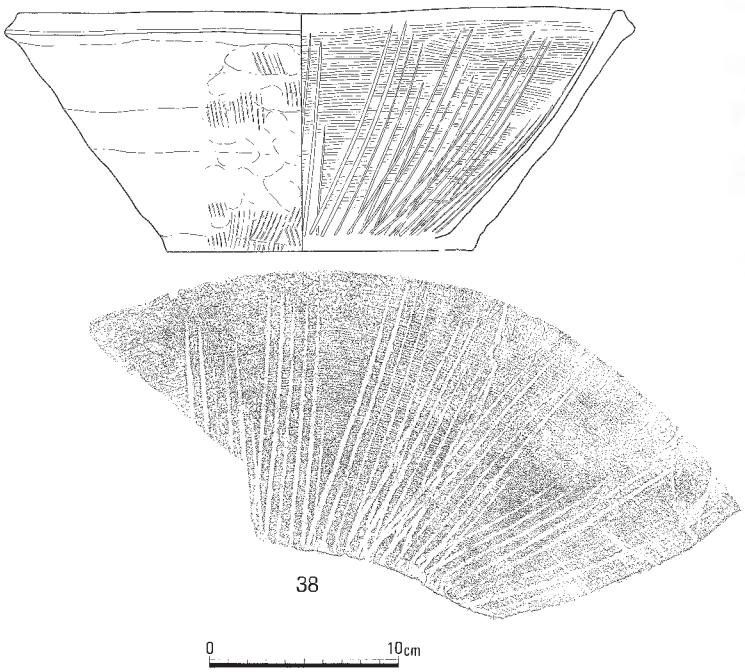
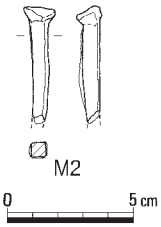


写真４　堀４堆積状況（西から）

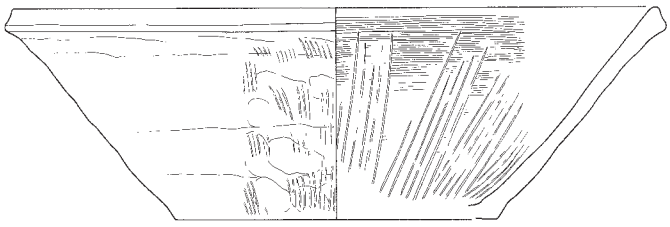


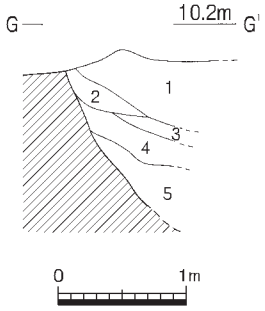
第34図　堀４出土遺物（1/4、1/3）

堀５（第28・35図）

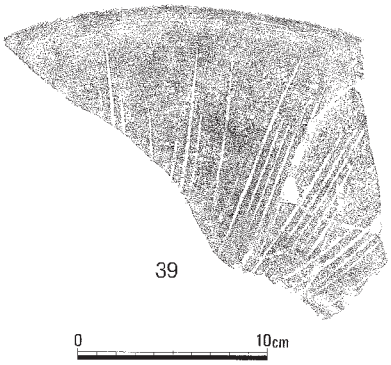
堀３東端の屈曲部の西側に所在する堀で、半ば以上が調査区外に広がるため、北側壁面を検出できたにすぎない。掘り下げは検出面から1.1ｍが限度であったが、壁面は下降を続けており堀３の深さに達するとみられる。断面図を示した東端付近では堆積層で埋まっているが西側では堆積土は薄く、埋土の大部分は埋めたてられた土で、埋め土上部は土塁盛土となる。このことから、元は堀３の東部から堀５へ続く東西の堀があり、後にその西半（堀４・５）を埋めて土塁を設け、外側に新たに堀３を掘削したと判断できる。また、その施工の時点で、先行する堀は部分的にかなり埋没していたことが明らかである。

埋土中からは堀４出土のものとよく似たすり鉢39が出土している。埋め土・堆積層が傾斜しているため帰属がやや不分明であるが前者に属すると考える。（宇垣）





1　褐色微砂
2　黄褐色粘質土
3　明黄褐色砂
4　褐灰色砂
5　明褐灰色砂



第35図　　堀５（1/60）・出土遺物（1/4）

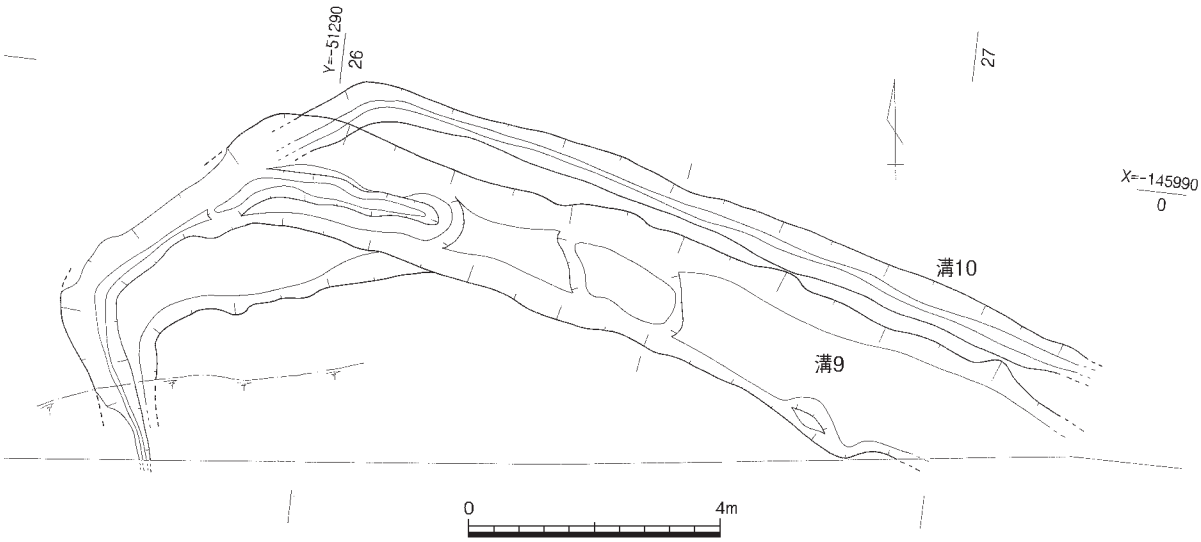
３　溝

溝９（第36・37図）

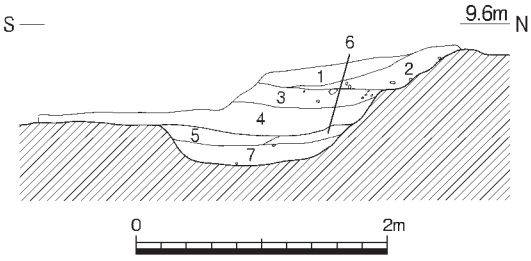
土塁の南側で検出した溝で、土塁の内側にそってめぐる。

断面形は逆台形をなし、上面幅1.8ｍ、底面幅1.1ｍ、深さ80㎝を測る。溝の西端は後述の溝10の埋土と区分しがたく一連の遺構として掘り下げたため表示できていないが、おおむね溝10の西肩と一致あるいはそれよりもやや内側に復元できる。底面は中央と西より部分でやや深くなり、西端部は浅くなる。

土塁の内側をめぐっており中世居館を構成する遺構の可能性はあるが、居館が機能した時期よりも後に掘削されたもので、直接の関係をもたない可能性を考えている。埋土中からは白磁碗40、14世紀

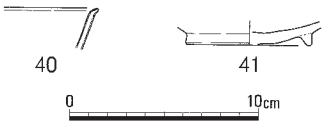


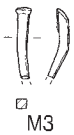
第36図　溝９・10（1/120）

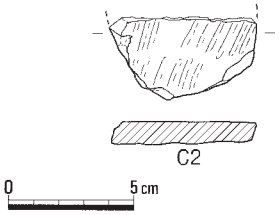


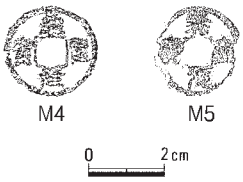
1　黄色微砂質土
2　黄色微砂質土
3　黄褐色砂質土（礫含）
4　黄褐色砂質土
5　褐色砂質土
6　褐灰色砂質土
7　暗褐灰色砂質土

写真５　溝９堆積状況（東から）









第37図　溝９（1/60）・出土遺物（1/4、1/3、1/2）

代前半とみられる土師器椀41、鉄釘Ｍ３、須恵器を円形に打ち欠いた土製品Ｃ２、天聖元寶Ｍ４、熙寧元寶Ｍ５などがある。土師器椀は図示できたのは41のみであるが小片はかなりの量が出土した。中世の遺物はここでの理解の場合、流れ込みとなるが、調査区南側の遺跡の状況を示すものである。　（宇垣）

写真６　溝10堆積状況（西から）

溝10（第36図）

土塁の南縁にそって検出した溝で、西側は一部が溝９によって削平される。東端から11.8ｍの直線をなして西にのび、130°の折れをもって南西に5.3ｍ続き、さらに110°折れて南に向かう。後述の土塁は流出と近世の削平によって逆Ｖ字形の平面形となるが、もとは直線で構成され、内側は２か所に折れをもつ形状であったことを示すとみてよい。溝の東半、第28図に破線で示した部分は土塁盛土の下に位置している。西半は後述の塚盛土下で検出したが、本来は上を土塁盛土が薄く覆っていた可能性が考えられる。

溝は幅60㎝、深さ50㎝を測る。東半の東西をなす部分では写真に示すように５～15㎝の円礫が充填されていた。この東半部においてはこの溝の上に土塁盛土が乗り、上には遺構はのびないが、溝10上方の盛土中には円礫が多く含まれており、土塁盛土の肩部上面では溝10の位置を大まかに示すような幅1.2ｍの帯状の円礫の広がりが認められた。また、H断面第12層のように溝にむかって層がたわみ、ブロック（第９層）が含まれる場合もある。

これらが全体としてどのような関係にあるのか、理解は必ずしも容易でないが、溝10は上方の盛土部に関連をもつ可能性が強いと考えられる。溝10は土塁の内壁の基礎構造ないしそれに類するものと考えている。　（〃）

４　土塁（第28・38～40図、巻頭図版２－１・２）

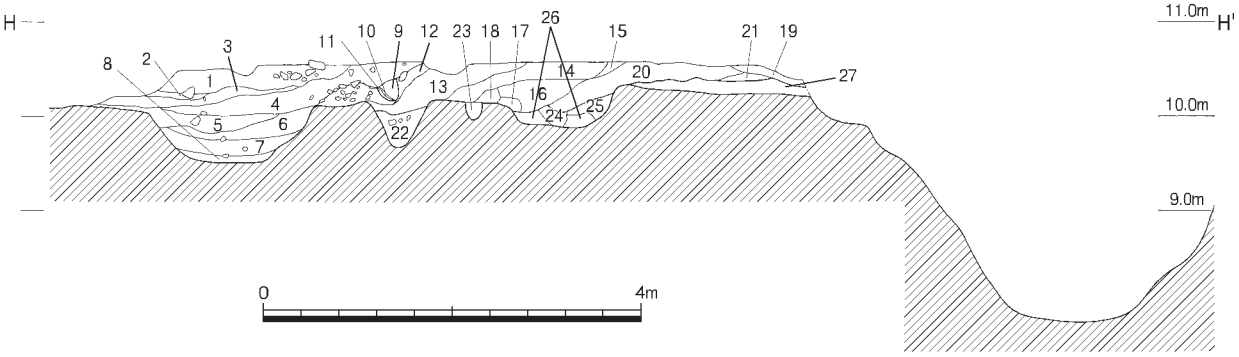
堀２・３の内側に設けられた居館北西側の防御施設である。平面形は逆Ｖ字形をなしており、以下、堀３に添う部分を北辺土塁、堀２に面する部分を西辺土塁と呼ぶ。北辺の検出延長31ｍ、西辺の検出延長12ｍである。西辺の西側は水田造成によってかなり削られており崖状の急斜面をなす。またこれの南端は調査区内にあるが、塚と重複しなかった部分は水田造成のため削平されたようで、本来はさらに南にのびていたとみられる。北辺は調査区外も東にのびるが、宅地裏側の竹藪となり形状は不明瞭となっていく。調査区内の北辺土塁は、中央付近に近世末ごろに建物が設けられており、そのため若干の削平を受けていた。

後述のようにこの土塁の盛土の高まりを利用して後に塚が築かれており、塚の盛土が重複した部分では盛土の保存状態は良好であった。第28図は塚盛土を除去した状態での測量図である。

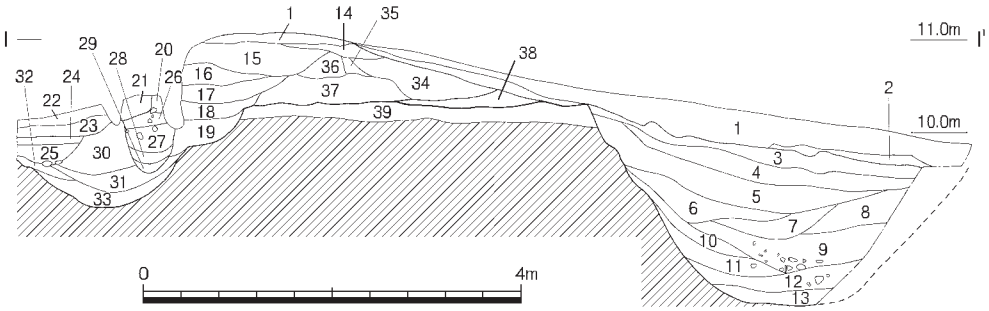
上記の溝10の形状と堀２・３内側の輪郭はおおむね相似形であり本来は外側も折れをもつ直線で構成されていたと推定される。北西の土塁屈曲部は全体の幅が広くなり、土塁内側には後述の塚主体部が設けられていた。主体部構築のため掘削されておりこの部分の本来の形状は不明であるものの、土塁の軸線は外側をめぐり、内側には台形の平面形をなすテラス状部分が設けられていた可能性が強い。

土塁西半の断面は塚と重複するため第42図に示すが、南北断面第30～36・37～45層、東西断面第38

～43・31～37層が土塁盛土である。最も遺存状態が良い西辺土塁は台形の断面形をなし高さ1.8ｍ、基部残存幅2.9ｍ、復元幅４ｍの規模である。一方、北辺土塁は基部幅5.7ｍで断面形は低い逆台形をなし、盛土の厚さ40㎝であるが、もとは西辺と同じ形状であったとみてよいであろう。



1　明黄色微砂質土
2　明黄色粘性微砂質土
3　明黄色粘性砂質ﾛｰﾑ
4　黄色粘性微砂質土
5　(暗)黄色粘質土（溝９）
6　灰黄色微砂質ﾛｰﾑ（〃）
7　黄色粘質土（〃）
8　暗黄灰色粘性微砂質土（〃）
9　暗灰色粘性砂質ﾛｰﾑ・明黄灰色粘質ﾛｰﾑ
10　明黄色粘性砂質土
11　明黄色粘質土
12　黄褐色粗砂質ﾛｰﾑ
13　暗黄色粘質土
14　褐黒色微砂質土
15　褐黄色砂質ﾛｰﾑ
16　黄褐色微砂質土（黒褐色土混）
17　黄褐色微砂質土
18　黄褐色粘性砂質ﾛｰﾑ
19　明黄色粘質土
20　黄色微砂質土
21　黄色粘質ﾛｰﾑ
22　褐灰色粘性砂質土（溝10）
23　暗褐黄色粘質土
24　黄色微砂質ﾛｰﾑ
25　黄褐色微砂質土
26　暗黄色粘性砂質土
27　褐黄色粘性微砂質ﾛｰﾑ



1　暗褐灰色微砂質土（流土）
2　暗灰黄色微砂質土（流土）
3　黄色微砂質土（流土）
4　褐黄色微砂質土（堀３）
5　黄褐色微砂質ﾛｰﾑ（〃）
6　暗褐色砂質土（〃）
7　褐色砂質土（〃）
8　褐色砂質ﾛｰﾑ（〃）
9　灰黄褐色砂質土
　(黒色土塊・レキ含)（〃）
10　灰黄褐色砂質ﾛｰﾑ（〃）
11　灰褐色砂質土（〃）
12　青灰色粘質土（〃）
13　灰色粘質ﾛｰﾑ（植物遺体含）（〃）
14　黄褐色微砂質土
15　黄褐色粘性微砂質土
16　黄褐色微砂質土
17　黄褐色粗砂質土
18　暗灰褐色微砂質ﾛｰﾑ
19　褐灰色粗砂質土
20　暗黄褐色微砂質土
21　明黄褐色粘性微砂質ﾛｰﾑ
22　暗褐色砂質土（耕作土）
23　暗灰褐色砂質土（耕作土）
24　暗黄褐色微砂質ﾛｰﾑ（溝９）
25　褐灰色微砂質土（〃）
26　明黄褐色粗砂質土（溝10）
27　明黄褐色微砂質土（溝10）
28　暗灰褐色微砂質土（〃）
29　暗灰褐色粗砂質土（〃）
30　明黄褐色粘性粗砂質土（堀４埋め土）
31　暗灰色粘性粗砂質ﾛｰﾑ（〃）
32　暗灰色粘性微砂質土（〃）
33　暗褐灰色粘性粗砂質土（〃）
34　灰黄褐色微砂質ﾛｰﾑ
35　暗黄褐色粗砂質土
36　淡黄褐色粘性微砂質土
37　灰黄褐色粗砂質ﾛｰﾑ
38　明黄色粘質土
39　明黄褐色粗砂質土

第38図　土塁（1/80）

盛土はＨ断面では北側から積まれた状況を示すが、塚部分の東西断面、堀５上部などでは水平に積み上げられていったとみることができ、この積み方が基本形であったようである。

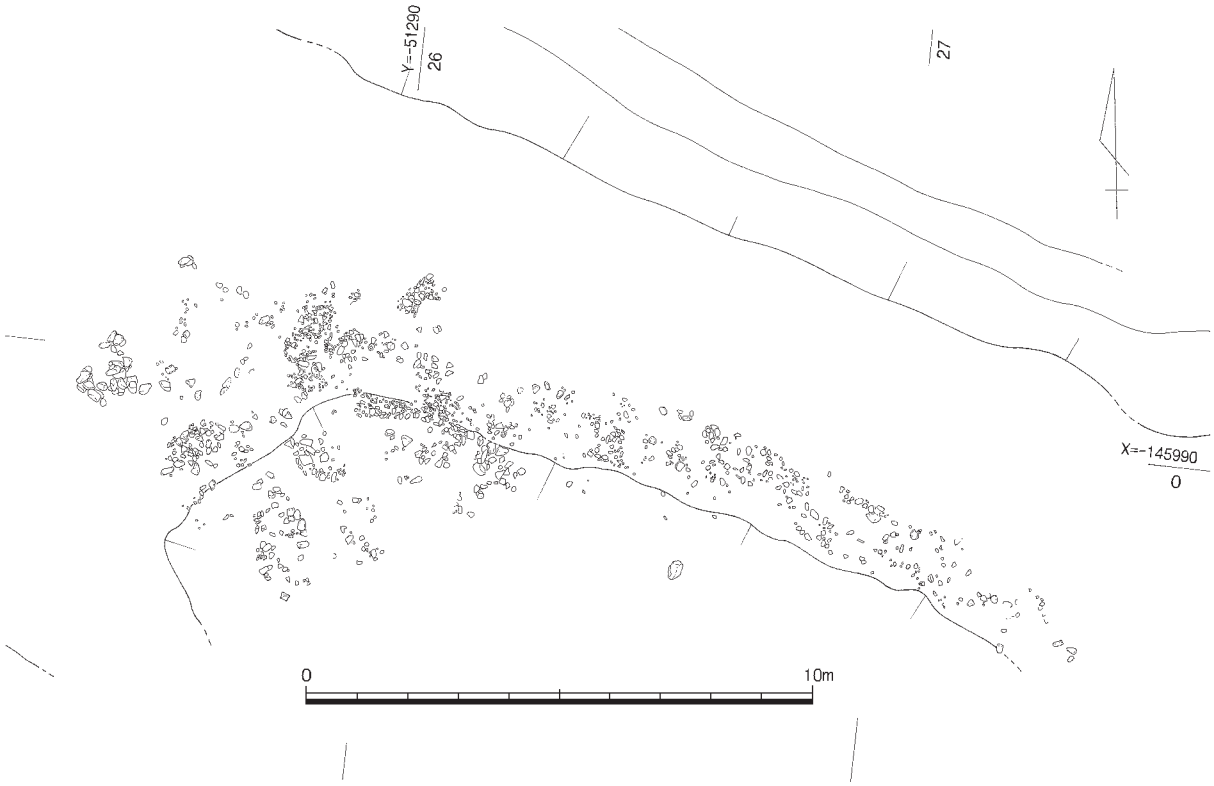
先に述べたように土塁は堀５を埋めて構築されており、居館の構造物のなかでも新しい段階のものと言うことができる。盛土下には通常見られる黒色の旧表土はなく、黄褐色の砂質土（Ｉ断面第39層）の上に盛土が乗る形となるが、これは土質あるいは水分の関係で黒色の旧表土層の形成がなされなかったためとみられ、北辺土塁の盛土下では部分的に炭・焼土の散布が認められた。

土塁盛土中からは備前焼甕42～45、すり鉢46～48が出土しており、そのうち47・48は盛土下面からの出土である。また、備前焼すり鉢49は土塁盛土上面－表土下からの出土である。

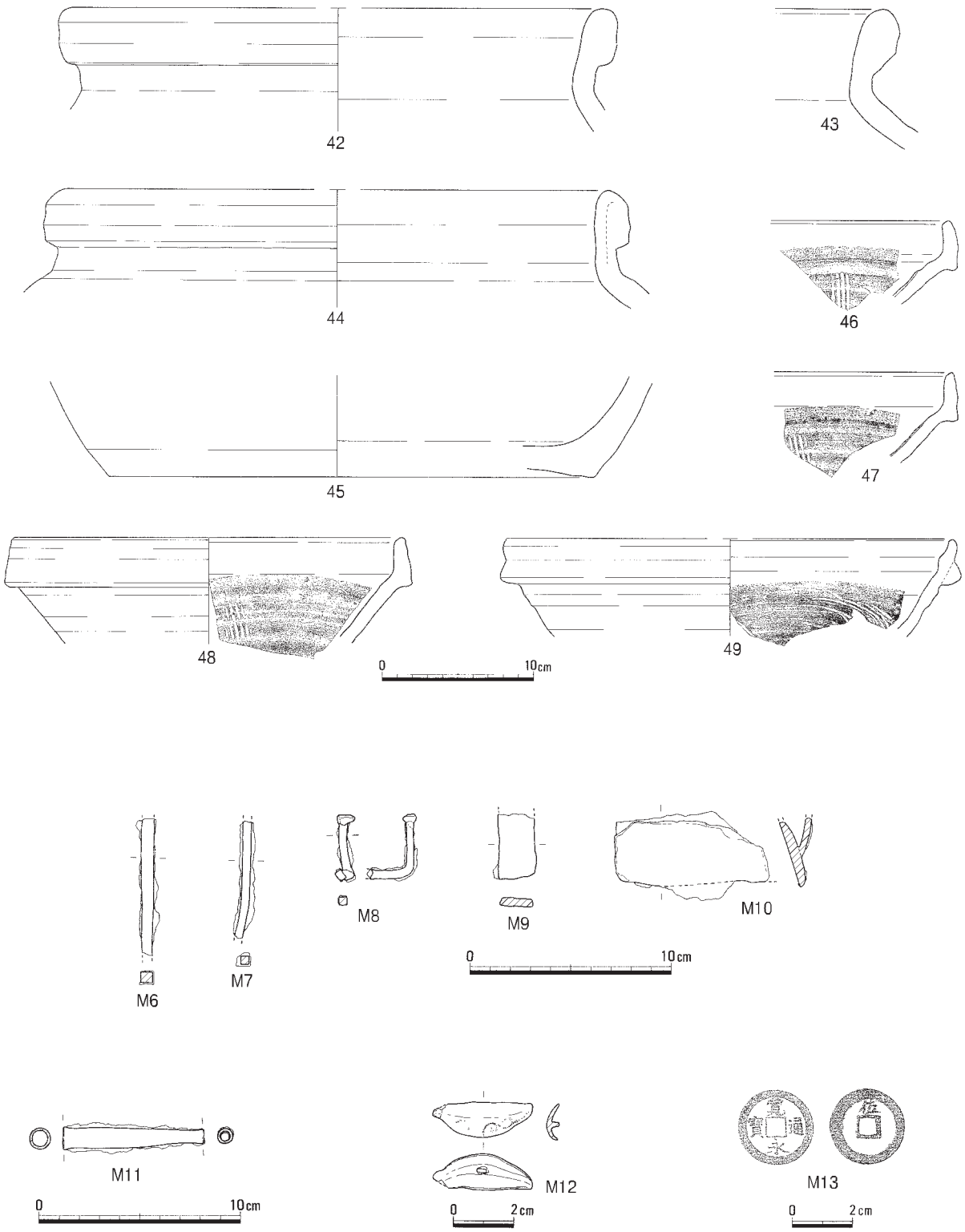
金属製品のうち、Ｍ８は盛土下の炭・焼土層中からの出土で釘とみられる。M12は盛土中からの出土で、青銅製で唐草状の施文がわずかに残る。長さ33mm、幅14mm、高さ12mmを測り、形状から刀装具の目貫と判断した。これ以外の金属製品は表土・流土からの出土であり土塁に直接関係するものではない。出土の備前焼は戦国時代のものであるが、そのうち42・43・47・48は15世紀末～16世紀初頭、44は16世紀前半、46は15世紀末～16世紀前半に位置づけられる。したがって、盛土がなされた年代の上限は16世紀前半となる。49は16世紀末～17世紀初頭で、居館の年代の下限示す可能性もあるが、確定はむずかしい。

堀４を埋めて新たに土塁を設けるという居館の平城化の要因として、天正10（1582）年の数年前から実施される、毛利氏による羽柴秀吉の侵攻に備えた境目の城の整備が考えられるが、それに伴うとする年代的な確証を欠いており、これに先行する時期の戦乱に対応したものである可能性もある。

(宇垣)



第39図　土塁南斜面礫検出状況（1/150）



第40図　土塁関連出土遺物（1/4、1/3、1/2）

5　塚（第28・41～46図、図版１－１～３）

前記の居館土塁の高まりを利用して築かれた塚である。

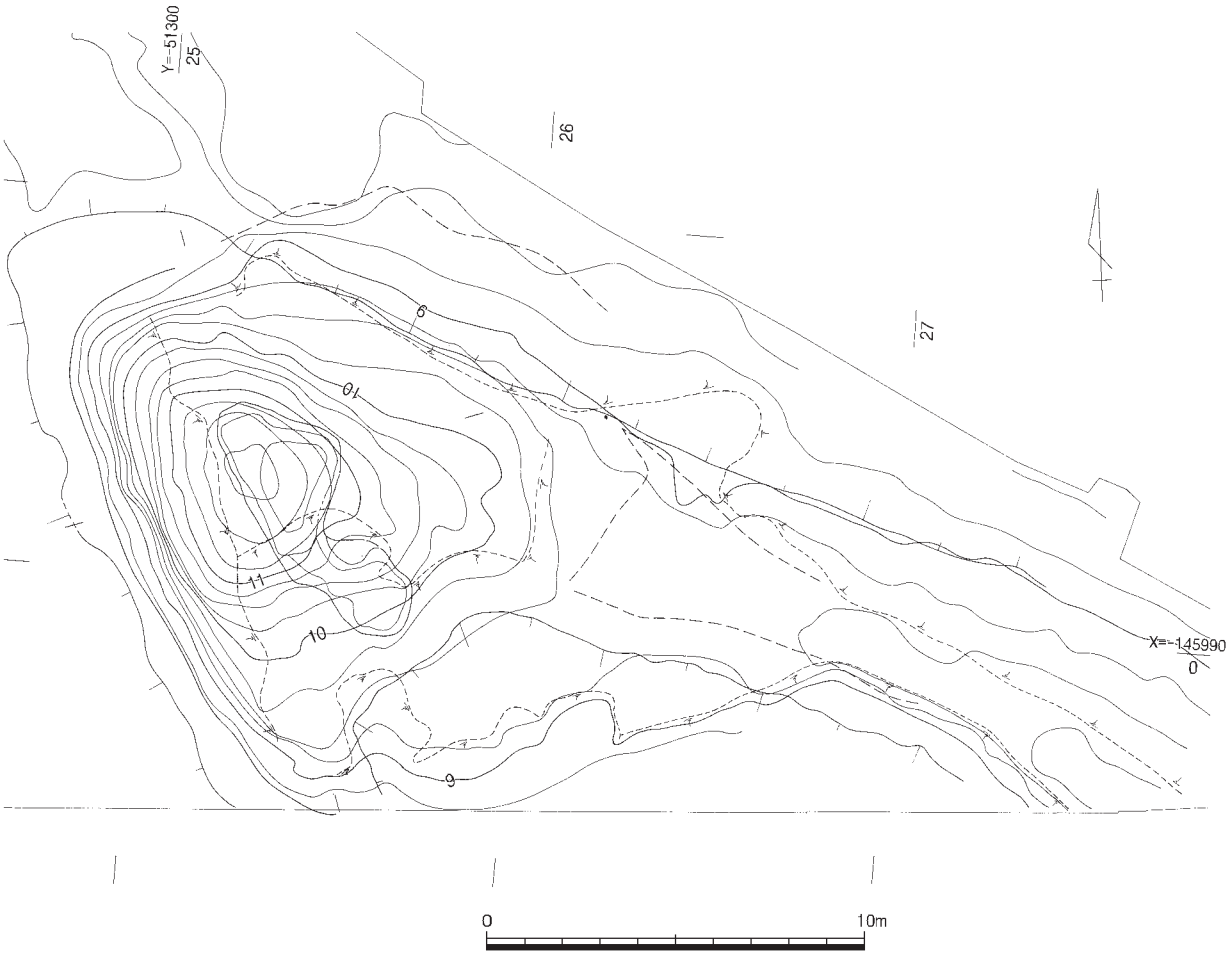
調査前にはこの塚よりも西側は水田となり、塚から東には宅地北縁の竹藪が続く状態であった。西

側の水田面からは屹立した状態であり、後期古墳を思わせるような形状であった。

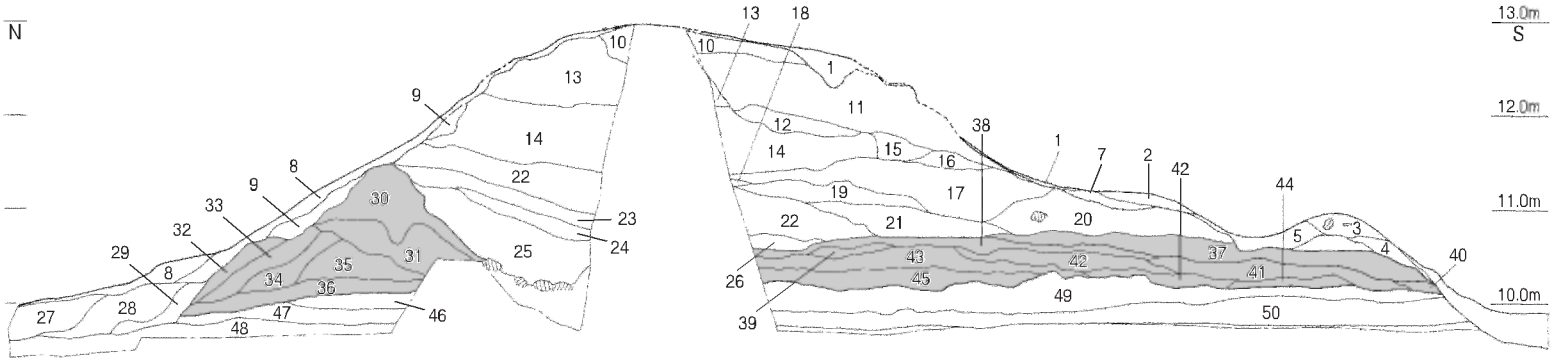
塚の南斜面中ほどの位置には古くなった状態ながら小社が設けられ、塚の中央には大木が生えていた。当初はこれらは二次的なものと考えていたが、調査の結果、盛土は塚であり現在までかろうじて機能を維持していたことが明らかになった。ただし、信仰の対象となる場所ではあったが、塚という認識やその由来についてはかならずしも明確ではなかった。

土塁の部分で述べたように西側面は水田の拡幅によって削られており、急斜面をなす。したがって、もとは西にある程度の広がりをもっていたとみることができる。現状で傾斜変換の内側を測った場合、南北８ｍ、東西８ｍとなるが、南側にも薄く盛り土が広がっており、それを含めれば南北11ｍとなる。南側は築造以後の改変・改修がなされて変形している可能性があるが、本来、古墳のように形状や端部が整ったものではなかった可能性が強い。高さは東の土塁上からで1.5ｍ、西側の水田面から土塁を含めた見かけの高さは3.1ｍである。

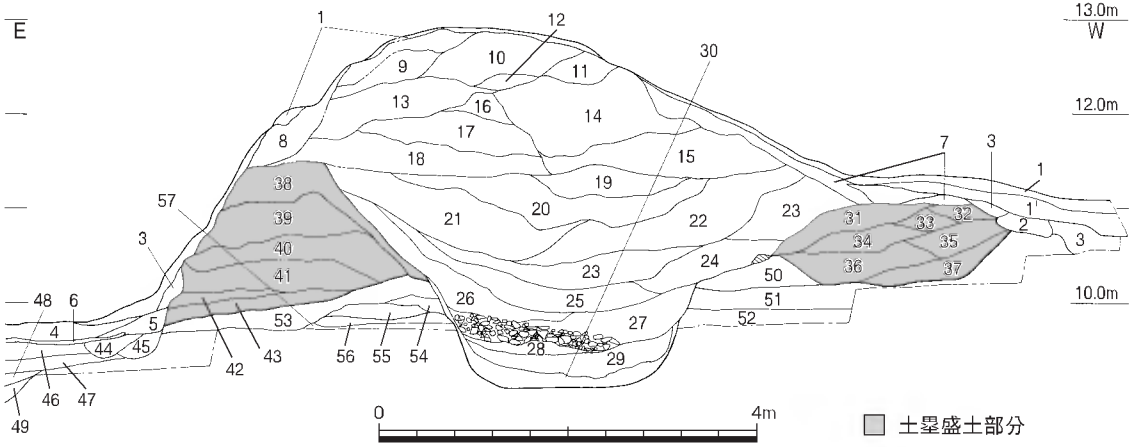
塚の盛土は後述の主体部上面からで3.36ｍを測る。盛土は中ほどを境界として上下に大別することができる。下層は東西断面19～27層であり、周囲から土を流し込むようにして土塁によって形成されたくぼみを埋め、いったん水平面を形成する。ここまでの埋土（盛土）にはおもに黄褐色微砂質土が



第41図　塚表土除去前の状況（1/200）



1　表土（腐植土層）
2　明黄色粘質土
3　暗褐色粘質土
4　暗黄褐色粘質土
5　明褐色粘質土
6　淡褐色粘質土
7　明黄色粘性微砂質土
8　褐黄色粘質土
9　暗黄褐色粘質土
10　明灰黄色粘質土
11　黄色粘性微砂質土
12　褐色砂質土
13　褐黒色粘性砂質土
14　褐色粘性砂質土
15　褐色砂質土（黄色土塊混）
16　明黄色粘性微砂質土
17　黄褐色粘性砂質土
18　明褐色砂質土
19　褐色微砂質土
20　暗褐色粘質土
21　黄褐色砂質土
22　褐色微砂質土
23　明褐黄色粘性砂質土
24　褐色微砂質土
25　暗褐色砂質土
26　黄色粘性砂質土（黒褐色土塊多）
27　暗褐色粘質土
28　淡黄色粘質土
29　（褐）黄色粘質土
30　黄色砂質土（暗褐色土塊少）
31　黄褐色微砂質土
32　黄色粘質土
33　明黄色粘性砂質土
34　黄色微砂質土
35　褐黄色砂質土
36　淡黄色微砂質土
37　褐黄色微砂質土
38　黄色粘性砂質土
39　褐色微砂質土
40　褐灰色粘質土
41　褐色粘質土
42　褐灰色粘質土
43　明褐灰色粘質土
44　黄色粘性微砂質土
45　土色なし
46　黄色粘質土
47　黄色粘質土（旧表土）
48　灰色砂質土
49　黄色粘性微砂質土
50　黄色微砂質土
51　褐色粘質土



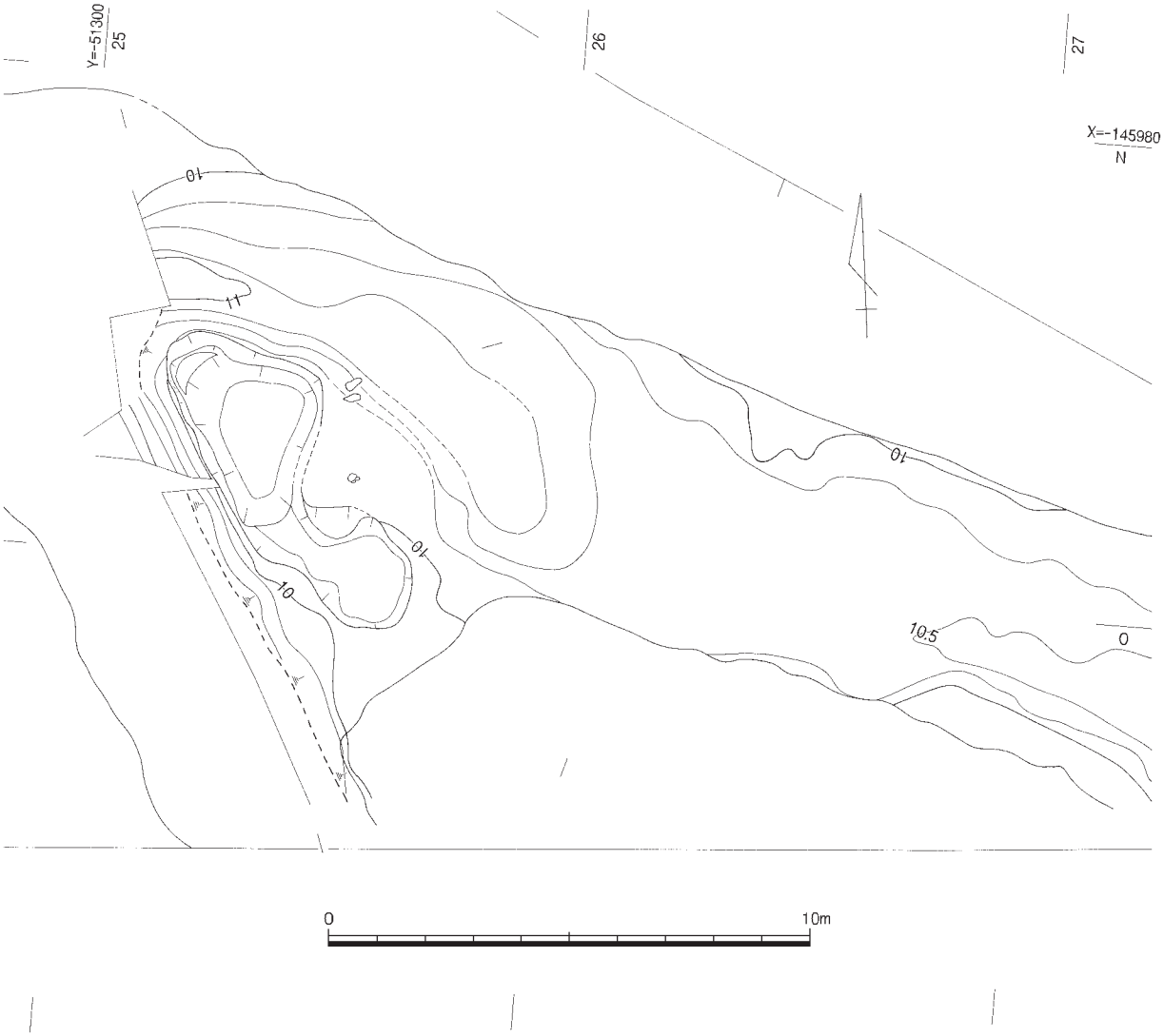
1　表土
2　撹乱
3　暗黄灰色粘質土
4　褐灰色粘質土
5　明灰褐色粘性微砂質土
6　Ｆｅ層
7　暗黄色砂質土
8　褐色粘性砂質土
9　黄色砂質土
10　明黄色砂質土
11　暗黄灰色微砂質土
12　暗褐色砂質土
13　黒褐色砂質土
14　黄色砂質土
15　灰黒色砂質土
16　暗黄色砂質土
17　暗褐色微砂質土
18　暗黄褐色砂質土（黒褐色土塊含）
19　灰黄色微砂質土
20　黄褐色砂質土
21　褐黄色砂質土
22　黄褐色微砂質土
23　褐色砂質土
24　灰褐色砂質土
25　褐黄色微砂質土
26　黄色砂質土
27　暗褐色砂質土
28　黒褐色粘性微砂質土
29　黒褐色砂質土
30　黄色砂質土
31　褐灰色微砂質土
32　黄色粘性砂質土
33　明黄色砂質土
34　明黄色微砂質土（灰色塊含）
35　暗褐色砂質土
36　褐色微砂質土
37　黄褐色砂質土
38　明黄色砂質土
39　褐黄色砂質土
40　明褐色微砂質土（灰色土塊少）
41　明褐色砂質土
42　明褐色微砂質土（灰色土塊多）
44　明黄灰色粘性微砂質土
45　暗黄灰色粘性微砂質土
46　黄褐灰色砂質土
47　暗褐色粘質土
48　黄褐色微砂質土
49　暗黄褐色砂質土
50　黄白色砂質土
51　黄色微砂質土
52　明黄色砂質土
53　明黄色砂質土
54　黄色砂質土
55　黄色砂質土
56　黄色粘性砂質土
57　灰褐色砂質土

第42図　塚（1/80）

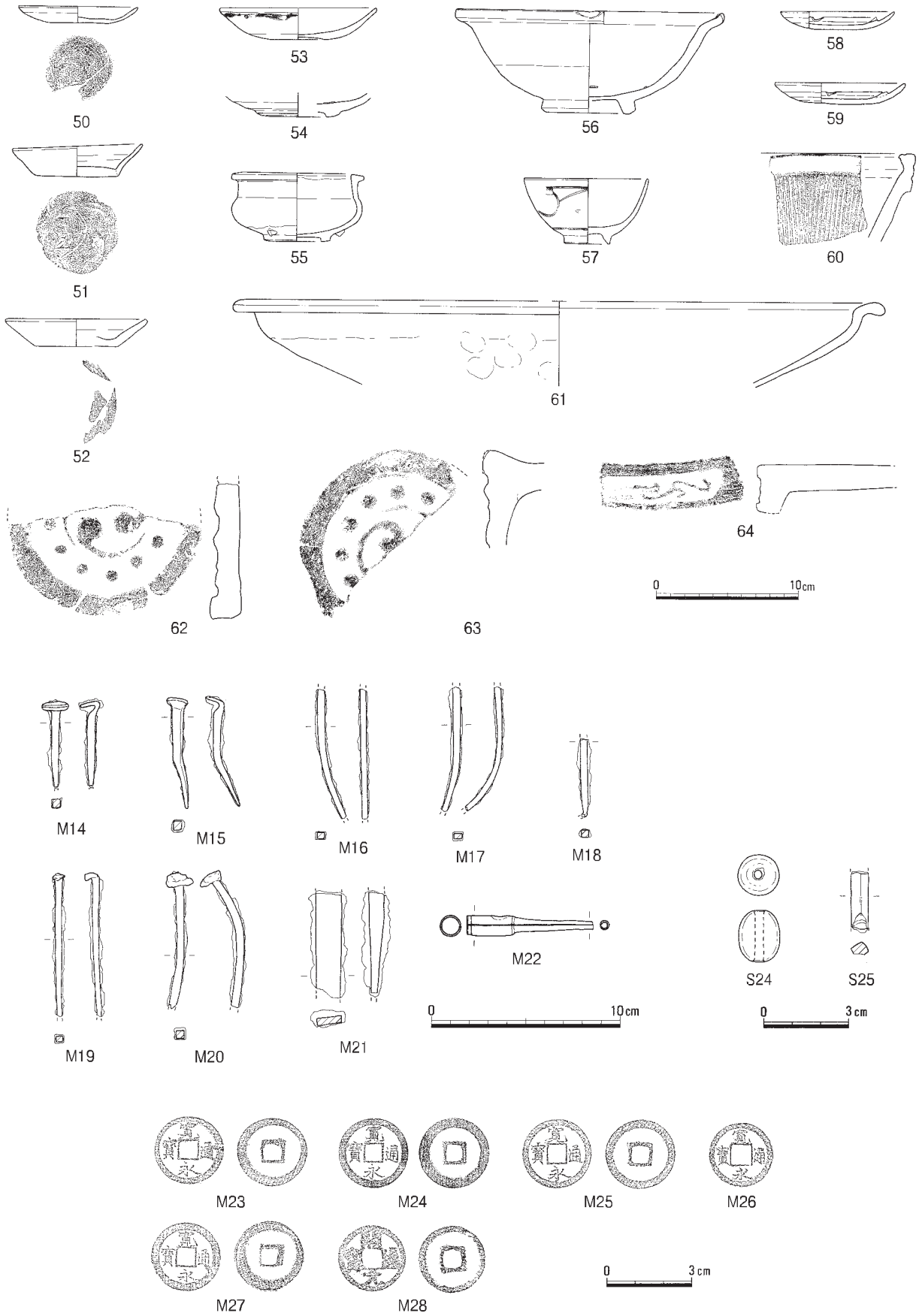
用いられる。下層の盛土の高さは1.8ｍで、西辺土塁上端に合わせてある。これに続いて上層の盛土がなされる。盛土の高さ1.5ｍを測り、おもに褐色～黒褐色土が用いられる。

塚の中心部には塚構築の目的とみられる施設が設けられる。施設の性格が明確でないためここでは主体部と呼ぶ。主体部は二つの土壙が接続したような不整形な形状を示し、全長7.45ｍ、幅2.85ｍを測る。主体部のうち中心は南北4.30ｍ、東西2.85ｍの三角の平面形で深さ66㎝の掘り込みを設ける。この掘り込みを北側から埋め戻して掘り込みの南端が最も低くなる斜面が形成される。また、南側には南北2.65ｍ、東西2.05ｍの円形をなす掘り込みが設けられる。掘り込みは浅く、南端はわずかに掘り窪められる程度であるのに対し、北側は20㎝の深さをもつ。南側の掘込みの北西側は溝状をなして中央の掘込みの南縁に接続する。

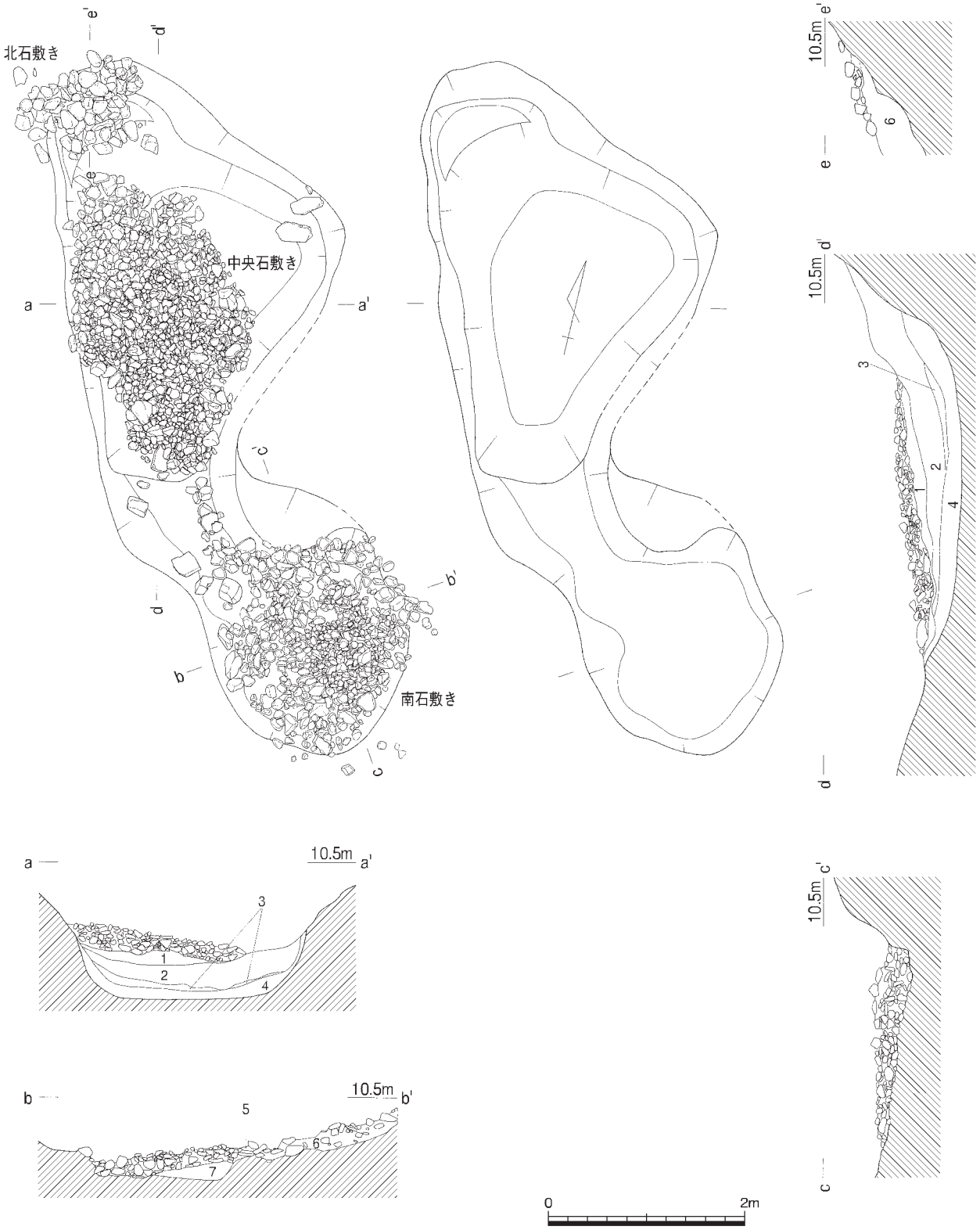
中央の掘り込みが埋め戻された段階で塚主体部の底面は南北両端が高く中央掘り込みの南端付近で最も低くなる不整形なくぼみをなし、この上に北・中央・南の３ヶ所の石敷きが設けられる。中央掘り込みの下面が中心施設になる可能性も考えたが、特に何も設けられておらず、この石敷きが主体部になるとみてよい。石敷きに用いられる石材はいずれも円礫である。



第43図　塚盛土除去後の状況（1/150）



第44図　塚関連出土遺物（1/4、1/3、1/2）



1　黒褐色粘性砂質土
2　黒褐色砂質土（黒褐色土塊多）
3　褐黄色砂質土
4　黄色砂質土
5　灰褐色土
6　暗黄色砂質土
7　黄色土

第45図　塚主体部（1/60）

北石敷きは南北1.0ｍ、東西1.3ｍを測り、他の石敷きよりもやや大きめの18㎝前後の礫によって構成される。中央石敷きは南北3.2ｍ、東西2.0ｍの楕円形をなし南～南東端が低くなる。礫の大きさは10㎝前後で、25㎝の厚みをもつ。

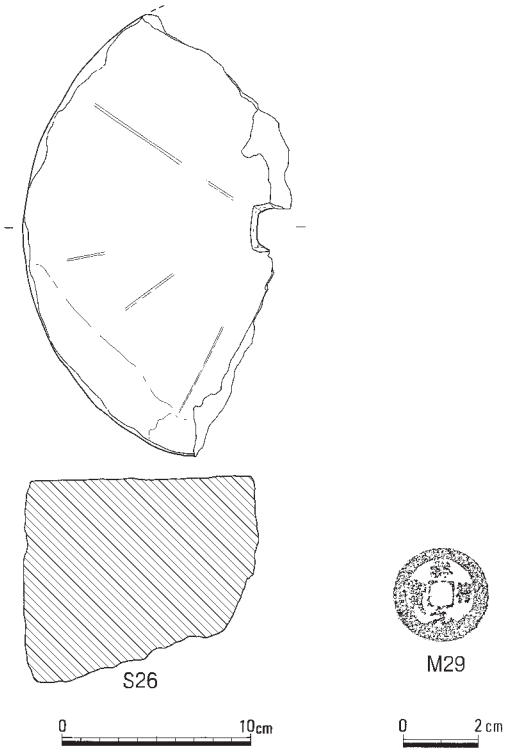
南石敷きは南北2.2ｍ、東西1.9ｍの円形をなし、北西端はやや大形の礫が石列状に並べられ中央石敷きに接続する。中央東より部分には８㎝前後とやや小さい礫が集中し周囲を16㎝前後のやや大きな礫がとりまく形となる。石敷きの厚さは16㎝である。

この３つの石敷きに共通する特徴は焼けて赤変した礫が含まれていることで、熱を受けて割れているものもある。赤変した礫の比率は全体の約１割であるが、これは明確な変色を示すものの量であり、焼けた礫の比率はもう少し高くなる可能性が強い。これらは石敷きのなかに散在した状態で、まとまって面をなすという状況ではない。したがって、礫が火を受けたのはこの状態ではなかったとみてよく、異なる場所で火を受けた礫が搬入されたと推定される。中央石敷きの礫間には空隙が見られる箇所があり、礫のみが敷かれたとみてよい。

一方、南石敷きの西部から掘り込みの西外側の土塁内側斜面にかけては、厚さ８㎝の堆積土と判断できる明灰色粘性砂質土が広がり、その上に厚さ３㎝の旧表土状の褐黒色砂質土、厚さ６㎝の明黄色砂質土が堆積し、その上を厚さ68㎝の盛土が覆うことが判明した。したがって、南石敷きの一部はある程度の期間露出しており、後に盛土がなされたと考えてよい。

写真７　銅銭出土状況（北から）

塚に確実に伴う遺物は少なく、南石敷きに用いられた状態で石臼Ｓ26が、同じく南石敷きの礫間から銅銭M29が出土した。石臼は復元径26.2㎝、縁部の厚さ10.7㎝を測る。焼けて変色しており、擂り面は摩耗が著しく不明瞭である。銅銭は祥符元寶である。これ以外に年代推定の手がかりがないため、塚の築造年代は大まかなものとならざるをえない。土塁の年代である16世紀が年代の上限となる。下限は不明と言わざるをえないが、銅銭が寛永通宝でないことからすれば、江戸時代でもかなり早い段階か、場合によっては土塁の機能が失われた直後に構築された可能性が強いと考える。第44図に示す遺物は基本的に表土・流土からの出土であり、築造以後の祀りに関わる遺物である。石敷きの上面・内部からは信仰の対象となる遺物は出土していないが、経巻などの有機物製品が納められた可能性は考えられる。　（宇垣）



第46図　主体部内出土遺物（1/4、1/2）

６　土壙

土壙９（第47図、図版４－４）

Ⅵ区中央南寄りに位置し、堀１の東側斜面で検出した。平面形は、推定直径140㎝の円形を呈すると考えられ、検出面からの深さは約90㎝を測る。底面は北西部が一段深く堀込まれている。井戸の可能性があるが断定できない。出土遺物は無く、時期を限定できないが、堀１の埋没が進んだ段階で設けられた可能性が最も高いと考えられる。（物部）

土壙10（第48図、図版４－５）

土塁東端の盛土下、旧表土下面で検出した土壙である。南端は堀５によって掘削されている。

楕円形をなし東西84㎝、南北47㎝、深さ17㎝を測る。図示しえないが中世の土器小片および須恵器小片が出土しており、中世の遺構と判断できる。（宇垣）

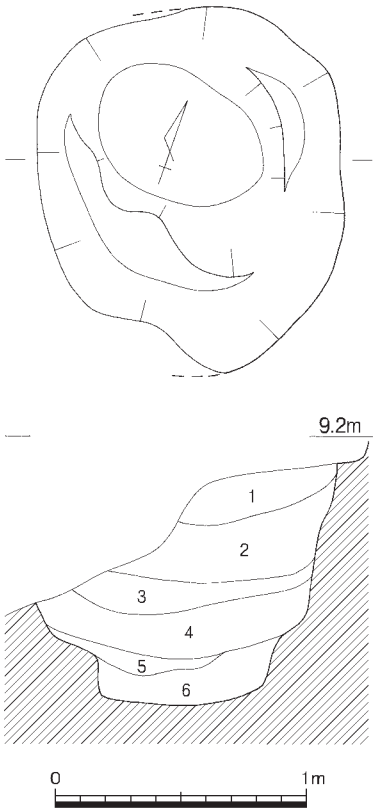
土壙11（第49図、図版４－６）

Ⅶ区の中央南端に位置し、東約３ｍには土壙12が存在する。平面形は長方形で、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸78㎝、短軸44㎝、検出面からの深さ10㎝を測り、底面からの海抜高は8.72ｍであった。出土した遺物は土器細片のみで、図示できるものはなかった。時期は中世と考えられる。（石田）

土壙12（第50図）

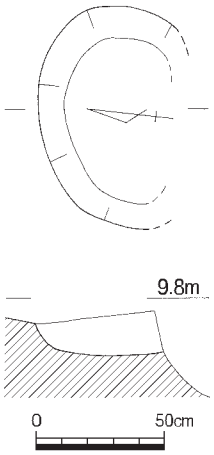
Ⅶ区の中央南端に位置する。平面形は長楕円形で、断面は皿状をなしていた。埋土は炭や焼土片を多く含んでいた。土壙の西半は調査区外に続くため、全容は不明である。

規模は検出できた範囲で、長軸131㎝、短軸71㎝、検出面からの深さ20㎝を測り、底面からの海抜高は8.62ｍであった。出土した土器は細片で図示できなかった。時期は中世と考えられる。（〃）



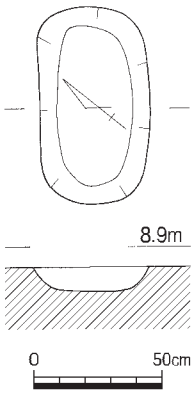
1　黄褐色弱粘性砂質土
2　淡黄褐色弱粘性砂質土
3　褐色粘性砂質土
4　淡褐色粘性砂質土
5　暗黄褐色砂質土
6　黒褐色砂質土

第47図　土壙９（1/30）



黄色粘性砂質土

第48図　土壙10（1/30）

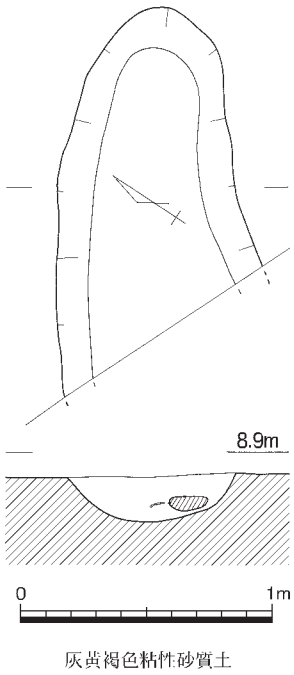


褐灰色粘性砂質土

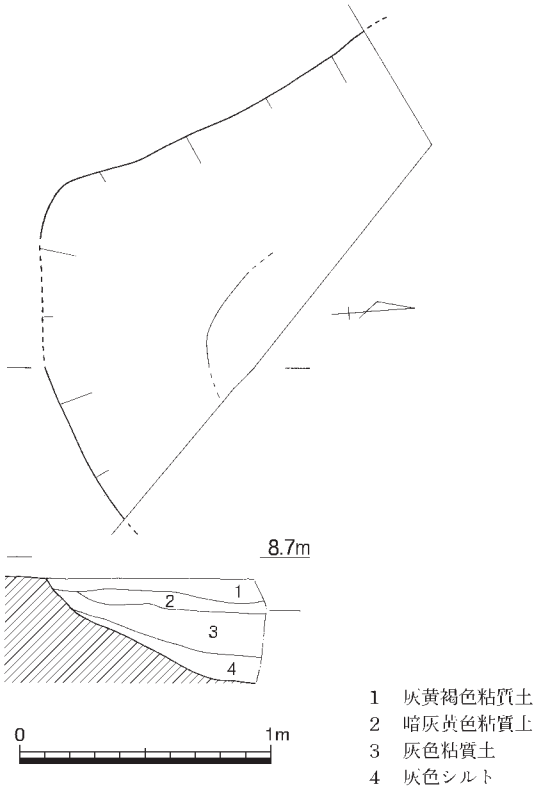
第49図　土壙11（1/30）

土壙13（第51図）

Ⅶ区の北端に位置し、近世の造成土の直下で検出された大形の土壙である。土壙の大部分は北の調査区外に続いており、南西隅の一部分のみを検出している。本来の平面形状は不明であるが、壁は底部からゆるやかに立ち上がる。規模は２×3.5ｍ以上あり、検出面からの深さ約80㎝、底面の海抜高は7.70ｍであった。時期は層序や埋土の特徴から近世と考えられる。（石田）



第50図　土壙12（1/30）



第51図　土壙13（1/60）

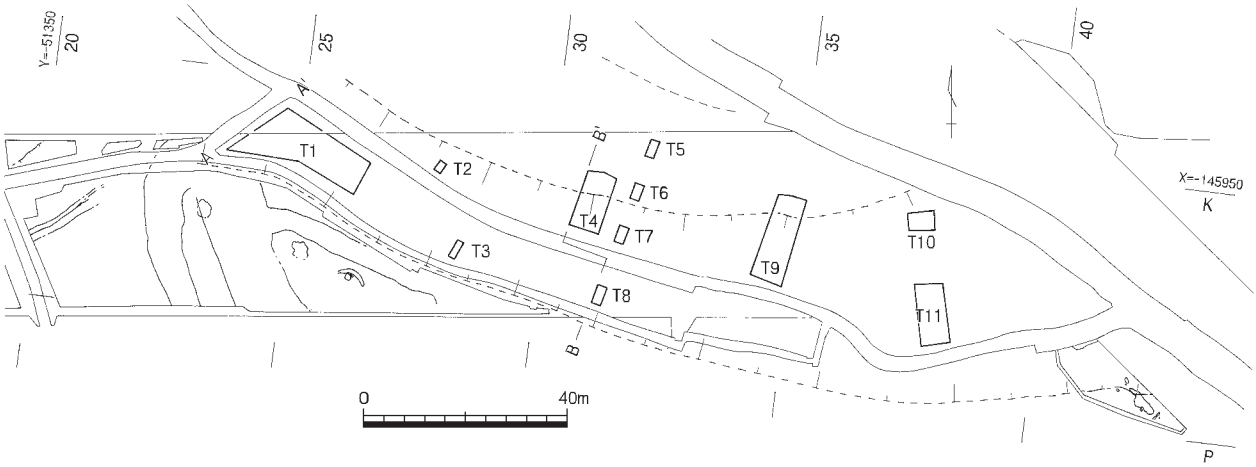
7　下がり（第52～54図）

Ⅵ区の北東側は一段低い水田となるが、この部分は旧河道部となる。微高地端部の形状は東側に所在する国府川の方向と平行しており、この川の護岸がなされ流路が固定されるまでは河道が微高地の端に及ぶことがあったとみられる。

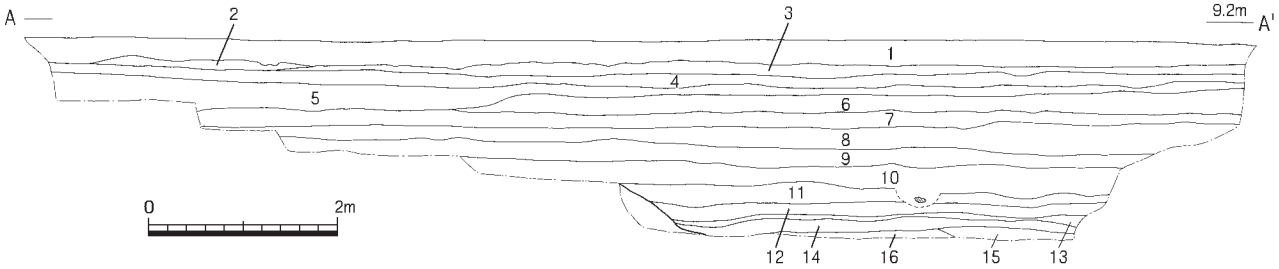
面的な調査を行ったＴ１では現地表下2.06ｍで基盤の礫層、あるいはそれに続く砂質土に達する。その上には未分解の植物片を含む暗褐色粘質土（第11層）、褐黒色粘土（第13層）が堆積しており、第13層および間層となる砂層（第12層）にかけて土師器皿65、土師器椀69～72が出土した。65・69・70はほぼ完形である。これらは痕跡的な高台の形状から14世紀前半に位置づけられ、微高地上にこの時期の遺跡が所在していたとみてよいが、居館遺跡そのものがこの時期にまでさかのぼるかどうかは堀の年代が明確でないため不明と言わざるをえない。この年代以降も河道あるいは河道にそった沼沢地であったとみてよく、居館北側の防御線として利用されたであろうことは想像に難くない。

これ以外の遺物のうち土師器椀67・68はⅦ区の斜面堆積層からの出土であり、13世紀代とみられる。

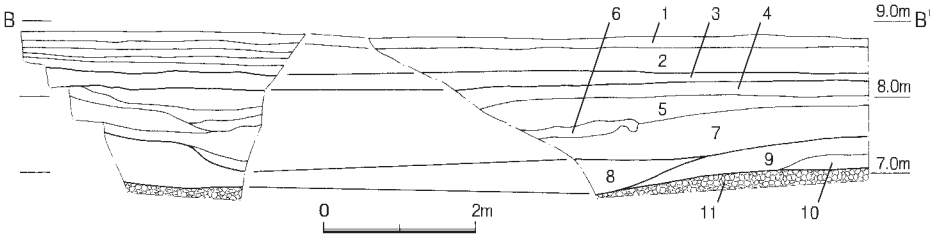
Ｔ１以外に10本のトレンチを設けて堆積の状況確認を行ったが、遺物の出土量は総じて少なく、堆積土の接続関係を把握することはかなり困難であった。Ｔ１第８層からは青磁碗73・74、木製品Ｗ１が出土した。５・６層からは江戸時代前半とみられる唐津Ⅲ76および銅銭M30～33が出土した。Ｚ13



第52図　Ⅷ区トレンチ配置図（1/1,500）



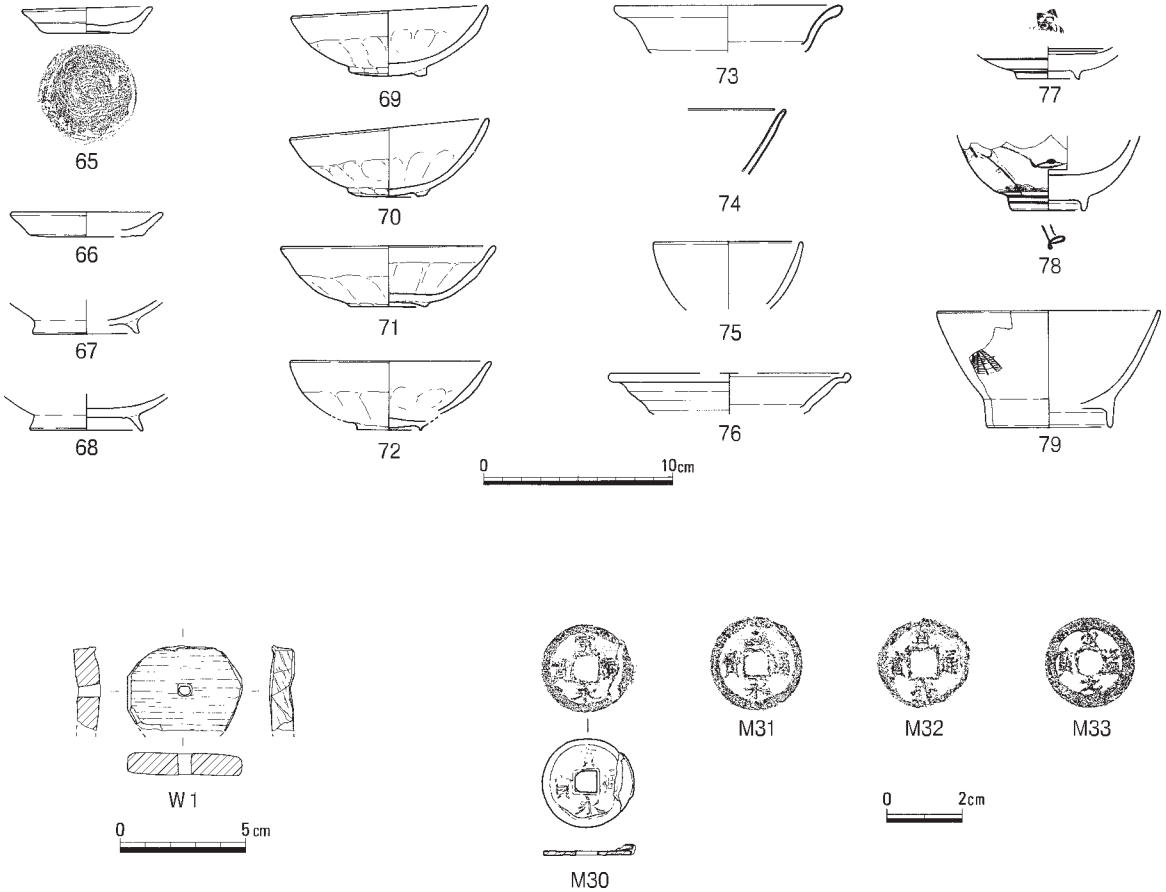
1　暗灰色粘質土（現水田）
2　灰黒色粘質土（水田）
3　明橙色粘性砂質土（近代水田）
4　明灰褐色粘質土
5　黄灰色粘性砂質土
6　暗灰色粘質土
7　黒灰色粘質土
8　灰黒色粘質土
9　褐色粘質土（砂・有機質含）
10　褐色粘質土（有機質少含）
11　暗褐色粘質土（ピート）
12　明灰色砂
13　褐黒色粘土（ピート）
14　灰黒色粘質土
15　黒色砂質土



1　褐色砂質土
2　暗青灰色砂質土
3　暗灰色粘質土
4　褐灰色砂質土
5　暗灰色砂質土
6　明褐色粗砂
7　暗灰色粘砂
8　暗茶褐色粘質土（ピート）
9　褐色粗砂と暗茶褐色粘質土の互層状
10　暗茶褐色粘質土（ピート）
11　礫層

第53図　トレンチ断面（上1/80・下1/100）

が至道元寶、他は寛永通宝である。このほか江戸時代後半の磁器77～79は各トレンチ上層からの出土である。河道部東部は近世ないし近代と推定される砂・砂質土が厚く、14世紀頃に形成された河道に後の河道が重複すると理解している。　(宇垣)



第54図　下がり関連出土遺物（1/4、1/3、1/2）

8　遺構に伴わない遺物（第55図）

遺構ではないが、調査の過程で地震による墳砂の痕跡を検出した。検出位置は堀斜面下部の数か所である。写真に示したのは堀１東斜面で検出したもので、上面幅67㎝、深さ70㎝を測り、断面形は逆台形をなし、上端は基盤層内で水平に終わる。平面では堀に直交して東に１ｍ以上のびることを確認している。写真に示すように基盤下部の礫層の礫が吹き上がっており、礫の大きさは最大30㎝を測る。きわめて規模の大きな地震痕跡であるが、基盤層中に所在しているため年代推定の手がかりがなく、縄文時代晩期

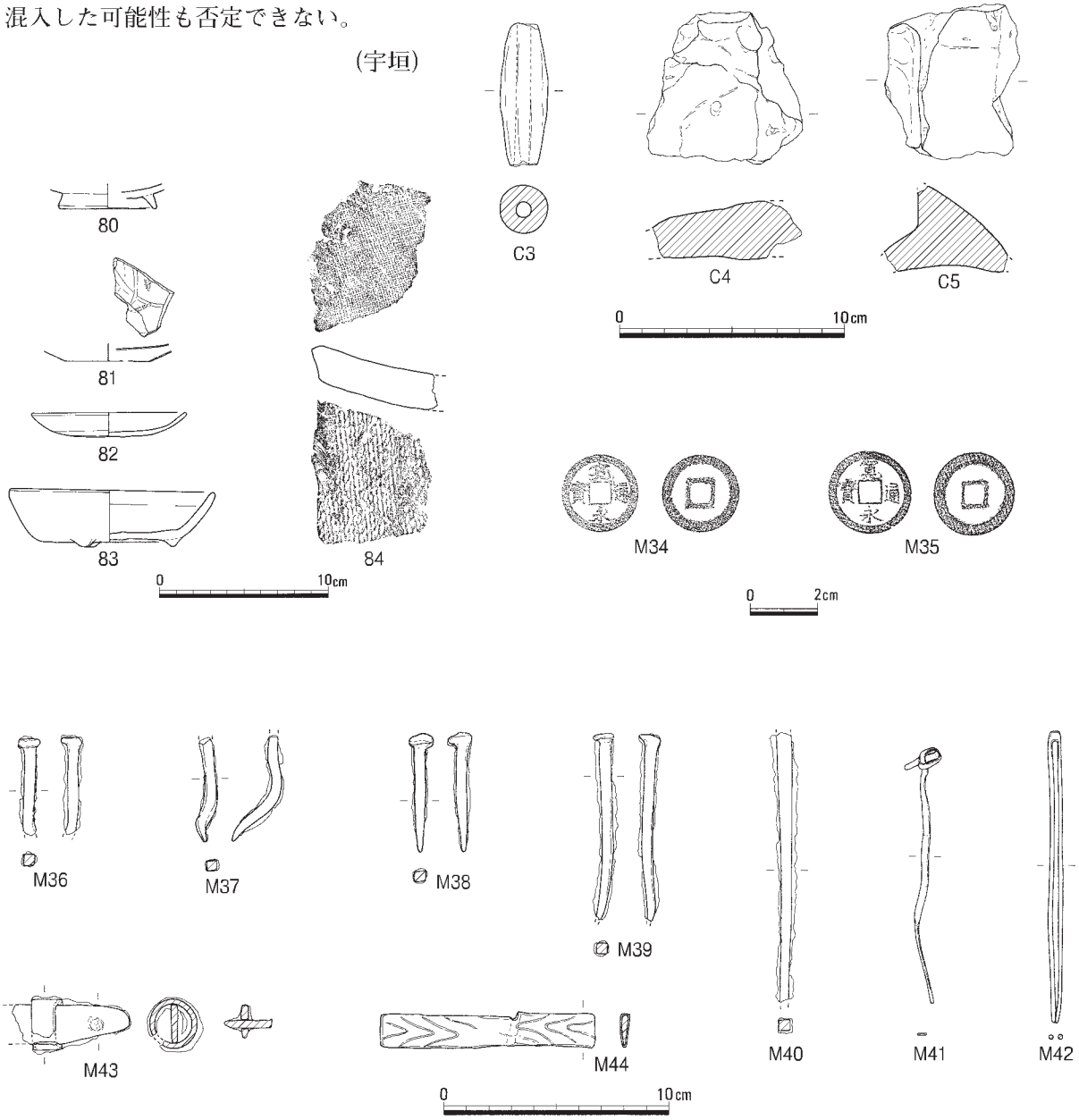
写真８　噴砂の状況（西から）

よりも古いとしか言えない。

表土あるいは流土などから出土した遺構に伴わない遺物として、奈良時代の瓦84、中世の土師器椀80、青磁皿81、近世の備前焼灯明皿82、土師器香炉83、土錘Ｃ３、寛永通寶M34・35などがある。このほかＣ４・５は焼土塊に近い胎土・焼成であるが面をもつ。全体に橙色～黄褐色を呈し、部分によっては黒色を呈する。鋳型の外型等とも思えるが確実とも言い難い。この２点はⅦ区の中世溝からの出土である。

金属製品は釘が主体を占める。これ以外ではM42が銅製のかんざし、M41は銅線状の製品で、同じくかんざしと推定する。M44は銅製の小柄で長さ9.5㎝、幅1.5㎝を測り、波状の文様が彫り込まれる。この３点は土塁上に設けられた近世末ごろと推定される建物の造成土中からの出土である。かんざしは近世の遺物とみてよい。小柄についても近世の可能性が強いが、中世の遺物が混入した可能性も否定できない。

(宇垣)



第55図　遺構に伴わない遺物（1/4、1/3、1/2、1/3）

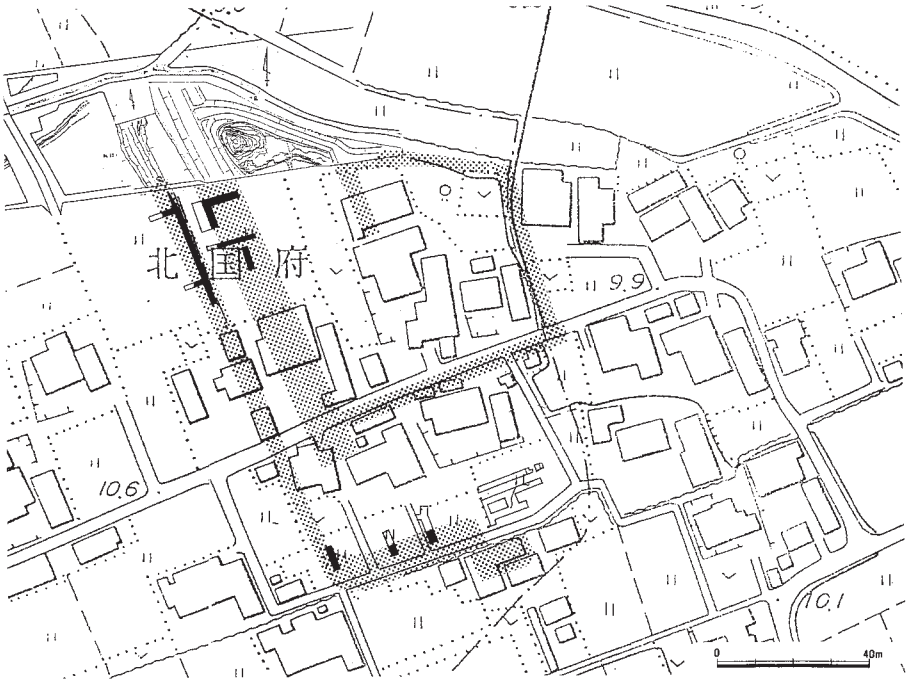
第４節　小結

総社遺跡は遺構の密度は低かったが、特色のある遺構・遺物を検出した。ここではおもに中世居館についての総括をおこなって小結とする。

調査区の東部で検出した中世の居館は、西側に堀１と２、北側に堀３と土塁を配置する構造であるが、これは最終的な形状である。北側の防御施設については16世紀のいずれかの時期に堀４・５を埋めて土塁が設けられたことが明らかになった。堀３は土塁にそっており、土塁とともに設けられたと推定される。したがって、北側は堀５・堀３東部と旧河道を防御線とする構造から、土塁・堀３・河道という、多重の防御線に改修されたことになる。西側は堀１・２の二重堀であるが、北側と同様に堀１がこの改修時に追加された可能性も考えられるが、堀が機能していた時点での遺物がないため検討は困難である。防御線の多重化がなされるこの改修によって、居館は平城としての機能を強化したと言ってよく、戦国時代の戦乱・緊張状態の激化に起因して実施されたと推定される。この地域で緊張状態が最も激化するのは16世紀後半であり、羽柴秀吉の中国地方侵攻、それに対する毛利氏の攻防戦が続く。1580（天正８）年には毛利氏は備中南部境目諸城の強化を図るが、その２年後には備中高松城水攻めに至ることになる。改修はこの情勢にもとづく可能性が考えられるが、遺物から居館の改修時期や廃絶年代を決定することがむずかしいため、可能性の一つとせざるをえない。

居館中央部は国府の地名であり、地元では備中高松城主清水宗治の部将であった国府市正の屋敷がこの付近にあったと伝える。遺構の年代から、その伝承と居館を結びつけることに特に無理はないと思われ、国府氏の拠点がこの居館であったと考える。

居館の平面規模は推定によらざるをえないが、過去に実施された総社市教育委員会の確認調査成果や集落内に以前水路状の池があったという伝承にもとづけば、南北150ｍの規模で、内部が堀によって区画されたものに復元できる。しかしながら、東辺の位置が不明であり、堀２の延長部がどこまでのびるかなど、内部の堀の配置も明確でないなどのため、図示した以上の復元はむずかしい。きわめて大規模な居館であるが、初現や変遷については一部しか解明できておらず、今後の資料の蓄積が必要である。（宇垣）



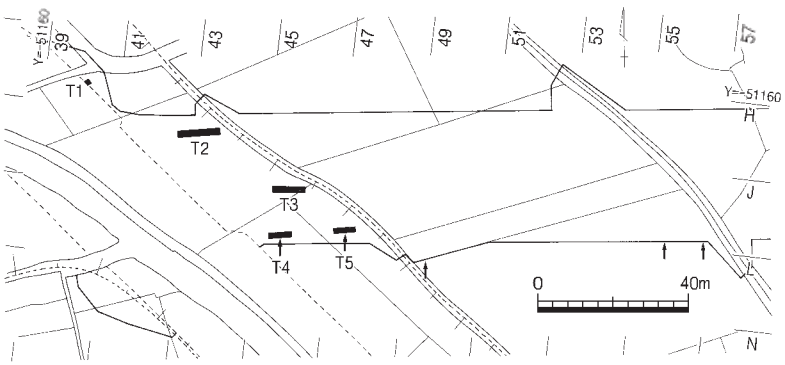
第56図　居館遺構の復元（1/2,000）

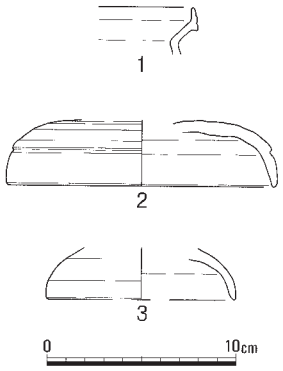
第４章　金井戸遺跡

第１節　遺跡の概要

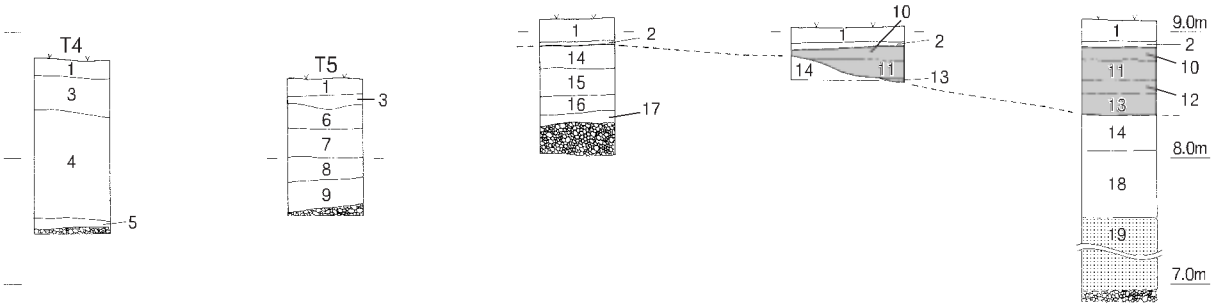
金井戸遺跡は総社遺跡から国府川を隔てた東側に位置する。調査対象地内を縦断する農道を境にさらに東西に分かれている。東側では近世以降の耕作土直下で古代～中世の微高地を確認し、掘立柱建物、土壙、鍛冶炉などを検出した。微高地は東に緩やかに下がり、北溝手遺跡との間には河道が存在していた。また調査区の東半には包含層が残存しており、河道肩口付近の土壙や鍛冶炉は包含層の下面で、素掘溝群は包含層の上面で検出されている。なお第58図には微高地を形成する堆積土から出土した土器を図示した。１は礫層、２・３は第14～16層に対応する砂質土から出土している。これらの遺物から、当微高地は弥生時代～古墳時代にかけて運ばれてきた砂礫堆が核となって形成され、古代にいたって安定した比較的新しい微高地と推察される。

一方、西側の現地形は東側より一段低い水田であり、Ｔ１～５のトレンチで確認を行った結果、いずれもグライ化した粘土と砂の堆積で、旧国府川の流路もしくは氾濫源と想定される。　　（渡邉）





第58図　基盤内出土遺物（1/4）



1　現代耕作土
2　旧水田層
3　造成土
4　造成土
5　灰オリーブ色微砂
6　暗オリーブ灰色粘土
7　暗灰色粘土
8　暗オリーブ灰色微砂
9　暗灰オリーブ色微砂
10　オリーブ褐色砂質土（古代～中世包含層）
11　暗オリーブ褐色粘性砂質土（古代～中世包含層）
12　黄褐色粘性微砂質土（古代～中世包含層）
13　暗灰黄色粘性微砂質土（古代～中世包含層）
14　にぶい黄褐色粘性砂質土
15　暗オリーブ褐色微砂質土
16　黒褐色微砂質土
17　黒褐色礫混じり砂質土
18　灰色粘質土
19　黄灰色細砂
20　礫層

第57図　調査区及びトレンチ配置図（1/2,000）・堆積状況柱状模式図

第59図　遺構全体図（1/300）

第２節　古代から中世の遺構・遺物

１　掘立柱建物

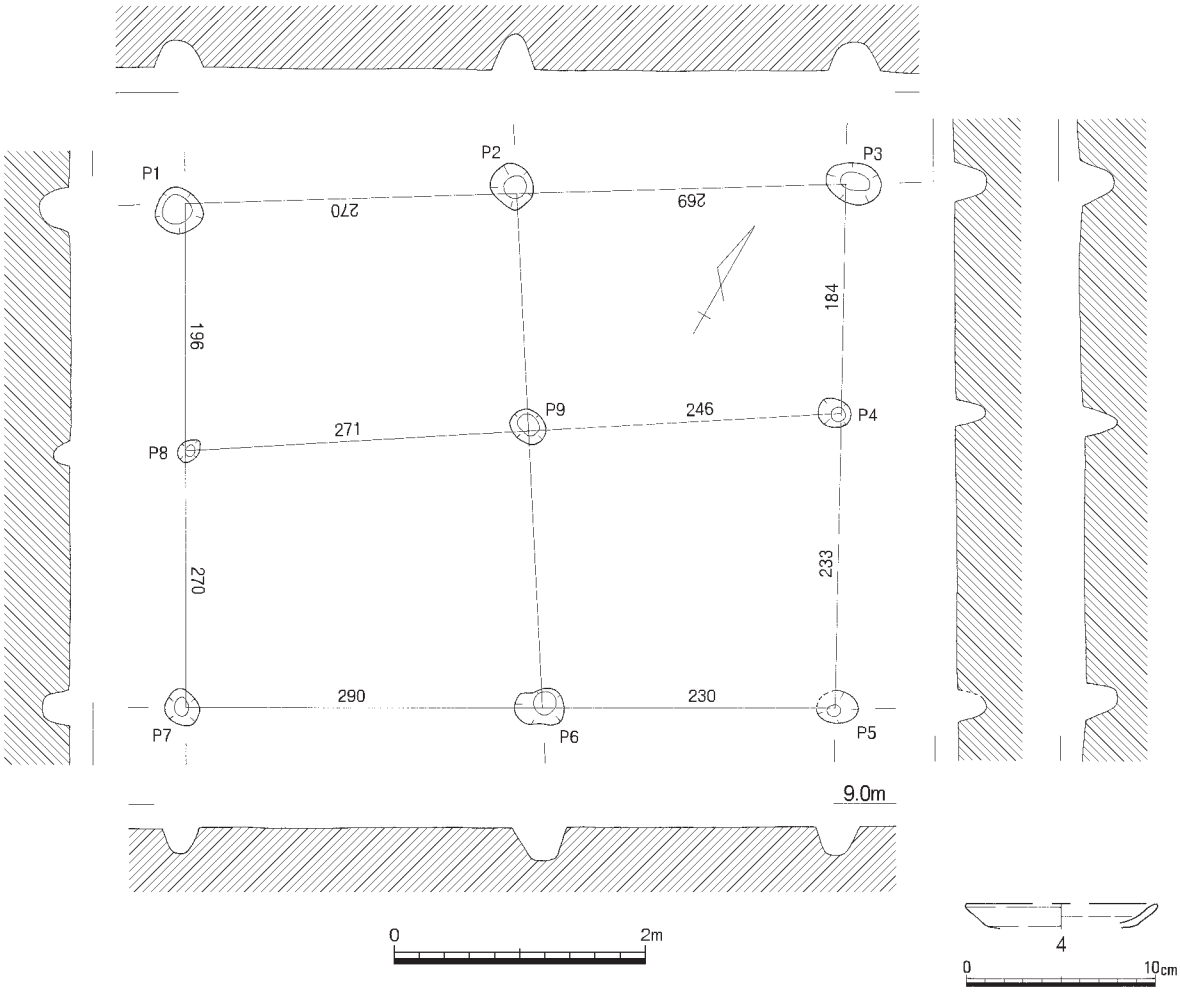
掘立柱建物１（第60図・図版８－１）

調査区の北西部に位置する。この掘立柱建物を中心に中世の土壙や柱穴が偏在している傾向が見られる。２×２間の規模で、東西にやや長い長方形を呈する。おおよそ現在の地割に則した主軸方向をとっている。柱穴は径20～30㎝、深さ30㎝前後の小規模な円形で、大きさ及び深さは一律でない。

Ｐ９から土師器皿４が、Ｐ７から格子叩きのある平瓦片が出土した他、鉄滓や炉壁も出土した。細片のため断定し難いが周辺の状況から13世紀頃のものと思われる。（渡邉）

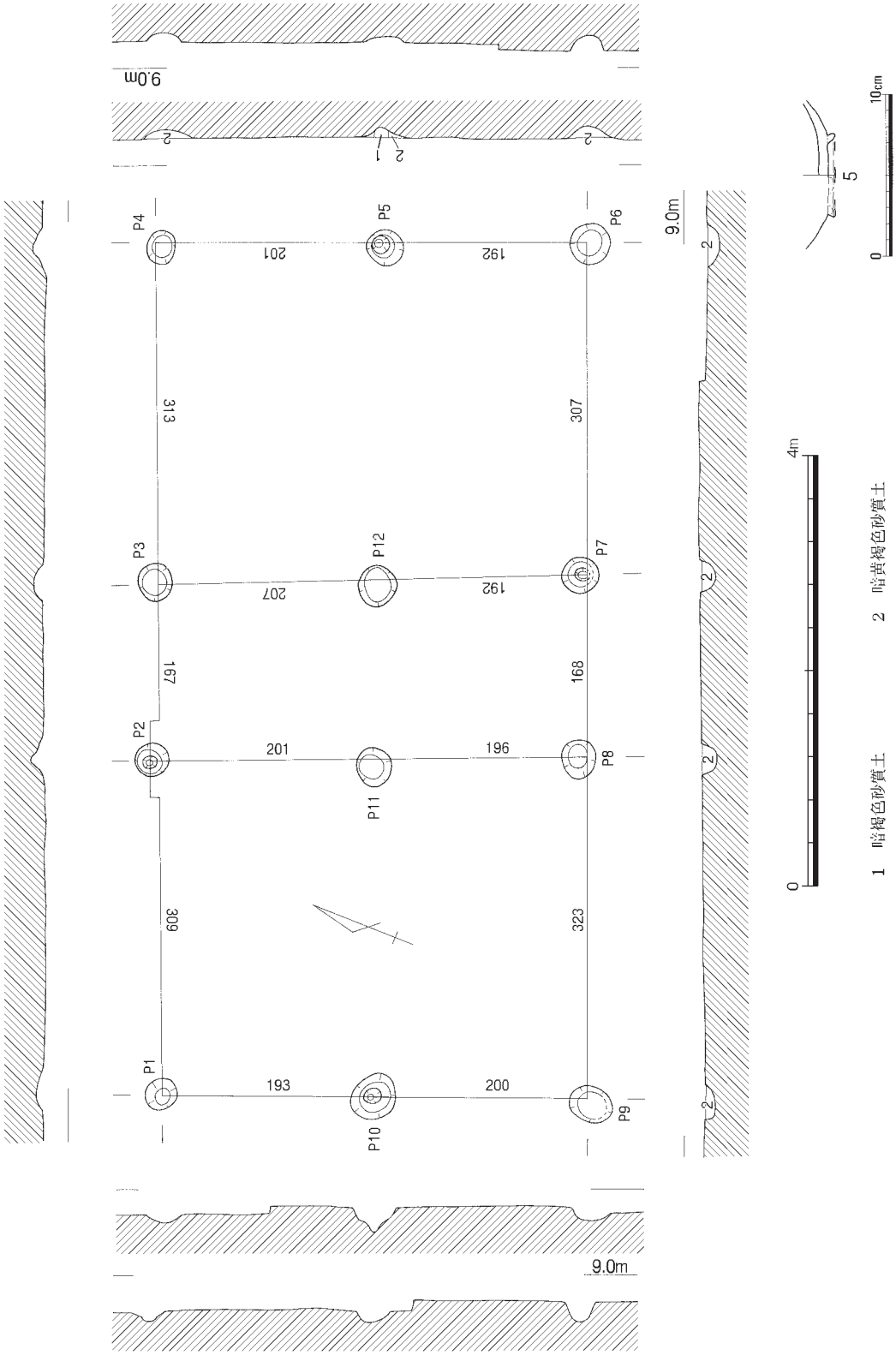
掘立柱建物２（第61図・図版８－２）

調査区西端で検出された２×３間の東西に長い掘立柱建物で、南西隅には土壙２が存在し、東側には後述する建物３が隣接している。規模は桁行3.99ｍ、梁間7.98ｍ、面積が31.8㎡で、建物の方位はＮ－22°80′－Ｗを示していた。柱穴間の距離は、桁行2.07ｍ～1.92ｍ、梁間3.27～1.67ｍである。柱



第60図　掘立柱建物１（1/60）・出土遺物（1/4）

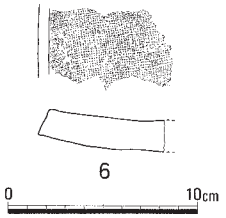
穴の平面形は円形で径30～45㎝、検出面からの深さは最大で約25㎝であった。中央部の梁間には２本の柱筋が近接して通っており、１×２間の２棟の側柱建物をつないだような構造である。この建物はその位置関係と規模から建物３に付属し、副屋としての機能を担っていたと推測される。出土遺物としてはＰ９から土師器椀**５**が出土しており、建物の時期は平安時代と考えられる。　　（石田）

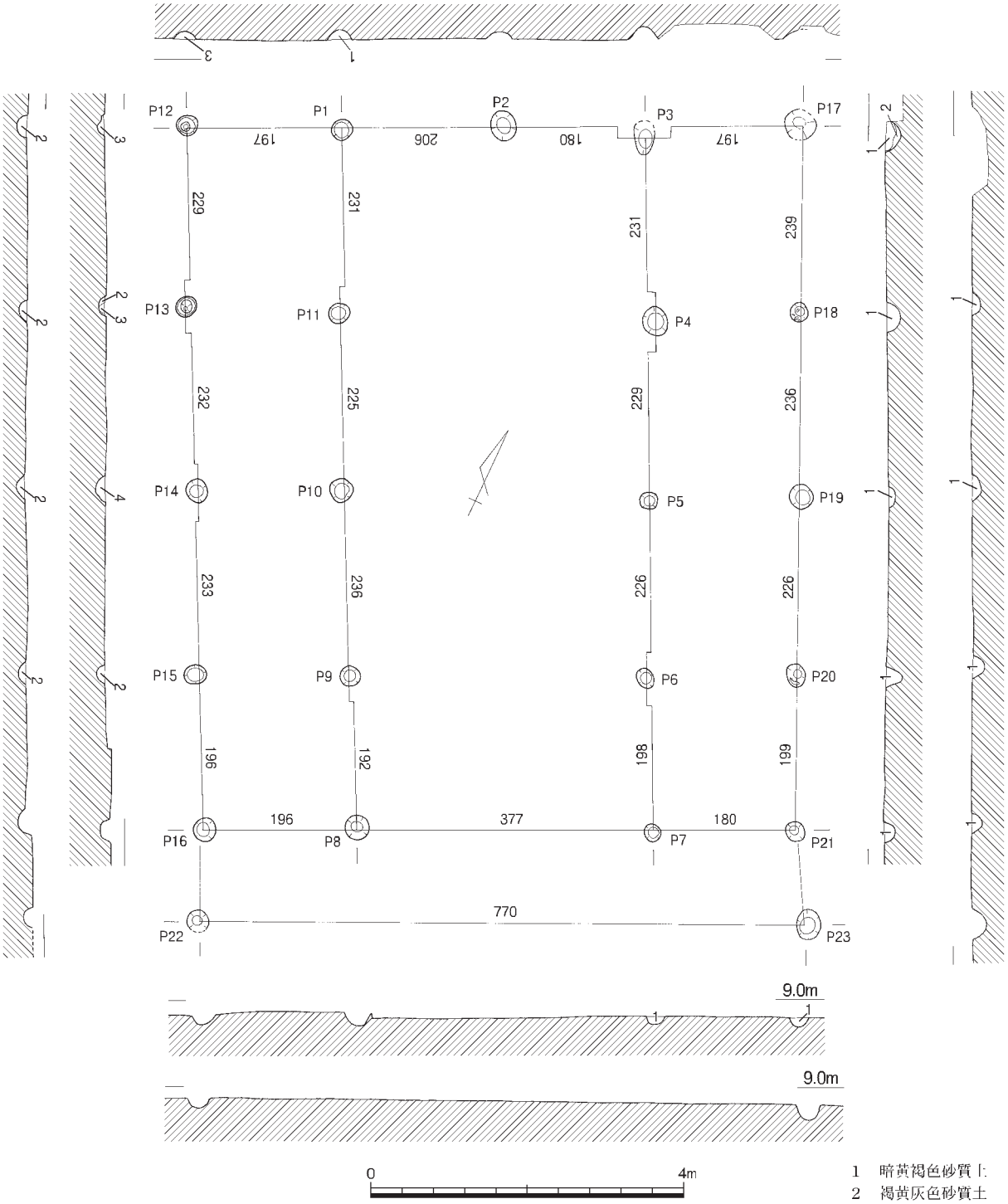


第61図　掘立柱建物２（1/60）・出土遺物（1/4）

掘立柱建物３（第62図・図版８－３）

調査区の西側に位置し、建物４と重複している。東約３ｍには棟方向を違えて建物２が存在する。この建物は金井戸遺跡では最大規模の建物で、２×４間の南北棟の側柱建物に東西の両面に庇がつく構造である。また、南側には１間分、外側の桁行の延長線上に柱穴が東西端で検出されている。軸はややずれる





1　暗黄褐色砂質土
2　褐黄灰色砂質土
3　褐灰色砂質土
4　明褐灰色砂質土

第62図　掘立柱建物３（1/60）・出土遺物（1/4）

が、南側に縁が取り付く建物を想定したい。

身舎部分の建物の規模は桁行3.86ｍ、梁間8.84ｍ、面積が34.1㎡を測り、庇・縁も含めた建物の総面積は70.2㎡になる。建物の方位はＮ-28°30′-Ｗを示しており、柱穴間の距離は、桁行2.06～1.80ｍ、梁行2.36～1.92ｍである。柱穴の平面形は円形で、径は15～40㎝、検出面からの深さは最大で20㎝程度であった。

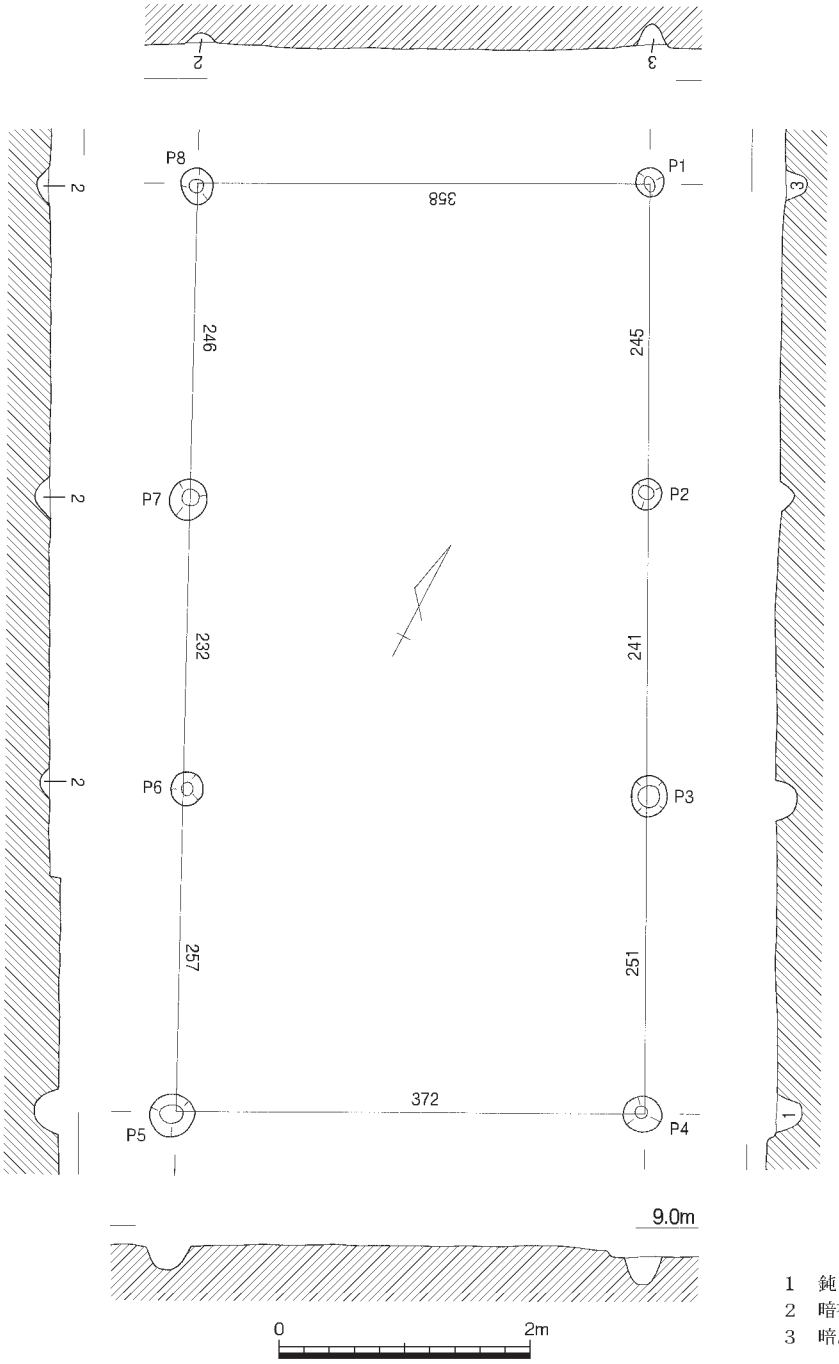
この建物は当遺跡において、その構造や規模から中心的な存在と考えられるもので、主屋としての機能が想定され、副屋と考えられる建物２と同時に併存していたものと推定される。

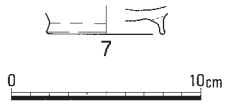
出土遺物としては布目のついた瓦片６がＰ６から出土しているほか、図示できなかったが土師器片が少量あった。建物の時期は平安時代に属すると考えられる。（石田）

掘立柱建物４（第63図）

調査区西側で建物３と重複するように検出された１×３間の南北棟の側柱建物である。建物３とは棟方位を若干違えている。建物３との直接の切り合い関係は無いが、検出状況から建物３に後出するものと考えている。

規模は桁行で3.72ｍ、梁行で7.37ｍを測る。面積が27.4㎡で、建物の方位はＮ-27°50′-Ｗを示していた。柱穴間の距離





1　鈍い黄褐色粘性微砂質土
2　暗褐色砂質土
3　暗灰黄色粘性砂質土

第63図　掘立柱建物４（1/60）・出土遺物（1/4）

は、桁行3.72～3.58ｍ、梁間では2.57～2.32ｍであった。柱穴の平面形は円形で径は20～40㎝、検出面からの深さは最大で20㎝程度であった。柱穴内からの出土遺物としてはＰ３から土師器椀７が出土している。建物の時期は平安時代と考えられる。　(石田)

掘立柱建物５（第64図）

調査区中央の南側に位置しており、東側には棟方向を違えて建物６が隣接している。建物は１×３間の南北棟の掘立柱建物で、北側に間仕切柱と考えられるＰ10がある。北側の桁行には対応するようにＰ９が存在し、北側の桁行は、柱間２間になっている。

建物の規模は桁行3.95ｍ、梁間6.41ｍ、面積が25.3㎡で、建物の方位はＮ-17°50′-Ｗを示していた。柱穴間の距離は、桁行3.90～1.83ｍ、梁間2.16～1.85ｍで、柱穴の平面形は円形で径は20～30㎝、検出面からの深さは最大で40㎝である。柱穴から出土した遺物としては、土師器片が少量あったが図化できるものはなかった。

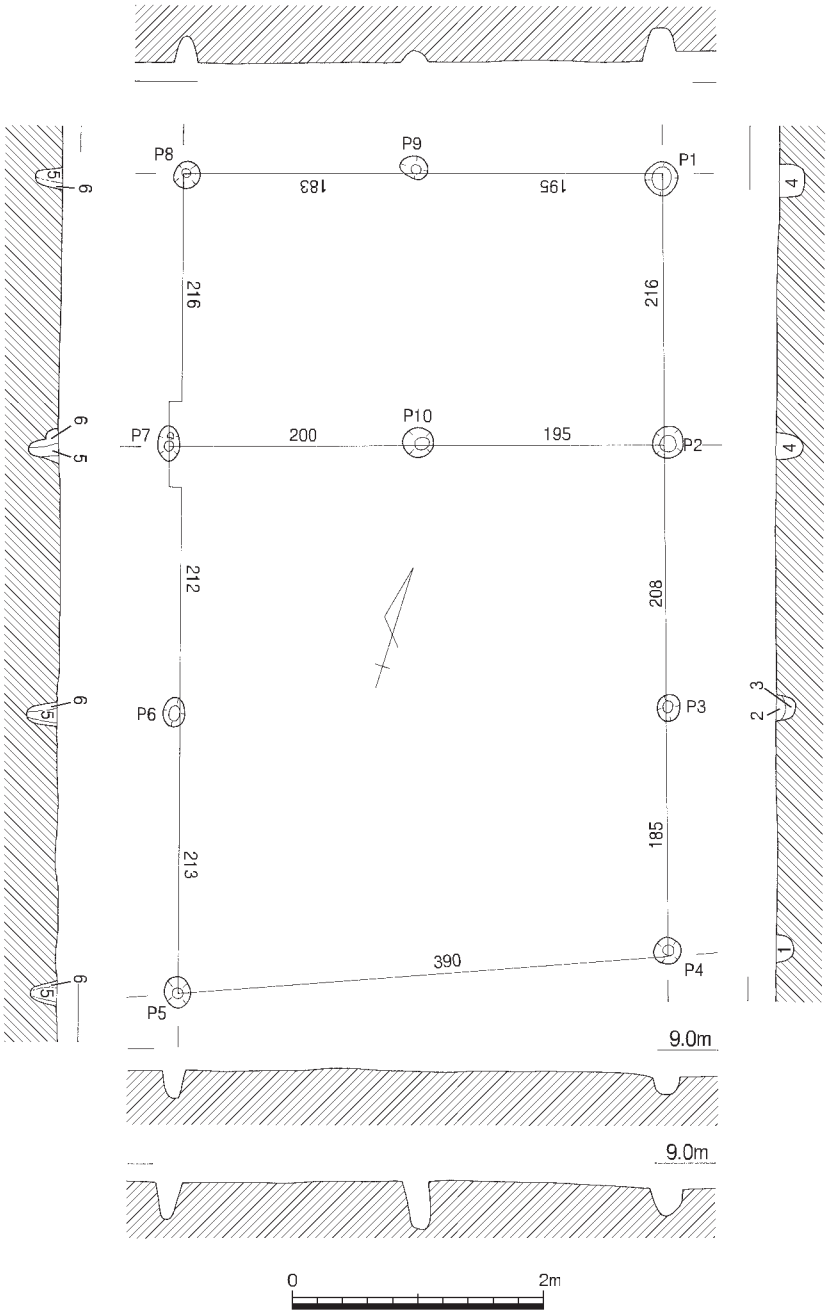
建物の時期は平安時代に属するものと考えられる。

（〃）

掘立柱建物６（第65図）

調査区中央南半で、掘立柱建物５の東、掘立柱建物７の南に位置する。

東西２間×南北１間の東西棟である。梁間の柱間距離が3.8ｍ弱とやや長いが、束柱等は確認できなかった。柱はいずれも小規模な円形で、径30～40㎝、深さ20～50㎝を

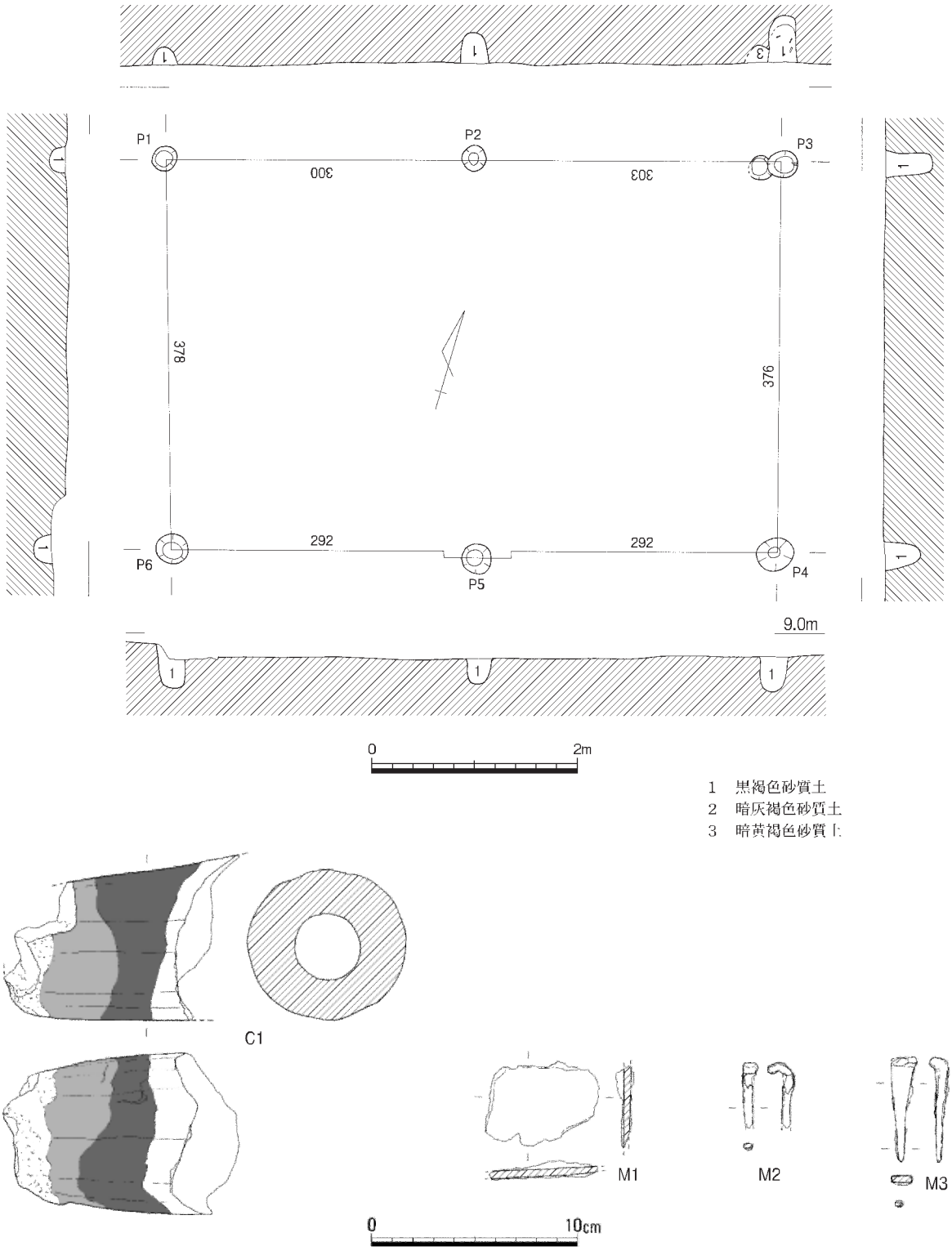


1　暗灰色粘質土　　3　黒灰色砂質土　　5　褐灰色粘性砂質土
2　褐黄色砂質土　　4　褐黒灰色砂質土　　6　鈍い黄褐色粘性砂質土

第64図　掘立柱建物５（1/60）

測る。

比較的多くの遺物が出土しており、羽口Ｃ１および釘Ｍ２がＰ３から、板状鉄片Ｍ１がＰ２から、鉄釘Ｍ３がＰ５から出土した。また底部ヘラキリの土師器小皿や内黒椀が出土しており、平安時代に



第65図　掘立柱建物６（1/60）・出土遺物（1/3）

属すると考えられる。隣接する掘立柱建物５とはほぼ直交する位置関係にあることから、同時期に併存していた可能性は高い。調査区東端では平安時代の鍛冶炉も検出されており、この２棟が鉄器製作、もしくは鉄器製作工人に関連する施設である可能性も考えられよう。　（渡邉）

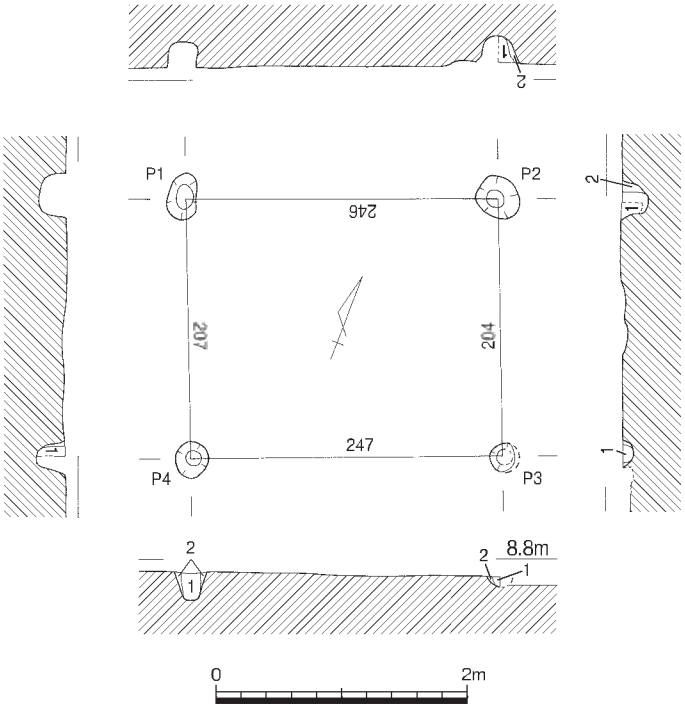
掘立柱建物７（第66図）

調査区のほぼ中央、掘立柱建物６の約５ｍ北に位置する。１×１間の小規模な建物で、梁間も2.5ｍ足らずである。柱穴は径20～30㎝の小規模な円形であるが、Ｐ２～４では柱痕を確認している。検出面からの深さ10～22㎝、底面の標高は8.46～8.58ｍを測る。

出土遺物は皆無で時期を特定しがたいが、掘立柱建物５に主軸方向や柱穴埋土が近似していることから、同時期の可能性もある。

一方、溝３・４を切っており、平安時代でも末近くか、中世にまで降る可能性も考えられる。

（　〃　）



1　暗褐色粘性砂質土
2　暗黄褐色粘性砂質土

第66図　掘立柱建物７（1/60）

掘立柱建物８

（第67図・図版９－１）

調査区東側で検出された２×４間の南北棟の掘立柱建物である。掘立柱建物５と似た構造で、北側には間仕切柱Ｐ13を持つ。東側８ｍには建物10が存在し、すぐ北側には柱穴列１が西側桁行の軸線上に伸びており、この建物に関連する施設と考えられる。また、建物の北東約１ｍには後述する土壙３が存在し、建物の南東隅には炭が散布していた。

規模は桁行3.97ｍ、梁間9.09ｍ、面積が36.1㎡で、建物の方位はN-32°-Wを示していた。柱穴間の距離は、桁行2.01～1.71ｍ、梁間2.84～1.42ｍである。柱穴の平面形は円形で、いずれの柱穴も上部は大きく削平を受けており、径40～80㎝、深さは、最大で15㎝程度が残存していた。また、Ｐ１・Ｐ10・Ｐ12の柱穴底部には扁平な石が置かれており、礎板石として用いられたと考えられる。

柱穴内から出土した遺物としては土師器片が少量あったが、図示できなかった。時期は平安時代に属すると考えられる。　（石田）

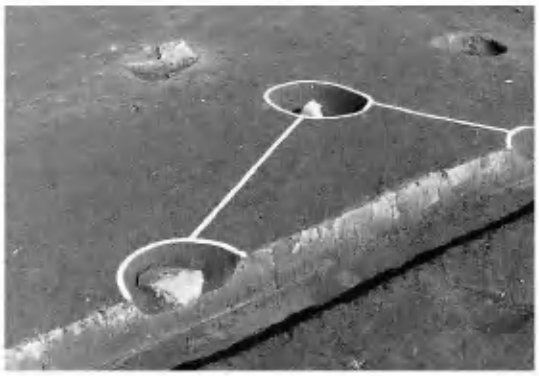
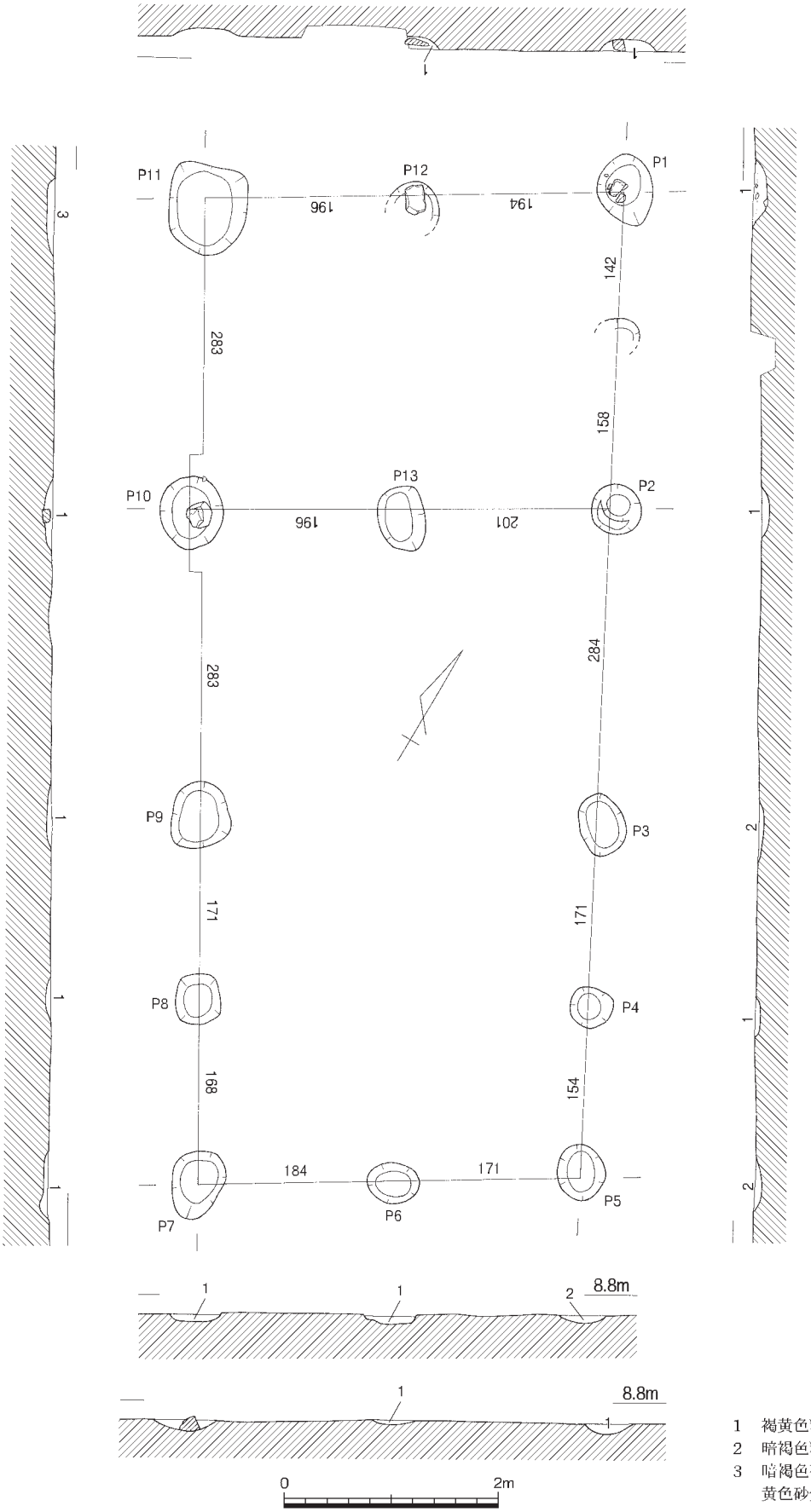


写真９　建物８－Ｐ１・12（南から）



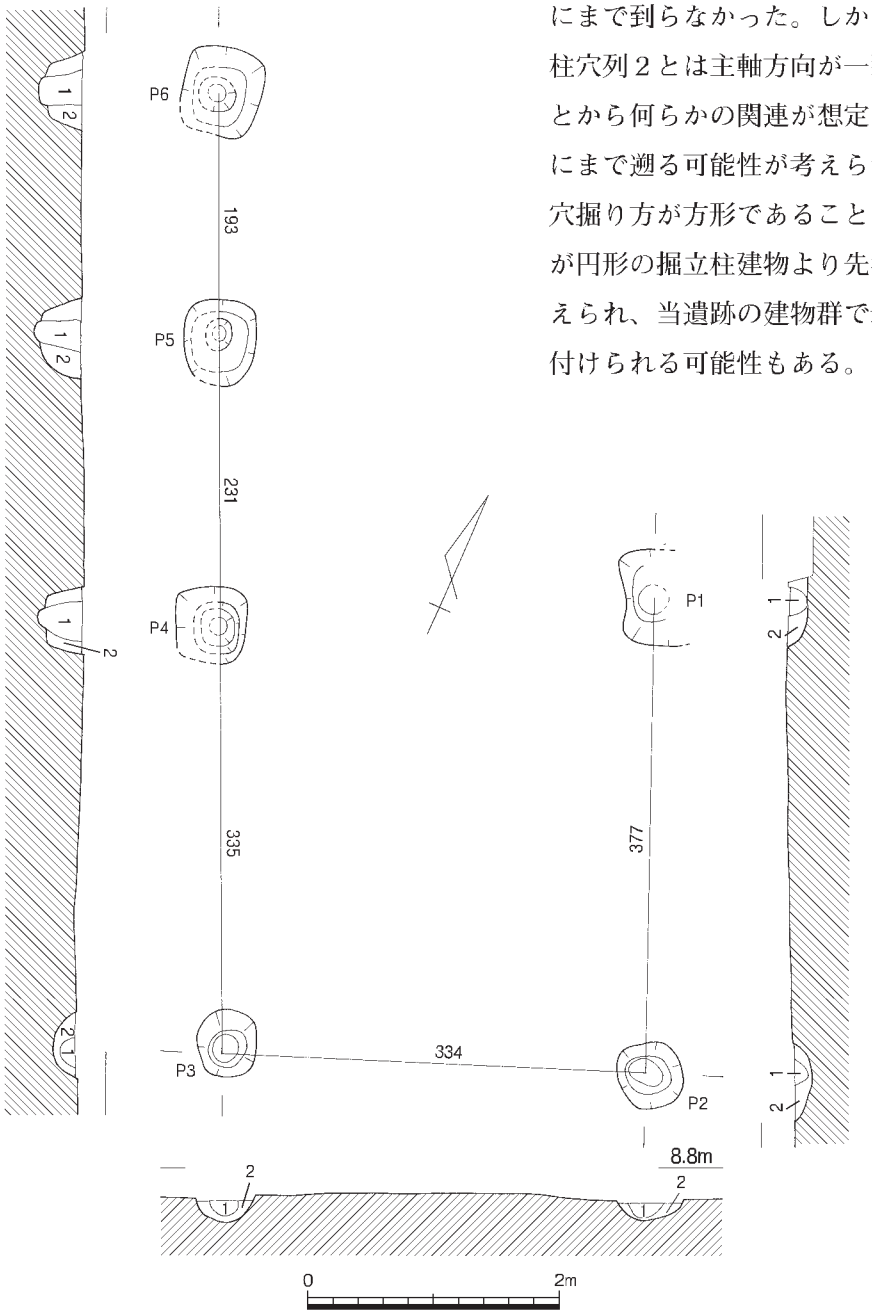
1　褐黄色粘性砂質土
2　暗褐色粘質土
3　暗褐色砂質土と
　　黄色砂質土混在層

第67図　掘立柱建物８（1/60）

掘立柱建物９（第68図・図版９－２）

調査区の北東部分で、掘立柱建物８の北東約９ｍに位置する。東西１間、南北３間分を検出した。柱穴は他の掘立柱建物と比べて一回り大きく、平面形も方形を呈する。最も大きいＰ６で70×60×深さ35㎝、底面の標高8.26ｍを測る。全ての柱で径20～30㎝の柱痕を確認した。さて、梁間にあたるＰ２・３の２本は他と比較して幅50㎝前後と小さく、深さも標高8.38ｍと浅い。また南１間分の桁行も大きく異なっている。しかし、複数の掘立柱建物を想定しうる柱穴が他には検出されず、１棟の建物内の空間の使い分けが反映されていると考えている。

Ｐ４～６で平安時代と思われる土器細片が出土しているが、厳密な時期の特定にまで到らなかった。しかし、後述する柱穴列２とは主軸方向が一致していることから何らかの関連が想定でき、同時期にまで遡る可能性が考えられる。また柱穴掘り方が方形であることから、掘り方が円形の掘立柱建物より先行する事も考えられ、当遺跡の建物群で最も古く位置付けられる可能性もある。　　（渡邉）



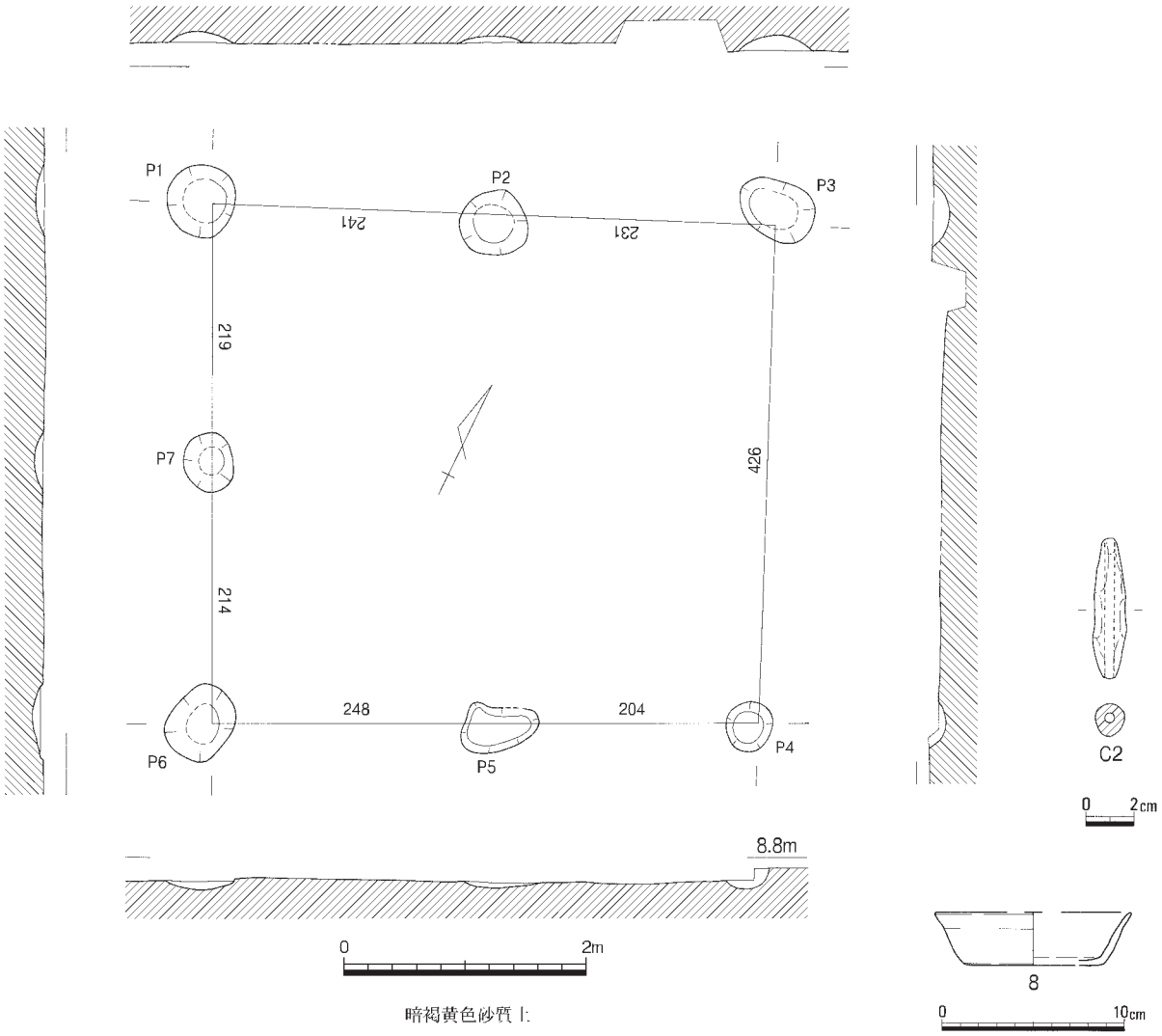
１　オリーブ褐色砂質土　　２　褐色粘性砂質土

第68図　掘立柱建物９（1/60）

掘立柱建物10（第69図・図版９－３）

調査区の東端で検出された２×２間の東西棟の掘立柱建物であるが、東側の梁間の柱間は１間のみである。南側約１ｍには建物の東西軸に平行して東西方向に流れる溝１が存在し、建物に関連する溝と考えている。また、建物の柱穴は溝11を切っている。

建物の規模は桁行4.72㎝、梁間4.33㎝、面積が20.4㎡で、建物の方位はN-28° 59′-Wを示していた。柱穴間の距離は、桁行2.48～2.04ｍ、梁行4.33ｍである。柱穴の径は40～70㎝の円形で、検出面からの深さは約15㎝と浅く、大きく削平を受けている。柱穴内の出土遺物としてＰ６から土師器椀８が、Ｐ７から土錘Ｃ２が出土している。建物の時期は10世紀と考えられる。　（石田）



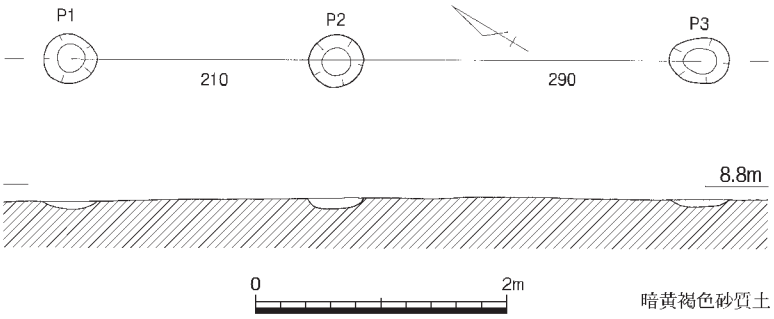
第69図　掘立柱建物10（1/60）・出土遺物（1/3、1/4）

２　柱穴列

柱穴列１（第70図）

掘立柱建物８の北に位置する。南北２間分を検出した。柱穴は径40㎝前後のやや大きい円形である

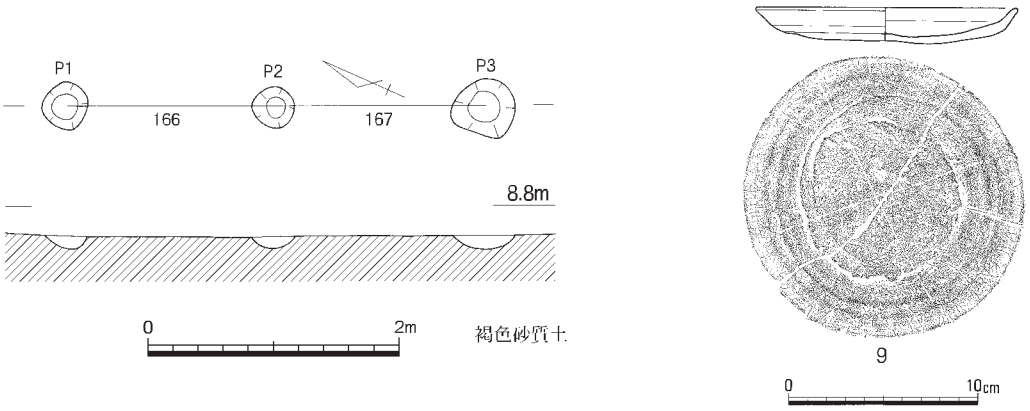
が、深さ10㎝足らずで底面の標高も約8.6ｍと浅い。時期の特定できる遺物は出土していないが、掘立柱建物８の西側桁行ラインの延長上にあり、軸方向も一致することから、掘立柱建物８に付随する可能性が考えられる。　（渡邉）



第70図　柱穴列１（1/60）

柱穴列２（第71図・図版９－２・12－４）

掘立柱建物９の南に位置する。南北２間分を検出した。掘立柱建物９の東側桁行ラインのほぼ延長線上に位置し、軸方向も一致することから掘立柱建物９に付随する施設と判断した。柱穴規模は30～40㎝とやや大きいが深さは浅く、柱穴列１と同様の傾向を示す。Ｐ１から内面黒色土器細片が、Ｐ２から土師器皿**９**が出土している。底部ヘラキリ後中央ナデで、十字のヘラ記号が加えられていた。時期は９世紀中頃～後半であろう。　（〃）

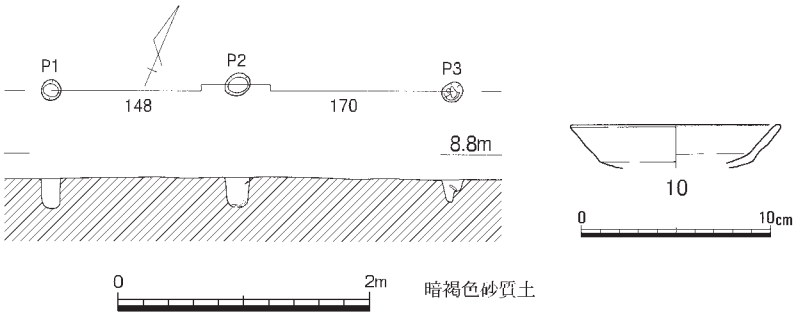


第71図　柱穴列２（1/60）・出土遺物（1/4）

柱穴列３（第72図）

柱穴列２の南側で、掘立柱建物10の北３ｍに位置する。東西２間分を検出したが東側は調査区外で、全容は不明である。柱穴は径20㎝足らずの小さい円形である。掘立柱建物10の北辺にほぼ並行するが、Ｐ２から出土した土師器杯10は、掘立柱建物10から出土した**８**より後出的な様相を示し、両者が同時に存在していたとは考え難い。10世紀後半～11世紀に位置づけられよう。

（〃）



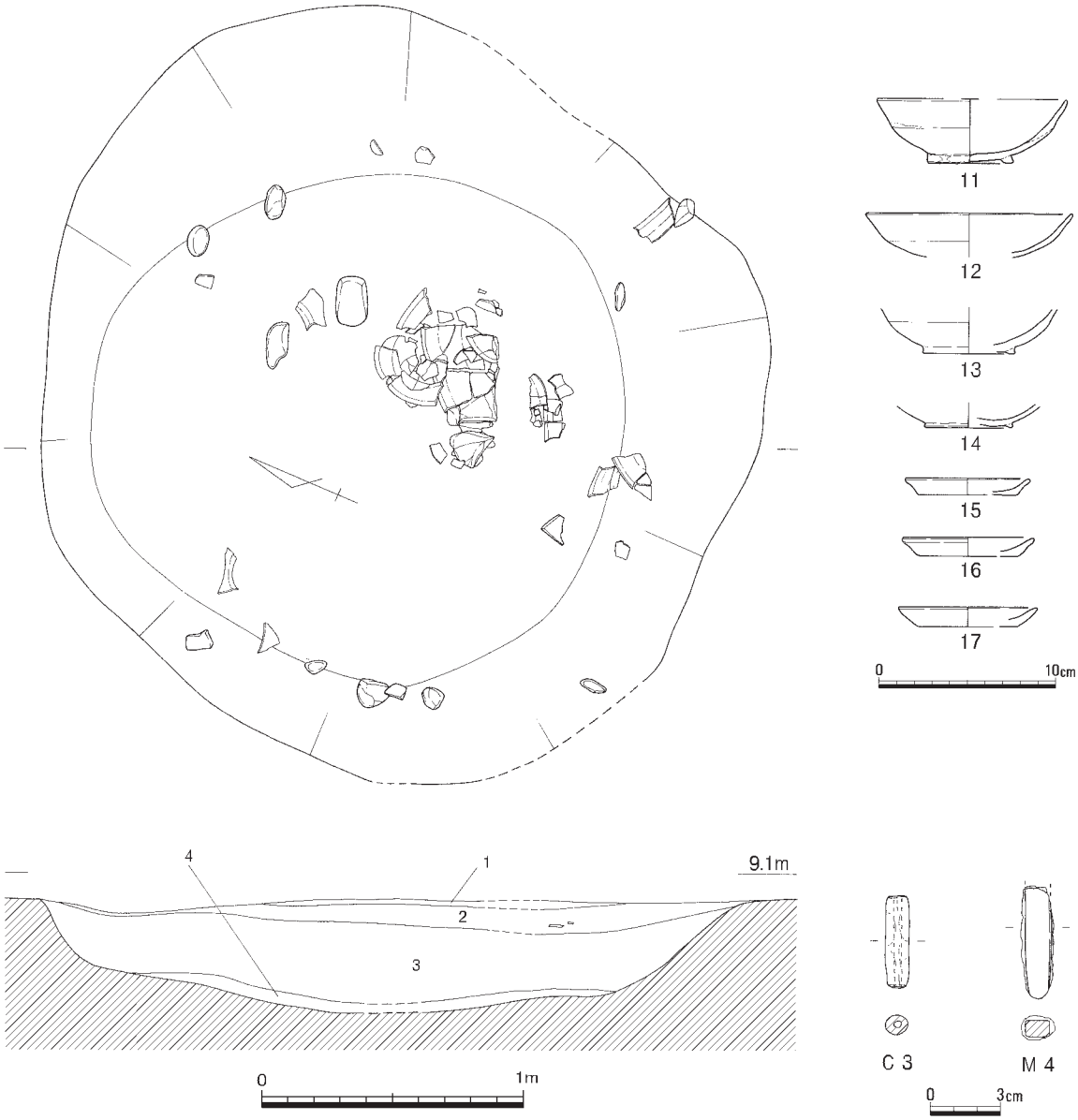
第72図　柱穴列３（1/60）・出土遺物（1/4）

３　土壙

土壙１（第73～75図・図版11－１）

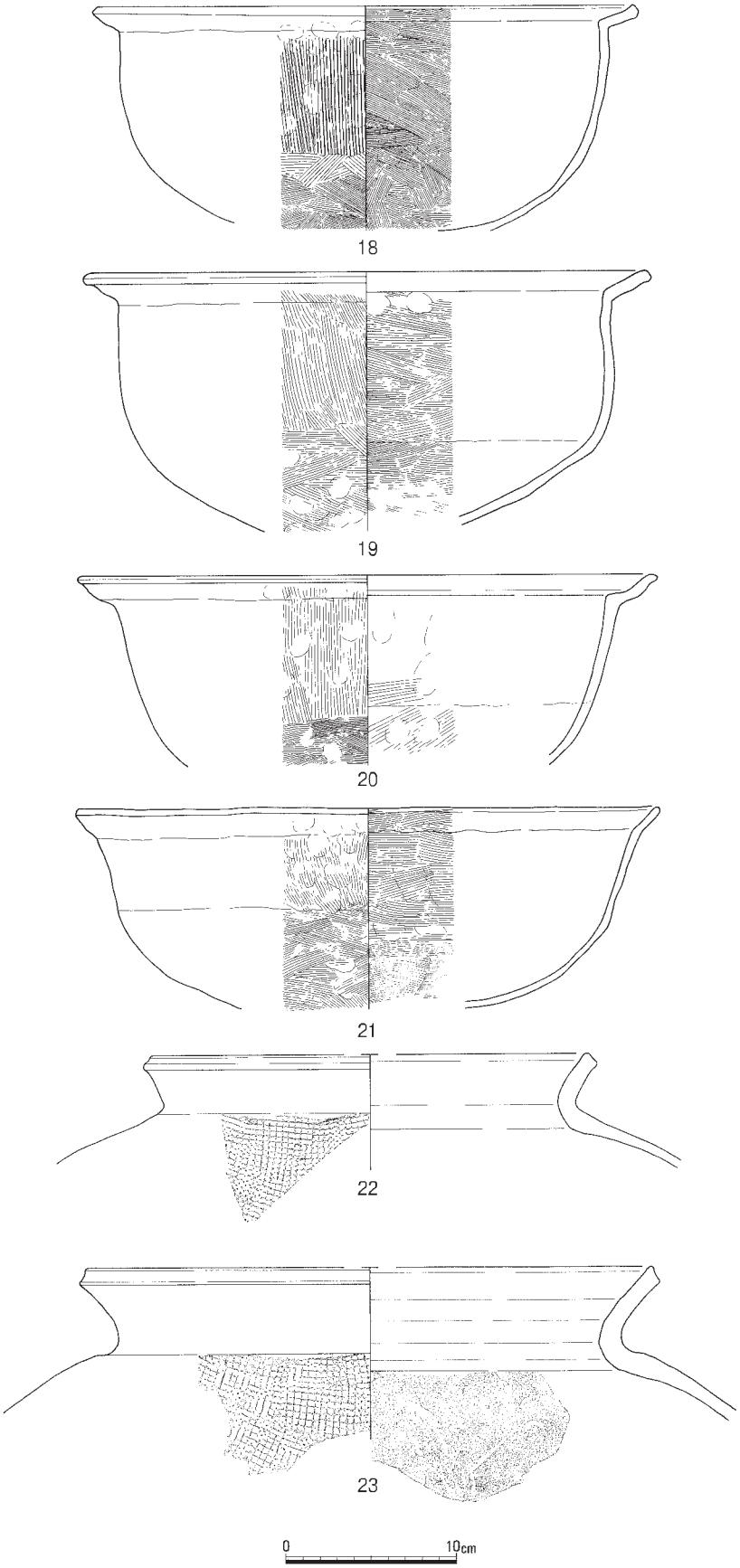
調査区北西で検出した土壙で、建物１の北約４ｍに位置する。平面形は不整な円形で、断面は皿状を呈している。土壙の規模は長軸3.29ｍ、短軸3.06ｍ、検出面からの深さ44㎝を測り、底面の海抜高は8.50ｍである。調査当初は井戸である可能性が考えられたが、下部は深く掘削が及んでおらず、井筒等も認められなかったため土壙と判断した。

土壙の埋土は４層からなり、上層の第１層から第２層にかけて土器が多く出土している。これらの土器は、土壙の埋没がある程度進行した後に、まとめて投棄されたもの考えられる。



1　暗灰色微砂質土
2　灰色微砂質土
3　褐灰色微砂質土
4　暗灰褐色砂質土

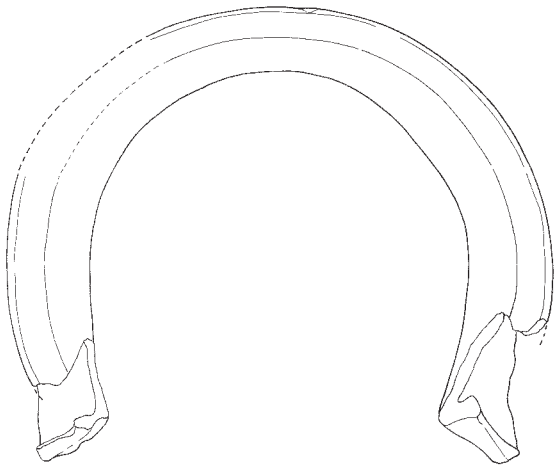
第73図　土壙１（1/30）・出土遺物①（1/4、1/3）

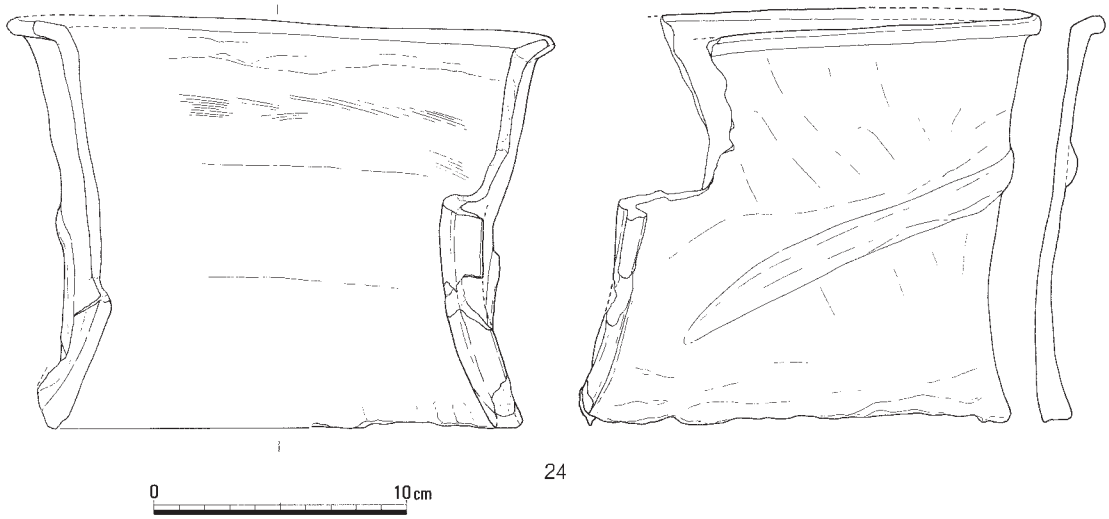


第74図　土壙１出土遺物②（1/4）

出土遺物で図示できたものには、いわゆる早島式土器の椀11～14と小皿15～17、土師器鍋18～21、亀山焼甕22・23、カマド24である。24の内面上半には煤が付着している。また、体部の両側面から後部背面にわったて突帯を貼り付けており、背面の突帯は馬蹄形になっている。他の出土遺物としては土錘Ｃ３、釘Ｍ４がある。

土壙が最終的に埋没したのは、これらの出土遺物から13世紀と考えられる。(石田)





第75図　土壙１出土遺物③（1/6）

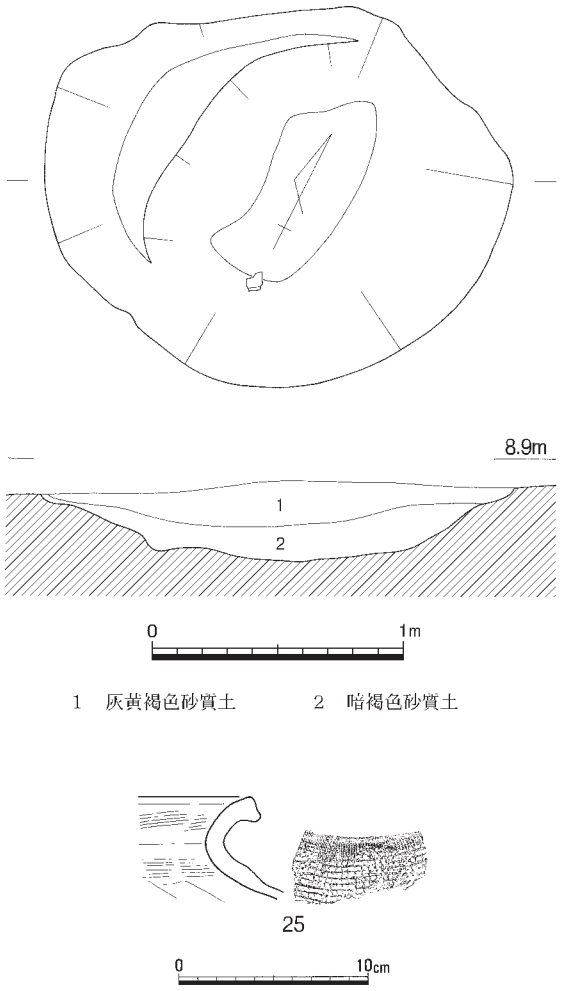
土壙２（第76図・図版11－２）

掘立柱建物２の南西角のすぐ南に位置する。東西186㎝×南北148㎝の不整円形で、検出面よりの深さは22㎝である。断面は西側は２段になっているが、おおむね緩やかな勾配でたわみ状を呈する。

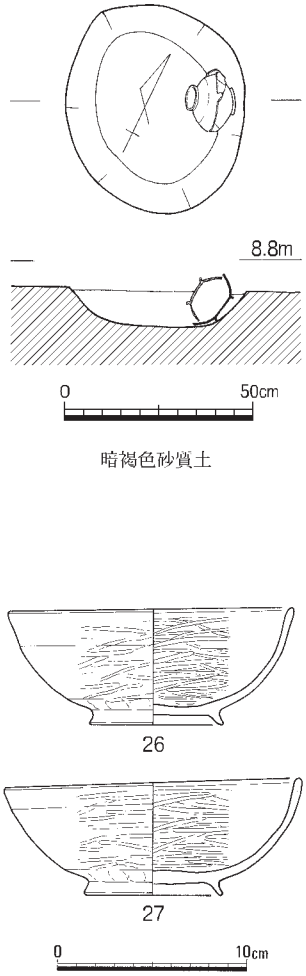
出土遺物には底面から出土した亀山焼甕25のほか、いわゆる早島式の土師器椀細片も出土している。土師器椀は型式が特定できるほどではなかったが、25が土壙１から出土した22・23と比較して新しい様相を呈していることから、14世紀代に位置付けられよう。（渡邉）

土壙３（第77図・図版12－１）

調査区東側に位置している土壙で、西側には建物８が隣接する。平面形は円形で、断面形は浅い皿形を呈している。規模は長軸59㎝、短軸47㎝、検出面からの深さ10㎝を測り、底面の海抜高は8.63ｍである。土壙の肩口では内面黒色の土師器椀26・27が互いに口を合わせた状態で出土した。これらの土器の内部には土が若干流入していたものの、ほぼ空洞の状態であった。内容物に関しては残存しておらず不明である。隣接する建物８に直接関連するかは不明であるが、出土状況から地鎮等の目的を持って埋められたものと想定される。時期は10世紀と考えられる。（石田）



第76図　土壙２（1/30）・出土遺物（1/4）



第77図　土壙３（1/20）・出土遺物（1/4）

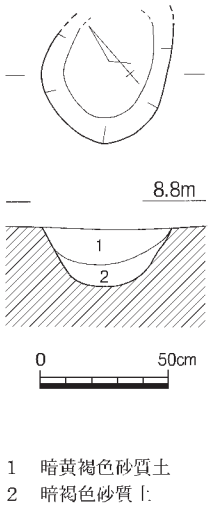
土壙４（第78図）

柱穴列２の北端より約1.3ｍ東に位置する。径50㎝と小さく、柱穴の可能性も否定できない。深さ20㎝、底面の標高は8.5ｍを測る。埋土は２層に分かれるが、上層に拳大の焼土塊を多く含み、下層にも焼土粒が混在していた。

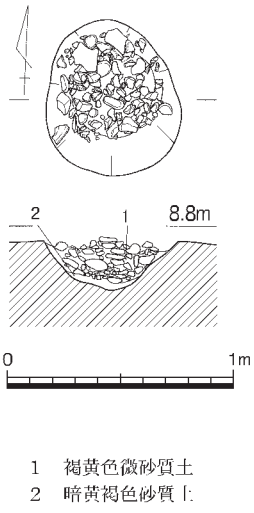
埋土より平安時代と思われる土師器細片が出土している。　（渡邉）

土壙５（第79図・図版12－２）

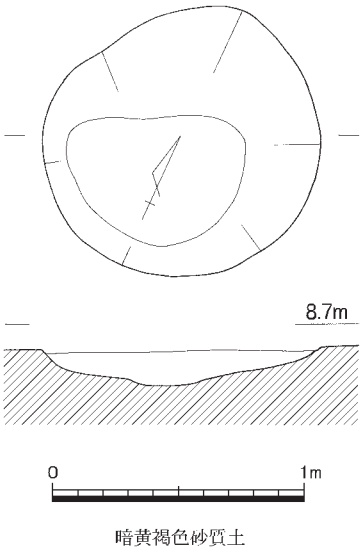
調査区東端に位置し、柱穴列３のすぐ北側に位置している土壙である。平面形は楕円形を呈しており、規模は長軸62㎝、短軸53㎝、検出面からの深さ19㎝を測り、底面の海抜高は8.30ｍである。土



第78図　土壙４（1/30）



第79図　土壙５（1/30）



第80図　土壙６（1/30）・出土遺物（1/4）

壙は多数の円礫の間に褐黄色微砂質土が混じって埋まっており底部付近では暗黄褐色砂質土が堆積していた。礫上部には赤色顔料が５か所にわたって残っていたが、この赤色顔料は分析によりベンガラの可能性が高いとの結果を得た。土器等は出土しなかったが、平安時代に属すると考えられる。　（石田）

土壙６（第80図）

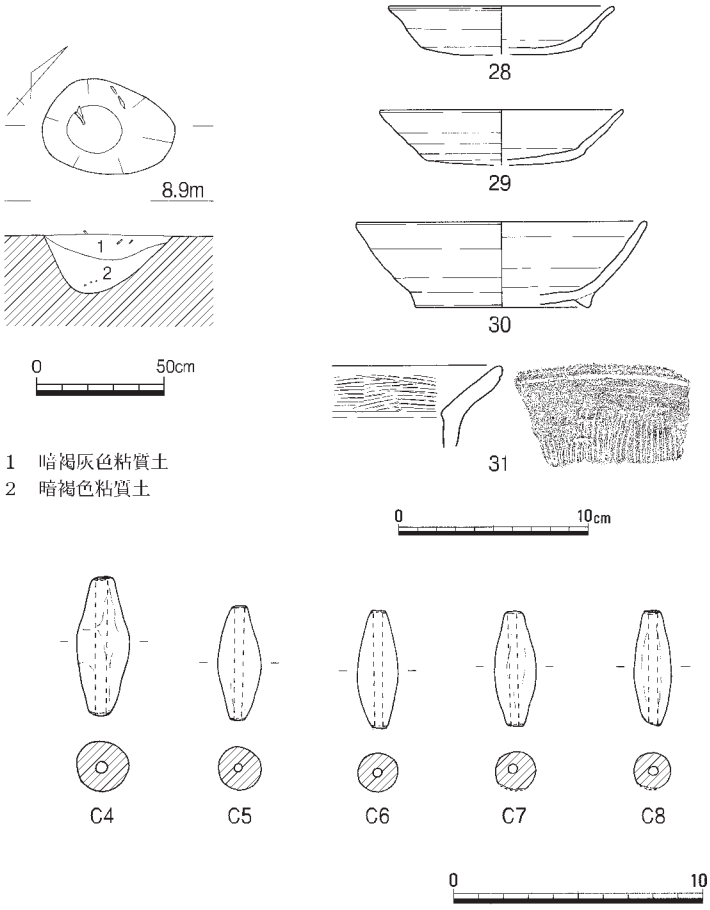
掘立柱建物10の西約１ｍに位置する。深さ14㎝と浅く、底面も平らでない。底面の標高は8.46ｍを測る。埋土には炭・焼土粒が多く混入していた。古代もしくは中世と思われる土師器細片が出土している。周辺の状況から古代に属する可能性が高いであろう。　（渡邉）

土壙７（第81図）

調査区の南東に位置していて東側約４ｍには土壙９が存在している。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸53㎝、短軸37㎝、検出面からの深さ23㎝を測り、底面の海抜高は8.53ｍである。埋土は上層が暗褐灰色粘質土、下層が暗褐色粘質土の２層である。上層では土錘Ｃ４～11が、下層の土壙中央部では土師器杯28・29と土師器椀30、土師器甕31がまとまって出土していて、28は内外面に丹塗りが施されている。時期は10世紀と考えられる。　（石田）

土壙８（第82図、図版12－３）

調査区南東、後述する土壙９から約２ｍ北に位置している。平面形は円形で断面形は皿形を呈している。規模は長軸53㎝、短軸48㎝、検出面からの深さ13㎝を測る。上面では石が肩口から落ち込むように埋まっており、埋土は暗黄褐色粘性砂質土の



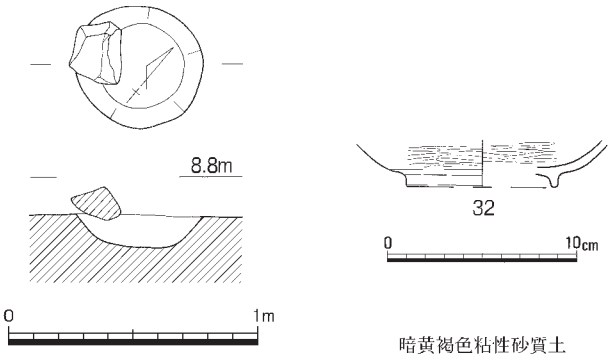
第81図　土壙７（1/30）・出土遺物（1/4、1/3）

一層である。出土遺物は内面黒色の土師器椀32がある。時期は10世紀と考えられる。　（石田）

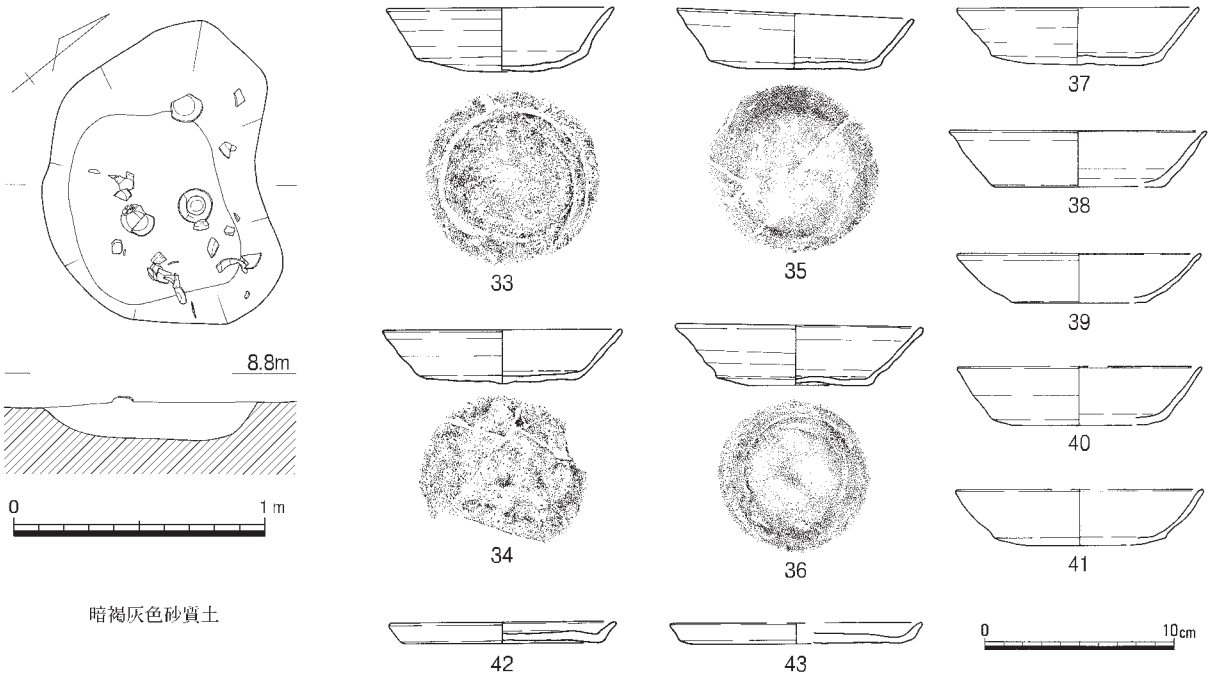
土壙９（第83図・図版11－３）

調査区南東、土壙７の東約４ｍに位置している。平面形は不整形で、断面形は皿形を呈する土壙である。規模は長軸1.20ｍ、短軸85㎝で、検出面からの深さは15㎝と浅く、底面の海抜高は8.53ｍである。

埋土は暗褐灰色砂質土の１層で、底部から上部にかけて土師器杯33～41、土師器皿42・43が出土している。33～37はいずれも完形に近い土器で、底部の外周をヘラキリ後に押圧している状況がよくわかる。また、36・38・39・42・43には丹塗りの痕跡が認められる。土壙が埋没した時期は10世紀と考えられる。　（〃）



第82図　土壙８（1/30）・出土遺物（1/4）



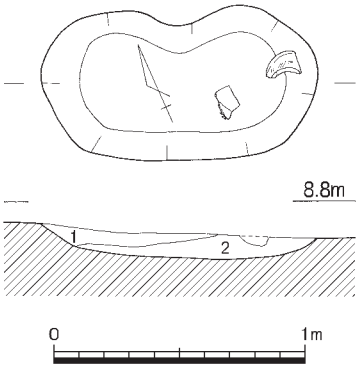
第83図　土壙９（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙10（第84図）

調査区東端に位置している土壙で南に炉４が隣接している。平面形は楕円形を呈しており、断面形は皿状をなしていた。埋土は炭や焼土片を多く含む暗褐色粘質土と暗橙褐色砂質土の２層であった。

規模は長軸1.10ｍ、短軸53㎝、検出面からの深さ15㎝と浅く、底面の海抜高は8.57ｍである。土壙の上部からは土師器皿44と、丸瓦45、土錘Ｃ12が出土している。45は凸面に縄目叩きとケズリ痕が残り、側面は面取りを行っている。また、凹面には「九」の字に似た線刻が施されている。

土壙の時期は10世紀と考えられる。　（〃）



1　暗褐色粘質土（炭片・焼土片多）
2　暗橙褐色砂質土

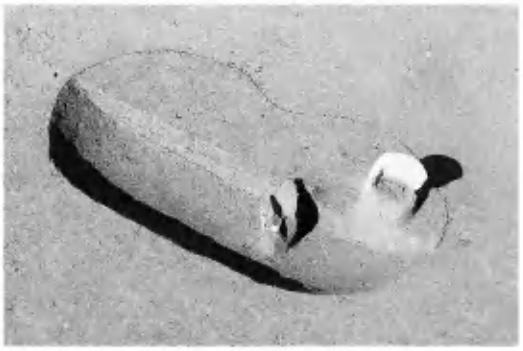
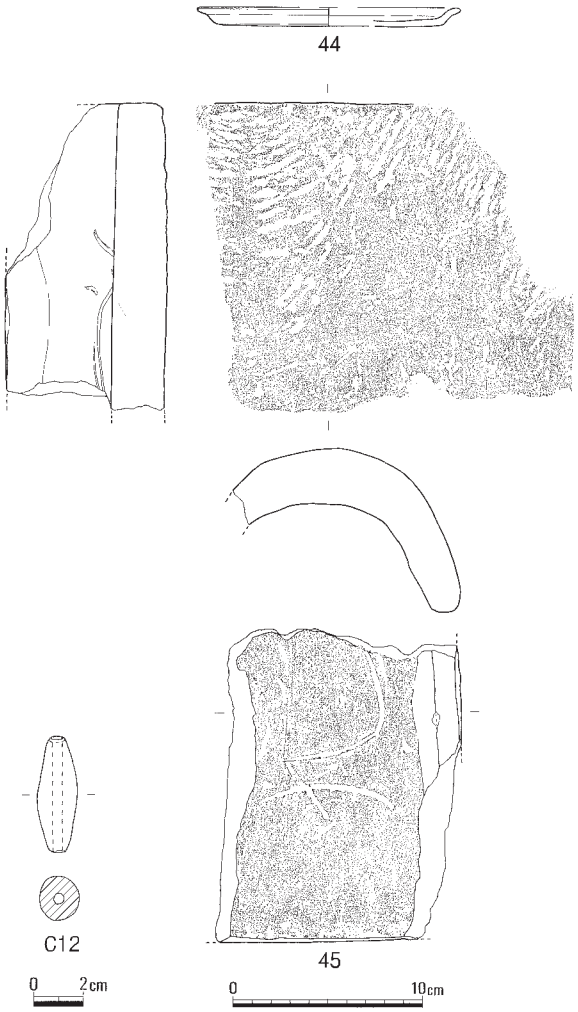
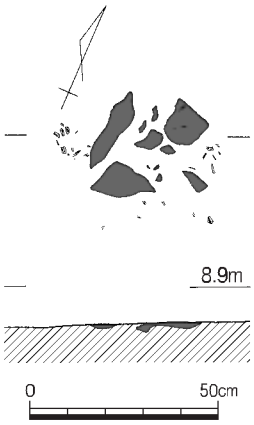


写真10　土壙10遺物出土状況（南から）



第84図　土壙10（1/30）・出土遺物（1/3、1/4）

4　炉



第85図　炉１（1/20）

炉１（第85図）

調査区北東部で検出された。炉２から西へ約６ｍの位置にある。堀り方等はなかったが、赤色に被熱した部分が径約30㎝前後の範囲でまだらに認められたことと、炭片が周辺に多く散布していたことから炉と判断した。赤色被熱部の厚さは３㎝程度であった。周辺から土師器片が出土しており、炉の時期は平安時代と考えている。　（石田）

炉２（第86図、巻頭図版３－２）

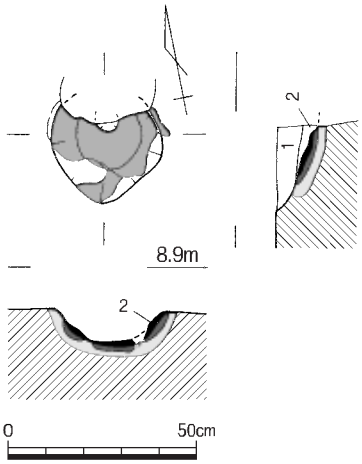
調査区の北東部で検出された。柱穴に北側の一部が切られている。平面形は円形に近く、規模は径30㎝前後、深さ８㎝を測る。炉の底部は厚さ約1.5㎝ほどが黒灰色に強く焼け、周囲は被熱により、厚さ２㎝程度が暗赤橙色に、さらに外側３㎝程度が黄色に変化していた。炉壁や滓等は残っていなかった。堆積土中より土師器片が出土していることから、時期は平安時代に属すると考えられる。　（〃）

炉３（第87図、巻頭図版３－３）

調査区南東で検出された。規模は径25㎝前後、深さ３㎝余りで、炉壁とともに、炉底には椀形の滓が残っていた。炉の東側には不整形で長径約30㎝、深さ３㎝程度の凹みがあり、大量の炭を含む暗黄褐色土が堆積していた。炉の底部周辺は厚さ２㎝程度が高温に焼け、黒灰色化しており、さらに外側３㎝程度は暗赤橙色に被熱していた。伴出遺物として他に鉄器片Ｍ５や土師器片がある。時期は平安時代と考えられる。（石田）

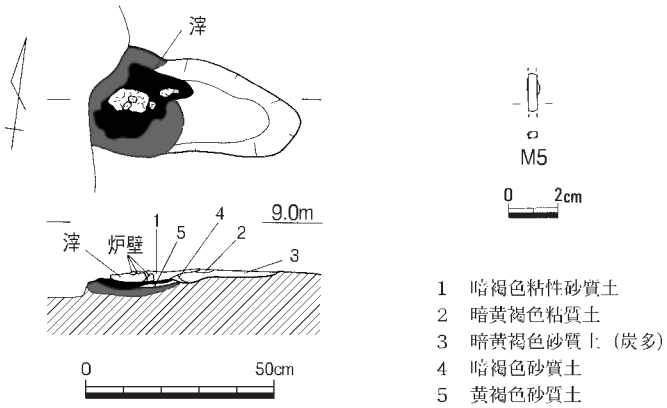
炉４（第88図）

調査区南東部で検出された。炉３から約６ｍ東に位置している。炉本体は残存していなかったが、平面は不整形に径20㎝前後、断面は厚さ３㎝余りが被熱の影響を受け暗赤橙色を呈し、さらに外側５㎝程度が黄色に変化していた。周辺から土師器片が出土しており、時期は平安時代と考えられる。（〃）

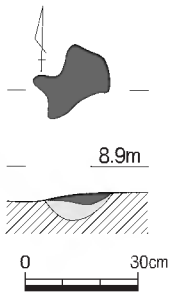


1　暗黄褐色砂質土
2　暗褐色粘性砂質土

第86図　炉２（1/20）



第87図　炉３（1/20）・出土遺物（1/3）



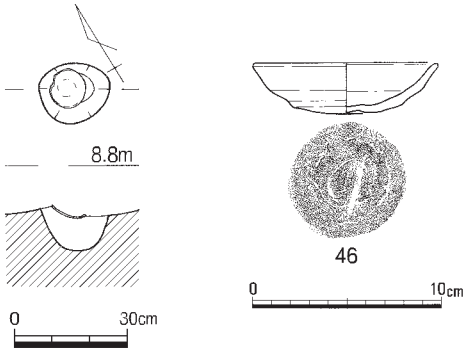
第88図　炉４（1/20）

５　柱穴（第59・89～94図）

第59図の遺構検出状況で明らかなように、遺物を包含する柱穴は西端、中央、東端の３群に偏在している。第91図に西端の、第92図に中央付近の、第93図に東端の出土土器・瓦を掲載し、土製品及び鉄製品は地点に関係なく第94図に掲載している。遺物の多くは破片の状態であったが、柱穴１・２では完形で出土した。どちらも径20㎝前後の小規模な円形で、Ｐ１が10世紀前半、Ｐ２が９世紀後半頃と時期差があるが、ほぼ正位に据えられており、意図的に埋納したと思われる。

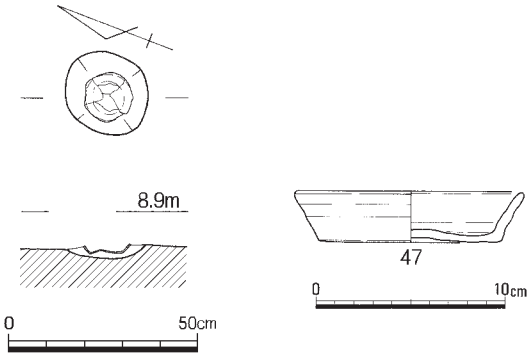
その他の柱穴出土遺物には土師器杯・皿・椀・甕、内面黒色土器椀、灰釉陶器、瓦、土錘、土玉、鉄釘、毛抜き、鉄製紡錘車などが出土している。土師器皿50および椀54・56～60・70はいわゆる早島式土器である。出土地点は西群に偏り、内面黒色土器椀52・66も外面が白色化するなど新しい様相を示している。土師器杯・皿では、東群出土品はヘラキリ後ナデやユビオサエを加えるが、西・中央群出土品はすべてヘラキリ未調整で径も小さく、新しい様相を示す。なお突帯のある83は美濃産の灰釉

陶器で、９世紀後半に比定される。これら遺物の示す時期は大きく９世紀後半、10世紀後半～11世紀前半、中世に分かれ、特に西群では中世が、東群では９世紀後半～10世紀前半の遺物が主体を占めている。この傾向は他の掘立柱建物や土壙などの様相とも符合しており、金井戸遺跡における全体的な推移や消長を反映していると考えられる。（渡邉）



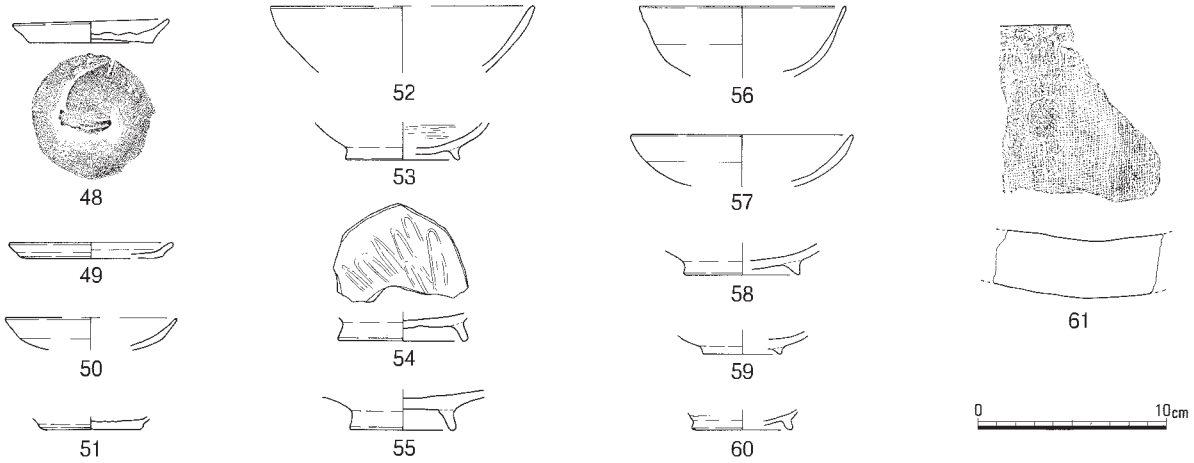
暗黄褐色粘質土

第89図　柱穴１（1/20）・出土遺物（1/4）

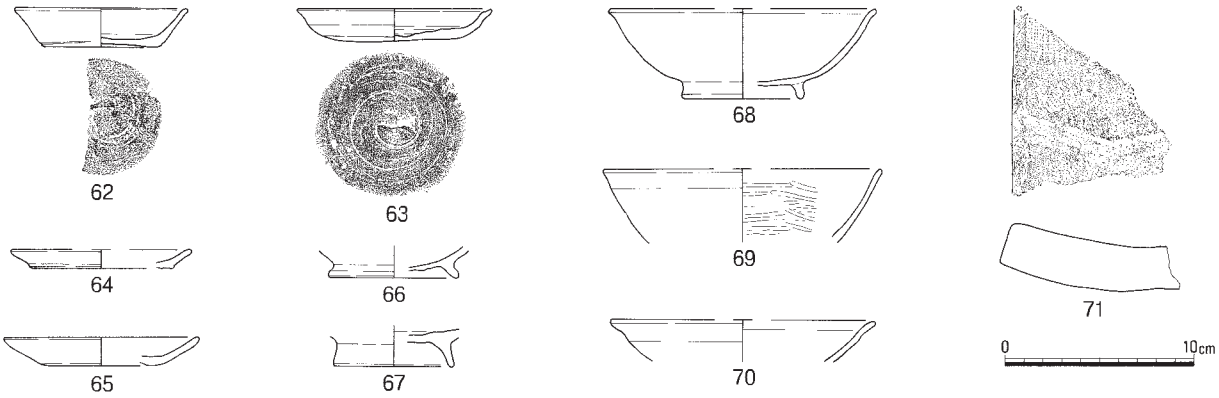


淡灰褐色粘性砂質土

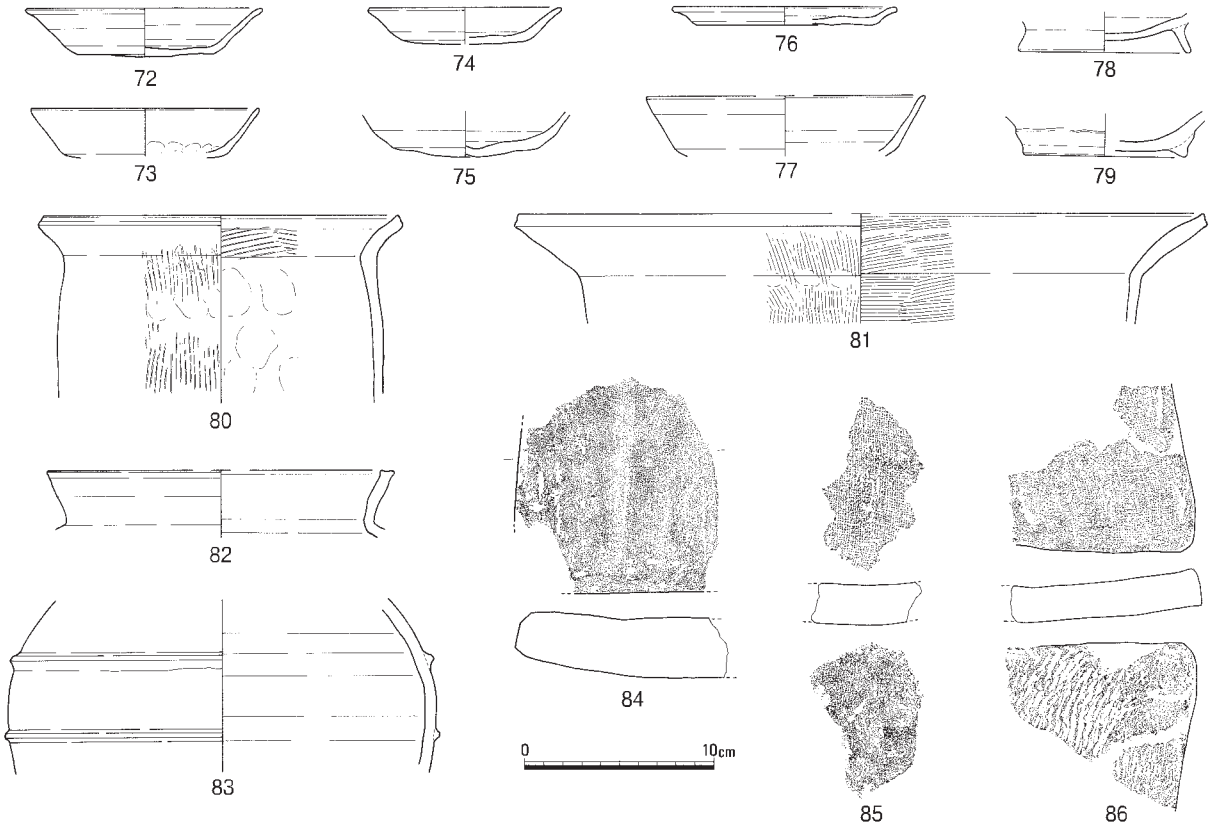
第90図　柱穴２（1/20）・出土遺物（1/4）



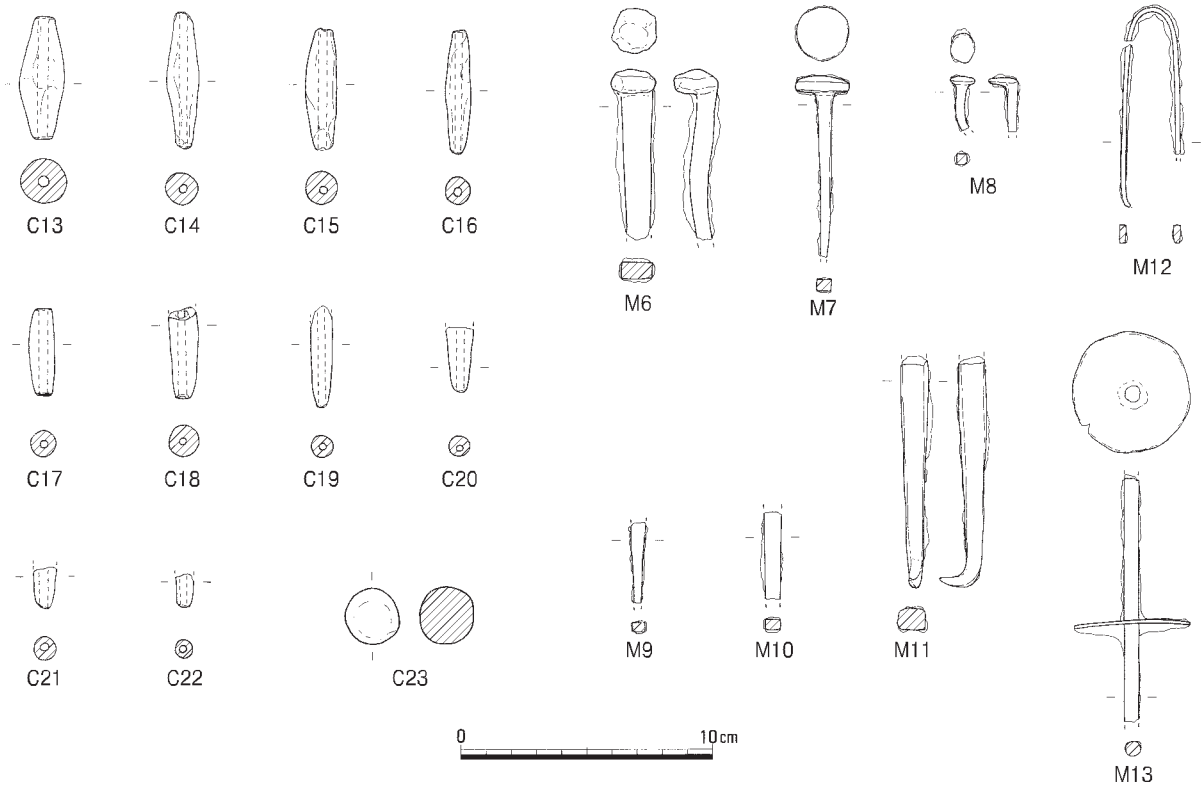
第91図　柱穴出土遺物①（西）（1/4）



第92図　柱穴出土遺物②（中央）（1/4）



第93図　柱穴出土遺物③（東）（1/4）

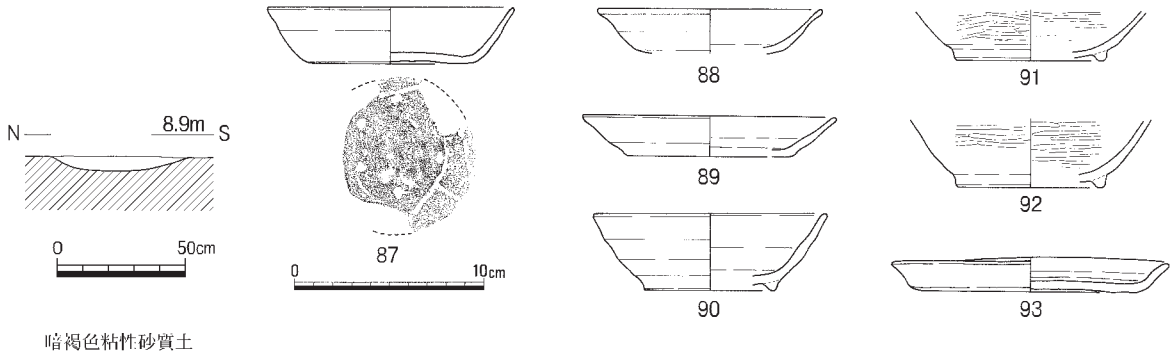


第94図　柱穴出土遺物④（1/3）

６　溝

溝１（第59・95図・図版10－１）

調査区東端に位置し、建物10の南約１ｍに位置する溝で、溝11を切るような状態で検出された。規模は長さ約３ｍ、幅50㎝、検出面からの深さ３㎝を測る。建物10の東西軸に平行しており、建物10に伴う施設と考えられ、雨落溝として機能していた可能性が高い。暗褐色粘性砂質土の溝埋土中から出土した遺物は土師器杯87～89、土師器椀90、内面黒色の土師器椀91・92、須恵器皿93がある。これらの土器から、溝の埋没した時期は９～10世紀と考えられる。　（石田）

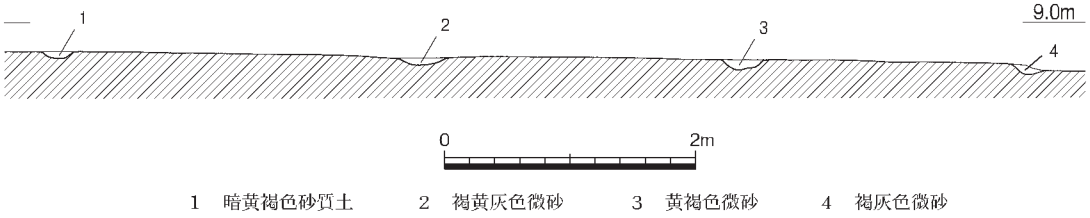


第95図　溝１（1/30）・出土遺物（1/4）

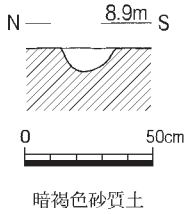
溝２～５（第59・96図・図版10－２）

調査区のほぼ中央を北西－南東方向にのびる４条の溝である。幅30㎝前後、検出面からの深さは７㎝前後と浅い。平面図から明らかなように底面はわずかな凹凸をもち、掘削時の形状を残す。溝は西から2.9・2.6・2.3ｍの間隔で、溝４の北部は溝３との間隔が3.5ｍと広くなり、溝２の北側は浅いくぼみの連続となる。当初は区画の溝の可能性を考えたが、耕作に関わる遺構と判断した。

溝２・４・５から土師器細片が、溝３から平安時代の須恵器杯蓋が出土している。　（宇垣）



第96図　溝２～５（1/60）



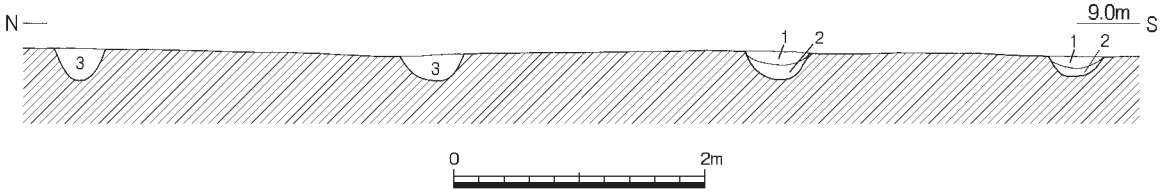
第97図　溝６（1/30）

溝６（第59・97図）

調査区東縁部に所在する北東－南西方向の溝で、幅21㎝、深さ10㎝を測り、後述の溝10を切って設けられている。溝の方位は上記の溝２～５の直交方向に近い。溝２～５と同様、遺物を伴っておらず、時期は古代と推定できるにとどまる。　（〃）

溝７～10（第59・98・100図）

溝６と同じく調査区東縁部で検出した４条の溝で、北東－南西方向に平行して並ぶ。幅50㎝、深さ20㎝前後で、同種の他の溝よりもやや規模が大きい。溝の間隔は北から2.8・2.8・2.4ｍである。南端の溝10からは10世紀代とみられる土師器皿**94**が出土しているが、該期の包含層が広がる部分であるので、埋没の課程で流入した可能性も考えられる。　（宇垣）

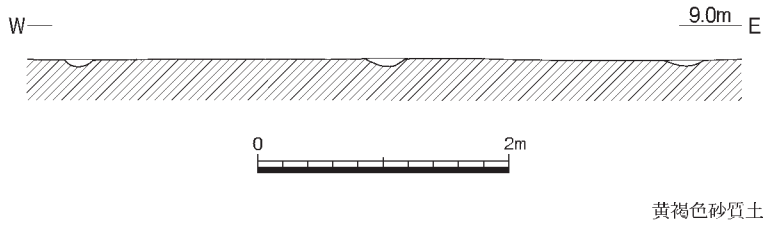


1　暗黄褐色砂質土　　2　暗褐色砂質土　　3　黄褐色砂質土

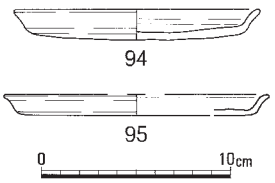
第98図　溝７～10（1/60）

溝11～13（第59・99・100図・図版10－３）

調査区の東部で検出した３条の溝で、溝７～10の南東に位置しそれらと直交する北西－南東方向をとるが、溝２～５とは若干方位が異なる。溝の幅は20～30㎝、深さは６㎝と浅いが、北西部ではやや深くなる。溝12からは土師器皿**95**が伴うが流入の可能性もあり、遺構の年代の上限を示すとすべきであろう。以上の平行する複数の溝は古代後半の耕作に伴う遺構と考える。　（〃）



第99図　溝11～13（1/60）



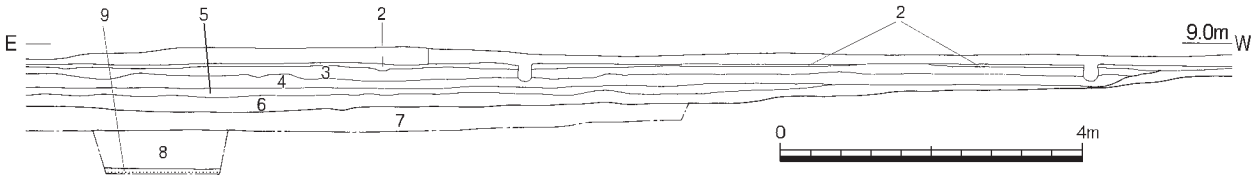
第100図　溝10・12出土遺物（1/4）

７　河道（第59・101～103図）

Ⅰ区南東角に位置する。耕作土直下で検出された。検出面は標高8.8ｍで、緩やかに東に下がり、底面は標高8.3ｍを測る。調査区内での比高差は50㎝程度しかなく、東への緩斜面としか認識できない状況であるが、東に隣接する北溝手遺跡の状況から南北方向の河道の西肩口である事が明らかとなっている。第101図は調査区南壁で確認された堆積状況であるが、第３～６層が河道内堆積層で、第１・２層は旧耕作土、第７層以下が基盤に対応する。第７層には土器細片や炭がわずかに混在していた。第８・９層から遺物は出土していない。また他の地点では第９層の砂層が約60㎝堆積し、標高７ｍよりさらに下に礫層が存在する状況を確認している。

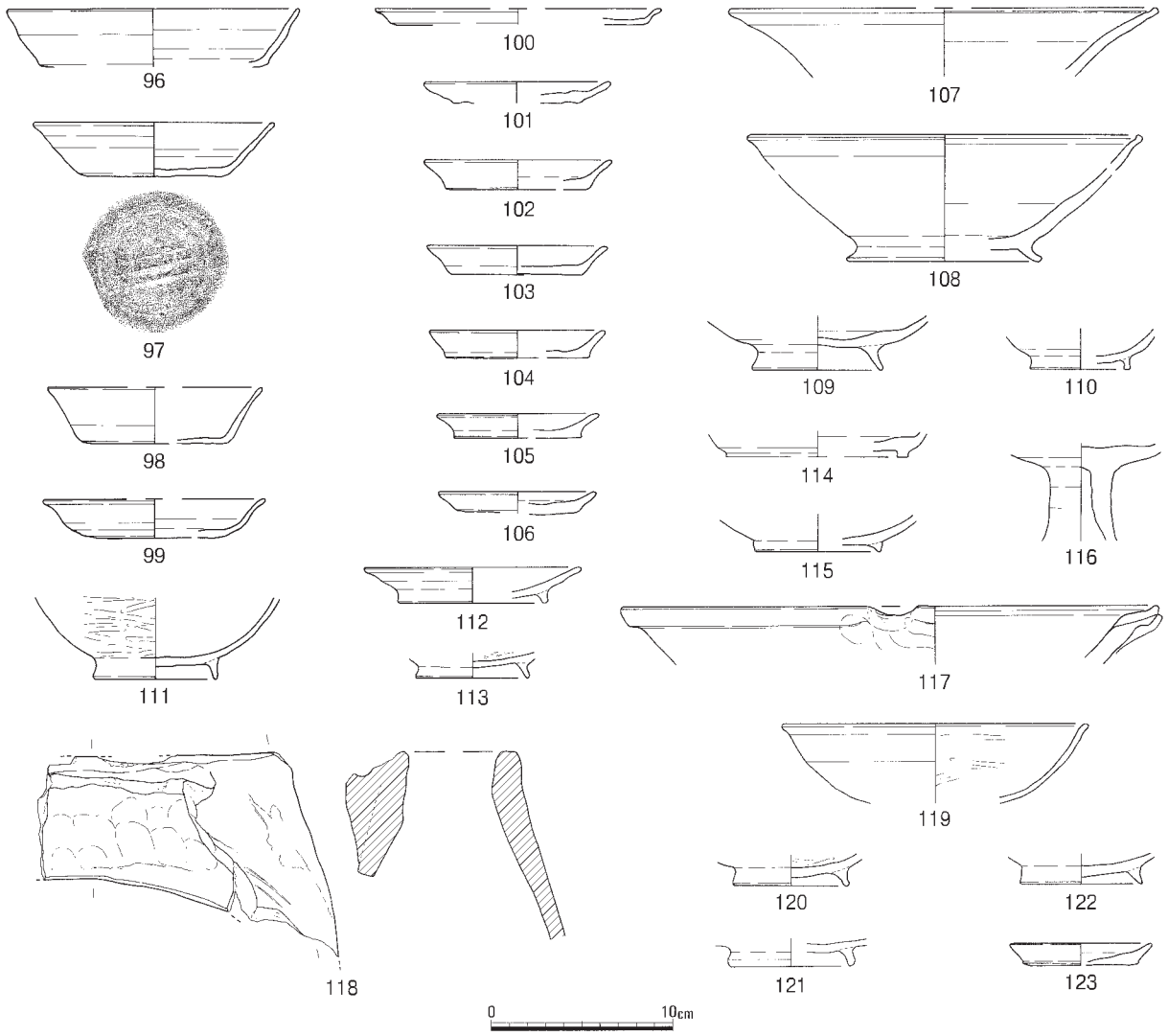
出土遺物には土師器杯・皿・椀・カマド、内面黒色土器椀・皿、土錘、羽口、刀子、釘などがある。土師器杯・皿の底部調整はヘラキリで、土師器杯**98**は中央部にユビオサエが加えられている。**97**はヘラオコシ痕が明瞭である。土師器杯**97**および内面黒色土器椀**111**も白色化し、土師器椀**110**には重ね焼

き痕が観察されるなど、古代の中でも新しい様相を示す一群が含まれている。土師器椀**119**～**121**、皿**122**・**123**はいわゆる早島式土器で、**117**は瓦質の捏ね鉢であり、中世の土器群も見受けられる。河道内には複数の土層が堆積しており、埋没にある程度の時間がかかったことが推察される。全ての土器の出土層位を把握できてはいないが、土師器杯**97**は河道上面で、土師器皿**100**・カマド**118**が第６層から出土しており、矛盾はない。また素掘溝と思われる溝11～13は河道上面で、土壙10および炉４は河



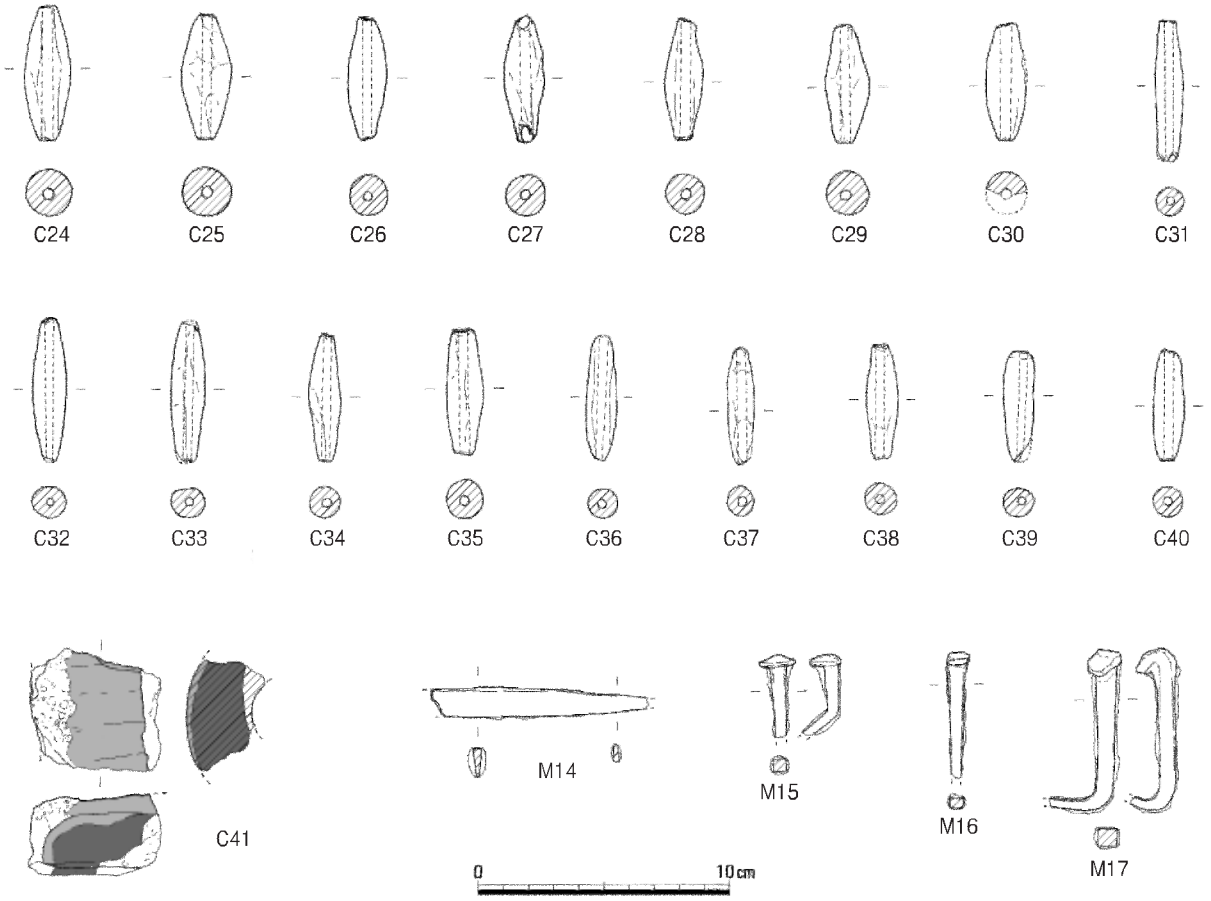
1　灰オリーブ色砂質土
2　灰色砂質土
3　オリーブ褐色砂質土
4　暗オリーブ褐色粘性砂質土
5　黄褐色粘性微砂質土
6　暗灰黄色粘性砂質土
7　鈍い黄褐色粘性砂質土
8　灰色粘質土
9　黄灰色細砂

第101図　河道（1/100）



第102図　河道出土遺物①（1/4）

道掘り下げ後に検出されている。このことから、河道は主に平安時代中頃から末にかけて埋没し、中世では既に河道としての機能を果たしていなかったと思われる。（渡邉）

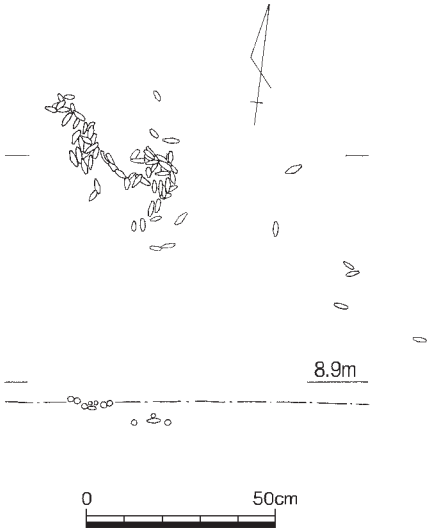


第103図　河道出土遺物②（1/3）

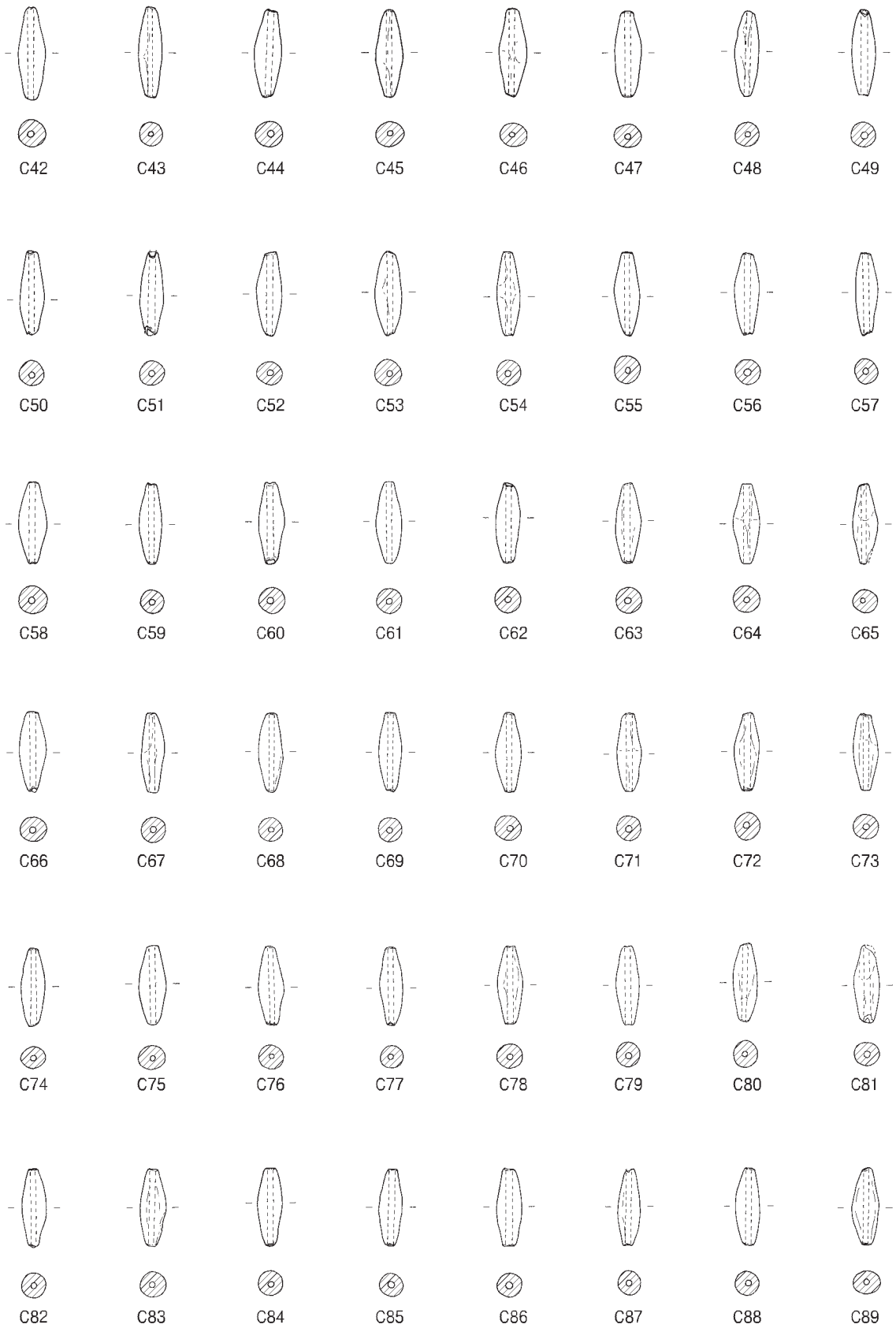
８　その他の遺構・遺物

土錘集積遺構（第104～107図・図版12－５）

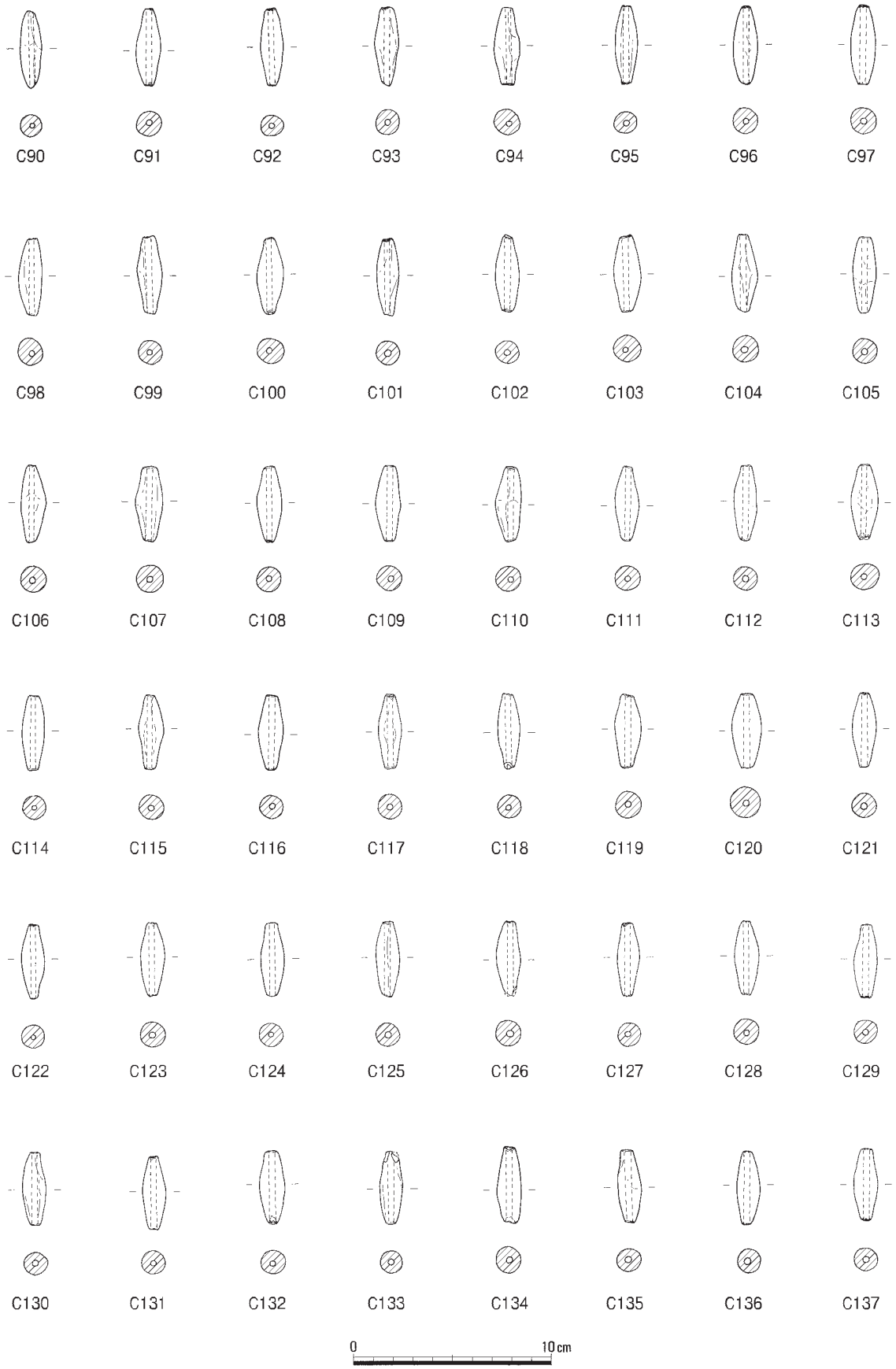
調査区中央部、柱穴列１から西へ約４ｍの地点で検出された。掘り方等は特に認められなかったが、径１ｍ前後の範囲に土錘が128個まとまって検出された。土錘は列状のかたまりを保っていたほか、５㎝程度の空間をおいて上下２か所に分かれていることが断面観察から確認された。これらのことから網を折りたたんだ状態のまま打ち捨てられいたものと推測され、有機質の網本体は腐食したため、連ねた土錘のみが残存していたものと考えられる。出土した土錘**Ｃ42～169**はいずれも紡錘形で、長さ4㎝前後、幅1.3㎝前後、孔の径３㎜程度にまとまっており、規格性が認められる。時期は周辺から土師器片が出土していることや、検出状況から平安時代のものと考えられる。（石田）



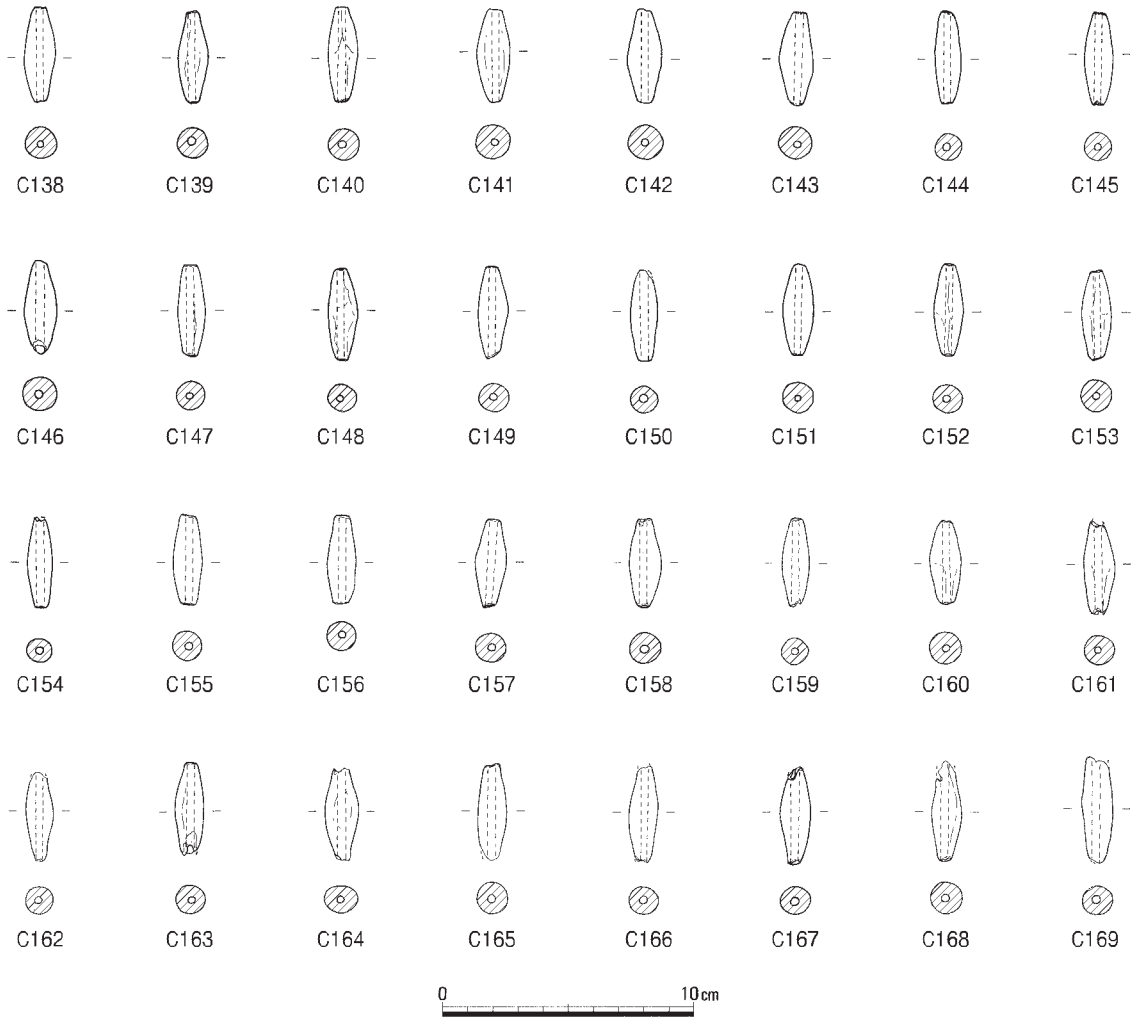
第104図　土錘出土状況（1/20）



第105図　出土土錘①（1/3）



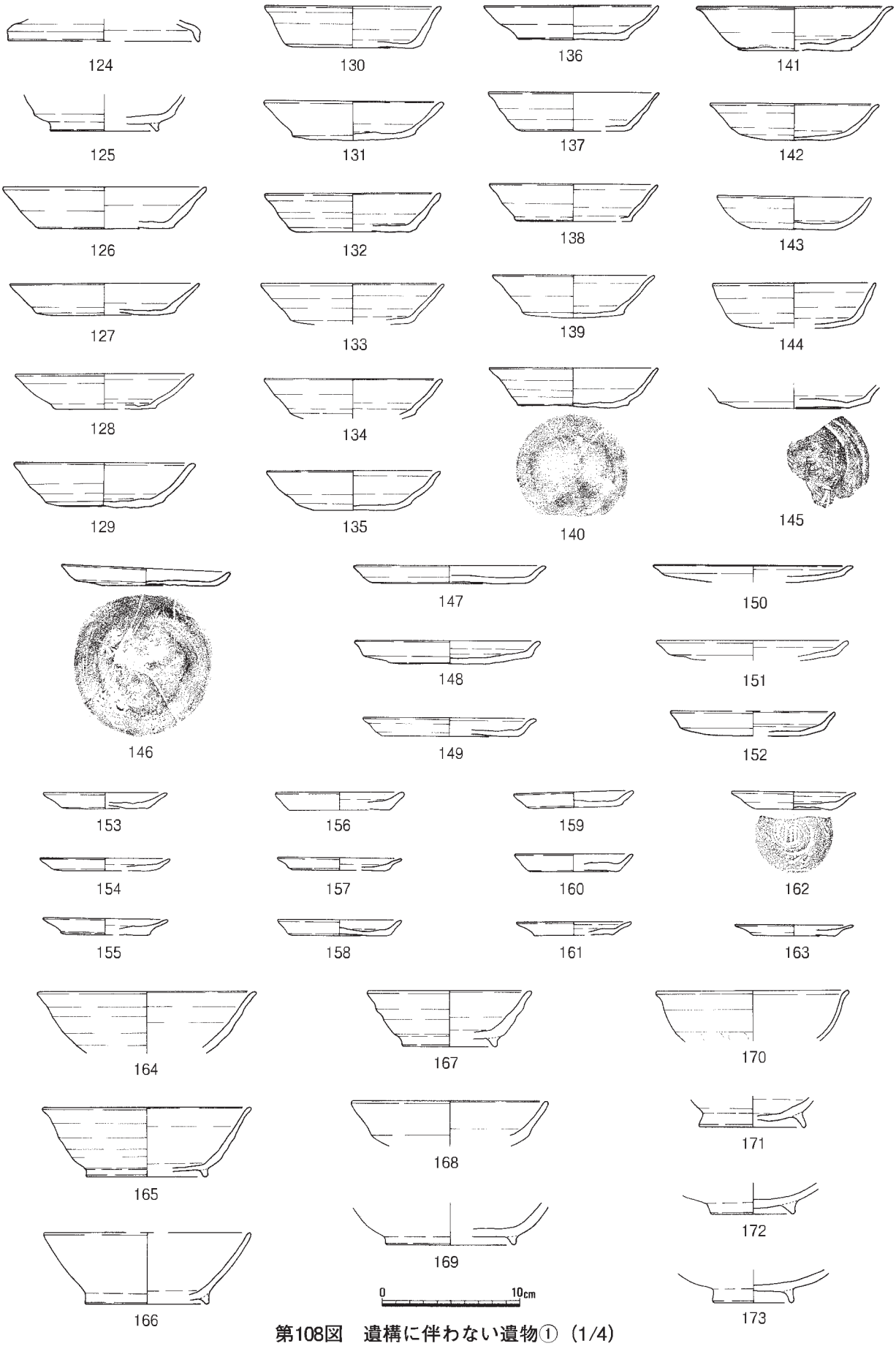
第106図　出土土錘②（1/3）



第107図　出土土錘③（1/3）

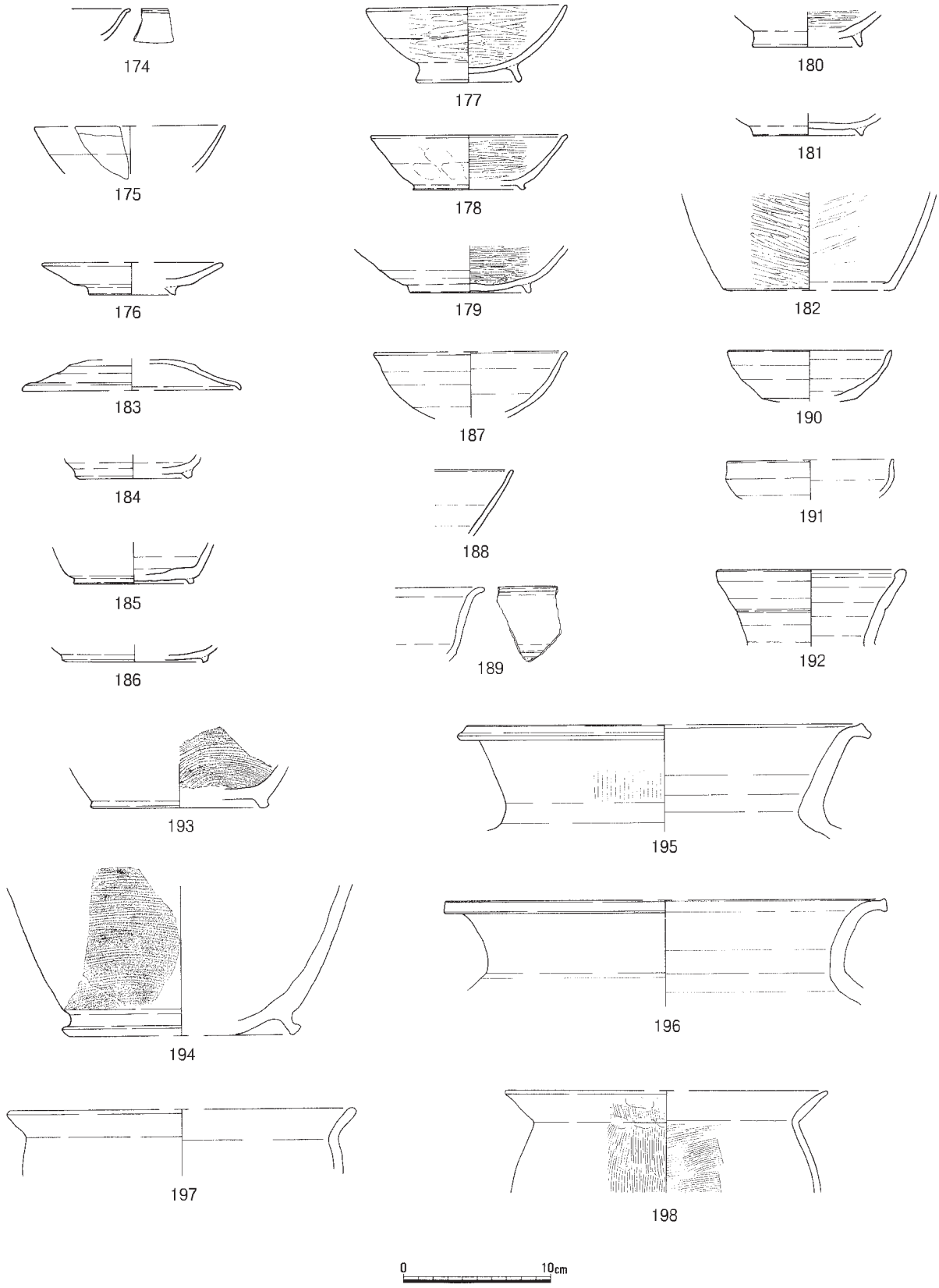
遺構に伴わない遺物（第108～115図）

調査の過程において、重機による耕作土除去後に遺構検出面まで掘り下げた時や側溝掘削時に出土した土器をここに一括した。特に調査区東半では包含層の遺物も含まれていると思われるので、包含層が遺存していたであろうと思われる掘立柱建物８より東を第108・109図に分けて掲載している。東側の土器の様相を見ると、土師器杯は径12～14㎝で、**141・144**以外は底部ヘラキリ後中央ユビオサエを施している。土師器皿のうち径12㎝を超える皿も同様の手法である。また丹塗りを施したものも含まれているなど古い要素が認められる。一方、径10㎝以下の小形の皿はヘラキリ未調整で、**162**にはヘラオコシの痕跡が残る。**141**にもヘラオコシ痕がある。土師器椀では**170**～**173**がいわゆる早島式土器で、須恵器の椀も出土するなど、古代末～中世の土器も含まれている。緑釉**174**は近江産で10世紀後半に比定されている。さて第110・111図の土器群の様相は東側と大差ないように見える。西側の遺物のうち、掘立柱建物４より西で出土したのは**204**～**206**・**217**・**218**・**229**・**230**・**238**・**239**・**241**・**243**のみで、ほかは掘立柱建物４から掘立柱建物８の間で出土しており、包含層がこの範囲まで残っていたか、この周辺の古い遺構の遺物が混入した可能性がある。逆に掘立柱建物４より西には包含層はなく、全て遺構から遊離してきた遺物と考えられる。径10㎝を超える土師器杯・皿は底部ヘラキリ

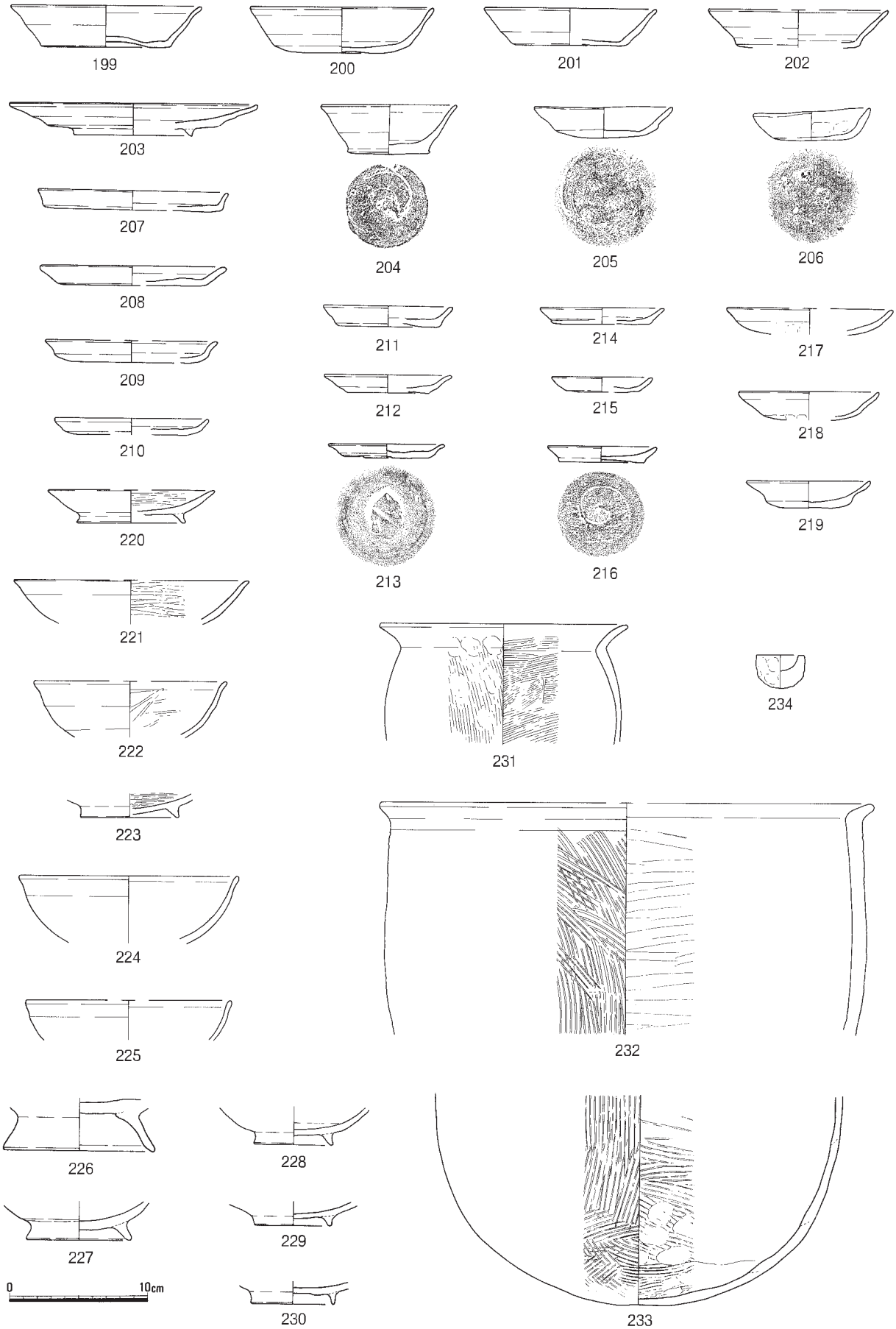


第108図　遺構に伴わない遺物①（1/4）

後中央ユビオサエもしくはナデで、小型の皿はヘラキリ未調整かヘラオコシ痕が残る。土師器皿215・217および土師器椀224・225・228～230は早島式土器である。土師器杯204～206は土壙１近くの北



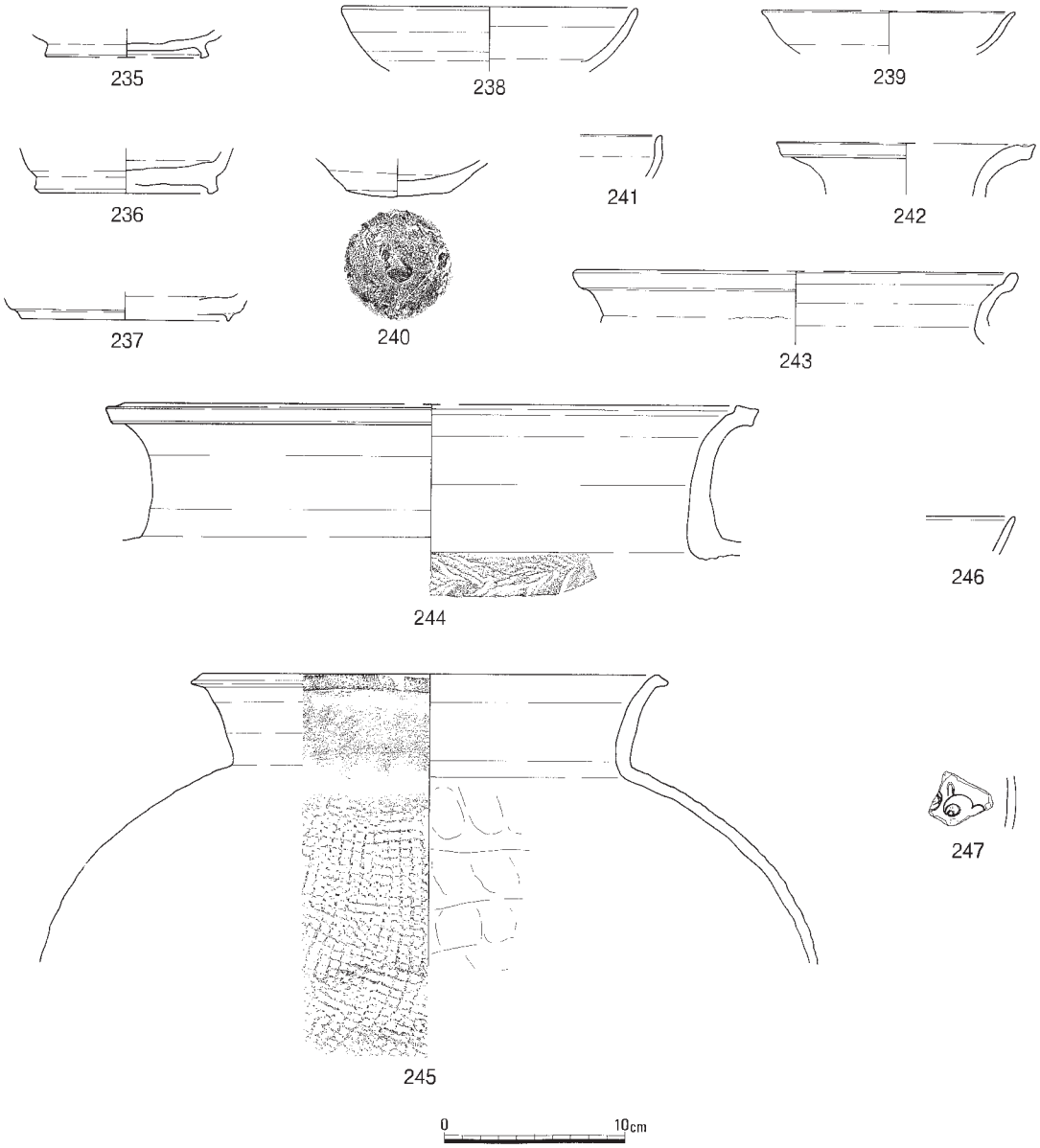
第109図　遺構に伴わない遺物②（1/4）



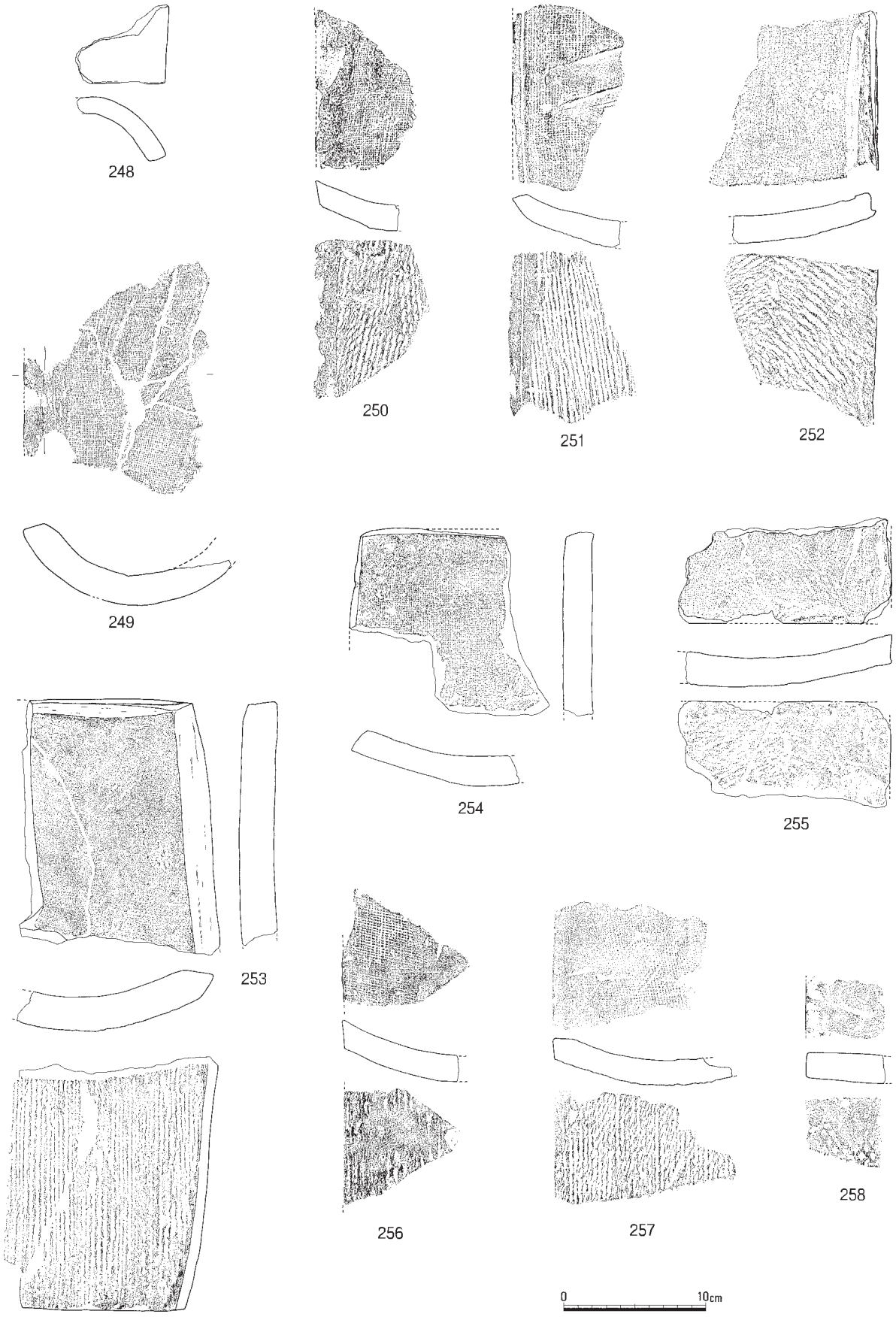
第110図　遺構に伴わない遺物③（1/4）

写真11　土器226・245出土状況（西から）

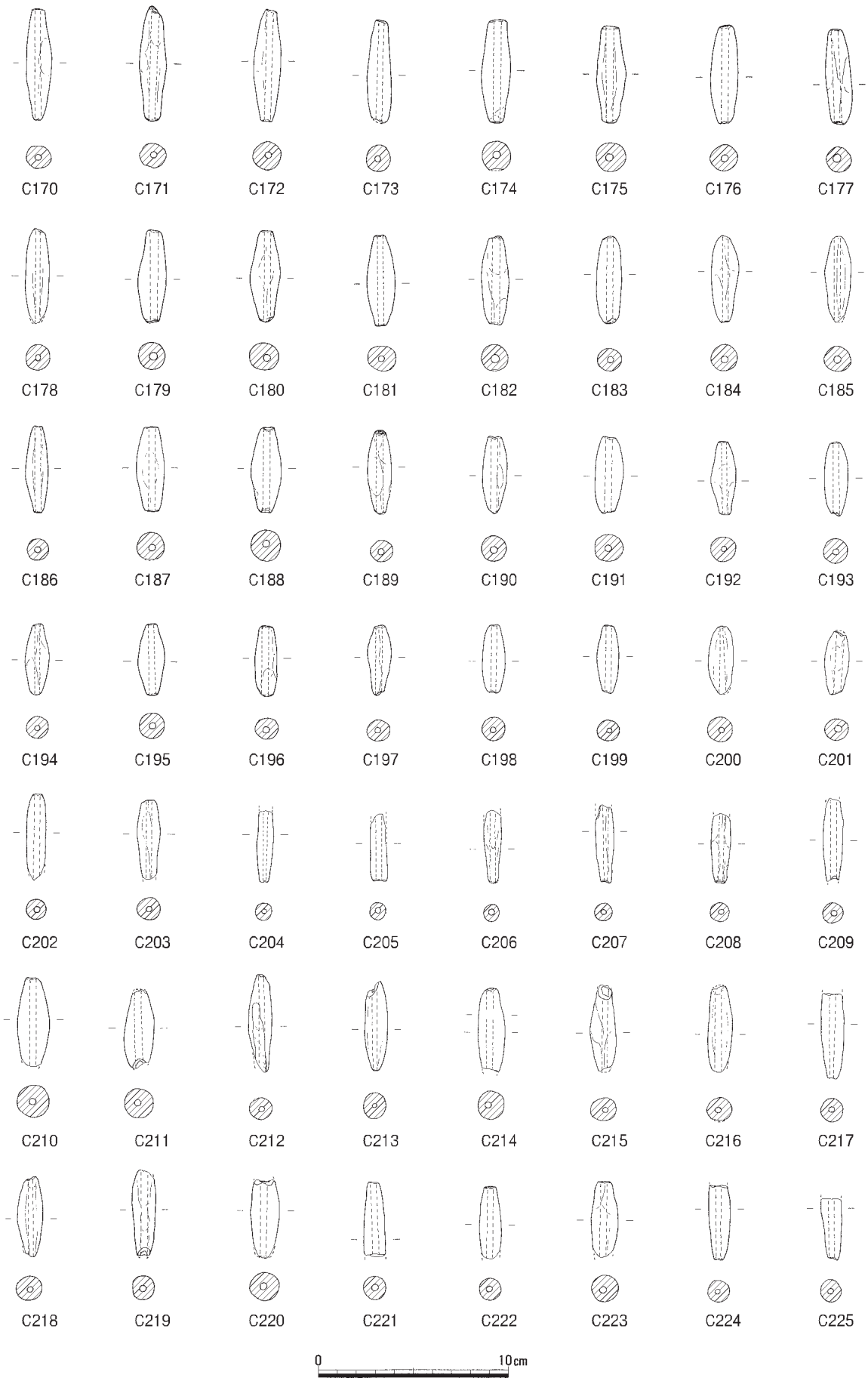
側掘削時に３点が重ねられた状態で出土した。平高台の杯Ｃと矮小になって皿化した杯Ａが供伴していた10世紀末～11世紀前半であろうか。須恵器甕**245**は土師器椀**226**と共に出土した。現状では外面格子叩きは中世の手法と認識しているが、土師器椀は11世紀代より降るとは思われず、今後検討を要する資料であろう。土製品・鉄製品の多くは調査区南東部で出土しているが、海老錠および石帯は調査区北東部で出土した。調査区北東部には方形の掘方を持つ掘立柱建物９があり、掘立柱建物９の性格を示唆しているのかもしれない。　（渡邉）



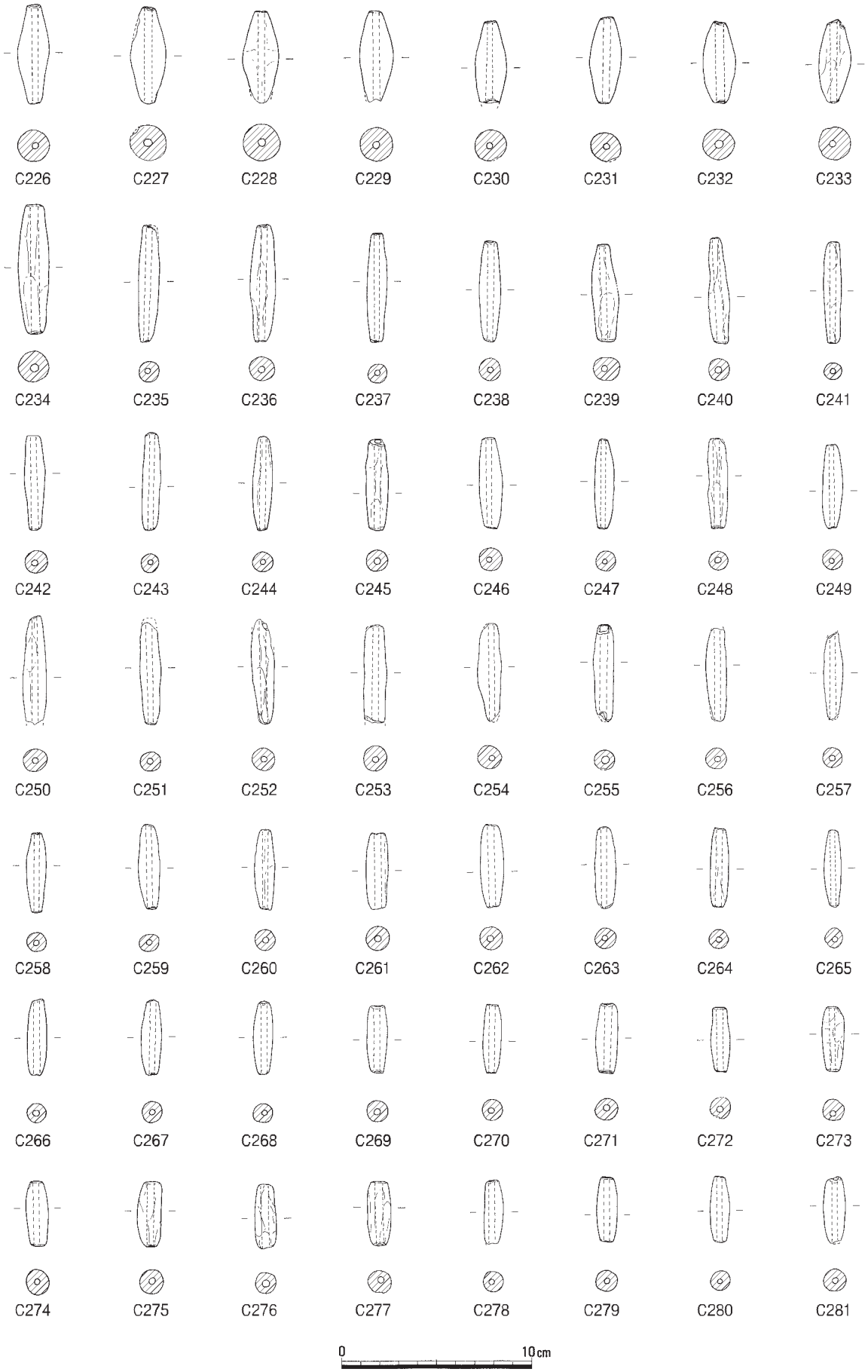
第111図　遺構に伴わない遺物④（1/4）



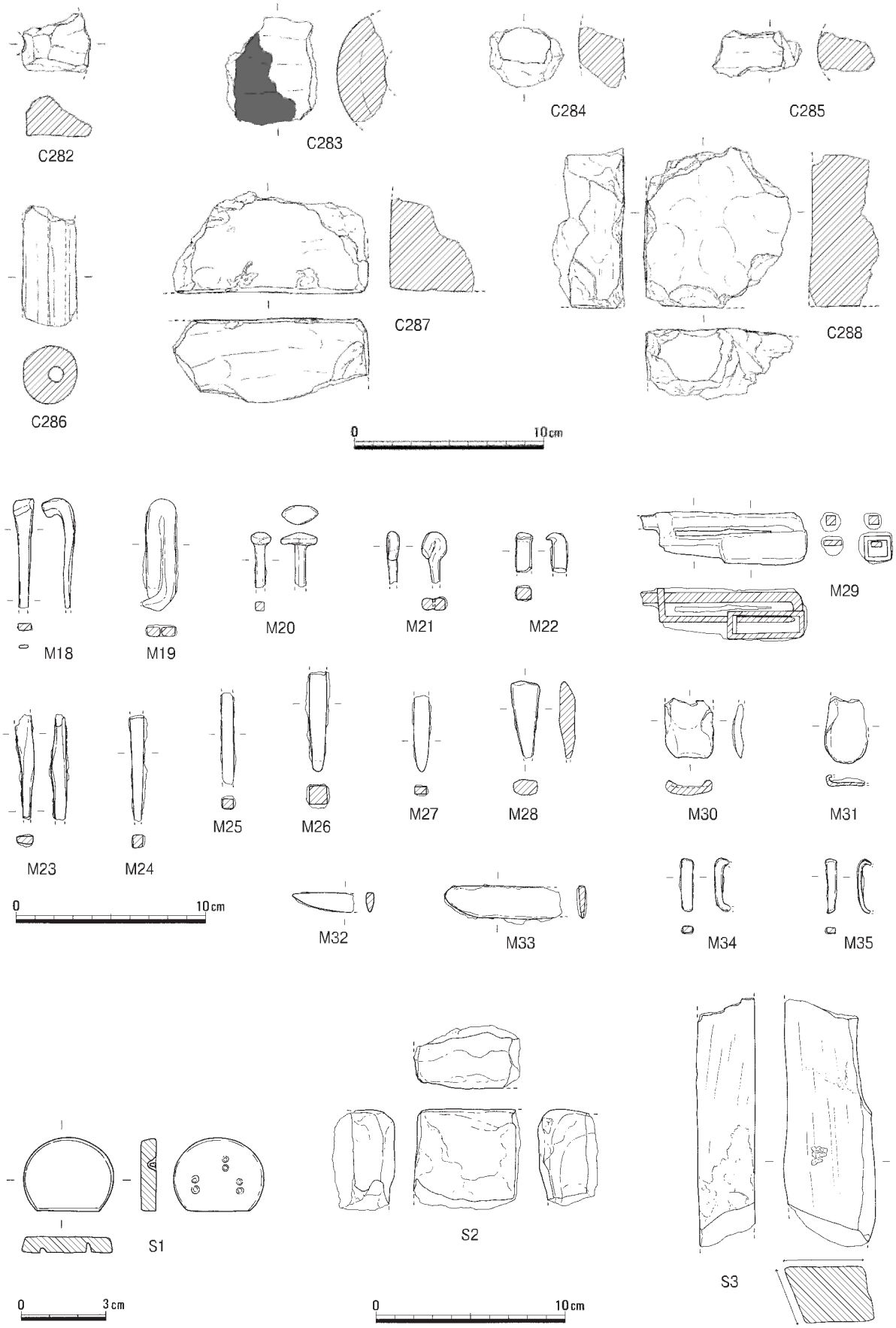
第112図　遺構に伴わない遺物⑤（1/4）



第113図　遺構に伴わない遺物⑥（1/3）



第114図　遺構に伴わない遺物⑦（1/3）

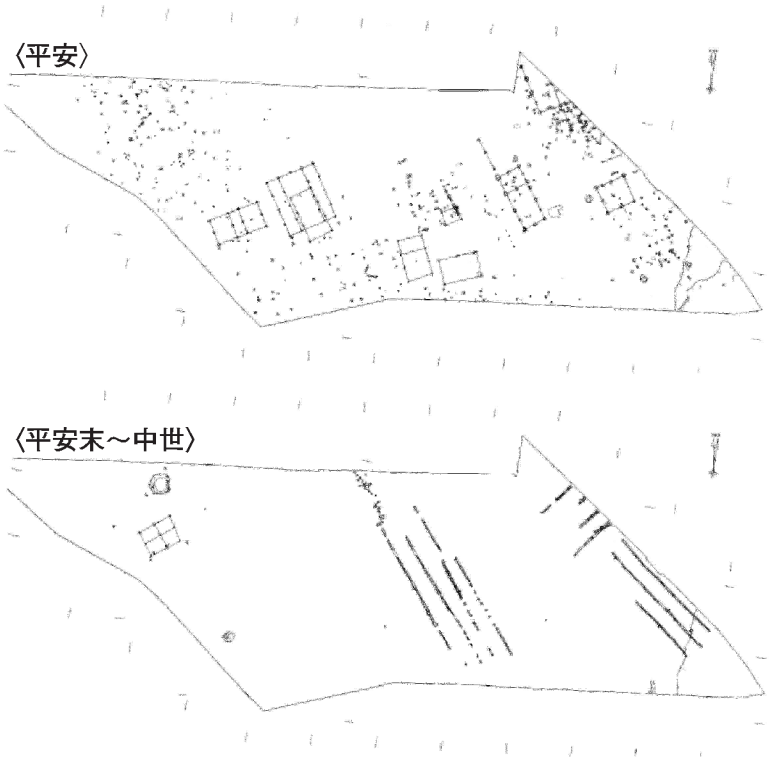


第115図　遺構に伴わない遺物⑧（1/3、1/2）

第３節　小結

金井戸遺跡では、東西幅100m程のやや狭い微高地上に、古代～中世を中心とする遺構を確認することができた。第１節で述べたように、基盤は弥生～古墳時代に堆積した砂礫で、古代になってやっと安定した新造の微高地といえる。検出された主な遺構は平安時代の掘立柱建物８棟、柱穴列３、土壙８基、鍛冶炉４基、中世の掘立柱建物１、土壙１・２があげられる。中世の遺構の多くが西端に偏在しているが、遺構検出面が近世～現代の耕作土（第57図１・２層）直下であり、削平が著しかったことがその要因と思われる。後述する北溝手遺跡でも低位部上で土壙墓がかろうじて残存しており、本来ならば中世においても全面に集落が広がっていたと想定される。なお、溝２～５、７～10、11～13の４条１セットと思われる溝群であるが、溝11～13は河道上面で検出されており、状況から見て古代末以降掘削されたもので、地形が東へ下がっていくことと合わせると、中世段階では遺跡の西半に居住地が、東半に耕作地が広がっていたのかもしれない。

さて、平安時代の掘立柱建物からは時期を特定しうる遺物を伴うものは少なく、詳細に時期的変遷を追うことは難しいが、柱穴の形態からグルーピングを試みると、径20～30㎝の掘立柱建物２～７、平面形が隅丸方形に近い掘立柱建物８・９、平面円形だが径が40㎝をこえる掘立柱建物10に大別できる。一方、土壙や溝、柱穴、河道出土遺物の様相は、９世紀中～後半、10世紀前半、10世紀後半の３時期に分かれ、灰釉陶器および緑釉陶器の年代とも矛盾をきたさないことから、建物群の形成時期にもこれらの傾向をあてはめることができるだろう。また、９世紀に遡る遺構が調査区東側に偏在していることから、掘立柱建物８～10が９世紀以前に遡る可能性は高い。これら掘立柱建物群の性格であるが、遺構に伴わないという不確定要素はあるものの、石帯Ｓ１、海老錠M29、越州窯青磁175など農村集落ではみられない遺物が含まれていること、備中国府および賀陽氏の氏寺である栢寺に隣接していること、また古代末以降は当地域が国衙領域に含まれることなどから一般農村とは考えにくい。一方、掘立柱建物３は両庇とはいえ桁行４間と小さく、倉庫らしき総柱建物も見られない点を考慮すれば、栢寺に付随する施設や下級官人層、もしくは賀陽氏に連なる豪族の居宅という見方もできるのではなかろうか。　（渡邉）



第116図　主要遺構の変遷（1/1,200）

第５章　北溝手遺跡

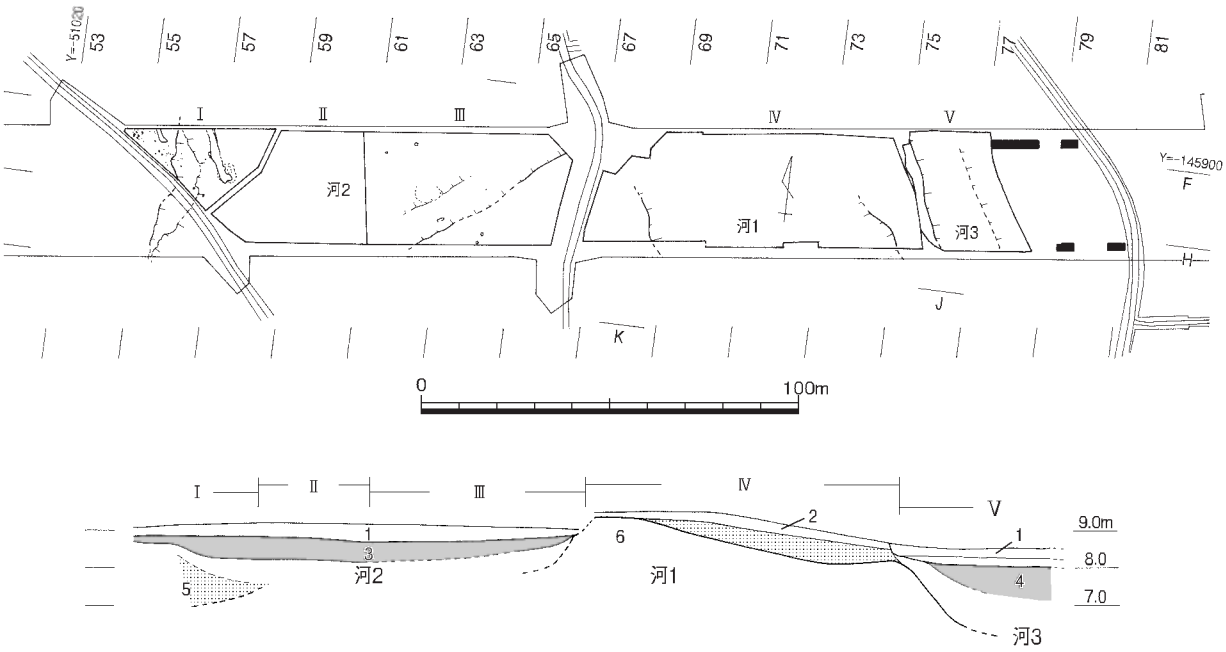
第１節　遺跡の概要

遺跡は微高地とその東西に所在する河道の跡からなる。

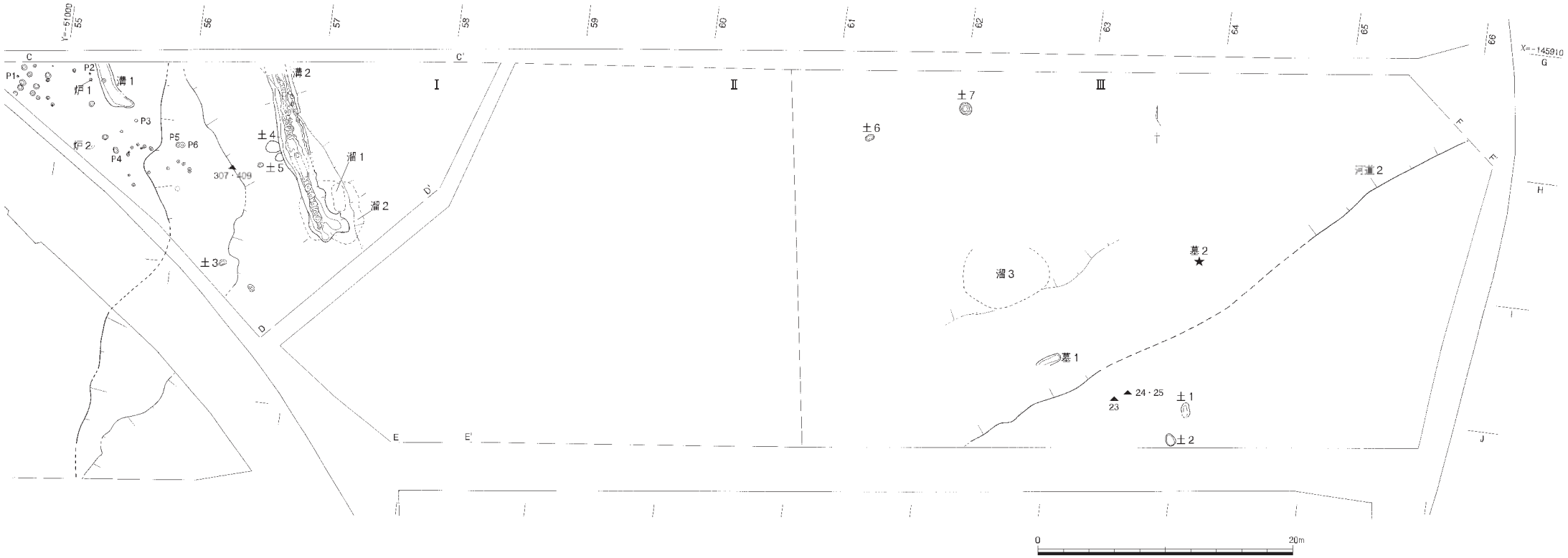
東部は遺跡中央部よりも一段低く、幅50ｍで北から南へ向かう河道跡が広がっている（河道３）。河道の形成時期は明確でないが、少なくとも中世以降微高地を削って流れ近世に埋没して水田化されたとみられ、河道は最終的に大字の境となる用水路となって残る。一方、西部には、幅50ｍの古代・中世の河道が北東－南西方向に所在し（河道２）、その北西岸は古代の建物が所在する金井戸遺跡の微高地となる。Ⅰ区は金井戸遺跡微高地の一部および斜面、Ⅱ・Ⅲ区が河道２、Ⅳ区が微高地、Ⅴ区が河道３という調査区割りである。

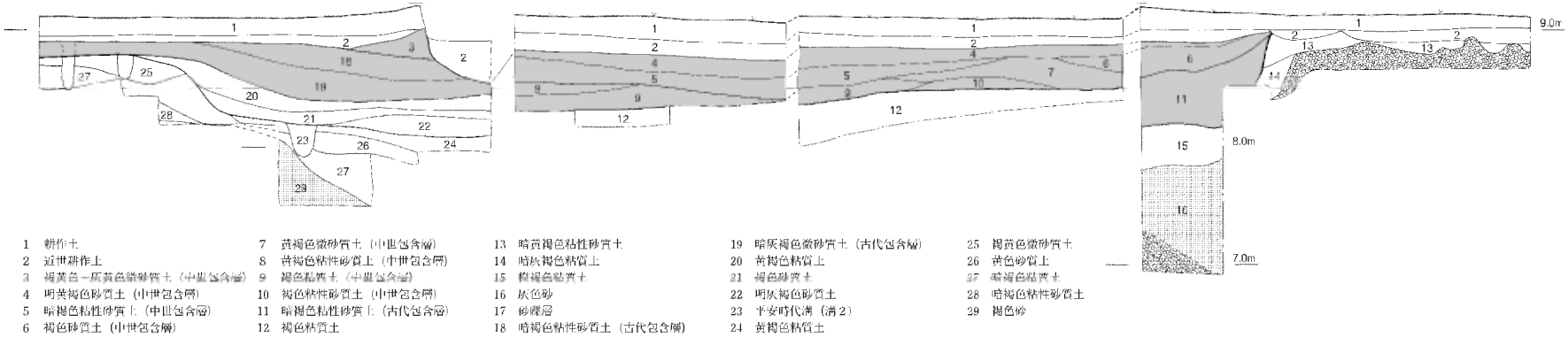
微高地となるⅣ区自体も弥生時代後期から古墳時代前半期の河道堆積によって形成されており、その段階では河道であったためこの部分を河道１とする。

検出遺構は少なく、また、それらはⅠ区とⅢ区に集中する。Ⅰ区の遺構は金井戸遺跡の遺構と一連のものであり、河道堆積中からの遺物の出土量も顕著であった。Ⅲ区の遺構は北溝手遺跡微高地のあり方をうかがわせる資料であるが、中世の土壙墓以外には目立った遺構は形成されていない。ただしⅡ・Ⅲ区とも河道堆積にはある程度の量の遺物が含まれていた。Ⅲ区は遺構は見られないが多量の弥生時代後期土器をはじめ土師器・初期須恵器などが出土した。　（宇垣）



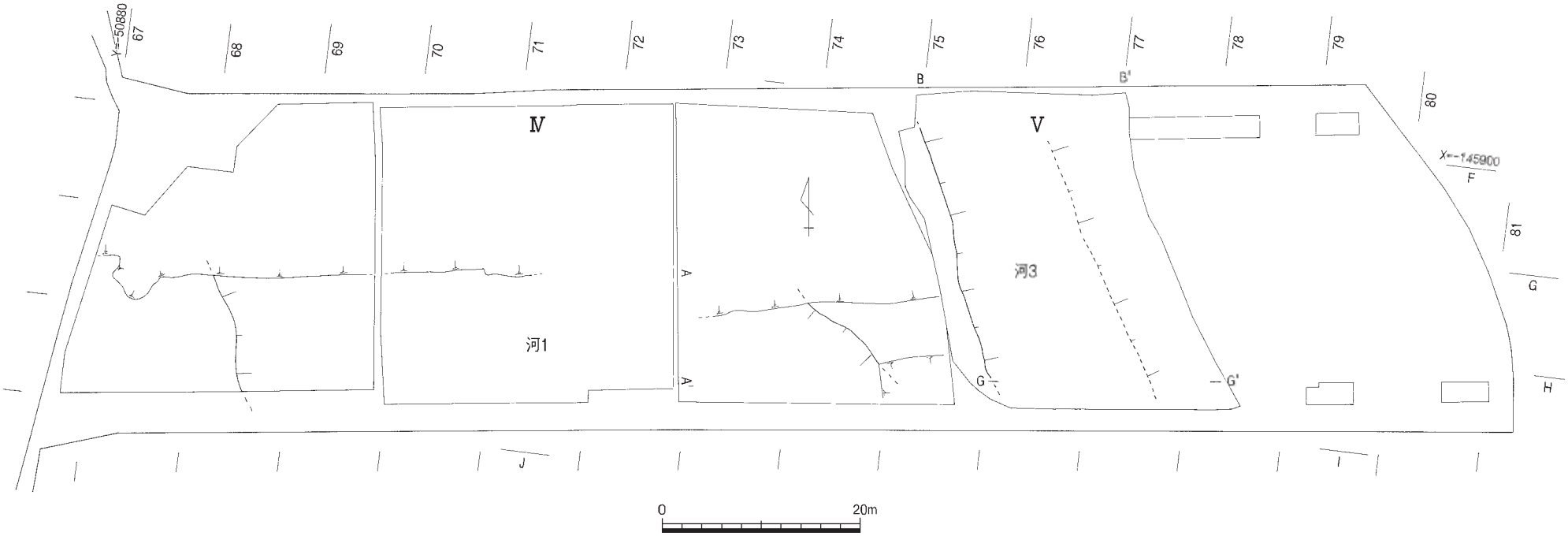
第117図　調査区配置図（1/2,000）・堆積状況模式図（横1/2,000、縦1/200）

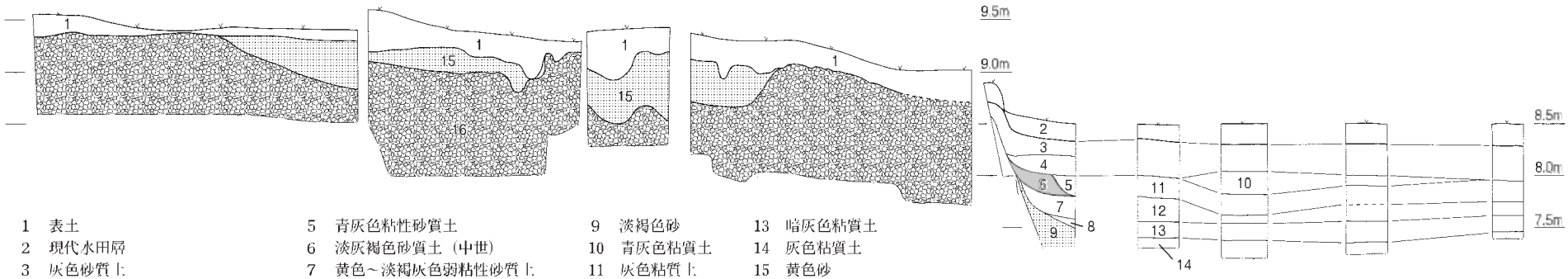




1 耕作土
2 近世耕作土
3 褐黄色－灰黄色微砂質土（中世包含層）
4 明黄褐色砂質土（中世包含層）
5 暗褐色粘性砂質土（中世包含層）
6 褐色砂質土（中世包含層）
7 黄褐色微砂質土（中世包含層）
8 黄褐色粘性砂質土（中世包含層）
9 褐色粘質土（中世包含層）
10 褐色粘性砂質土（中世包含層）
11 暗褐色粘性砂質土（古代包含層）
12 褐色粘質土
13 暗黄褐色粘性砂質土
14 暗灰褐色粘質土
15 暗褐色粘質土
16 灰色砂
17 砂礫層
18 暗褐色粘性砂質土（古代包含層）
19 暗灰褐色微砂質土（古代包含層）
20 黄褐色粘質土
21 褐色砂質土
22 明灰褐色砂質土
23 平安時代溝（溝2）
24 黄褐色粘質土
25 褐黄色微砂質土
26 黄色砂質土
27 暗褐色粘質土
28 暗褐色粘性砂質土
29 褐色砂

第 118 図　Ⅰ～Ⅲ区遺構全体図（1/300）・堆積状況模式図（横 1/300、縦 1/60）





1　表土
2　現代水田層
3　灰色砂質土
4　青灰色～黄色粘質土（近世耕土）
5　青灰色粘性砂質土
6　淡灰褐色砂質土（中世）
7　黄色～淡褐灰色弱粘性砂質土
8　黄灰色粘質土
9　淡褐色砂
10　青灰色粘質土
11　灰色粘質土
12　淡灰色粘質土
13　暗灰色粘質土
14　灰色粘質土
15　黄色砂
16　砂礫

第119図　Ⅳ・Ⅴ区遺構全体図（1/600）・堆積状況模式図（横1/600、縦1/60）

第２節　古墳時代以前の遺構・遺物

１　概要

弥生時代から古墳時代中期にかけて土器を多量に含む砂礫層が堆積し、後に砂の堆積に変わる。遺物量は多く、摩滅が著しいものが含まれる一方で状態の良いものも認められ、すべてが長距離を運ばれ堆積したとも考えにくく、調査区付近にそれらのもととなった集落遺跡が所在するのかもしれない。

出土遺物のうち、弥生時代後期の特殊器台片、古墳時代中期の初期須恵器は出土例の少ない資料である。埋没がある程度進んだ段階で河道２の東斜面には完形の土器をおさめたとみられる土壙２基が設けられる程度で、遺構は少ない。　(宇垣)

２　土壙

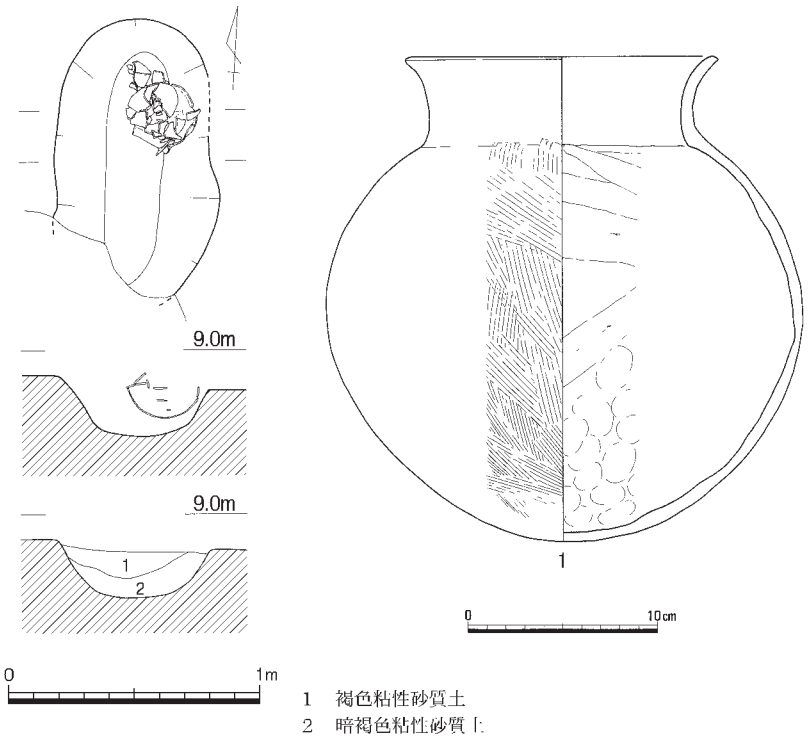
土壙１（第120図、図版18－２）

Ⅲ区中央の南端で検出された土壙である。平面形は楕円形で、断面形はⅢ形を呈している。規模は長軸109㎝、短軸61㎝、検出面からの深さ24㎝を測り、底面の海抜高は8.66ｍであった。

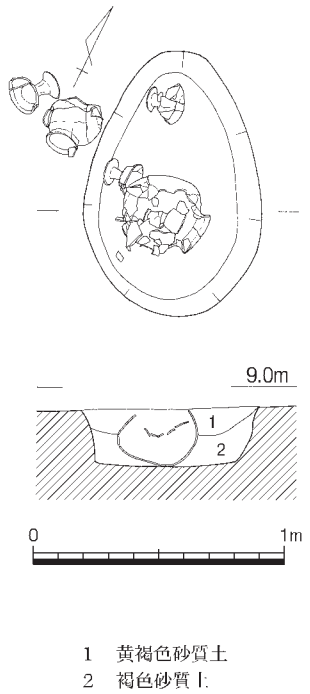
土壙の北隅では土師器甕１が据え置かれていたようで、完形に近い状態のまま、土圧によって押し潰され出土している。時期は５世紀前半と考えられる。　(石田)

土壙２（第121・122図、図版18－３）

Ⅲ区中央南端で検出された土壙で北東約２ｍには、土壙１が存在する。平面形は楕円形で、断面形は箱形を呈している。土壙の規模は長軸109㎝、短軸70㎝、検出面からの深さ24㎝を測り、底面の海

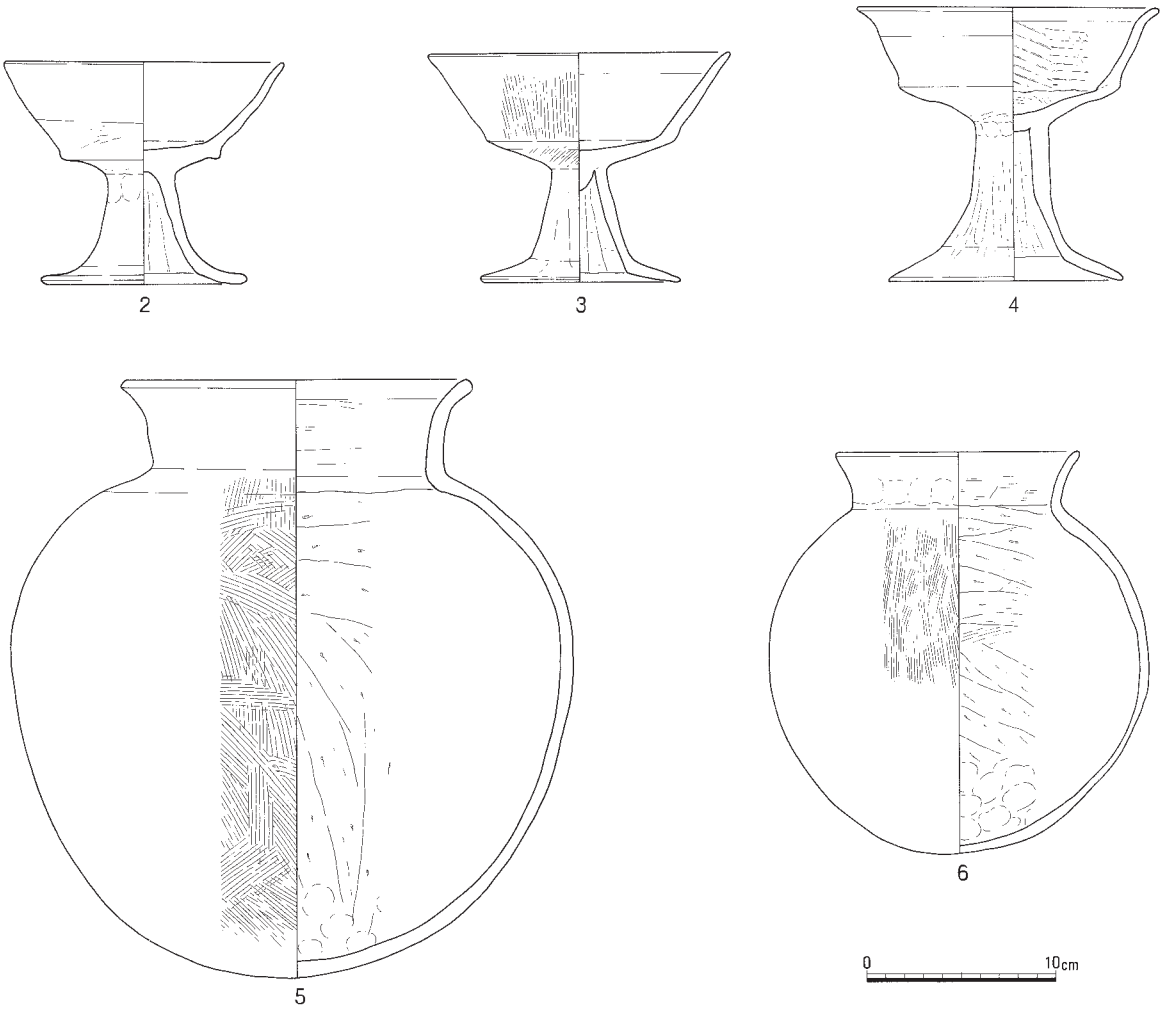


第120図　土壙１（1/30）・出土遺物（1/4）



第121図　土壙２（1/30）

抜高は8.68ｍである。掘り方の検出は困難で、当初に土師器甕５と高杯２・３を包含する楕円形の掘り方を確認した。しかし、周辺の掘り下げを進めていく過程で、すぐ北東側においても甕６と高杯４が確認されたことから、本来の土壙の規模は、これらの土器をまとめる範囲のものであったと考えられる。出土した土器はいずれも５世紀前半のものと考えられる。（石田）



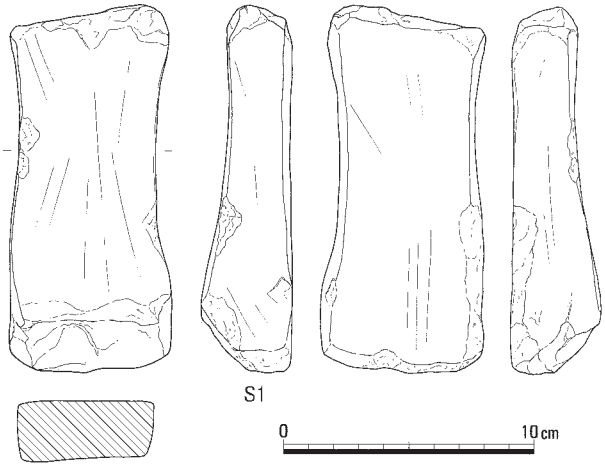
第122図　土壙２出土遺物（1/4）

３．河道

河道１（第117～119・123～138図）

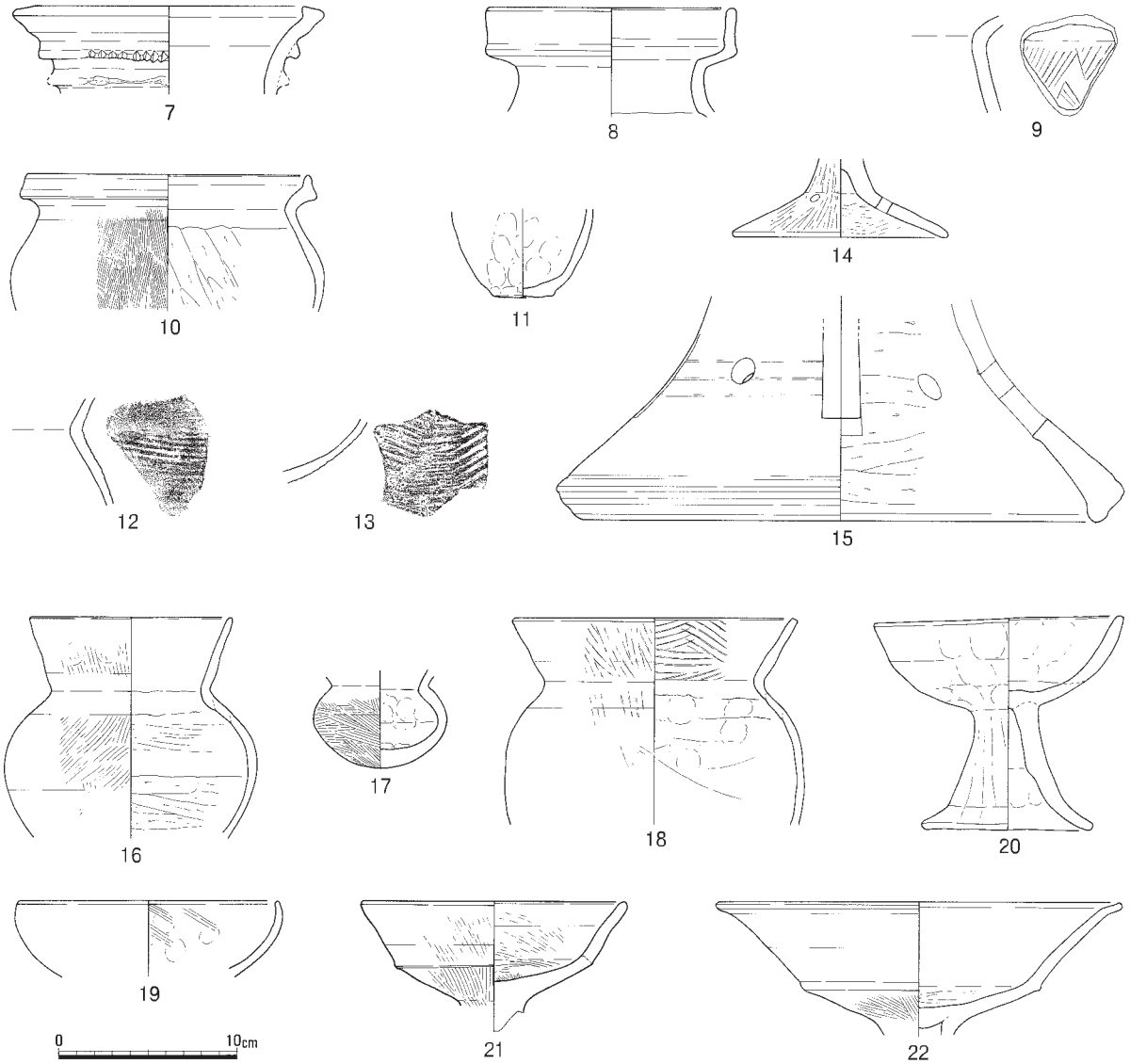
北溝手遺跡西端およびⅢ区とⅣ区の境に古墳時代以降の微高地が形成されているが、その基盤は砂および礫（第５・６層）であった。この砂と礫は自然流路によって運搬された土砂の堆積であろうが、比較的多くの遺物を包含していたので河道として扱った。弥生時代前期～古墳時代中期の遺物が出土したが、大半は弥生時代後期末～古墳時代中期に属すもので、この時期に堆積作用が盛んであったことが

写真12　Ⅳ区南壁（北から）



想起される。以下、大きく調査区毎で地点を分け、概要を記す。　　（渡邉）

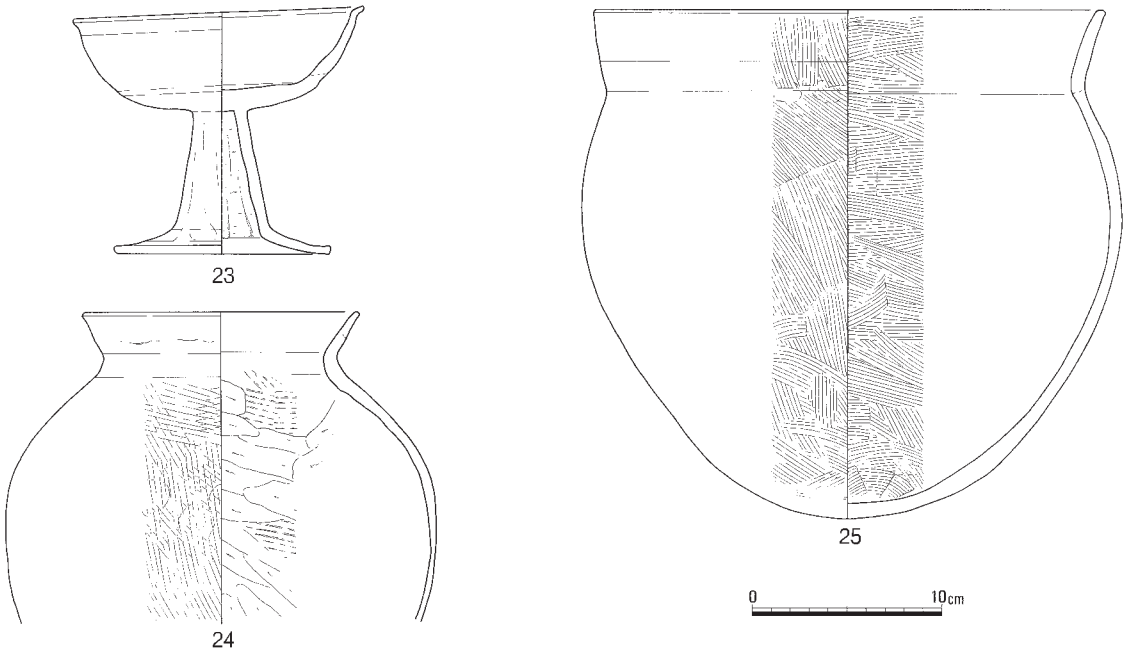
Ⅲ区　Ⅳ区の微高地の基盤となる砂礫層のつづきで、西端部分にあたる。この砂礫層は古墳時代以前の古い流路と考えられ、弥生時代中期から古墳時代前半期にかけての土器を包含していることから、出土遺物の大半は、周辺の微高地上に存在していた集落からの二次堆積と考えられる。出土遺物には砥石Ｓ１のほか、７～15は弥生土器で、中期中葉の壺７、内外面に丹塗りを施す後



第123図　河道１　Ⅲ区出土遺物①（1/4、1/3）

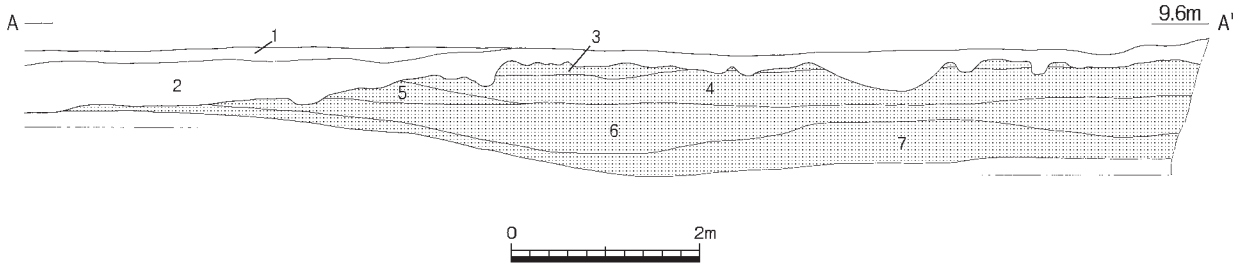
期の壺８、タタキ甕の破片12・13、短脚の高杯の脚部14がある。９は特殊器台の破片で、鋸歯文を施す。15は器台の脚部で方形の透かし孔と円孔が確認できる。16～25は古墳時代の土師器で壺16～18、高杯19～23がある。また、高杯23と甕24・25はともに近接した状態で出土しており、土壙１・２の出土土器も含めて、河道埋没前後の短期間に祭祀的な用途に使用された可能性が考えられる。　(石田)

写真13　土器24・25出土状況（西から）



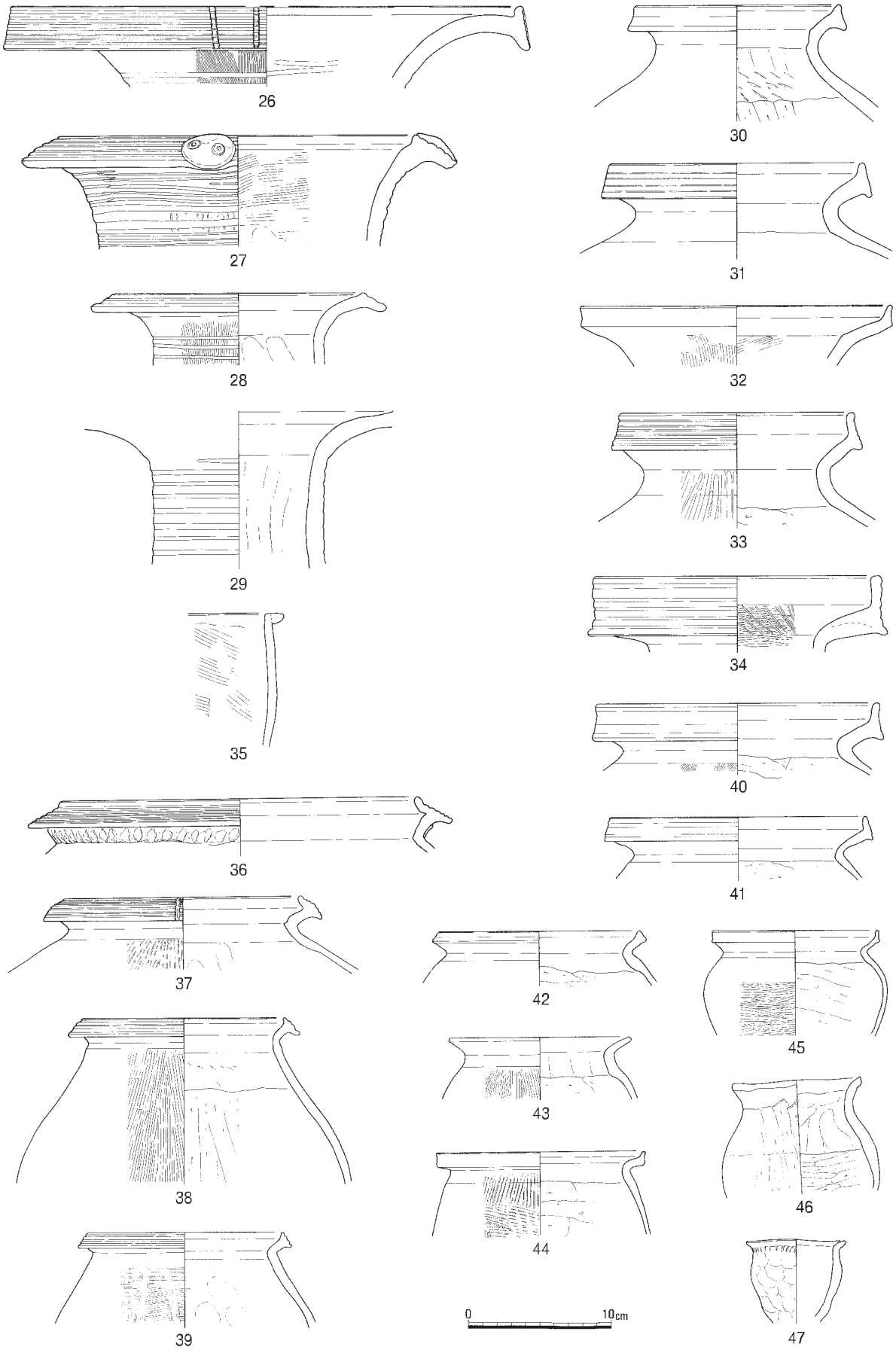
第124図　河道１　Ⅲ区出土遺物②（1/4）

Ⅳ区　Ⅲ区東端の微高地のつづきで、Ⅳ区西端の微高地を形成する遺物を包含する砂礫層にあたる。その規模は調査範囲を大きく越えており、河道幅や流走方向、深さなど不明な点が多い。堆積層は上部の砂層とその下の砂礫層を確認した。砂層出土遺物を第126～128図、砂礫層出土遺物を第129～135図

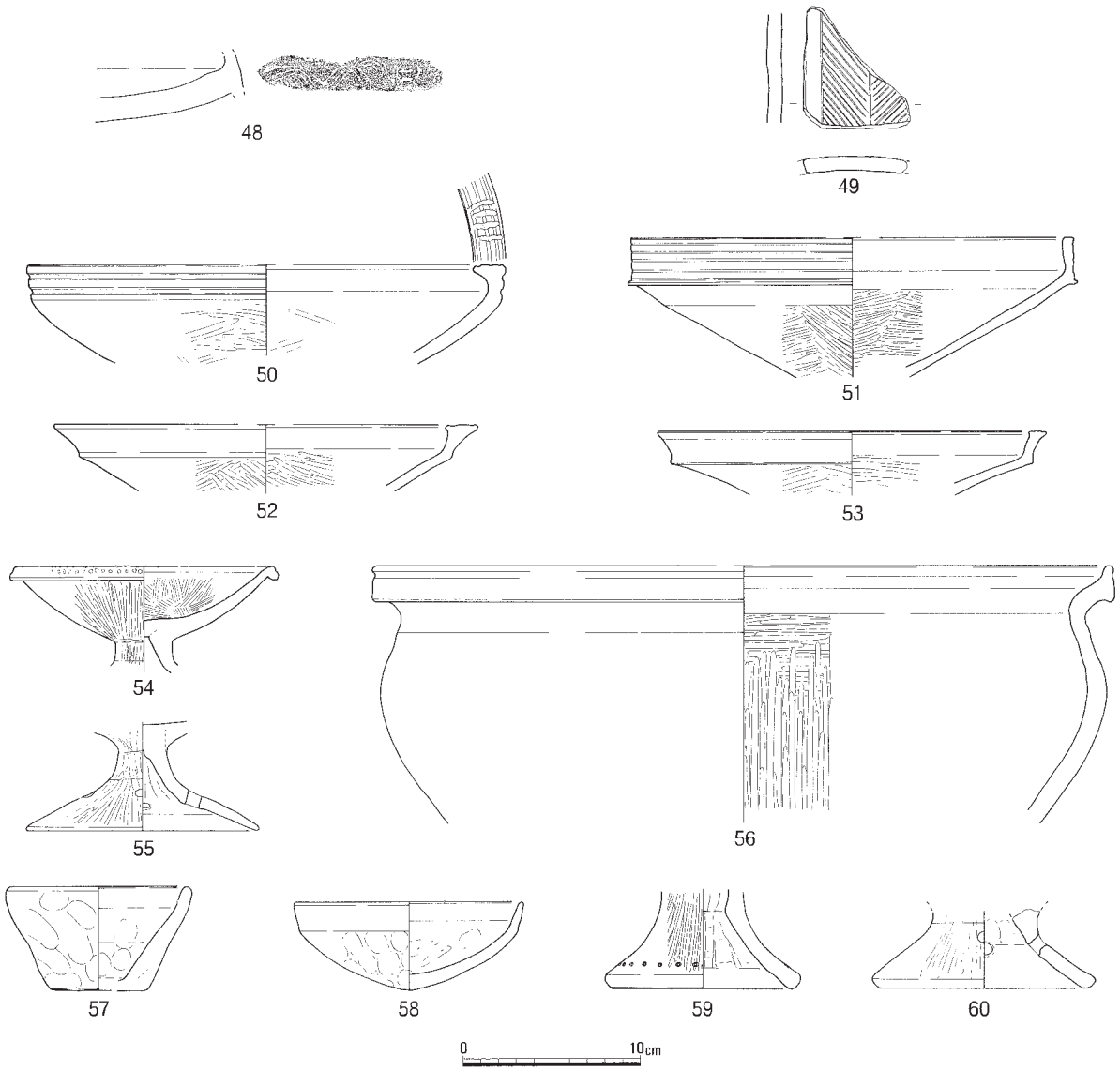


1　山土
2　造成土
3　黄褐色砂
4　灰黄色砂
5　黄色砂（礫含）
6　黄色砂
7　黄色粗砂

第125図　河道１　Ⅳ区（1/60）



第126図　河道１　Ⅳ区砂層出土遺物①（1/4）

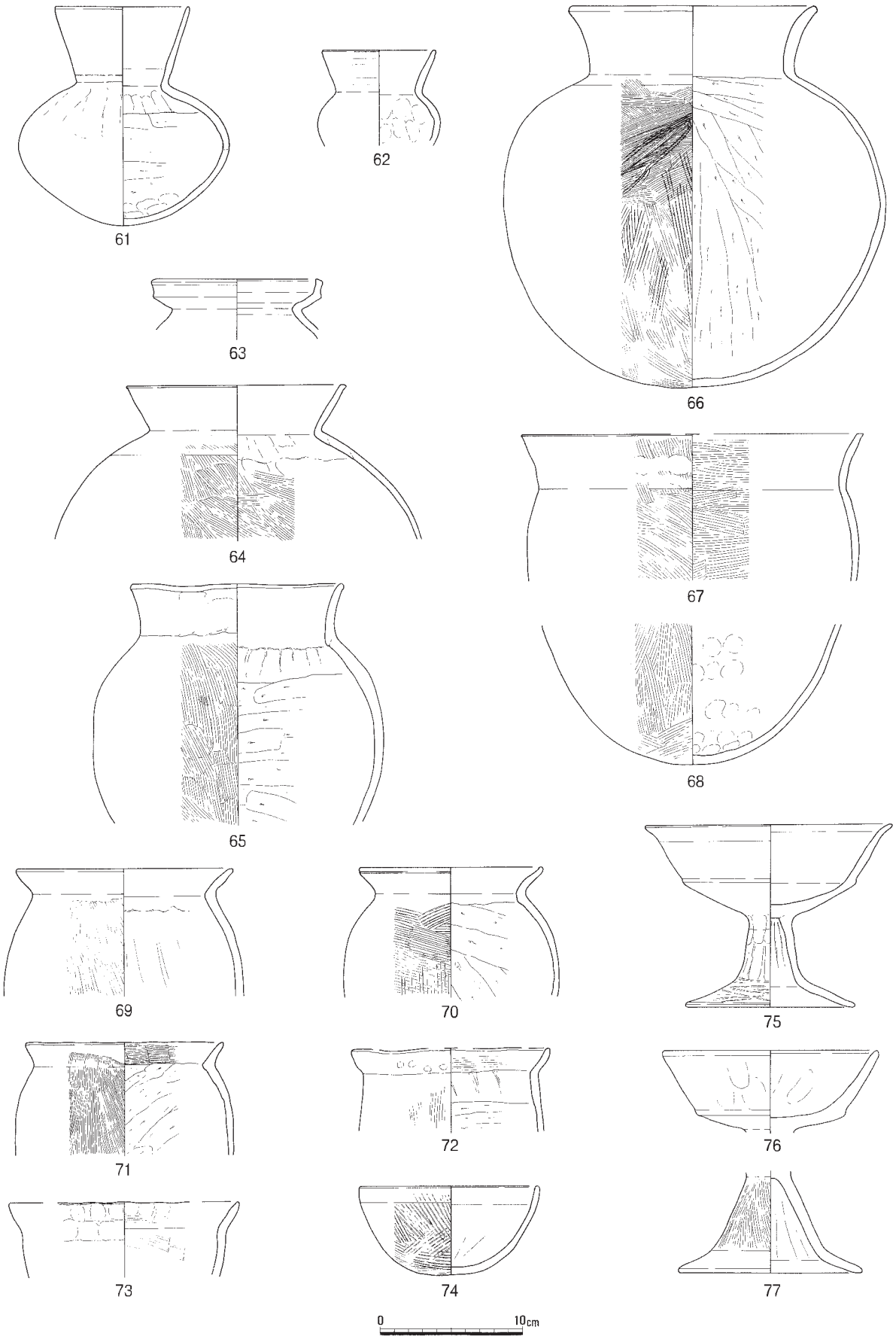


第127図　河道１　Ⅳ区砂層出土遺物②（1/4）

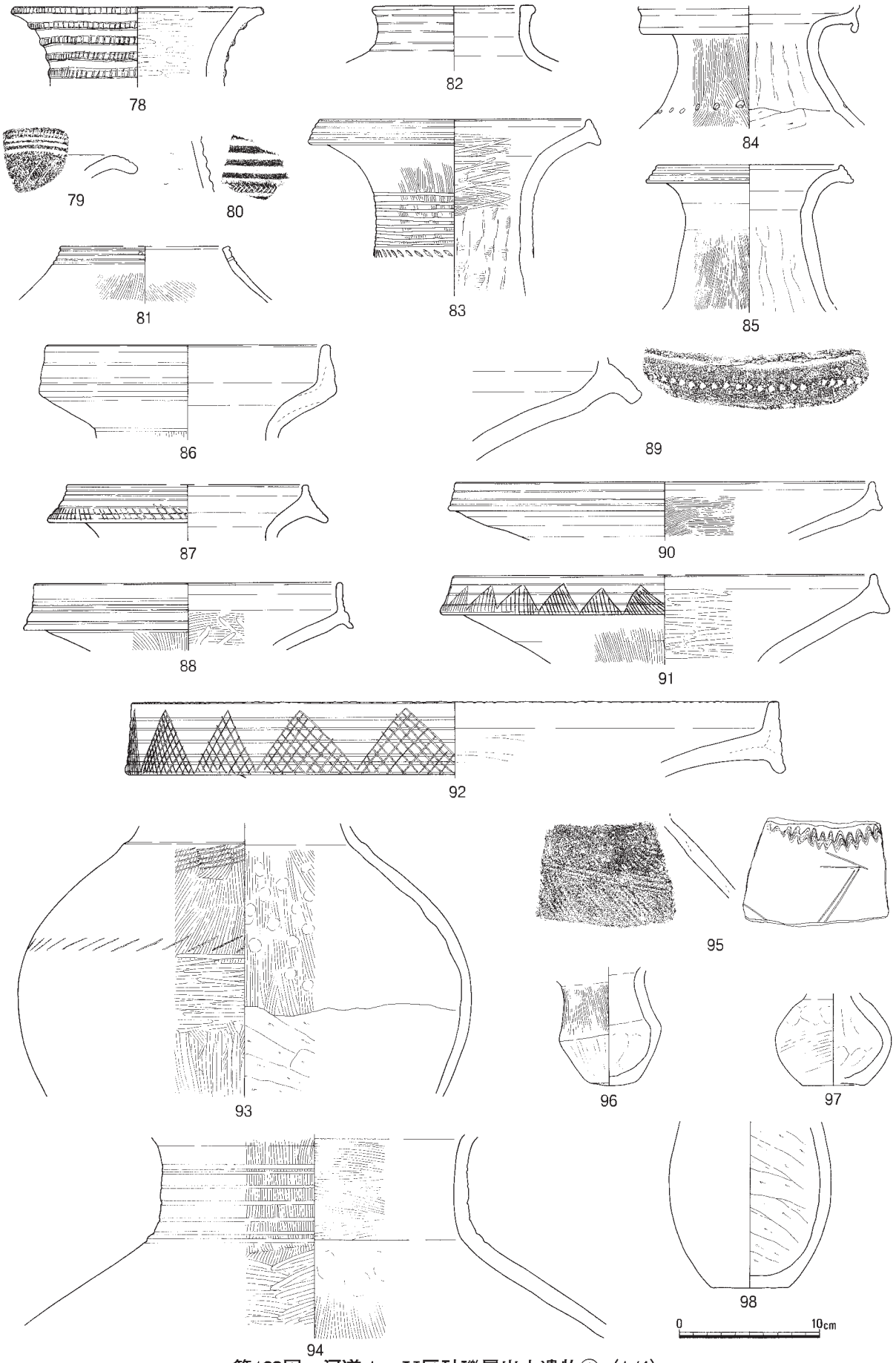
に掲載した。どちらも弥生時代前期後葉と中期中葉の土器がわずかにあり、中期後葉から後期、古墳時代前・中期までの土器が多く出土しており、層位的に差がない。このことから河道１は古墳時代中期（５世紀前半）の段階に、上流に所在する集落を崩しながら、一気に埋まった可能性がある。

48の器台口縁端部には３～４条単位の波形のヘラ描き沈線文が施され、右端は上～後方に反転させて終わっている。その隣に刺突があり、目、口と小さな顔のように見えるが定かでない。それぞれの沈線は連続せず、雑な印象を受ける。胎土から弥生時代後期に属すると考えられる。**49**は立

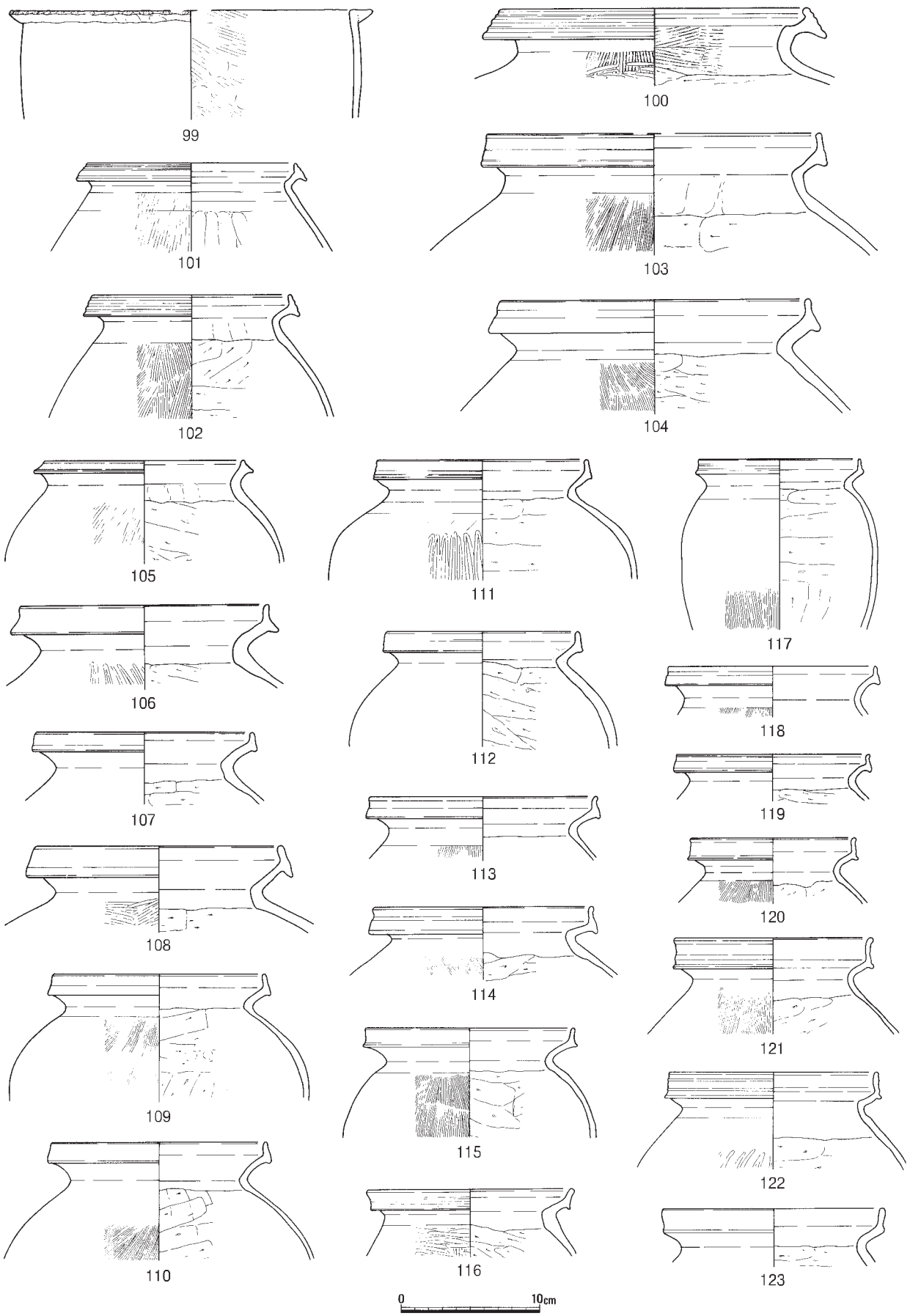
写真14　土器66出土状況（西から）



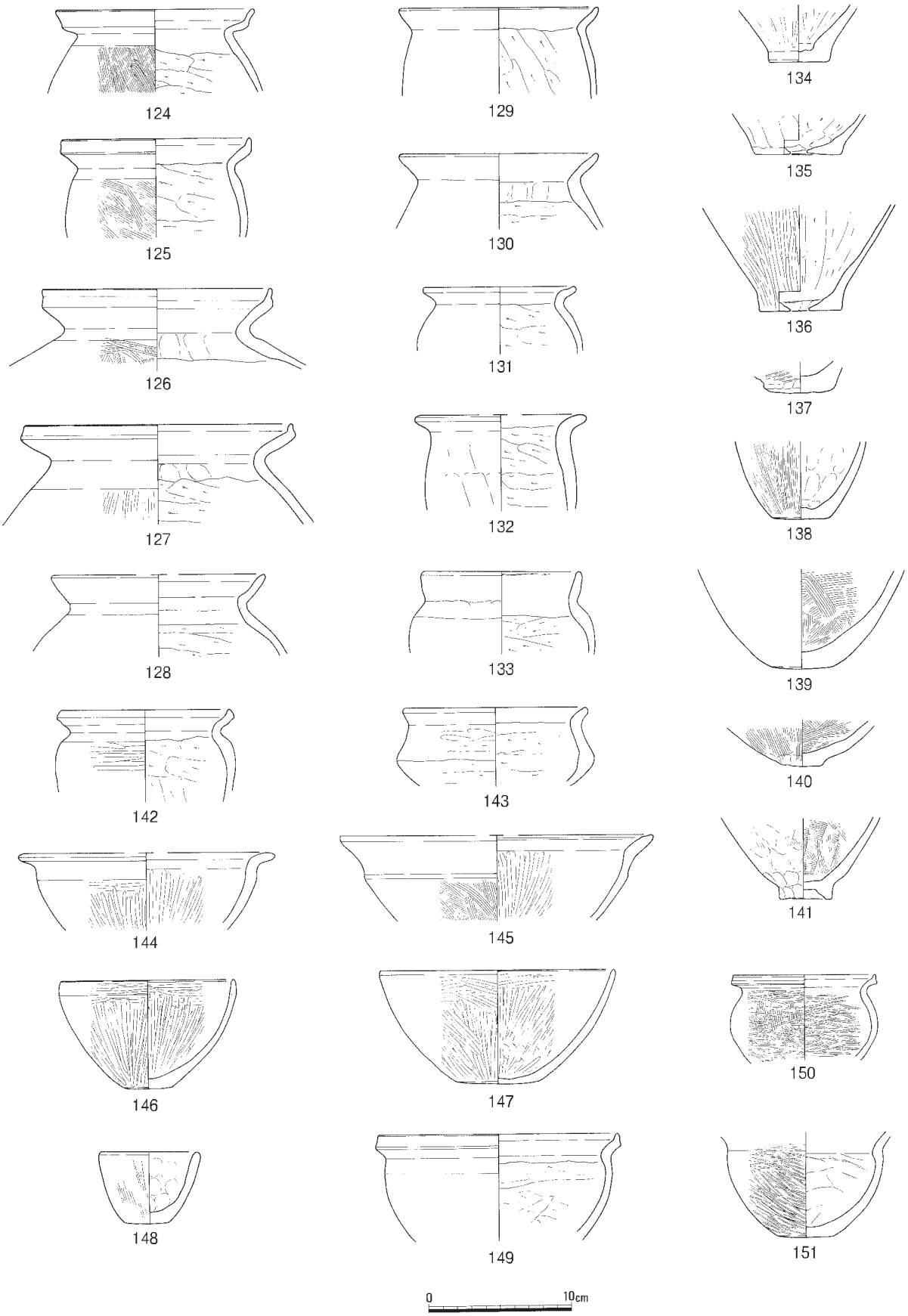
第128図　河道１　Ⅳ区砂層出土遺物③（1/4）



第129図　河道１　Ⅳ区砂礫層出土遺物①（1/4）

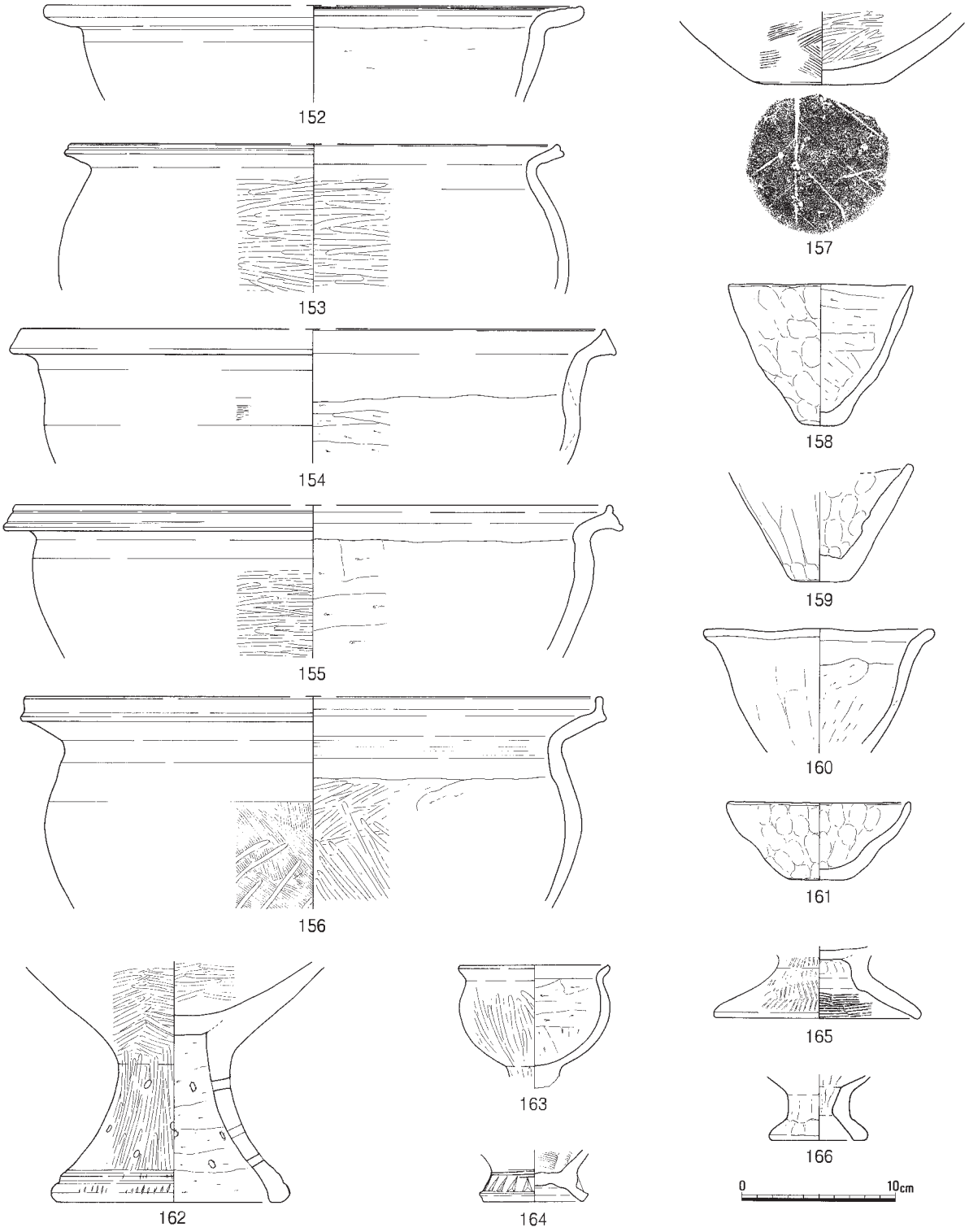


第130図　河道１　Ⅳ区砂礫層出土遺物②（1/4）

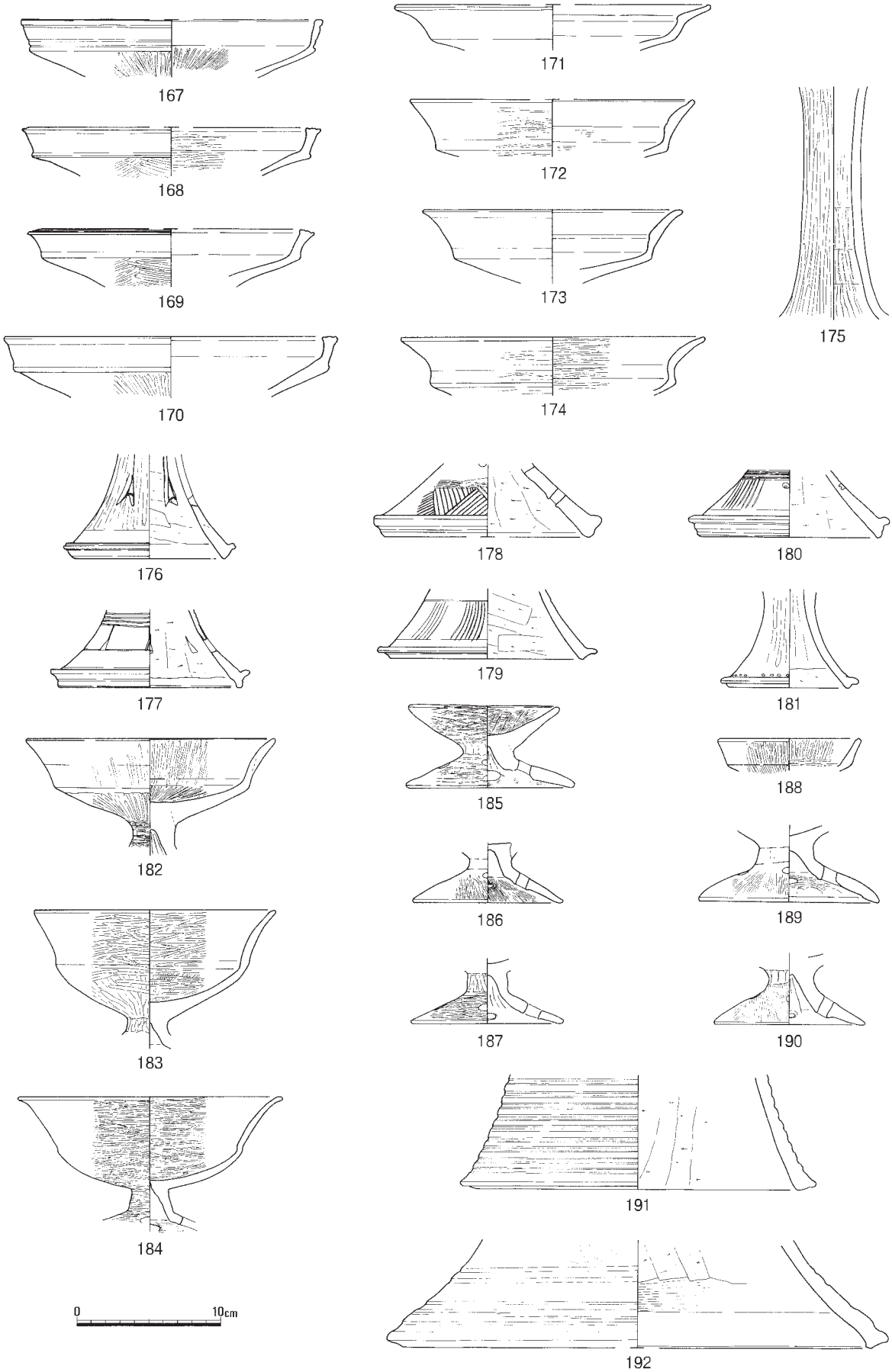


第131図　河道１　Ⅳ区砂礫層出土遺物③（1/4）

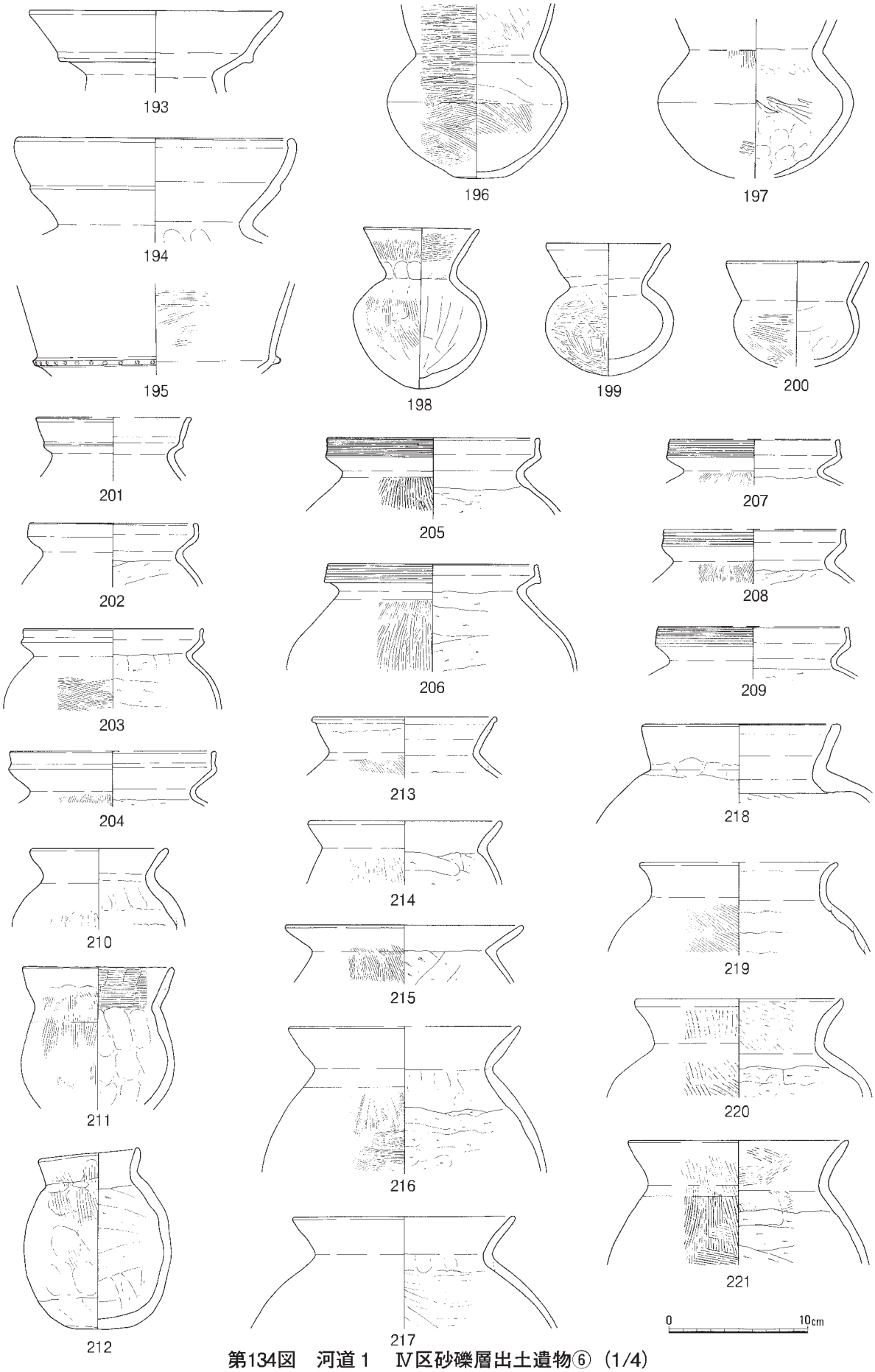
坂型の特殊器台である。胎土は角閃石を含み、色調は橙色（5YR6/6）を呈する。綾杉文の隣に長方形の透かしがある。**95**は「シカ」の絵画土器である。Ｖ字形の頭部と２本線の首、背中の一部が見られる。壺あるいは甕の肩部片と考えられるが、時期は白っぽい色調と内面ハケ目調整から弥生時代中期後半期と推定される。**176**の弥生時代中期後葉の高杯には矢羽根透かしが見られる。**195**は屈曲部外



第132図　河道１　Ⅳ区砂礫層出土遺物④（1/4）

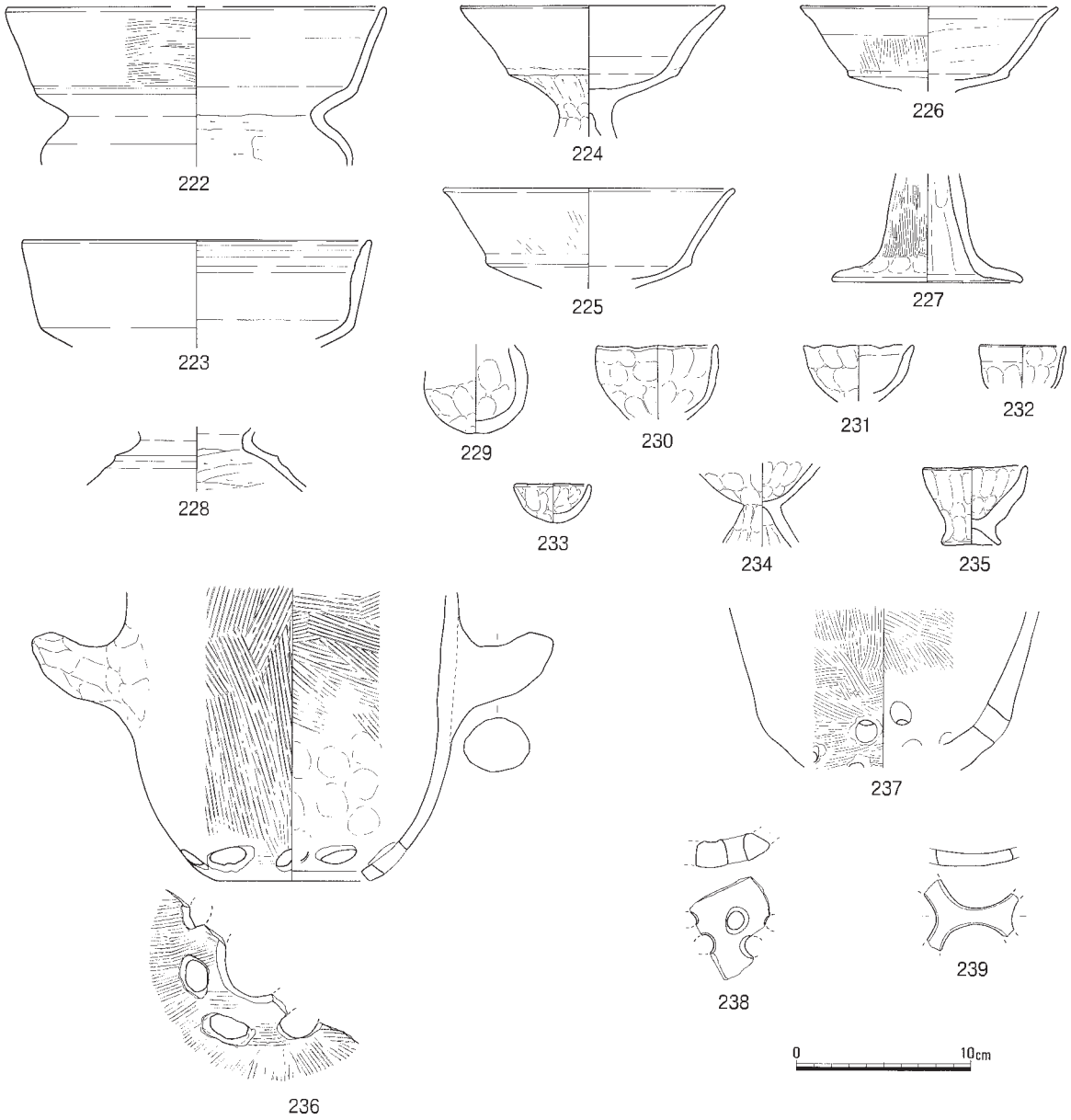


第133図　河道１　Ⅳ区砂礫層出土遺物⑤（1/4）



第134図　河道１　Ⅳ区砂礫層出土遺物⑥（1/4）

面に突帯を貼り付け、竹管文を施す。器種は高杯、あるいは壺口縁か定かでない。228は鼓形器台である。229～235は手捏ねのミニチュア土器。236～239は甑で、すべて底部に円形の孔が多数開くものである。240と241はどちらも破片であるが、内外面ともタタキをよくナデ消しており、初期須恵器と考えられる。240は黄色をおびた淡い灰色を呈する。断面は中心部が灰色その両側が橙色で、胎土は精良である。241は表面が暗灰色、断面が橙色を呈する。240と違い白色の砂粒を多く含む。Ｃ１・２は分銅形土製品で、特にＣ２は推定直径20㎝を測る大形品である。白っぽい色調で砂粒が少ないことから弥生時代中期後葉、240は橙色を呈し、砂粒が多いので後期に下るものと推定される。Ｃ３は羽口の破片で、どの時期に所属するか断定できないが、河道１出土遺物の中で一番新しい226・227高杯や甑、初期須恵器の段階の遺物と捉えたい。　（物部）



第135図　河道１　Ⅳ区砂礫層出土遺物⑦（1/4）

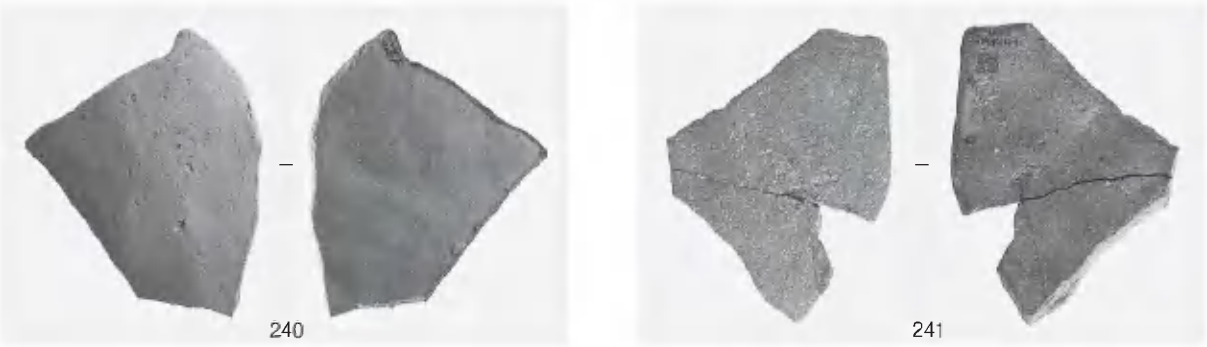
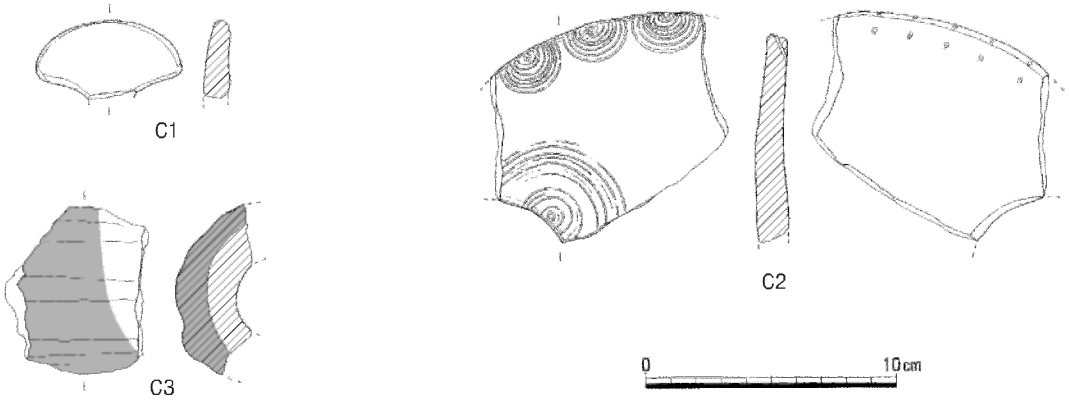


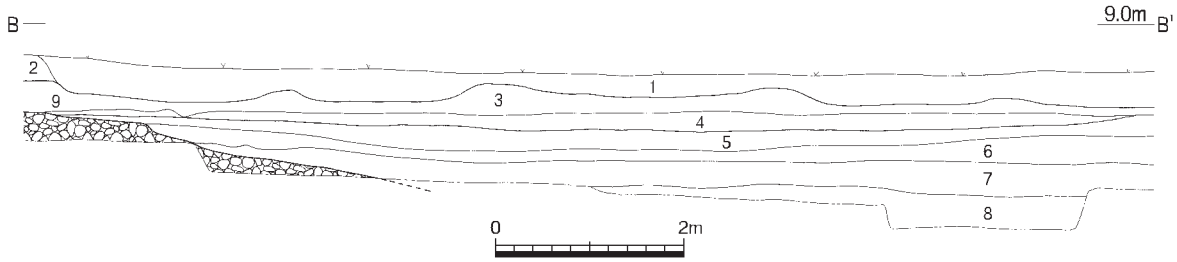
写真15　河道１　Ⅳ区出土初期須恵器（左1/3、右1/2）



第136図　河道１　Ⅳ区出土土製品（1/3）

Ⅴ区　河道１の砂礫堆積層はⅤ区の西端まで続く。本来この層はさらに東に広がっていたとみられるが、河道３によって削られており、層の東縁は下降を続け、その上に古代・中世の遺物を含む堆積層が乗ってくる。

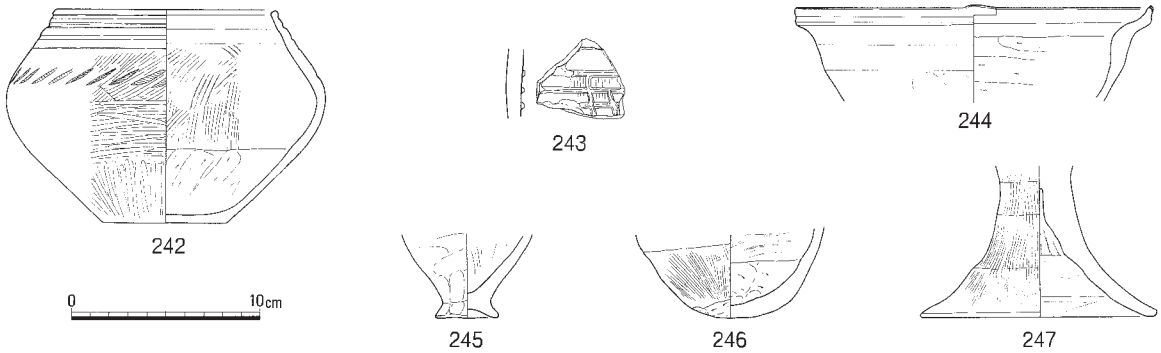
Ⅳ区と同様、砂礫層中には弥生土器、土師器、須恵器が小破片を中心に包含されていた。鉢244のような弥生時代後期後半の土器がその主体を占めるが、中期後半の無頸壺242なども含む。243は細い粘土紐を貼り付けた破片であるが器種は不明である。245は後期の製塩土器である。246・247は全形



1　灰色砂質土（現代水田）
2　褐灰色土（アゼ）
3　褐灰色砂質土
4　黄灰色砂質土
5　褐灰色砂質土
6　灰褐色砂質土
7　褐灰色砂質土
8　暗灰色粘質土
9　砂礫

第137図　河道１　Ⅴ区北壁（1/80）

が不明であるが古墳時代中期の土師器小形壺・高杯とみられる。これら以外に写真に示す初期須恵器が出土している。５×6.5㎝程度の小片で、内外ともナデ調整である。内外面は灰色、破面は赤橙色を呈し焼成は良い。　(宇垣)



第138図　河道１　Ⅴ区出土遺物（1/4、1/3）

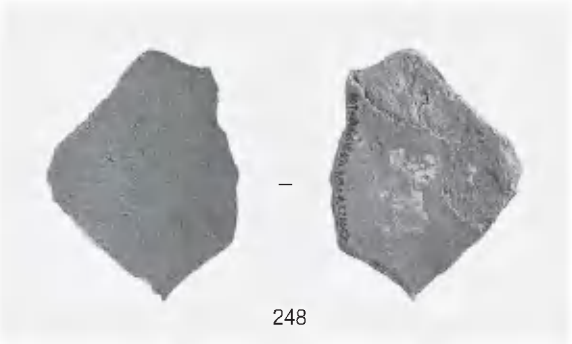
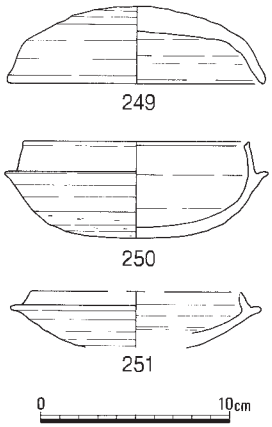


写真16　河道１　Ⅴ区出土初期須恵器（1/3）

写真17　土器247出土状況

４　遺構に伴わない遺物（第139図）

基盤層や包含層など遺構に伴わない出土土器のうち、弥生時代～古墳時代中期のものは河道に含め、それ以外をここに図示している。249はⅢ区北半の包含層、250はⅣ区上面の近世以降の攪乱土内、251はⅠ区に設けられたトレンチの古代以降の包含層に混在して出土した。いずれも６世紀代の須恵器杯であるが、北溝手遺跡では当概期の遺構は確認されていない。金井戸遺跡でも同様に古代以降の遺構面を形成する基盤となる砂礫層から６世紀代の須恵器が出土しており、その頃まで河川の堆積作用が続いていたとも考えられるが、一方、北溝手遺跡の東に隣接する南溝手遺跡では６世紀後半～７世紀前半の集落が確認されており、北溝手遺跡の北にも当概期の集落が存在しており、そこから流れ込んできた可能性も想定できる。　(渡邉)



第139図　遺構に伴わない遺物（1/4）

第３節　古代から中世の遺構・遺物

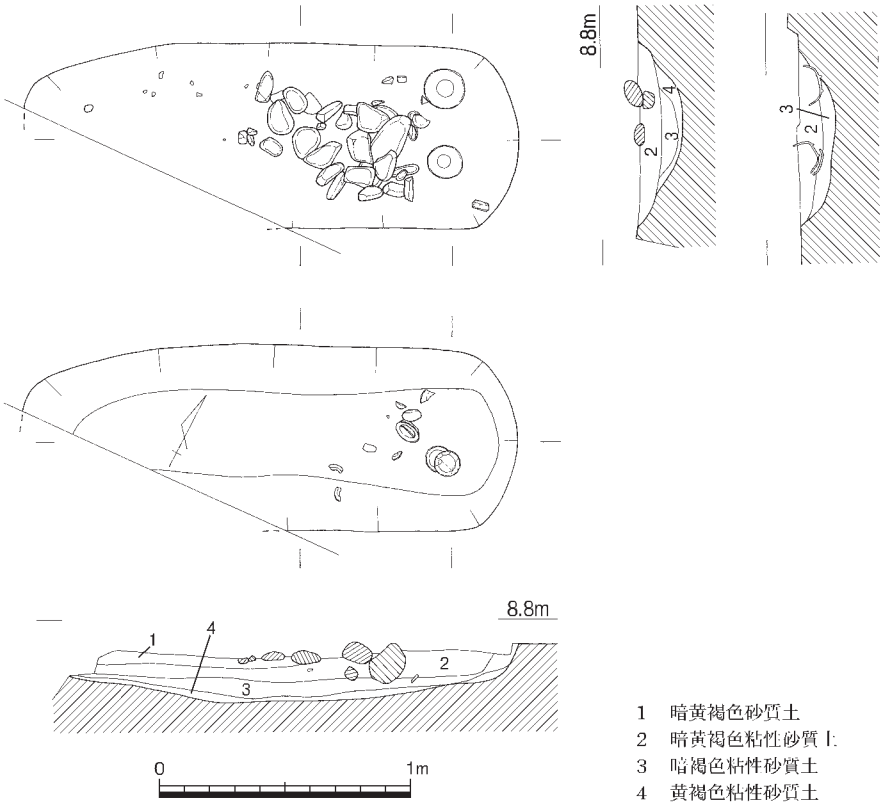
１　概要

河道１上部は古墳時代後期以降は微高地化し、栢寺廃寺が所在する微高地の一部となるが、遺構は認められない。これは調査区がこの微高地の北縁辺部であること、微高地上部を形成する堆積が砂であるため上面がかなり流出しているとみられることなどによるとみられ、ある程度の遺構が所在した可能性があるが、河道２東側の主要遺構が土壙墓や土器溜まり程度であることからすれば、集落域の縁辺であったと思われる。河道２は古代以降埋没が進み、その部分に土壙墓や土器溜まりが形成される。河道２の北西斜面には金井戸遺跡から続く古代の遺構群が形成されている。　(宇垣)

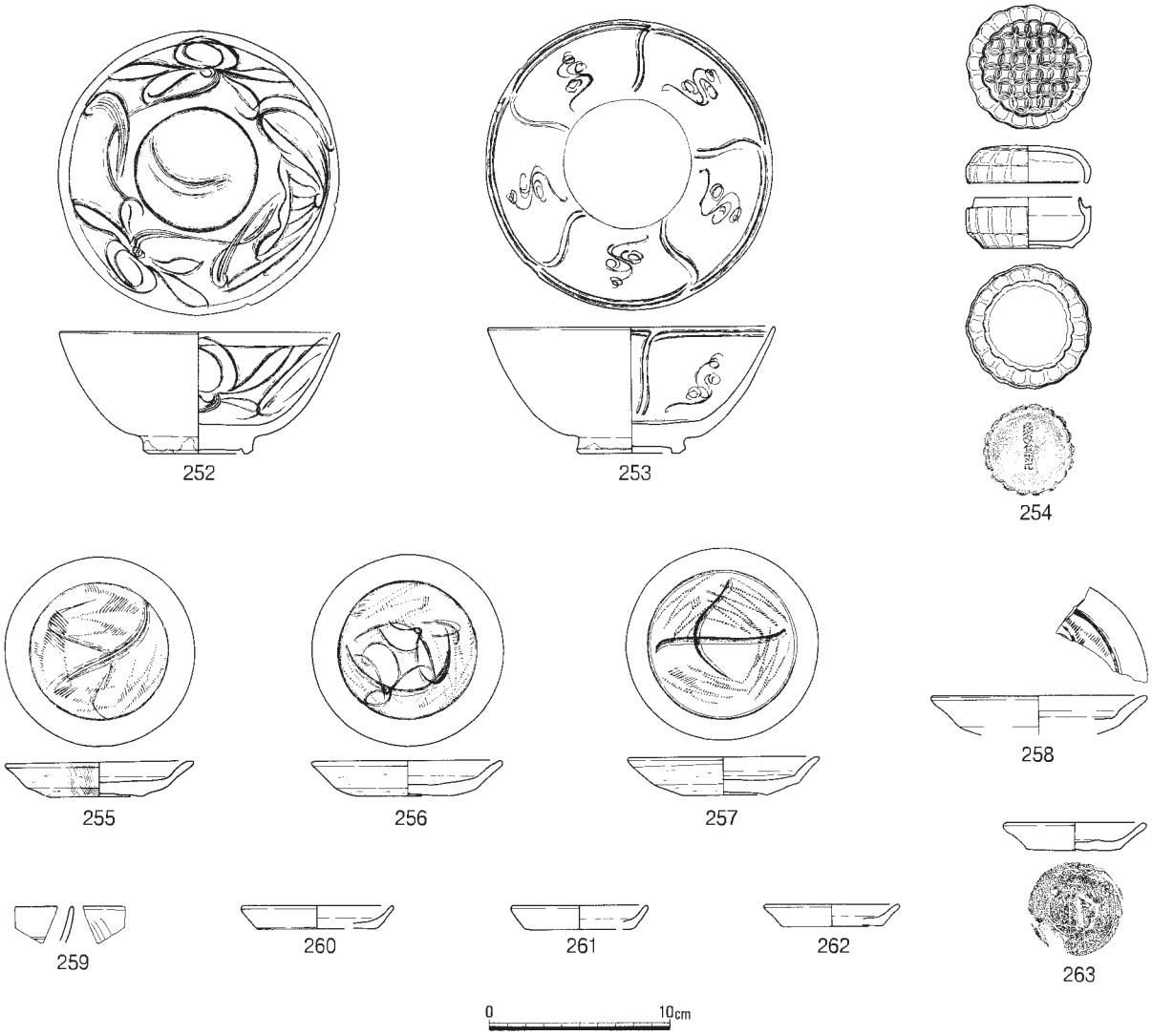
２　土壙墓

土壙墓１（第140・141図、巻頭図版５、図版18－１）

Ⅲ区の南側で検出された土壙墓で、平面形は長楕円形を呈し、断面は皿状を呈する。長軸1.96ｍ、短軸71㎝、検出面からの深さは23㎝を測り、底面の海抜高は8.37ｍである。埋土の上層では10～25㎝大の礫が中央付近から東にかけてまとまって検出されており、標石として置かれたのが、落ち込んだものと考えられる。なお、棺の痕跡等は特に認められなかった。出土遺物は東側の小口にまとまっており龍泉窯系青磁碗252・253・259、同皿255～258、同安窯系青白磁合子254、土師器小皿260～263が出土した。皿は碗の下から重なった状態で出土している。252は内面に蓮華文を、253は内面に飛雲文を、255～258は内面に櫛目文を施している。また、254の合子蓋の外面には七宝繋ぎ文が施され、合子身の底部外面には「○家合子記」と刻印されている。最初の文字は「段」とも読めるが断定できない。時期は12世紀後半～13世紀と考えられる。　(石田)



第140図　土壙墓１（1/30）

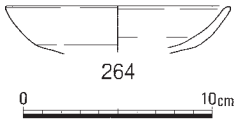


第141図　土壙墓１出土遺物（1/4）

土壙墓２（第142図）

Ⅲ区のほぼ中央で検出した。土壙墓１から北東約13ｍに位置する。写真のように骨片が散布しており、土師器Ⅲ**264**や瓦片が伴って出土している。周辺の精査を行っても堀り方等は特に認められなかったが、出土状況から土壙墓であった可能性が高いと考えられる。土壙墓１に近い時期のもので、鎌倉時代のものと考えられる。

（石田）



第142図　土壙墓２出土遺物（1/4）

写真18　土器・骨散布状況（南西から）

３　土壙

土壙３（第143図）

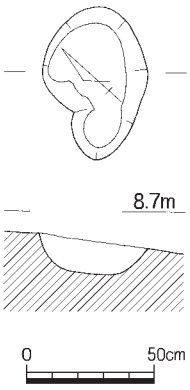
Ⅰ区の南端で検出した土壙である。平面形は不整形で、断面形は皿形を呈する。規模は長軸61㎝、短軸42㎝、検出面からの深さ16㎝を測り、底面の海抜高は8.45ｍであった。出土遺物としては土師器片、瓦片、鉄滓があったが、図示できるものはなかった。時期は平安時代と考えられる。　（石田）

土壙４・５（第144図）

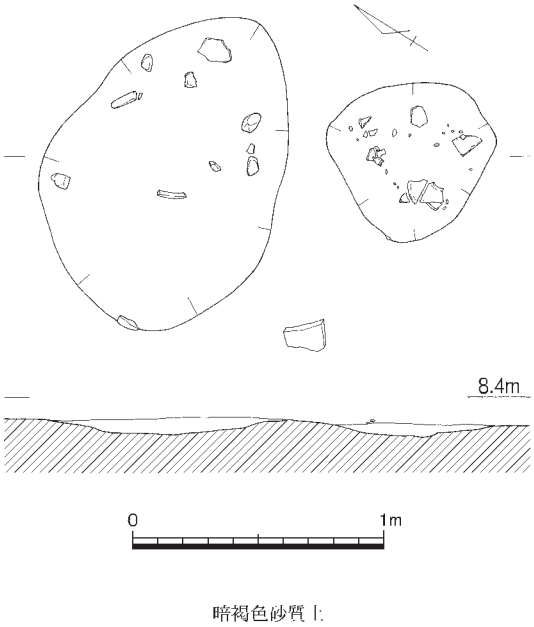
Ⅰ区中央で隣り合って検出された土壙で、溝２に切られて検出された。土壙４・５ともに平面形は不整形で、断面形は浅い皿状を呈しており、たわみ状のものである。

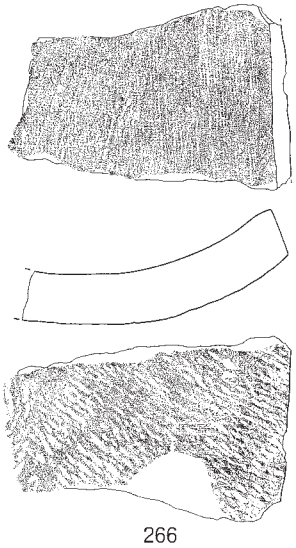
規模は土壙４が長軸116㎝、短軸96㎝、深さ６㎝、底面の海抜高は8.25ｍである。土壙５は長軸67㎝、短軸63㎝、深さ５㎝を測り、底面の海抜高は8.24ｍである。埋土は土壙４・５ともに暗褐色砂質土であった。両土壙の埋土中には10㎝前後の礫とともに土器片、瓦片が混ざりあっていたほか、土壙５では焼土片や炭片も含まれていた。

出土した遺物で図示できたものには土師器高杯**265**と瓦片**266**がある。**265**の脚柱部外面は面取りされており、内外面に丹塗りが施されている。時期は８世紀後半と考えられる。　（〃）



第143図　土壙３（1/30）





第144図　土壙４・５（1/30）・出土遺物（1/4）

４　炉

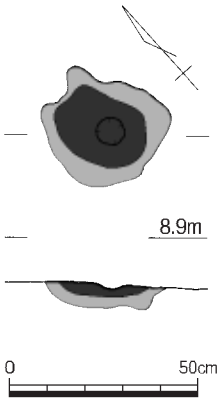
炉１（第145図）

Ⅰ区の北西隅で検出された炉で、径30㎝程度にわたって不整形に被熱している範囲が認められた。断面は皿状に厚さ５㎝あまりが高温を受けて黒色に焼け、さらに周囲５㎝程度が赤色に被熱していた。中央部は炉床にあたるのか、径10㎝程度の円形に凹んでいた。伴出遺物はないが、検出状況から平安時代に属するものと考えられる。（石田）

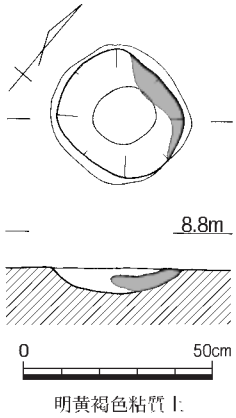
炉２（第146図）

Ⅰ区の北西部で検出された炉で、炉１の南約５ｍに位置する。不整な円形で、浅い皿状の堀り方を検出しており、炭・焼土片を含んだ明黄褐色粘質土で埋まっていた。規模は長軸34㎝、短軸29㎝、検出面からの深さは８㎝程度であった。赤色に被熱している箇所は全体ではなく、肩口の一部だけで底面は焼けていなかった。

時期は検出状況から平安時代に属すると考えられる。（〃）



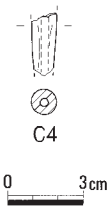
第145図　炉１（1/20）

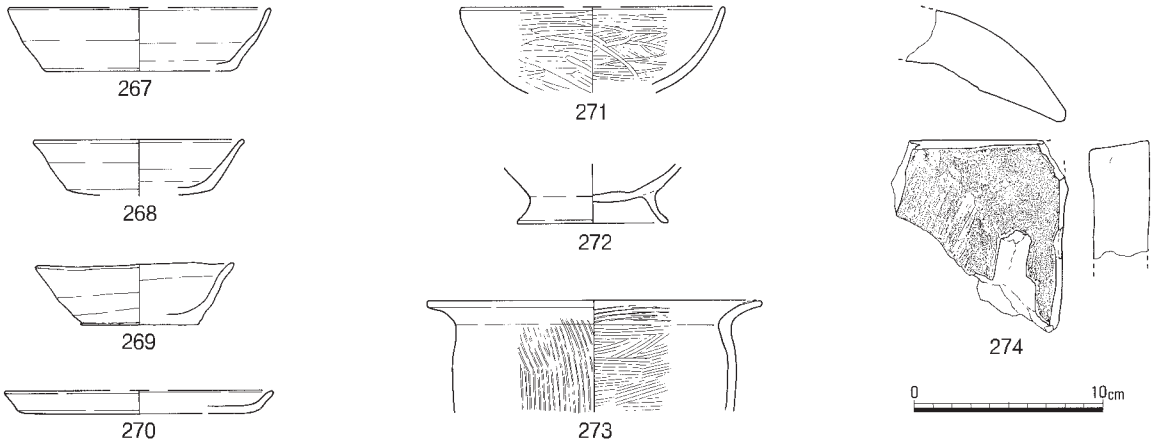


第146図　炉２（1/20）

５　柱穴（第147図）

Ⅰ区の西側で検出された柱穴で、東へ下がる河道２の肩口でいずれも検出されている。調査区内で建物等にまとまるものはなかった。柱穴１からは土錘Ｃ４、柱穴２からは土師器椀272、柱穴３から土師器杯269、柱穴４から土師器杯267・268、土師器皿270、土師器甕273、柱穴５からは内面黒色の土師器椀271が、柱穴６からは丸瓦片274がそれぞれ出土している。これらの柱穴は平安時代に属すると考えられる。（〃）





第147図　柱穴１～６出土遺物（1/3、1/4）

６　溝

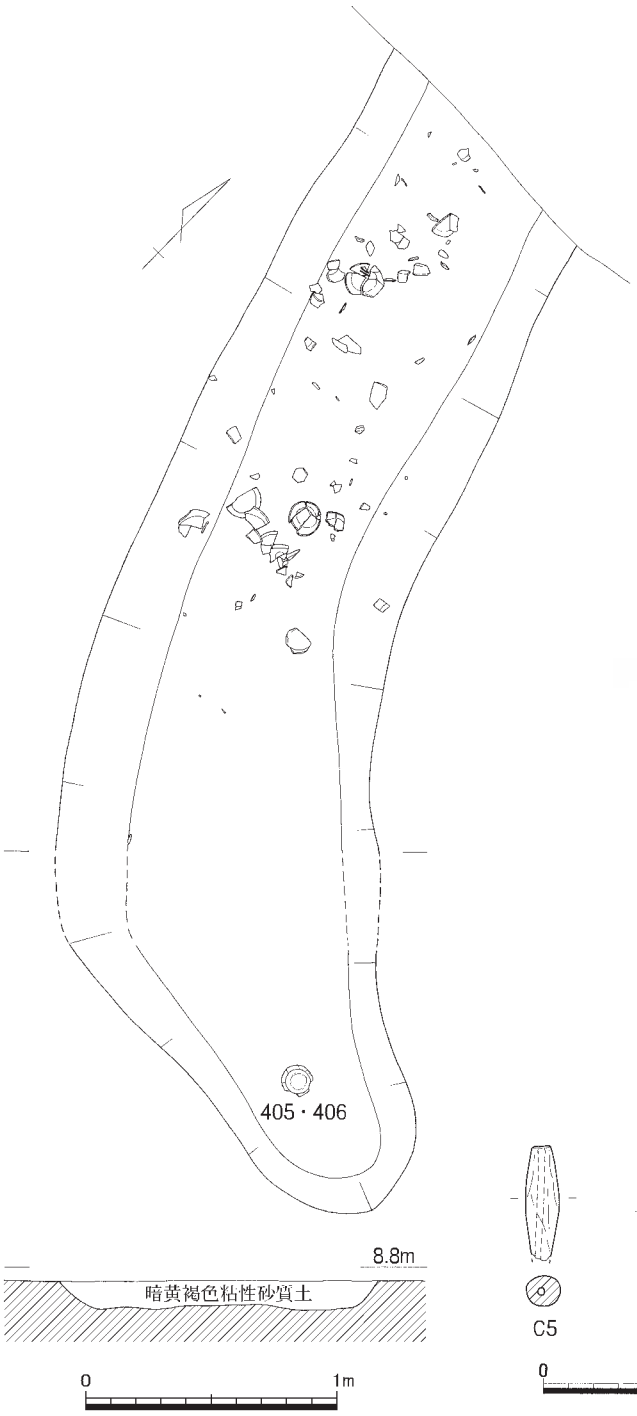
溝１（第148・149図、図版19－１）

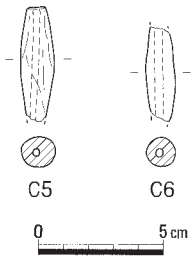
Ⅰ区の北西隅で検出した。南北方向に流れる溝で、北半は調査区外に続いている。規模は長さが約4.5ｍ、幅約1.2ｍ、検出面からの深さは約10㎝を測る。断面形は浅い皿状を呈しており、溝の埋土は暗黄褐色粘質土の１層で炭片が若干混じっていた。

溝の北半では、土錘**Ｃ５・６**、土師器杯**275～281**、土師器皿**282～288**、内面黒色土器皿**289**、内面黒色土器椀**290**、須恵器杯蓋**291**がかたまって完形に近い状態で出土しており、まとめて投棄されたような状況を呈していた。

土師器杯、皿は底部の外周をヘラ切り後押圧しているほか、丹塗りが認められるものもある。

なお、溝の南端部分で土師器杯**405・406**が重なって検出されている。ただ、これらの土器は溝に直接伴うものではなく、上部から掘り込まれた遺構に伴っていたか、河道２の堆積土中に入っていたものと考えられる。したがって溝１の時期は、北半で検出された遺物から10世紀と考えられる。　　（石田）

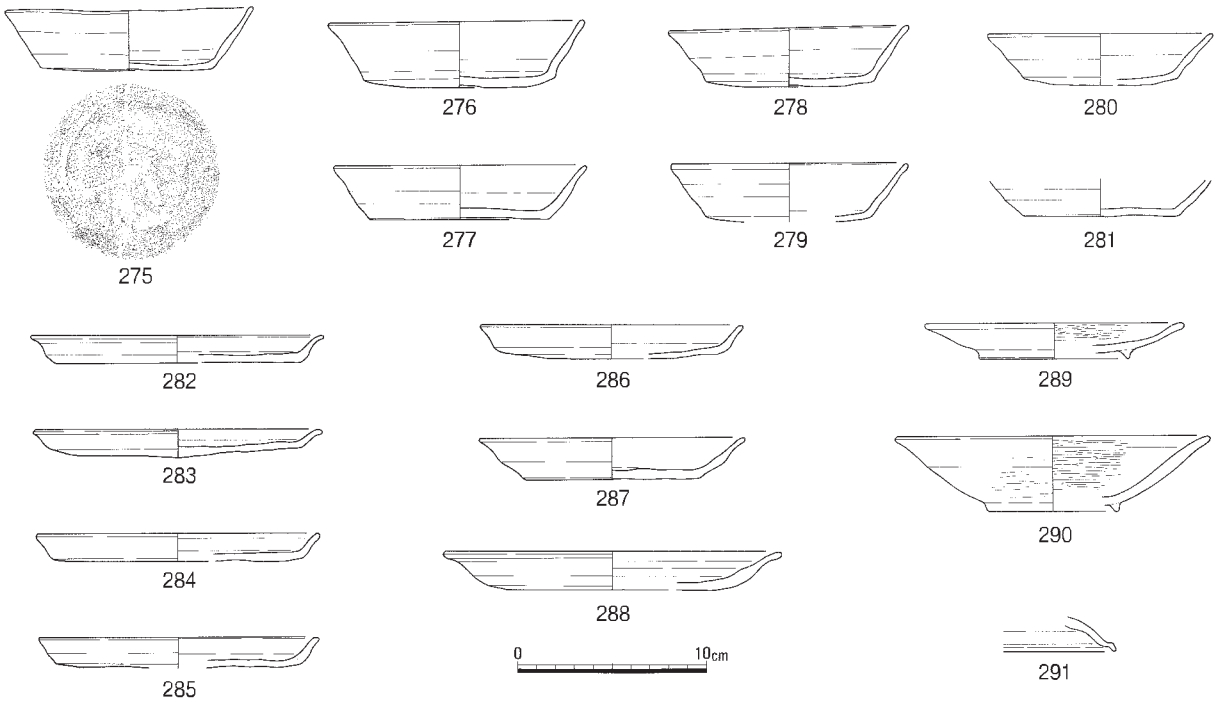




第148図　溝１（1/30）・出土遺物①（1/3）

写真19　遺物出土状況（西から）

写真20　405・406出土状況（南から）



第149図　溝１出土遺物②（1/4）

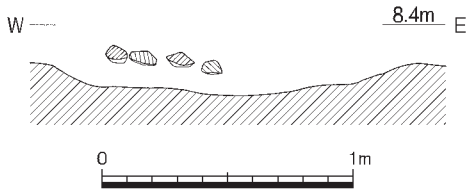
溝２（第150・151図、図版19－２）

Ⅰ区のほぼ中央で検出した溝である。北西－南東方向に流れる溝で、土壙４・５を切っている。溝の北側は調査区外に続いており、全容は不明である。西側に隣接する金井戸遺跡から続く微高地が東の低位部へ向かって下がるが、溝はその微高地の周縁に沿うように掘削されている。

溝の規模は、検出できた長さで約14ｍ、幅2.1ｍ、深さは７㎝程度で、断面形は浅い皿状を呈していた。また、溝の底部には径20㎝、深さ20㎝程のピット状の凹みが連続して検出されている。

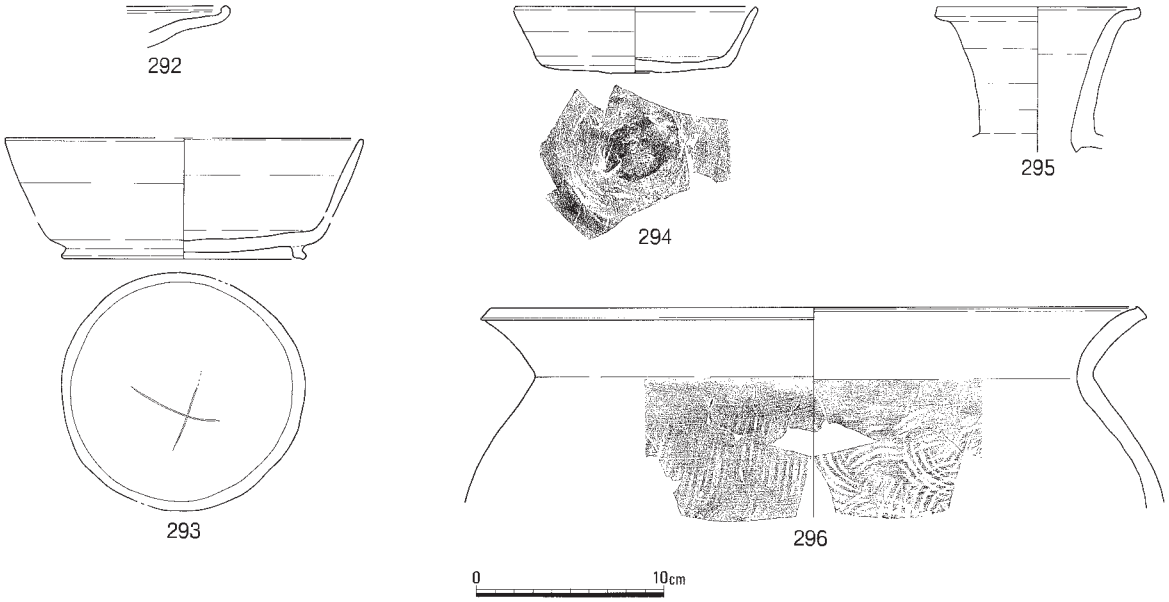
溝埋土の上部では底から浮いた状態で集石状に10㎝大の礫が検出されたが、人為的な石組み等は確認されなかった。このような状況から集石状の礫は、溝が埋没する過程で投棄されたものが集まったものと考えられる。

遺物は溝の埋土中から礫と絡み合うように土師器や須恵器などが出土している。**292**は土師器高杯の口縁部の破片で内外面に丹塗りが施されている。**293・294**は須恵器杯身で、**293**の底部外面には「×」としたヘラ記号が刻まれている。**295**は須恵器平瓶の口縁部の破片と考えられる。**296**は須恵器の甕である。出土遺物から溝の埋没した時期は８世紀後半と考えられる。　（石田）



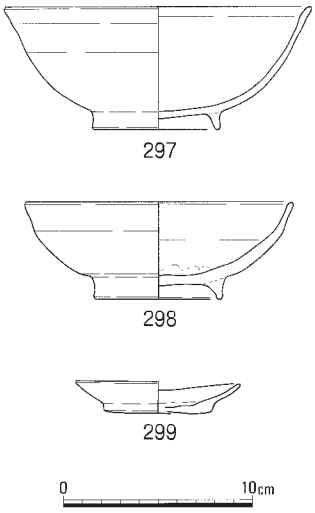
第150図　溝２（1/30）

写真21　溝２内礫検出状況（西南から）



第151図　溝２出土遺物（1/4）

写真22　土器溜まり１検出状況（東から）



第152図　土器溜まり１
出土遺物（1/4）

7　土器溜まり

土器溜まり１（第152図）

Ⅰ区の南東端に位置する。中世の土器を多く包含する河道２の堆積土上層を掘り下げ中に検出した土器溜まりで、土壙や柱穴状の掘り方等は認められなかった。

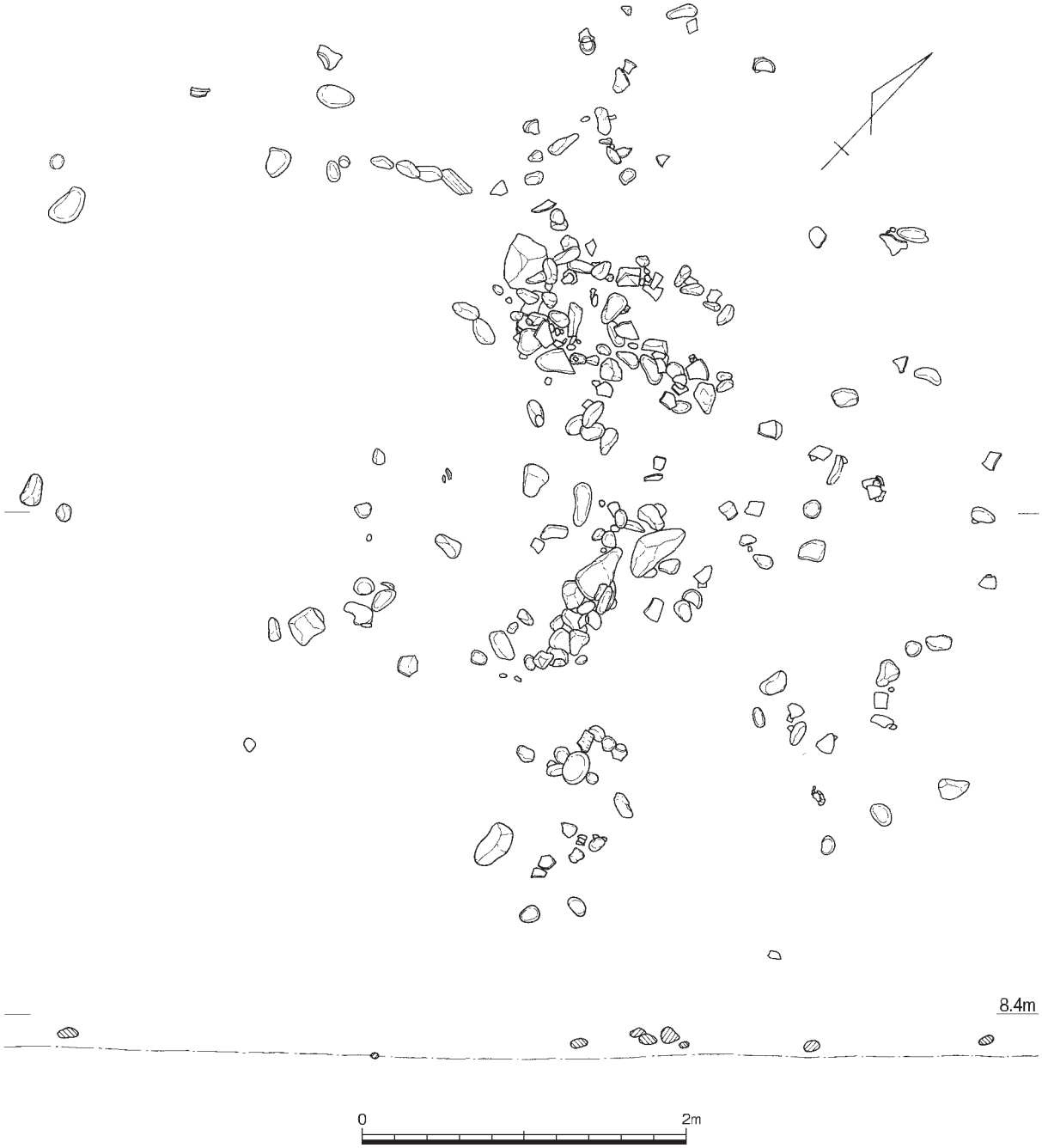
南北約２ｍ、東西約１ｍの範囲で、焼土片や炭片とともに土器片が混ざり合った状態で検出されており、これらは河道２の埋没前後に投棄されたものと考えられる。

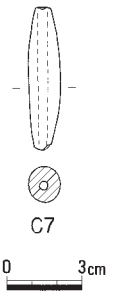
図示できた遺物には早島式の椀**297・298**、土師器Ⅲ**299**がある。これらの土器の時期は13世紀と考えられる。　（石田）

土器溜まり２（第153～155図、図版19－３）

Ⅰ区の南東で検出された土器溜まりである。西に隣接する金井戸遺跡から続く微高地が東の低位部へ向けて下がるが、その肩口部分の、なだらかな斜面に集石が認められた。また、これらの礫とともに堆積していた灰色系の粘質土に多くの土器片等が混ざって出土している。

集石の範囲は南北約６ｍ、東西約４ｍで、分布範囲の中央部分は密に礫が集まっていた。これらの礫は10㎝大のものが大半で、規則的な石組み等は認められず、西側の微高地から投棄されたものが溜まったものと考えられる。

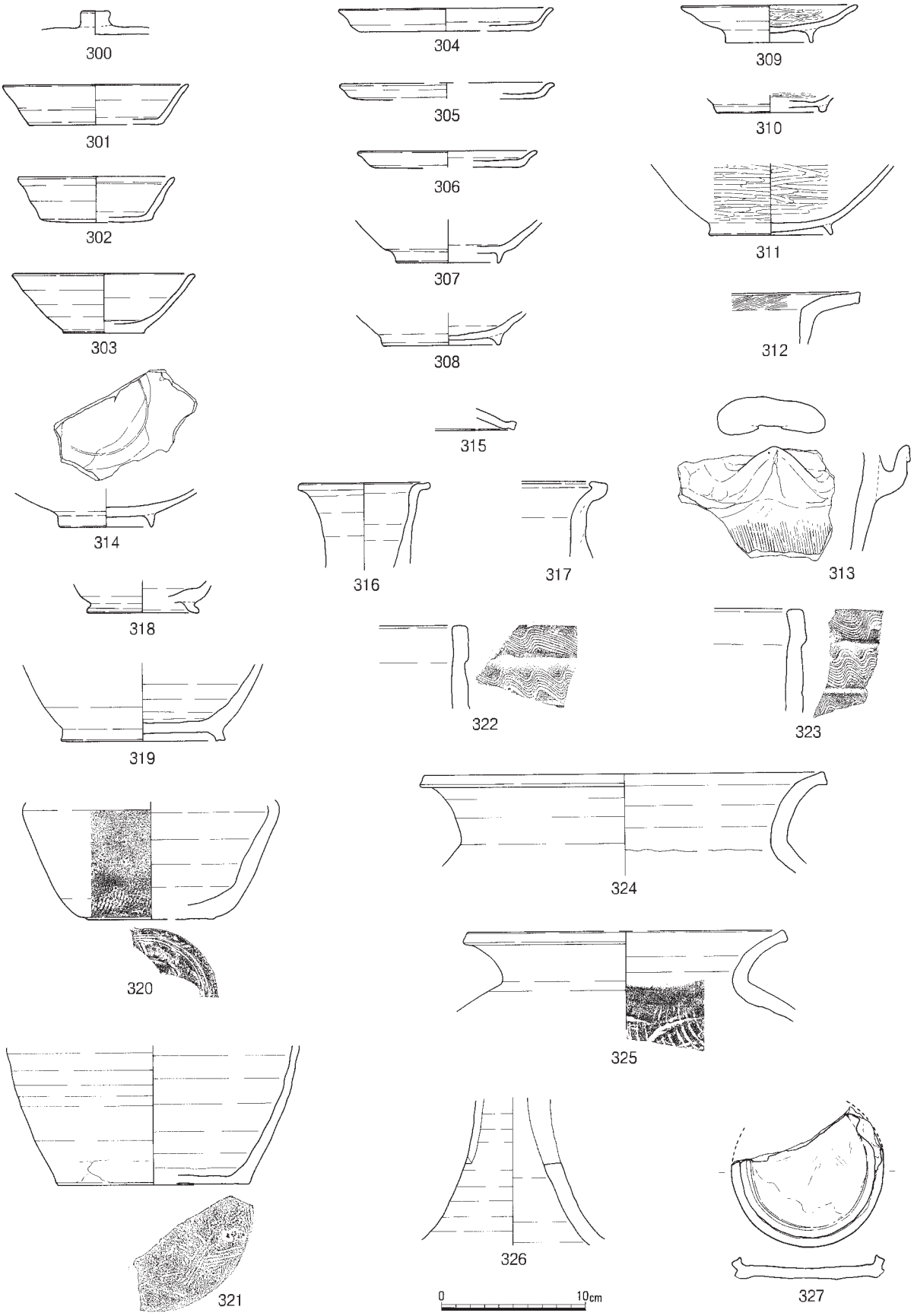




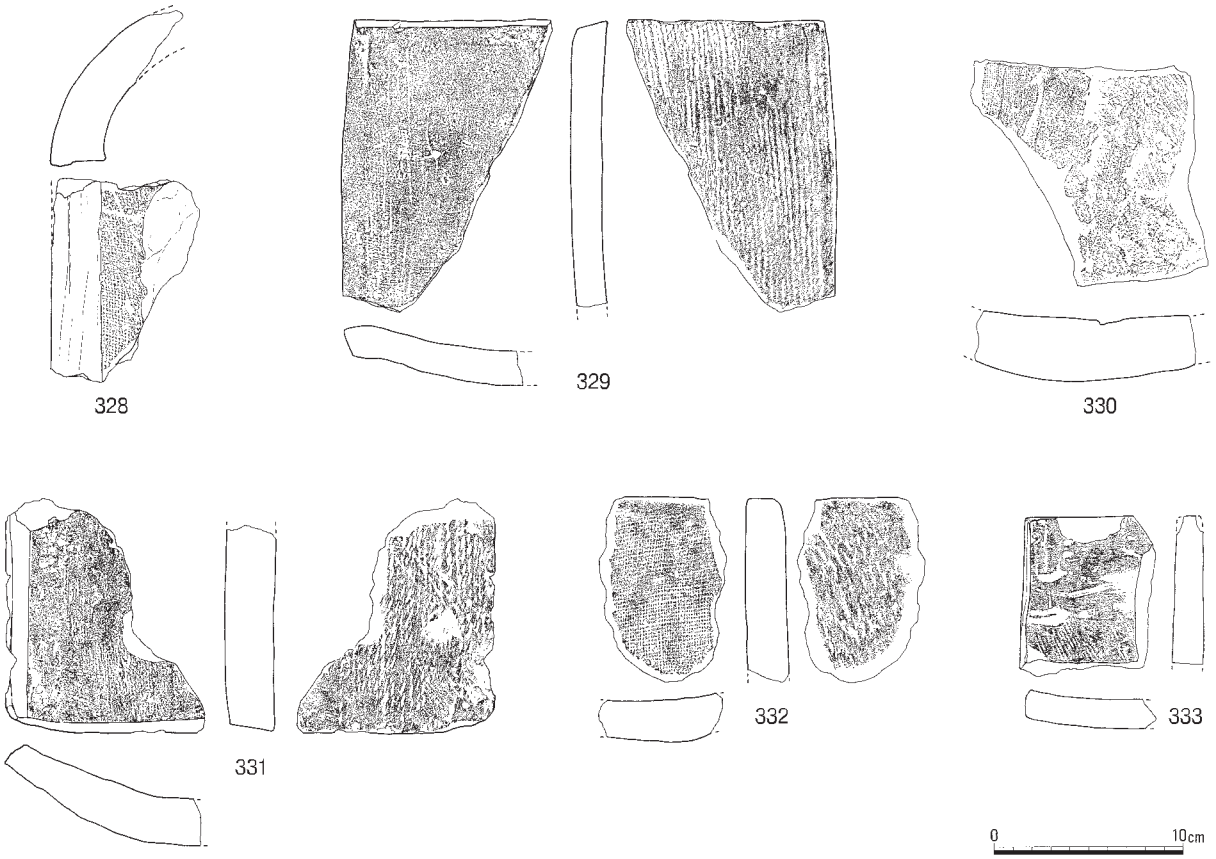
第153図　土器溜まり２（1/40）・出土遺物①（1/3）

出土した遺物は細片が中心であるが、施釉陶器等も含まれており、微高地上に営まれた建物群の性格を少なからず示しているものと考えられる。

図示できた遺物としては、土師器蓋300、土師器杯301・302、京都産の緑釉陶器椀303、土師器皿304～306、土師器椀307・308、内面黒色土器皿309、内面黒色土器椀310・311、土師器甕312、土師器鍋313、灰釉陶器椀314、須恵器杯蓋315、須恵器平瓶316、須恵器壺317～323、須恵器甕324・325、須恵器高杯326、須恵器杯の転用硯である327がある。他に丸瓦片328、平瓦片329～333も出土している。出土した土器は８～10世紀と時期幅を持っており、長期にわたって投棄されたものが、徐々に埋没していったものと考えられる。（石田）



第154図　土器溜まり２出土遺物②（1/4）



第155図　土器溜まり２出土遺物③（1/4）

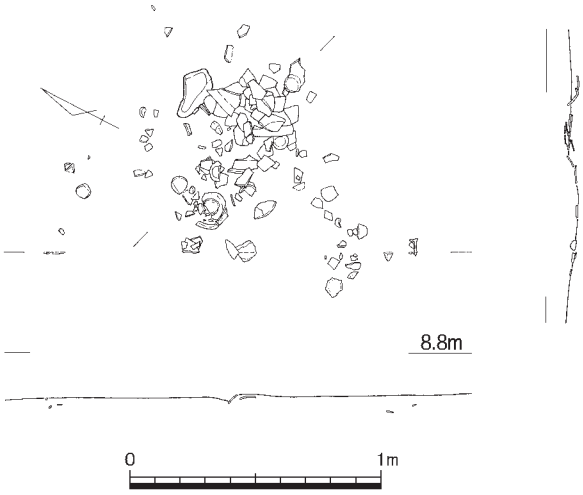
土器溜まり３（第156・157図、図版20－１）

Ⅲ区の中央西側に位置する土器溜まりである。南東約５ｍには土壙墓１が、東約12ｍには土壙墓２が存在する。南北約５ｍ、東西約７ｍの範囲で、土器片とともに焼土や炭片が平面的に散布している状態で検出された。

特に南東部の約１ｍ四方には土器が集中して出土しており、第156図はこれらの土器が集中している部分を示したものである。

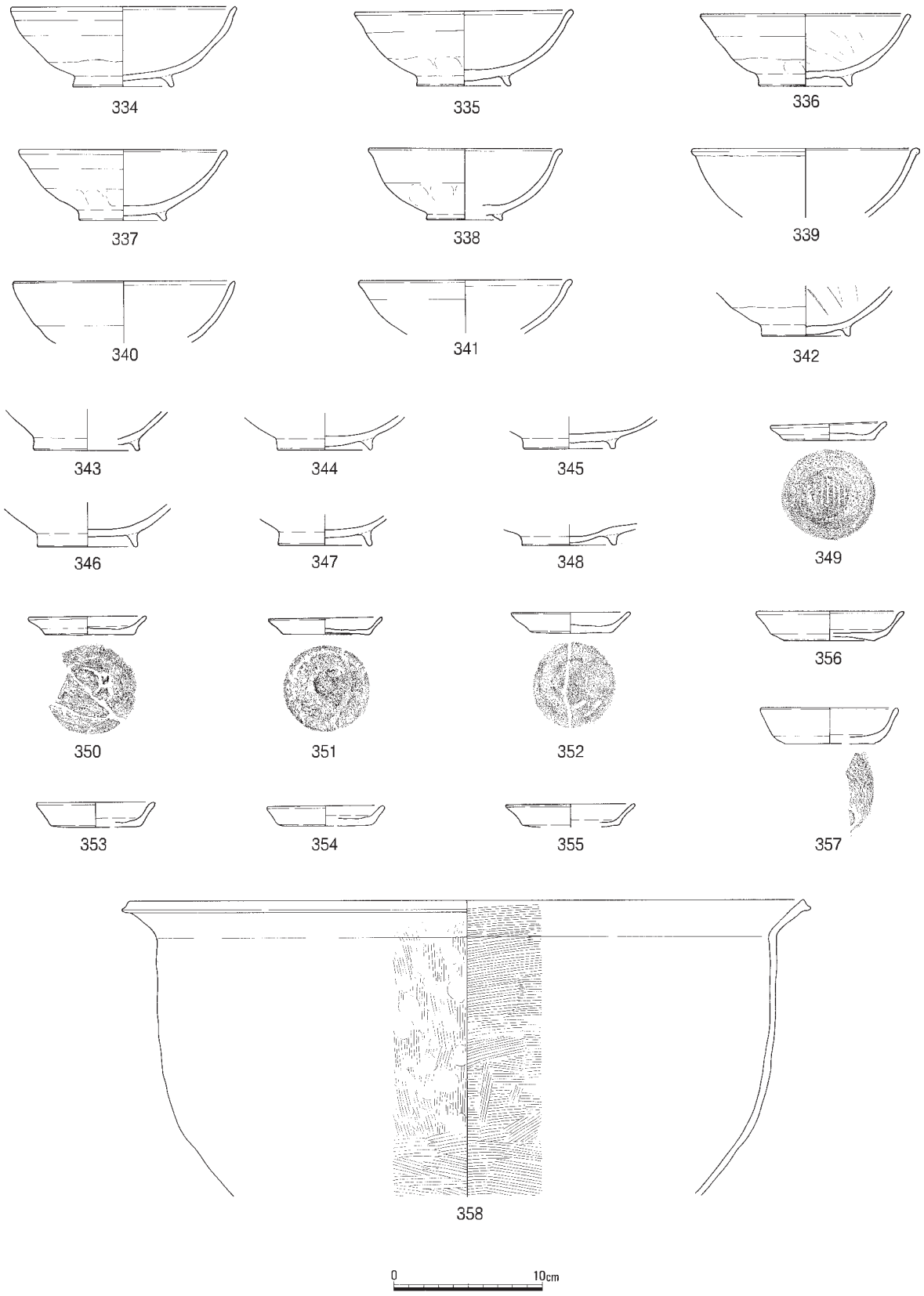
上部には鍋が下部には椀が重なるようにして、押しつぶされたような状態で検出された。土器はその場で打ち捨てられたようで、土壙や柱穴状の掘り方は認められなかった。

出土した遺物で図示できたものには、早島式の椀**334**～**348**、Ⅲ**349**～**355**のほかに須恵器Ⅲ**356**・**357**、土師器鍋**358**があった。**334**～**341**の口径は12.9



第156図　土器溜まり３（1/30）

～15.0㎝の幅をもつ。**356・357**の底部は糸切りで、焼成は良くない。**349**の底部はヘラ切りで板目が残る。**350～352**の底部はヘラ切りである。これらの土器の時期は13世紀と考えられる。　　（石田）



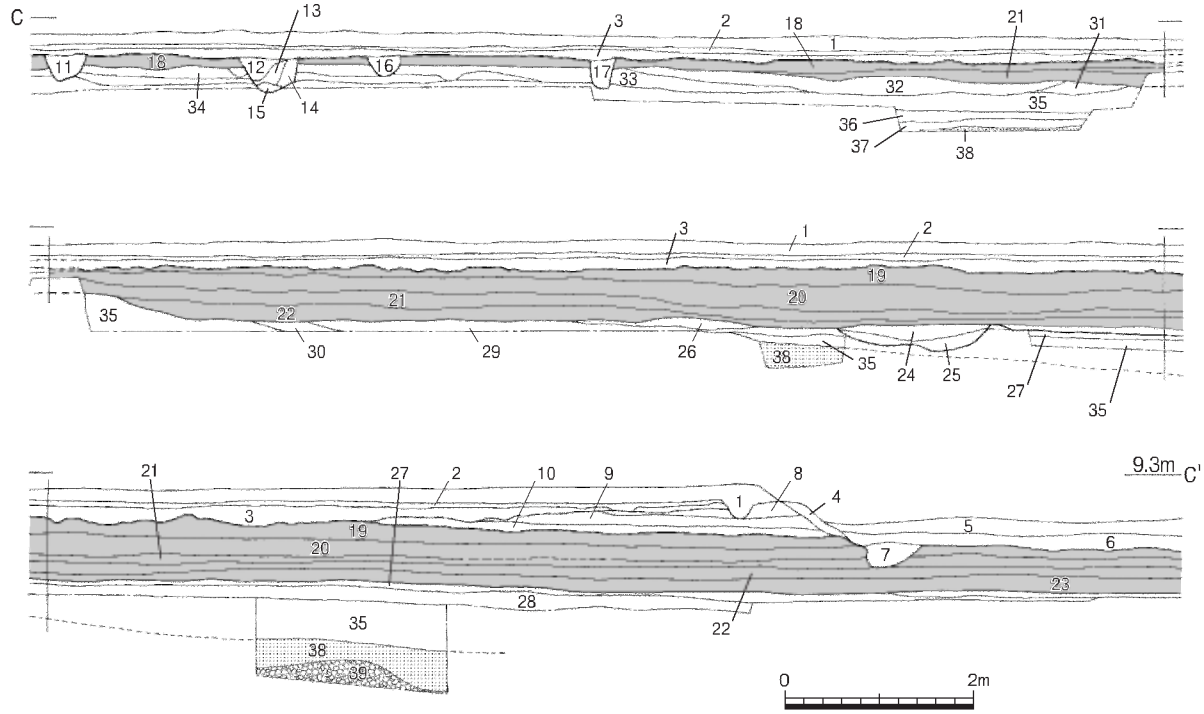
第157図　土器溜まり３出土遺物（1/4）

８　河道

河道２（第158～170図、図版20－２・３）

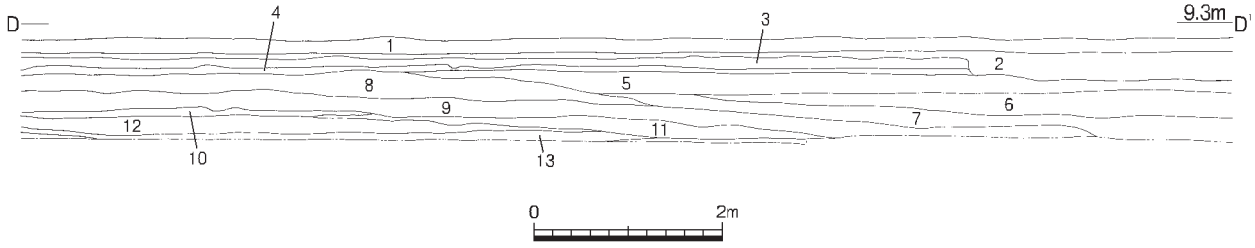
Ⅰ区からⅢ区にかけて北東から南西方向に流走する幅約70ｍの河道である。河道の堆積土は古代から中世にかけての遺物を多く包含している。特に、Ⅰ・Ⅱ区においては西に隣接している金井戸遺跡の微高地上の集落から流れ込んだと考えられる古代の良好な遺物が数多く出土している。

Ⅰ区　近世から現代にかけての耕作土の下部で検出した。第158図の第18～23層は古代を中心とした遺物包含層で、第27層以下の無遺物層をはさみ、河道１に対応するとみられる砂層、砂礫層を最下層で確認している。**359～389**は須恵器で杯蓋**359～366**、杯身**367～372**、Ⅲ**373～376**、壺**377～386**があり、**386**は壺の耳であろう。**387**は鉢、**388～389**は甕である。なお、**361・362・365**は硯に転用している。土師器では蓋**390～393**、杯**394～406**、高杯**407～409**、Ⅲ**410～421**、椀**422～426**があり、**410**には墨書が認められる。**427**は近江産の緑釉陶器の椀で、**428・429**は内面黒色土器皿、**430～436**は内面黒色土器椀である。中世では、早島式の椀**437～441**、Ⅲ**442～444**、須恵器椀**445**、須恵器こね鉢**446**のほか、土師器の甕**447～449**、鍋**450**、カマド**451～453**がある。他には、瓦**454～462**があり、**454**は



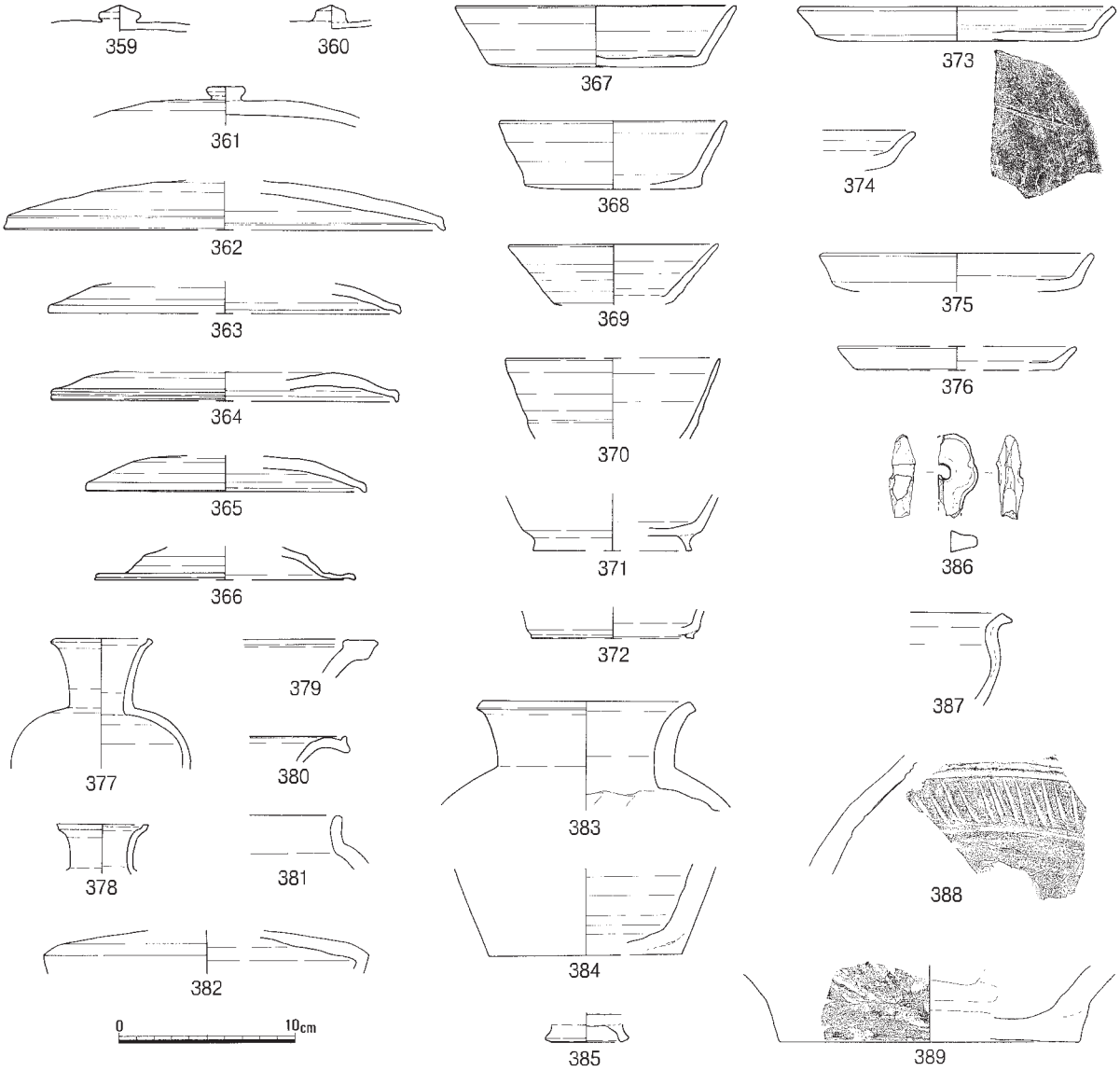
1　現代耕土
2　明灰色砂質土（旧耕土）
3　明橙黄色砂質土（近世以降耕土）
4　黄灰色土
5　灰黒色粘性砂質土（現代耕土）
6　明灰色砂質土（旧耕土）
7　明黄色微砂質土
8　黄色微砂質土（中世～近世）
9　灰黄色微砂質土（中世～近世）
10　褐黄色微砂質土（中世～近世）
11　暗灰褐色粘質土（柱穴）
12　暗灰褐色粘性砂質土（柱穴）
13　暗灰褐色粘質土（柱穴）
14　灰褐色砂質土（柱穴）
15　石
16　暗灰褐色粘性微砂質土
17　暗褐色粘質土
18　暗灰褐色微砂質土（古代包含層）
19　暗褐色粘性砂質土（古代包含層）
20　褐色砂質土（古代包含層）
21　黄褐色粘質土（古代包含層）
22　褐色砂質土（古代包含層）
23　明褐灰色砂質土（古代包含層）
24　灰色砂（溝２）
25　灰色粘性砂質土（溝２）
26　暗黄褐色粘質土
27　黄色砂質土（無遺物層）
28　暗灰色砂質土
29　黄褐色粘質土（焼土粒少し含）
30　暗褐色粘性砂質土
31　褐黄色粘質土
32　褐黄色微砂質土（ベース）
33　黄色微砂質土
34　明褐黄色微砂質土
35　暗褐色粘質土
36　暗褐色粘性砂質土
37　暗褐色砂質土
38　暗褐色砂
39　砂礫層

第158図　河道２　Ⅰ区北壁（1/80）

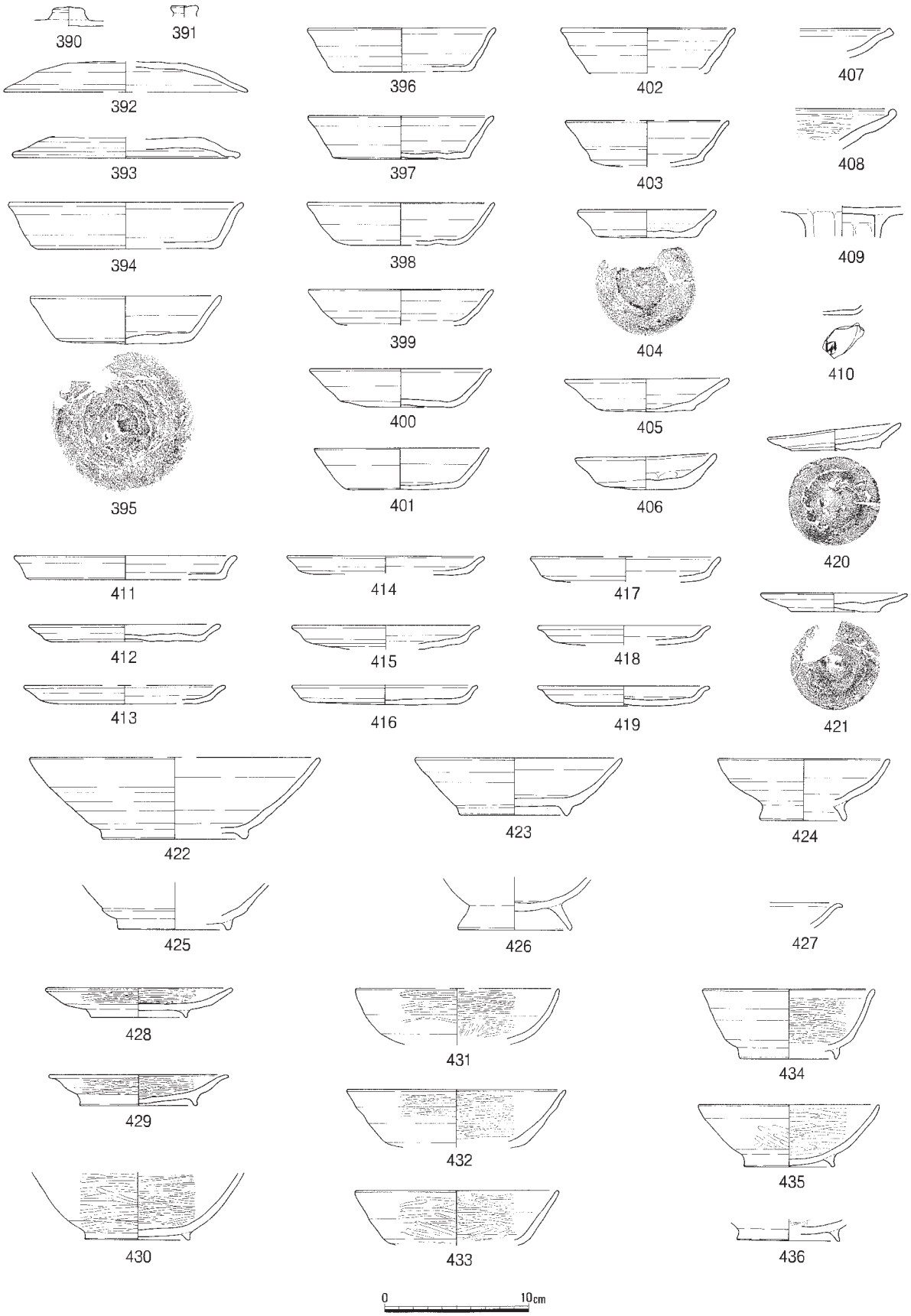


1　暗灰色砂質土（現代耕土）
2　灰色砂質土（旧耕土）
3　黄褐色砂質土（近世水田層）
4　暗褐色砂質土（中世）
5　暗褐黄色砂質土
6　褐黄色粘性砂質土
7　褐灰色粘性砂質土
8　暗茶褐色粘性砂質土
9　暗褐色粘性砂質土
10　暗褐黄色砂質土
11　褐灰色粘質土
12　暗黄褐色粘性砂質土
13　褐灰色粘質土
14　暗赤橙色砂質土

第159図　河道２　Ⅰ区南壁（1/80）



第160図　河道２　Ⅰ区出土遺物①（1/4）



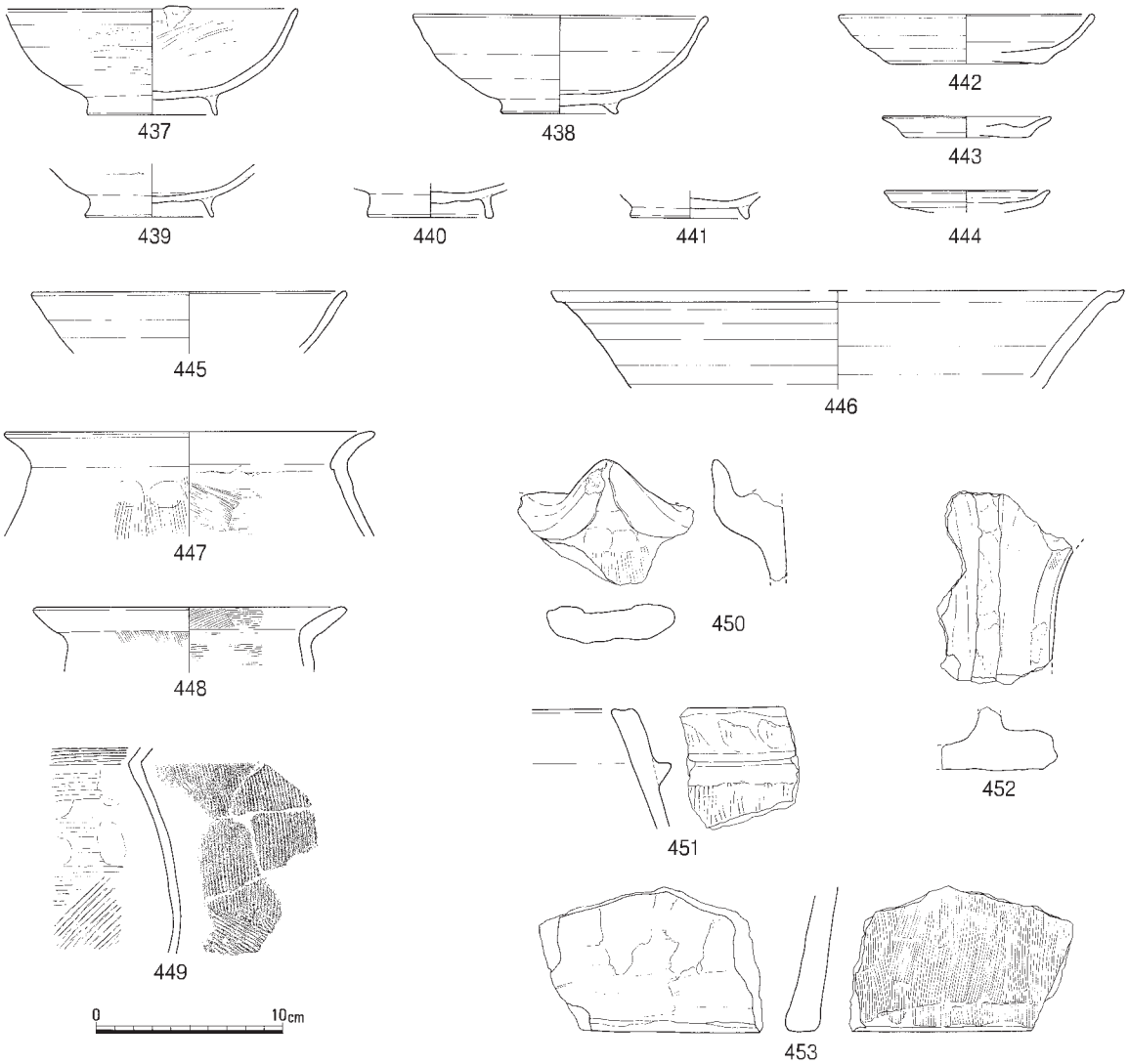
第161図　河道２　Ⅰ区出土遺物②（1/4）

軒丸瓦の瓦当面が一部残る。鉄製品では鉄鏃Ｍ１、釘Ｍ２～13、刀子Ｍ14・15、鎌Ｍ16がある。

また、砂岩製の鋳型Ｓ２～４、砥石Ｓ５、台石Ｓ６、土錘Ｃ８～37、羽口Ｃ38・39、遊戯具と考えられる円板状土製品Ｃ40・41、磚Ｃ42も出土している。これらの遺物の時期は、奈良時代～平安時代、鎌倉時代の二時期にわたっているが、包含層の下部では古代の遺物が大半を占めていた。

Ⅱ区　河道２の中央部分にあたり、河道堆積土である第166図の第６～８層を中心として古代から中世にかけての遺物が出土した。古代では須恵器杯463、須恵器椀464、須恵器壺465・466があり、467は須恵器の鉢であろう。468は土師器皿、469は内面黒色器椀、470・471は近江産の緑釉陶器で470は椀か皿、471は椀である。472は越州窯系青磁の碗である。中世では早島式の椀473～475、白磁碗476、土師器皿477～479、青磁碗480・481がある。また、土製品では羽口Ｃ43・44、土錘Ｃ45～47がある。Ｍ17～28は鉄製品で釘が多いが、鉄鏃Ｍ26・27もみられる。他に、砥石Ｓ７・８がある。

Ⅲ区　河道２の東岸にあたる。Ⅰ・Ⅱ区と同様に古代から中世にかけての遺物が出土している。古代の遺物には、須恵器杯蓋482、須恵器甕483、土師器杯484・485、土師器椀486、内面黒色土器椀487

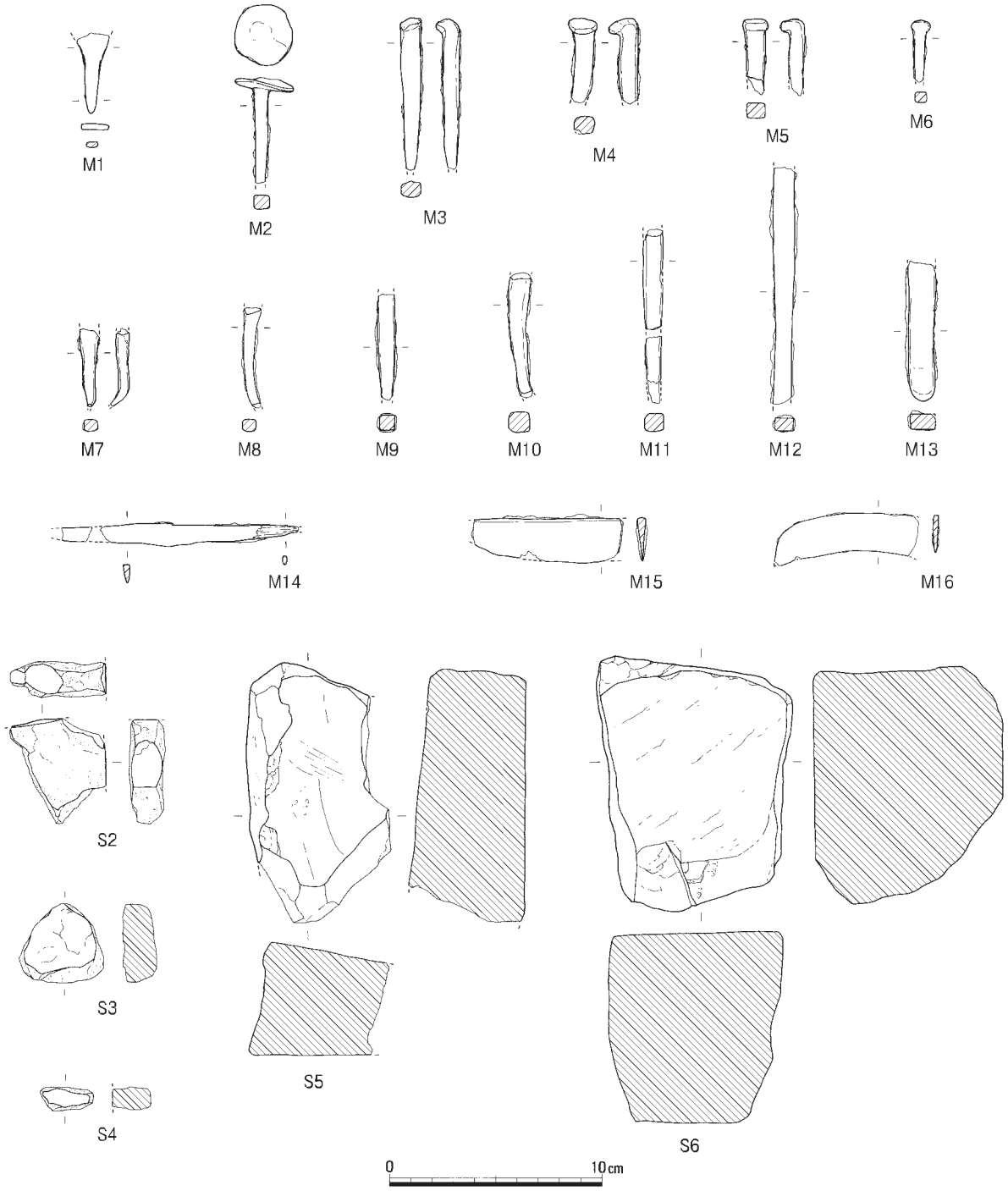


第162図　河道２　Ⅰ区出土遺物③（1/4）

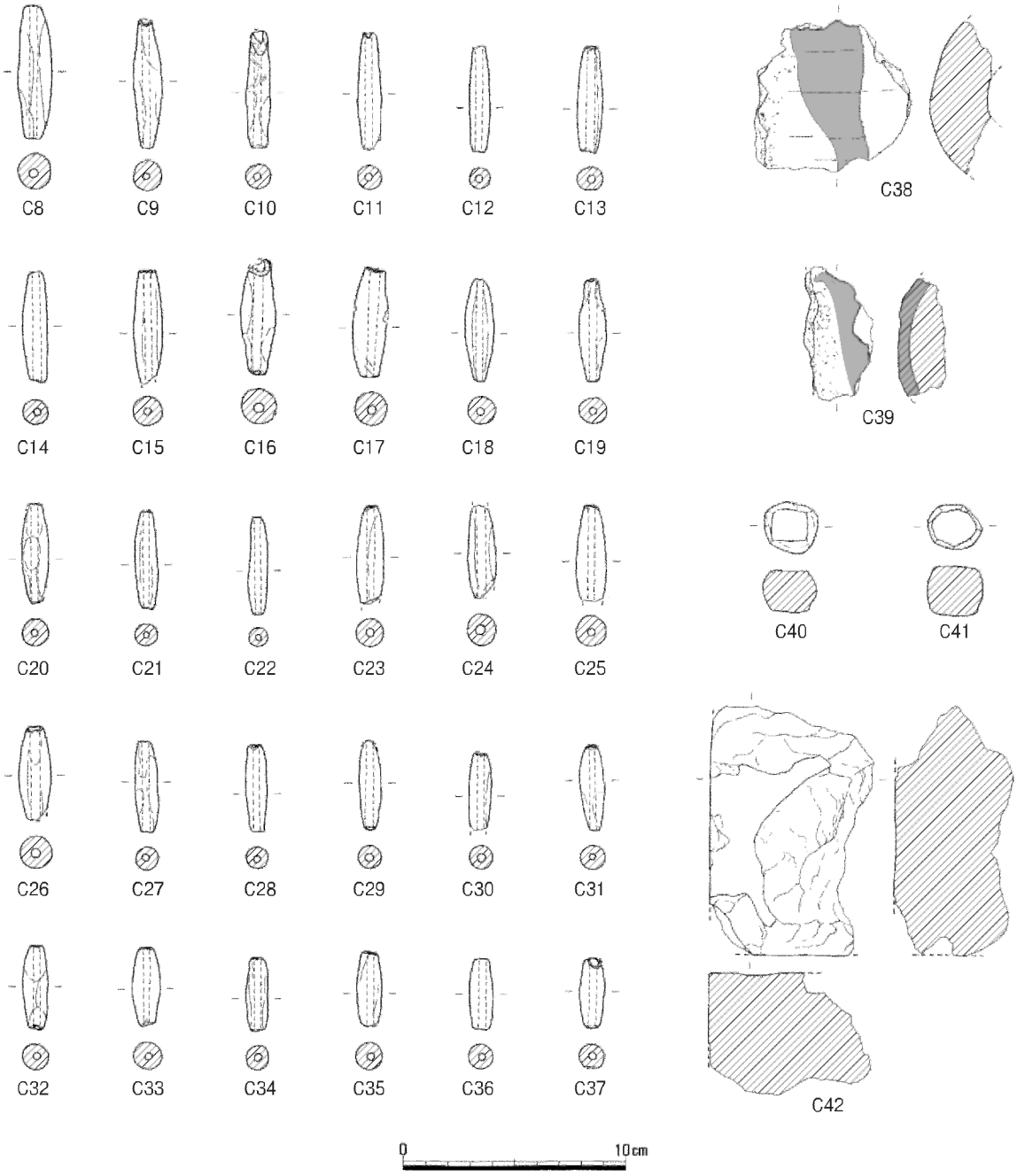
第163図　河道２　Ⅰ区出土遺物④（1/4）

がある。中世では、早島式の椀488～495、土師器台付皿496、土師器皿497～500、白磁碗501～505、白磁皿506・507、青磁皿508、須恵器椀509、須恵器こね鉢510～511がある。また、瓦512～516があり、512は複弁八弁蓮花文軒丸瓦である。その他に円板状土製品Ｃ48、土錘Ｃ49～54、磚Ｃ55がある。Ｓ９は石鍋で温石に転用している。Ｍ29は椀形の鍛冶滓で、Ｍ30は鉄鏃、Ｍ32～36は鉄釘である。

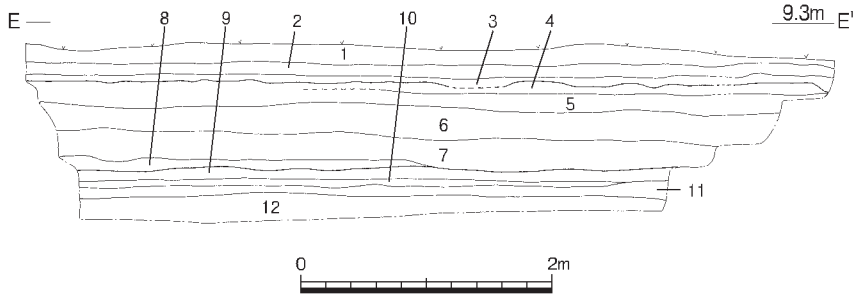
（石田）



第164図　河道２　Ｉ区出土遺物⑤（1/3）

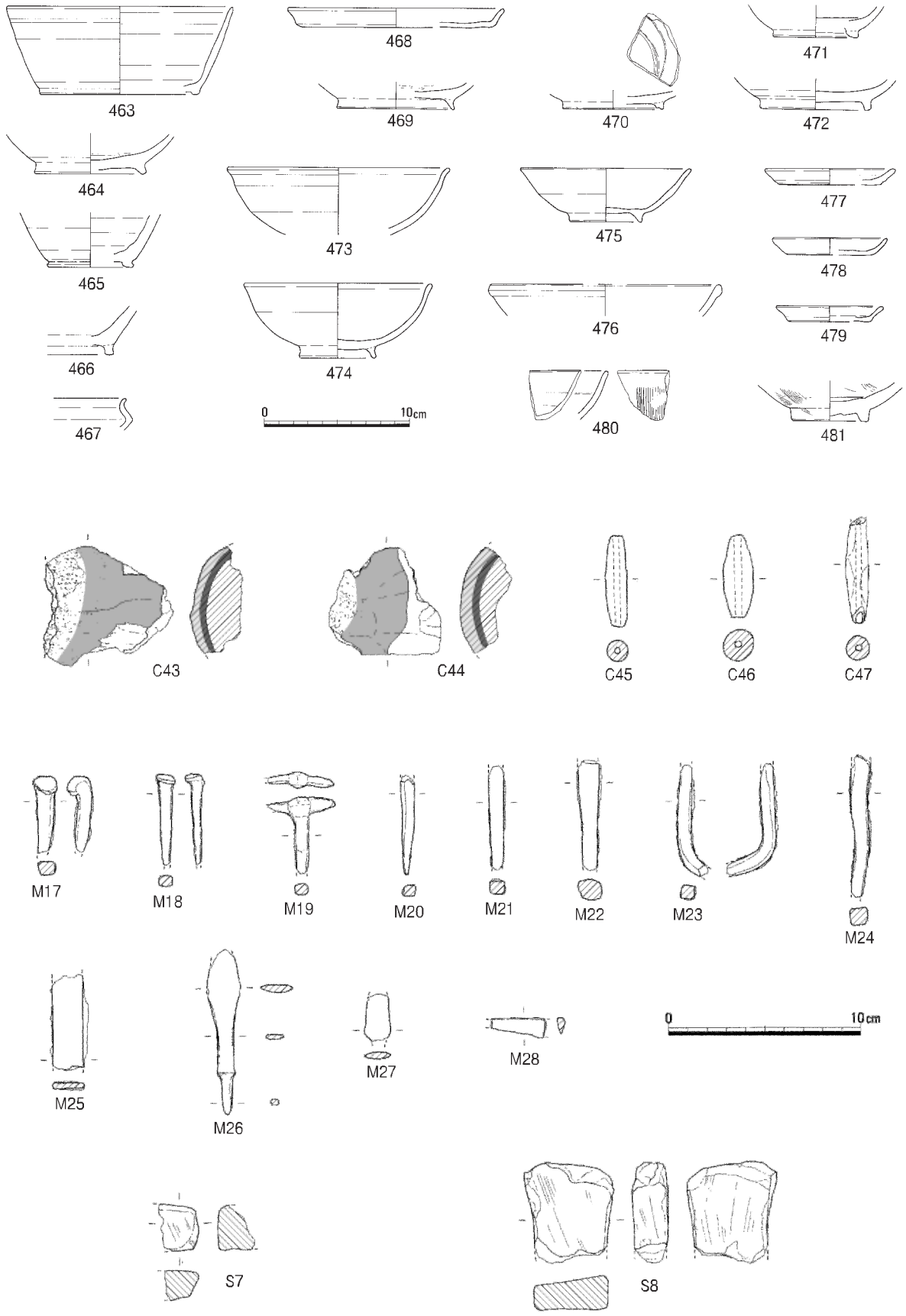


第165図　河道２　Ⅰ区出土遺物⑥（1/3）

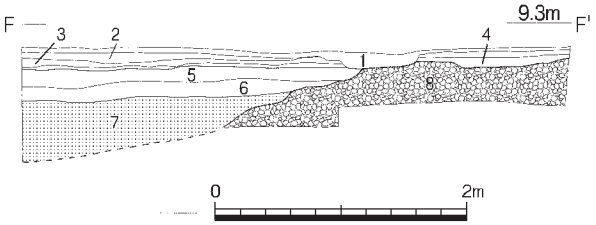


1　灰黒色粘質土（現水田）
2　明黄灰褐色砂質土（近世水田）
3　暗黄色粘質土
4　黄灰色砂質土
5　暗褐色砂質土
6　暗褐色粘質土
7　黄褐色粘性砂質土
8　暗黄褐色粘性砂質土
9　黄橙色粘質土
10　暗褐黄色粘質土
11　褐黒色粘質土
12　灰黒色粘質土

第166図　河道２　Ⅱ区南壁（1/60）

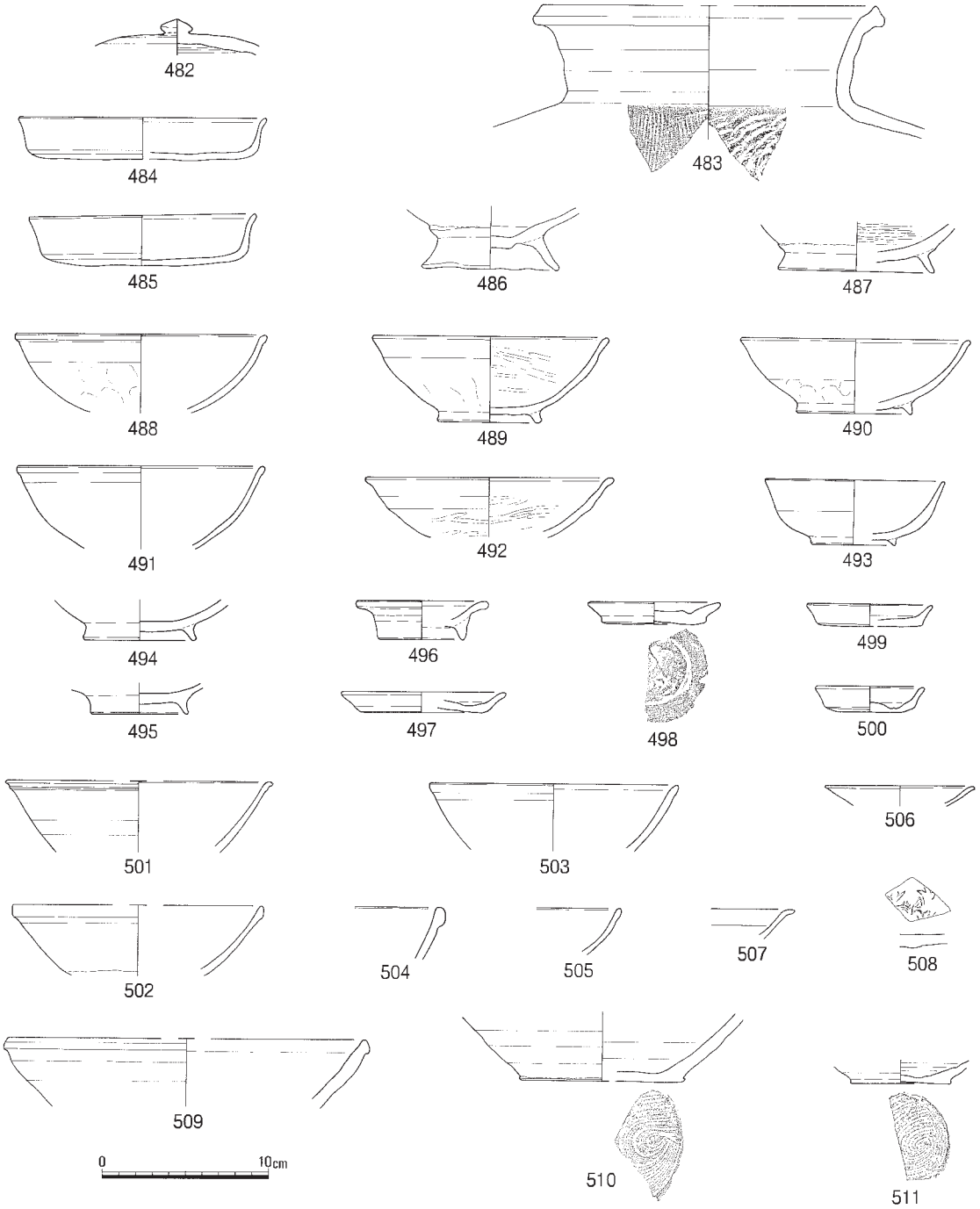


第167図　河道２　Ⅱ区出土遺物（1/4、1/3）

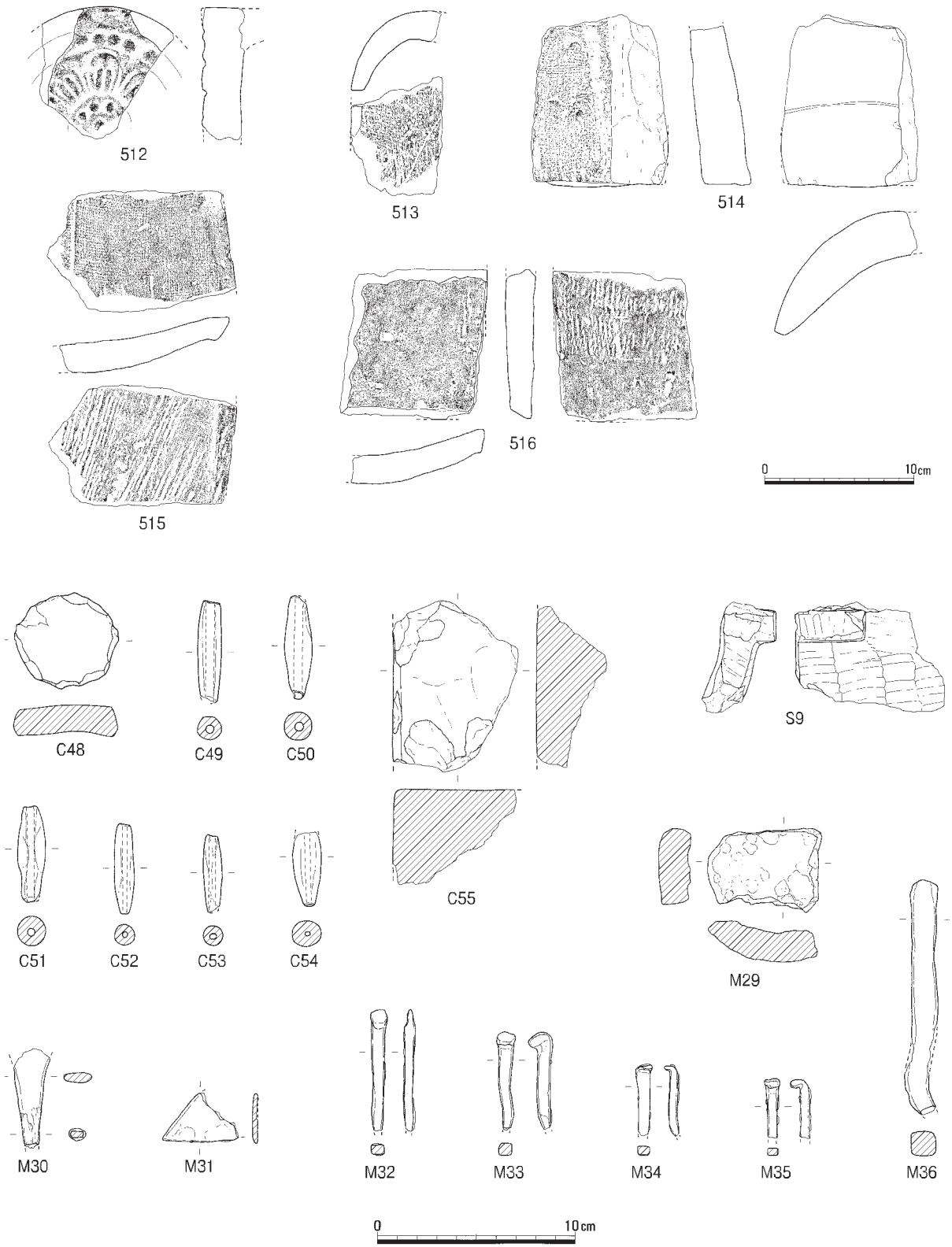


1　灰色砂質土（現代耕土）
2　褐色砂質土（近世水田層）
3　明灰色砂質土（近世水田層）
4　黄褐色砂質土（近世水田層）
5　褐色粘性微砂質土
6　暗褐色粘性砂質土
7　暗褐色砂層
8　砂礫層

第168図　河道２　Ⅲ区北壁西端（1/60）



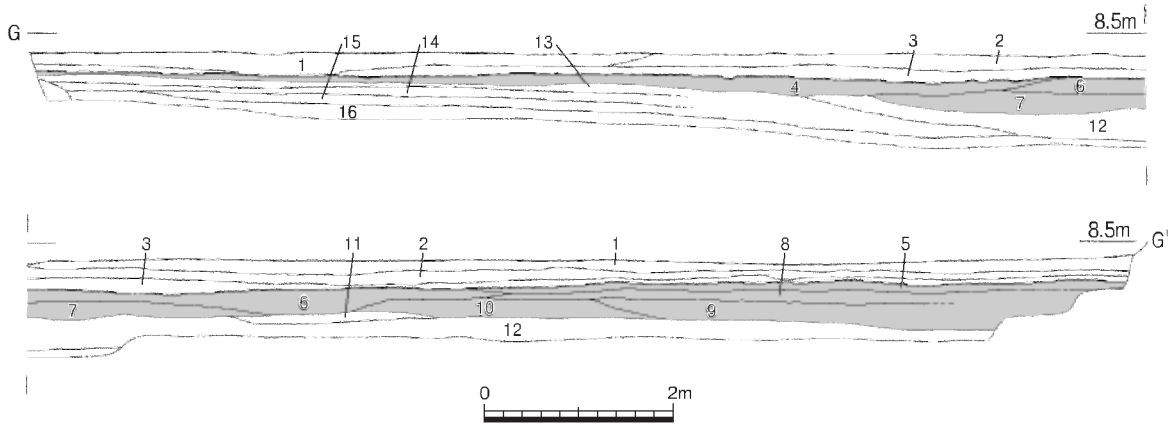
第169図　河道２　Ⅲ区出土遺物①（1/4）



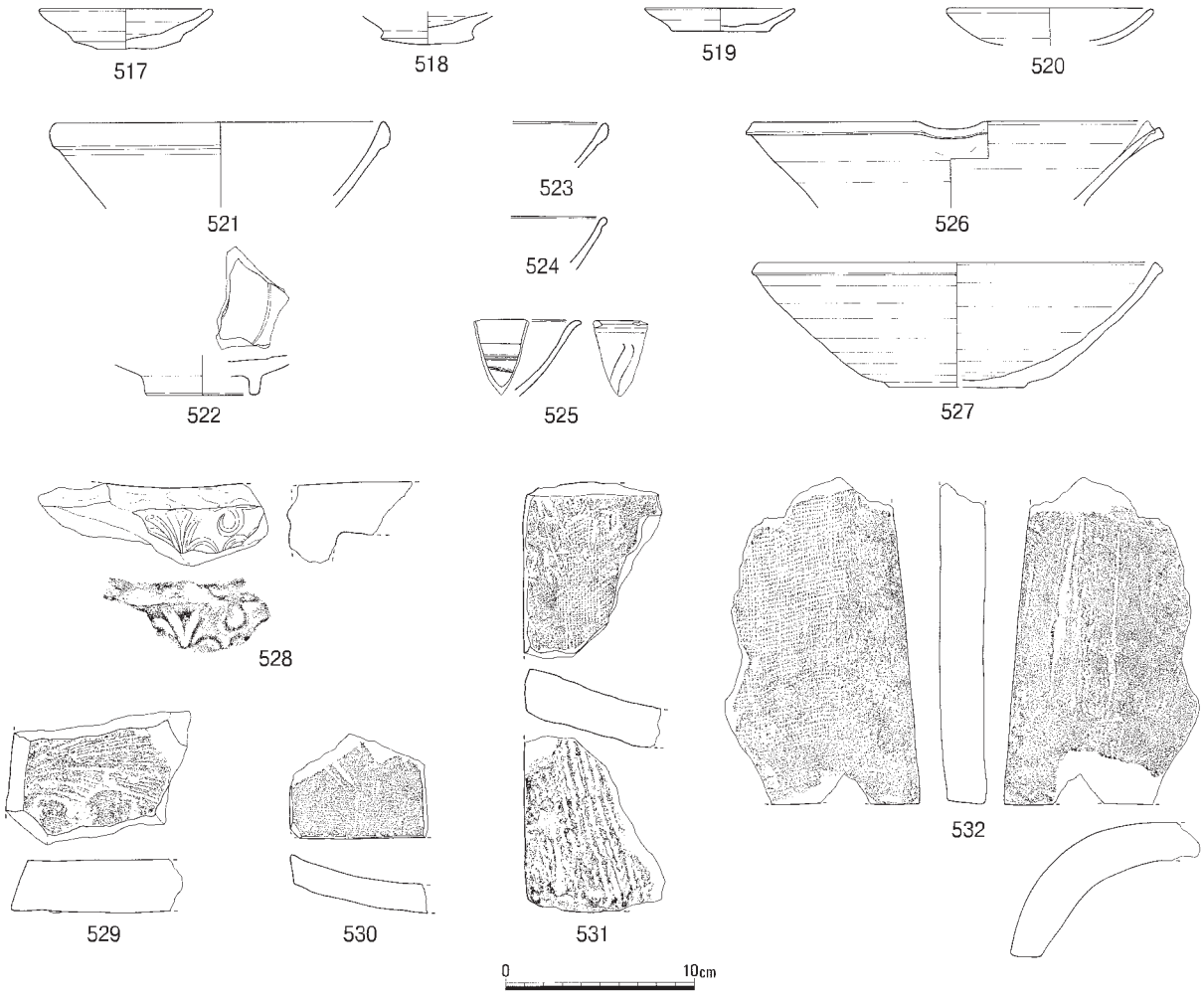
第170図　河道２　Ⅲ区出土遺物②（1/4、1/3）

河道３（第172・173図）

遺跡の東部を流下する大規模な河道であり、その形状は地形図や航空写真から読みとることができ、現在も周囲の水田より一段低くなっており、埋没と水田化はかなり新しいとみられる。



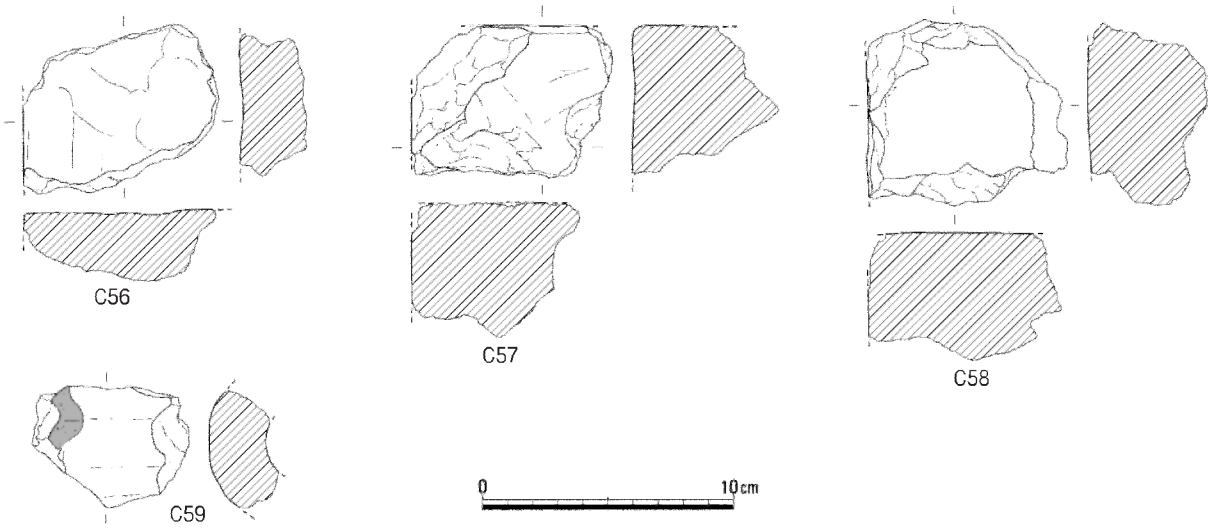
1　試掘埋土
2　明黄褐色砂質土（現代耕土）
3　灰褐色粘性微砂質土（近世）
4　暗褐灰色粘性微砂質土（中世）
5　暗褐色粘性微砂質土（中世）
6　暗褐色粘性粗砂質土（中世）
7　褐灰色粘性粗砂質土（古代）
8　暗褐灰色粘質土（古代）
9　褐灰色粘性粗砂質土（古代）
10　褐灰色粘性微砂（古代）
11　暗灰褐色粘質土（古代）
12　青灰色粘質土
13　褐灰色粘性微砂
14　暗灰色粘性粗砂
15　暗灰褐色粘質土
16　青灰色粘質土



第171図　河道３（1/80）・出土遺物①（1/4）

一次調査の結果、遺物は河道の西岸の堆積層に集中することが判明したため、その部分について掘り下げを行った。出土遺物の量は少なくないが、大量に堆積したという状態ではない。

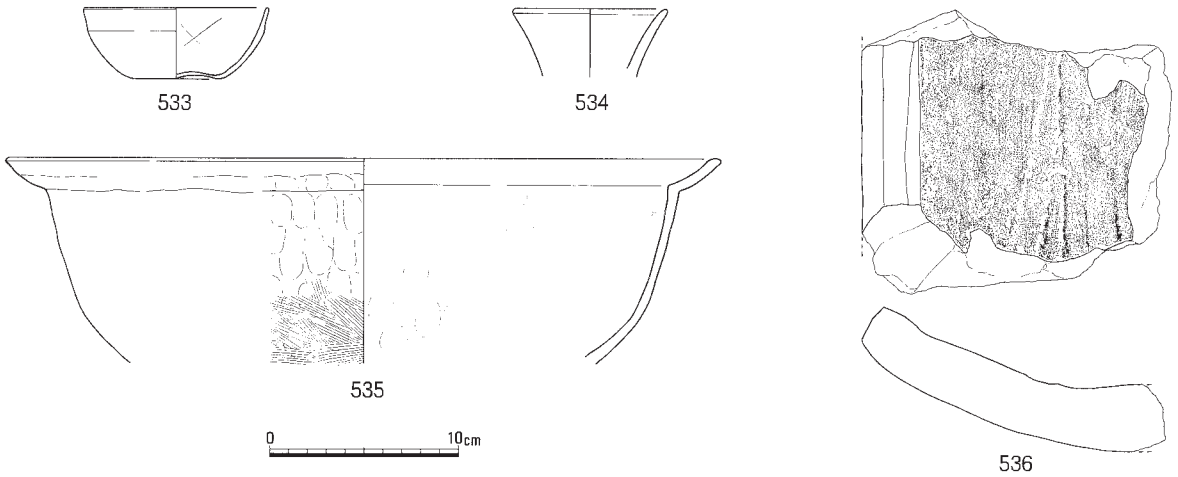
中世の遺物は土師器皿517～520、白磁碗521～524、青磁碗525、東播系こね鉢526・527などがある。このほか瓦528～532、磚Ｃ56～58、羽口Ｃ59があり、これらは栢寺廃寺からもたらされたものと推定される。このうち軒平瓦528は段顎で広い瓦当面を造り出している。唐草文の変形の文様になるようであるが部分であるため構成はよくわからず、類例も見出せていない。磚はいずれも長さ10㎝以下の小片になっており、粘土接合部で剥離した状態を示すものが多い。　(宇垣)



第172図　河道３出土遺物②（1/4、1/3）

9　遺構に伴わない遺物（第174図）

下図の遺物は全てⅣ区から出土している。533～535は近世以降の攪乱から、536は弥生時代～古墳時代の河道とした第119図第15層上部より出土しており、いずれも西側微高地上より流入してきたものと考えられる。　(渡邉)



第173図　遺構に伴わない遺物（1/4）

第４節　近世の遺構・遺物

１　概要

近世には河道部分は水田として利用される。微高地上も畑等として利用され居住域ではなかったと推定される。検出遺構は耕作関係とみられる土壙２基である。図示してはいないが、東の河道３に形成された近世の水田層では幅２ｍ、長さ７ｍ以上の長方形の小区画が河道の方向にそって南北に連なる状況が認められた。近世の水田層・堆積層中から該期の遺物が出土している。　　(宇垣)

２　土壙

土壙６（第175図）

Ⅳ区の北部で検出した円形の土壙で、径1.02ｍ、深さ37㎝を測る。上部は浅いⅢ状に広がっており、検出面よりも８㎝下から急角度の壁面をなす。この上部は埋没前に肩部が流出したものであろう。埋土は微砂質土である。遺物は伴っていない。

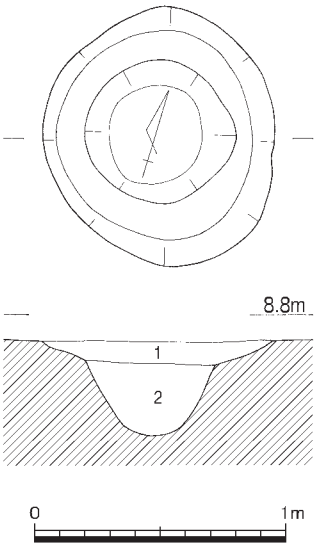
（　〃　）

土壙７（第176図）

Ⅲ区の北部で検出した土壙で土壙６の西80ｍに位置する。

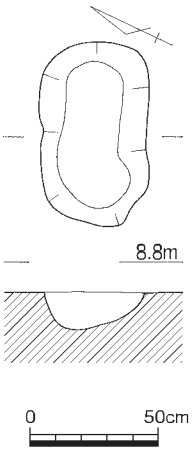
長さ73㎝、幅41㎝の隅丸長方形をなし、深さは15㎝を測る。

埋土は土壙６と同様の微砂質土で、遺物は伴っていない。これらは近世水田に関係する遺構である。　　（　〃　）



1　褐黄色微砂質土
2　褐黄色微砂質土
（褐色粘性砂質土塊含）

第174図　土壙６（1/30）



褐黄色微砂質土

第175図　土壙７（1/30）

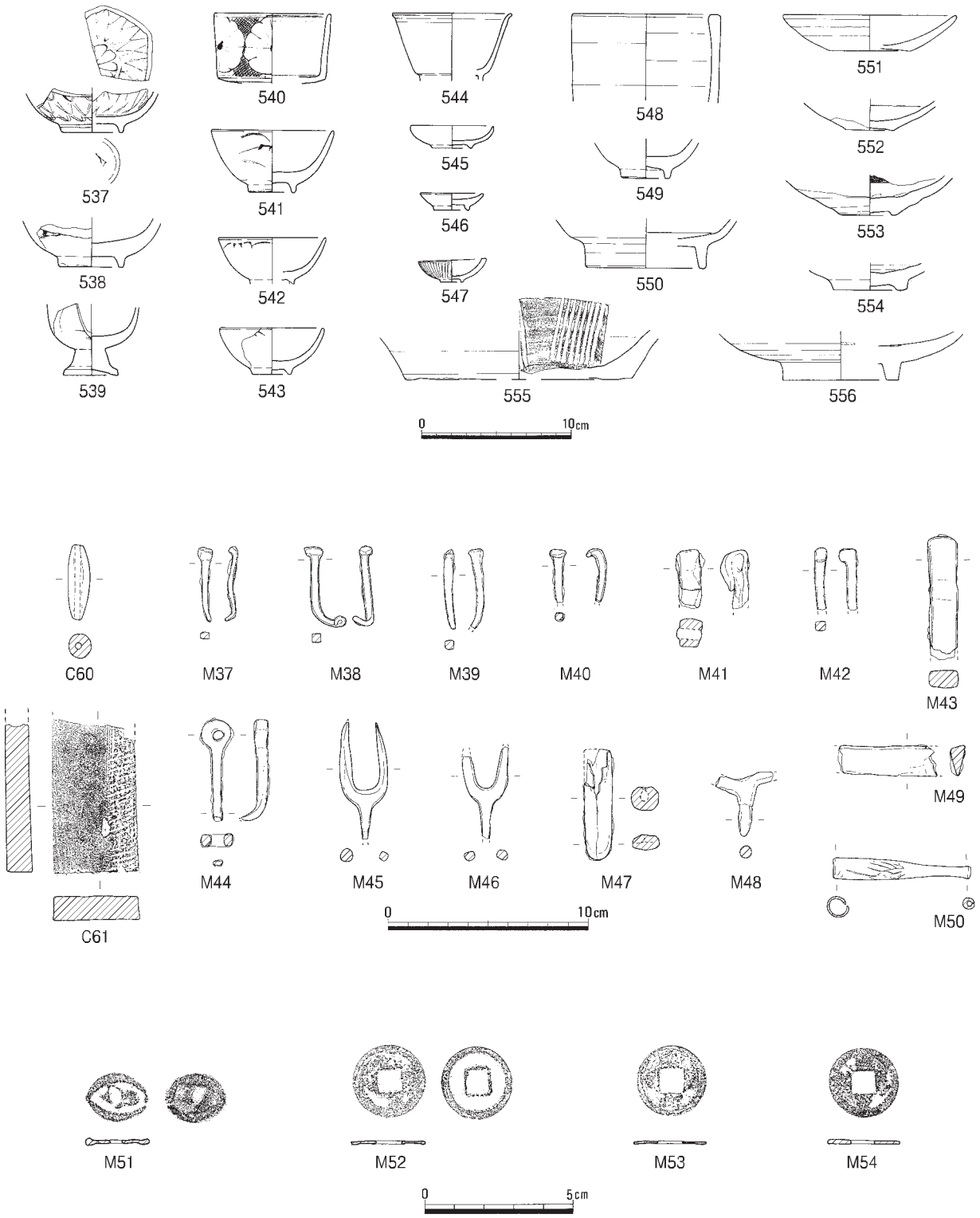
３　遺構に伴わない遺物（第177図）

Ⅰ～Ⅲ区の近世水田層およびⅤ区の堆積層中からは近世の遺物が出土している。遺物は陶磁器および鉄器が主体を占める。陶磁器は基本的にⅤ区の近世水田および堆積層からの出土であり、鉄器はⅠ～Ⅲ区の近世水田・堆積層からの出土である。

陶磁器類は唐津Ⅲ553、備前焼すり鉢555のように中世後半から近世前半とみられるものを含むが、主体を占めるのは近世後半のものであり、河道３の埋没がこのころまで続いていたことを示す資料とも言える。

C61は焼き物の硯である。図版28－２に掲載したが、土製の人形もかなりの量出土している。

鉄器はいずれも小片で、釘類が比較的多い。M45・46は雁又の鉄鏃とも思われるが確実ではない。M50はキセルである。銅銭のうちM51は楕円形で孔もゆがんでおり、キセルの雁首をつぶして作られた偽造銭、雁首銭とみられる。M52・54は中世の元豊通宝、M53は判読不能である。　　（宇垣）



第176図　遺構に伴わない遺物（1/4、1/3、1/2）

第５節　小結

北溝手遺跡はおもに河道の調査となったが、微高地部分の様相を示す多くの情報を得ることができた。おもな成果として、１．河道１の弥生時代・古墳時代遺物、２．河道２出土の平安時代の遺物、３．土壙墓１、がある。

河道１から出土した弥生土器のなかには特殊器台破片２点が含まれていた。それぞれ胎土と色調が異なっており、２個体の破片である。特殊器台は墳墓から出土し葬送儀礼に用いられた土器と評価されてきたが、ここ10年ほど集落域からの出土例が増加している。本例と最もよく似た出土状態を示すのは岡山市百間川米田遺跡であり、ここでは河道堆積中から弥生後期土器片に混じって特殊壺の破片が出土している。

河道からの出土であるので、墳墓から流出した破片が堆積したという可能性もなくはないが北溝手例も百間川米田例も付近に弥生墳墓は知られておらず、集落遺跡から流出したとみるべきである。その場合、集落においても実施された葬送儀礼に用いられたと考えれば通説と合致はするが、集落遺跡出土資料も津寺遺跡、矢部南向遺跡などかなりの量にのぼっており、葬送以外の儀礼に用いられた可能性を考慮することも必要である。小片ではあるものの、本遺跡の特殊器台は、特殊器台の研究において重要な資料となる。

このほか、小片ではあるが河道１出土の初期須恵器は、古墳時代中期の集落における須恵器受容のあり方を知る資料である。

河道２から出土した平安時代の遺物は、河道の西岸に所在する金井戸遺跡から投棄・流出したものとみられ、遺跡の性格を示す資料である。遺物のなかには緑釉・灰釉陶器、越州窯青磁などが含まれる。調査資料の増加に伴ってそれらの出土遺跡も増加しており、出土をもって官衙とみなすことは適当ではないだろうが、当時一般に常用される土器ではなく官に関連した遺跡であったとみてよいだろう。

また、土壙墓１は完形品だけでも青磁碗２、青磁皿３、青白磁合子１という豊富な副葬品をもつ。県下で検出された中世墓では百間川原尾島遺跡で検出された土壙墓４などと並ぶ副葬品の多さと言えるが、墓壙の規模は小さい。今、この地域の中世墓全体のなかでこの墓がどのように位置づけられるか検討を行うことはむずかしいが、副葬品の多寡が被葬者の社会的な位置を反映するのかどうか、また、仏教思想のなかで副葬品はどういった意味をもつのかという問題などを考えるうえで、実に良好な資料となると思われる。　(宇垣)

第６章　まとめ

今回の調査は南北幅36ｍ、東西延長700ｍを超える長大な調査区で、西から総社遺跡、金井戸遺跡、北溝手遺跡の３遺跡の発掘調査を実施したが、当地域は備中国府推定域や栢寺廃寺に隣接する、いわば備中の中枢域の縁辺にあたるような重要な地域で、あたかもその地域を横断するようなトレンチを入れたような格好になっている。第３～５章でそれぞれの調査成果を報告し個別に検討を加えてきたが、ここで３遺跡を総合し、微高地の形成および展開を堆積状況や遺構のあり方から復原しつつ、当地域の動向に触れてみたい。

縄文時代の明確な遺構は検出されていないが、総社遺跡から縄文後期土器１点、突帯文土器３点が出土している。縄文時代後期の土器20は弥生時代中期の溝４に混入していたが、突帯文土器23は土器溜まり状に出土している。同じ平野部に立地する県立大学用地内の南溝手・窪木遺跡[1]からは１㎞程度しか離れておらず、当地点に突帯文期の集落が存在していた可能性は高い。

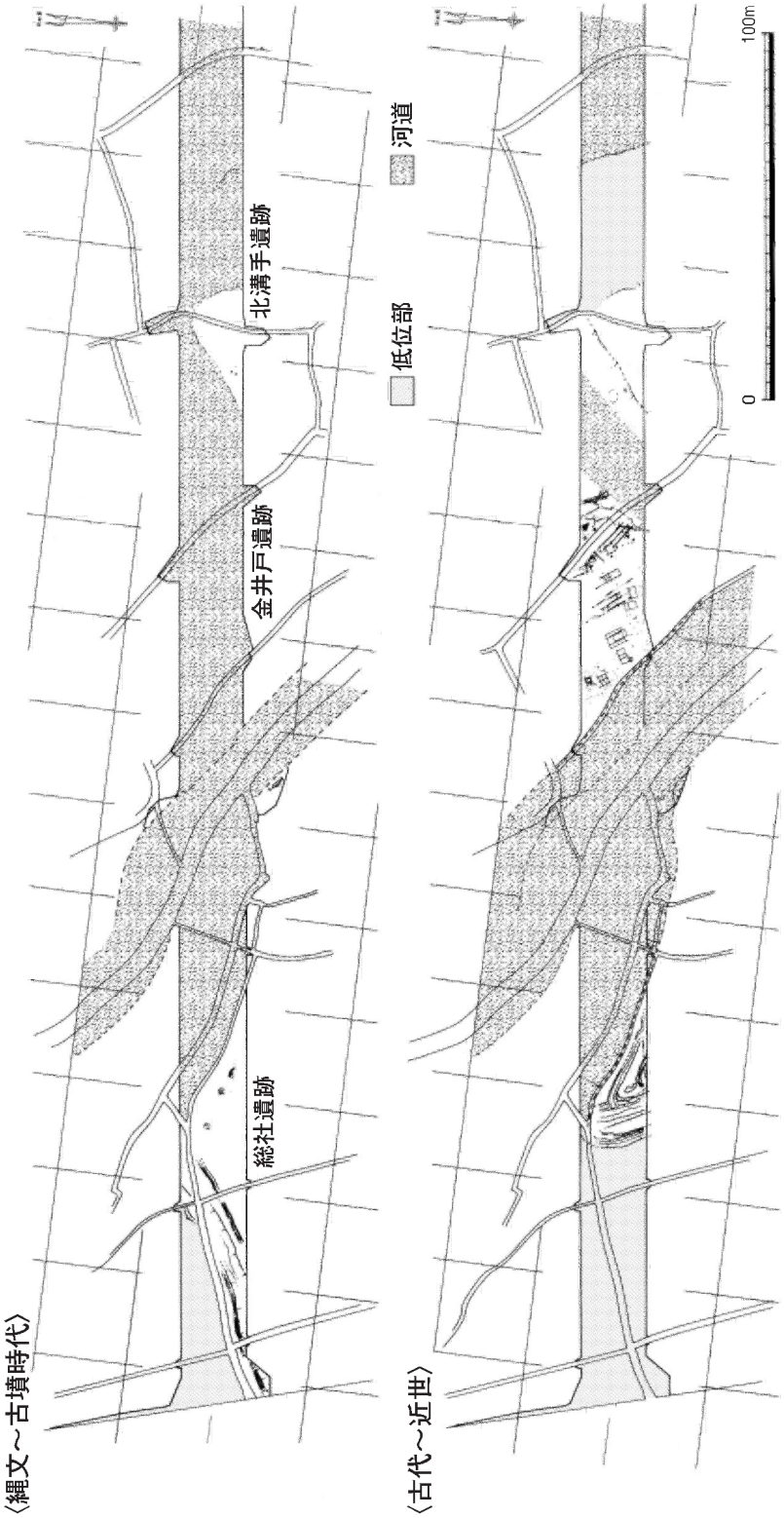
続く弥生時代前期の遺構・遺物は共に希薄で、わずかに総社遺跡土壙２から出土したのみである。溝４からは弥生時代中期前葉～中葉の土器片が出土しているが、溝４は総社遺跡の集落域縁辺をめぐる基幹用水路という見解が出されており、それに従えば、弥生時代前期～中期の集落が今回の調査地点より南に存在すると想定される。総社遺跡Ⅶ区では微高地上に弥生時代後期の集落が確認されており、この考えを肯首するものであろう。一方、北溝手遺跡では基盤を形成する砂礫層から弥生時代前期末～古墳時代前期の遺物が大量に出土しており、総社遺跡Ⅵ・Ⅶ区を除く広域が河川の流域内にあったと考えられる。特に弥生時代末～古墳時代前期の土器が大半で、また層位的な序列も認められないことから、この時期に大量に土器と土砂が流出するような事象、つまりは大規模な洪水に見舞われたのではないかと推察される。同じように弥生時代の終わり頃から古墳時代の初めにかけて洪水砂に被覆されたり大規模な溝や流路が形成される状況は岡山県南部平野では広範に認められる現象[2]で、この事が古墳時代への転換を促した遠因の一つに挙げられるのではないだろうか。

さて、北溝手遺跡で基盤が安定するのは古墳時代中期以降になってからで、古墳時代前期までに堆積した砂礫の中で最も高所にあたるⅢ区で土壙１・２が掘削される。しかし河道肩口に完形の土器を埋納している状況から、集落縁辺で行われた特殊な祭祀と考えられる。また北溝手遺跡では古墳時代後期の須恵器が包含層から出土しているが、金井戸遺跡でも基盤上面で同時期の須恵器が検出されている。この頃、総社遺跡では引き続き微高地を取り巻くように溝が掘削されており、前代と同じような状況を呈していることから、やはり金井戸遺跡および北溝手遺跡では大規模かつ拠点的な集落を営み得るまでには安定していなかったと想定される。

状況が一変するのは古代に入ってからである。北溝手遺跡では奈良時代の遺構が確認され、金井戸遺跡の微高地上では遅くとも９世紀には掘立柱建物群が姿を現す。ただし北溝手遺跡は金井戸遺跡と一連の微高地で、当然北溝手遺跡で検出された遺構は金井戸遺跡と同一領域に属すでろう。金井戸遺跡の出土土器の傾向は９世紀後半、10世紀前半、10世紀後半に大別でき、遺構の変遷もそれに合致したものであろうと先に述べたが、北溝手遺跡河道２からも９世紀後半～10世紀前半の越州窯青磁、９世紀後半の灰釉陶器および緑釉陶器、10世紀後半の緑釉陶器が出土するなど同様の傾向を示してい

る。また両遺跡出土遺物の中には接合するものもあり、北溝手遺跡河道２出土遺物の多くは金井戸遺跡を含む西側微高地上から転落したものであろう。第２章第３節で金井戸遺跡について若干の見解を述べたが、ここで北溝手遺跡も含めて、今一度検討を加えてみたい。

一方、北溝手遺跡では土壙４・５、溝２が８世紀後半に比定され、河道２にも奈良時代に遡る土器が含まれているなど微高地上の建物群より古い様相が看取される。第118図をみると、古代～中世の堆積層は複数確認されており、溝２がさらに下層で掘削されていることから古代の遺構面も複数面形成されていたと考える方が妥当であろう。とすると金井戸遺跡も奈良時代に遡る建物が含まれている蓋然性が高くなる。その場合、最も可能性が高いのは掘立柱建物９である。柱穴掘り方平面形が方形に近く、断面も台形を呈し、比較的深く柱痕が明瞭に残るなど掘立柱建物８・10とは一線を画した方が良さそうである。現状では可能性しか提示できないが、当遺跡の性格とも合わせて検討していく余地があろう。なお河道からは栢寺と同型式の瓦が出土し、磚も出土している。金井戸遺跡Ｐ29から出土した灰釉陶器83は寺院からの出土が多い四足壺の可能性も指摘されており[3]、栢寺から持ち込まれた、もしくは栢寺に関連する施設の可能性が高まってくる。いずれにせよ奈良時代～平安時代にかけて賀陽氏が権勢を誇っていた時期、その中枢に近い当地域に忽然と遺跡が形成され

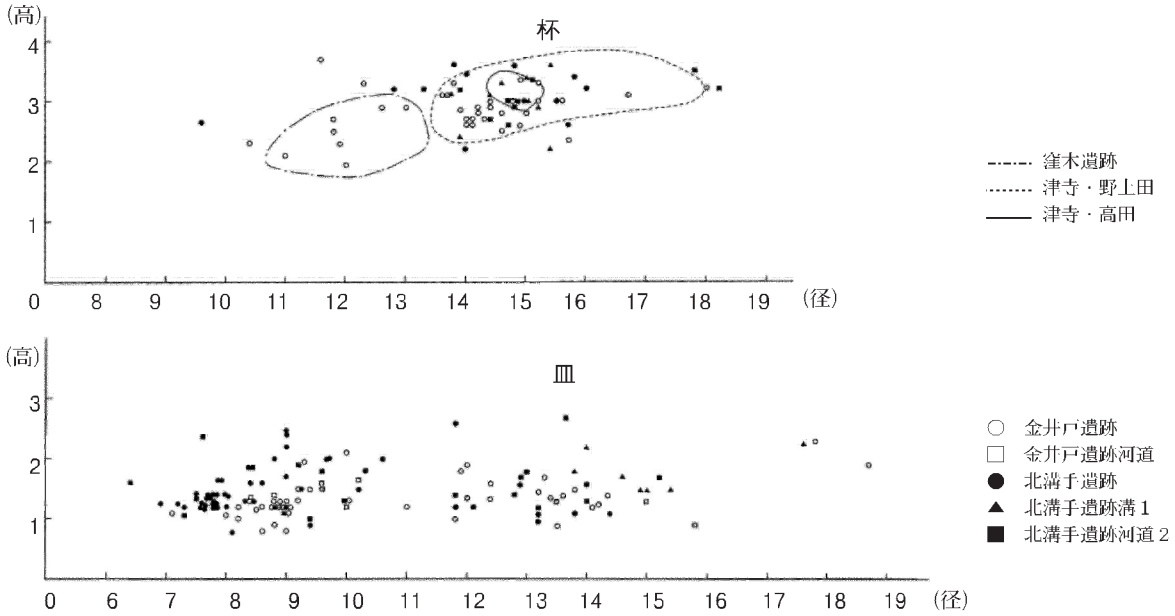


第177図　主要遺構変遷図（1/4,000）

ることには、その性格が賀陽氏と強く結びついたものであると想起せざるを得ない。

中世も金井戸遺跡では掘立柱建物が建てられている。北溝手遺跡では河道が停滞後埋没したようで、河道上で土器溜まりや土壙墓が確認されている。微高地部にあたる金井戸遺跡で検出された遺構は希薄で、掘立柱建物も規模が小さく、特殊な遺構とは見なしがたいが、北溝手遺跡土壙墓１は豊富な青磁・白磁・青白磁からなる副葬品を持ち、やはり在地有力層が居住していた可能性が考えられる。一方、国府川を西に隔てた総社遺跡でも同時期の遺構が確認されている。さらに縄文時代以来の微高地の核となる総社遺跡Ⅵ区では土塁が築かれ、堀が掘削されている。この土塁と堀については第３章第４節で述べられているとおり国府氏の館に比定されている。館の形成期については判然としないが、低位部にあたる総社遺跡Ⅷ区で出土した14世紀の土師質椀は微高地上面から転落してきたものと考えられている。つまりその時期の遺構を削平して居館が形成されたといえ、堀内部の出土土器の様相と合わせて、15世紀には館の前身が現れ、15世紀末に土塁を築くなど平城化していったと想定される。この動きは14世紀後半の西日本における「濠構えの武家居館の増加」と「集落の再編・集住」[4]に符合するものとして評価したい。戦国時代の防御機能を備えた城館への発展も含めて、少なくとも県内全域を視野に入れて広域に検討すべき課題であろう。

近世には総社遺跡の土塁を利用して塚を築いているが、他遺跡では特に目立った遺構は検出されていない。おそらく全面が耕地化されたものと思われるが、北溝手遺跡のさらに東に位置する南溝手遺跡では溝で区画された屋敷地が確認されている。近世の様相については南溝手遺跡の報告を待って、あらためて検討していきたい。　（渡邉）



第178図　　金井戸・北溝手遺跡土器法量分布図

註

(1)「南溝手遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100　岡山県教育委員会　1995ほか
(2) 津寺遺跡群、百間川遺跡群など
(3) 高橋照彦氏から教示を受けた。
(4) 宇野隆夫『荘園の考古学』　青木書店　2001
(5) 平井泰男「第3節　古代の土器について」（「窪木遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』124　岡山県教育委員会1998）より

付載１　金井戸遺跡土壙５出土赤色顔料

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岡山県総社市に所在する金井戸遺跡では、古代～中世の時期とされる建物群が検出されている。発掘調査所見では、中～下級官人層の居宅である可能性があると考えられている。また、周辺では鍛冶炉も数基検出されている。建物群の中から検出された土壙の一つに多量の礫が埋積され、その礫と礫の間を埋める土の中に塊状の赤色顔料と思われるものが多量に認められている。本報告では、この赤色物質の性状を捉えることにより、物質名を特定し、土壙の用途・性格に関わる資料を作成する。

１．試料

試料は、金井戸遺跡の東端部に近い位置で検出された土壙５より採取された。土壙５は、径約1.2mの円形に近い平面形を呈し､深さ約40cmのすり鉢状の断面形を呈する。土壙内には径５～15cm程度の円礫が多量に詰められており、礫と礫の間は黄褐色の砂質土壌で充填されている。この砂質土状の中に赤褐色を呈する塊状の顔料様物質が多く認められている。この顔料様物質を削り取って分析に供した。

２．分析方法

物質の特定にはX線回折分析と電子顕微鏡による構造の観察を用いた。以下に各方法について述べる。

(1) X線回折分析

土塊表面に付着した赤色物質を採取し、105℃で２時間乾燥させた後、メノウ乳鉢で微粉砕した。この微粉砕試料をアセトンを用いて無反射試料板に固定し、Ｘ線回折測定試料とした。作成したＸ線回折測定試料について以下の条件で測定を実施した（足立，1980；日本粘土学会，1987)。

検出された物質の同定解析は、Materials Data,Inc. のＸ線回折パターン処理プログラムＪＡＤＥを用い、該当する化合物または鉱物を検索した。

装　置：理学電気製MultiFlex	Divergency Slit：1°
Target：Ｃｕ（Ｋα）	Scattering Slit：1°
Monochrometer：Graphite湾曲	Recieving Slit：0.3mm
Voltage：40KV	Scanning Speed：2° /min
Current：40mA	Scanning Mode：連続法
Detector：ＳＣ	Sampling Range：0.02°
Calculation Mode：cps	Scanning Range：3～45°

(2) 電子顕微鏡観察

土塊から赤色物質を少量削り、軽く粉砕した上で導電テープを用いて試料台に固定する。走査型電子顕微鏡を用いて構造の有無等を観察する。

３．結果

(1) X線回折分析

Ｘ線回折図を図１に示した。検出された鉱物は石英（quartz)、曹長石（albite)、ハロイサイト(halloysite)、赤鉄鉱（hematite）の４鉱物である。

(2) 電子顕微鏡観察

試料中には、何らかの結晶が観察できるが、由来等は不明である。また、赤色顔料のベンガラの一部に見られるパイプ状構造は認められない。

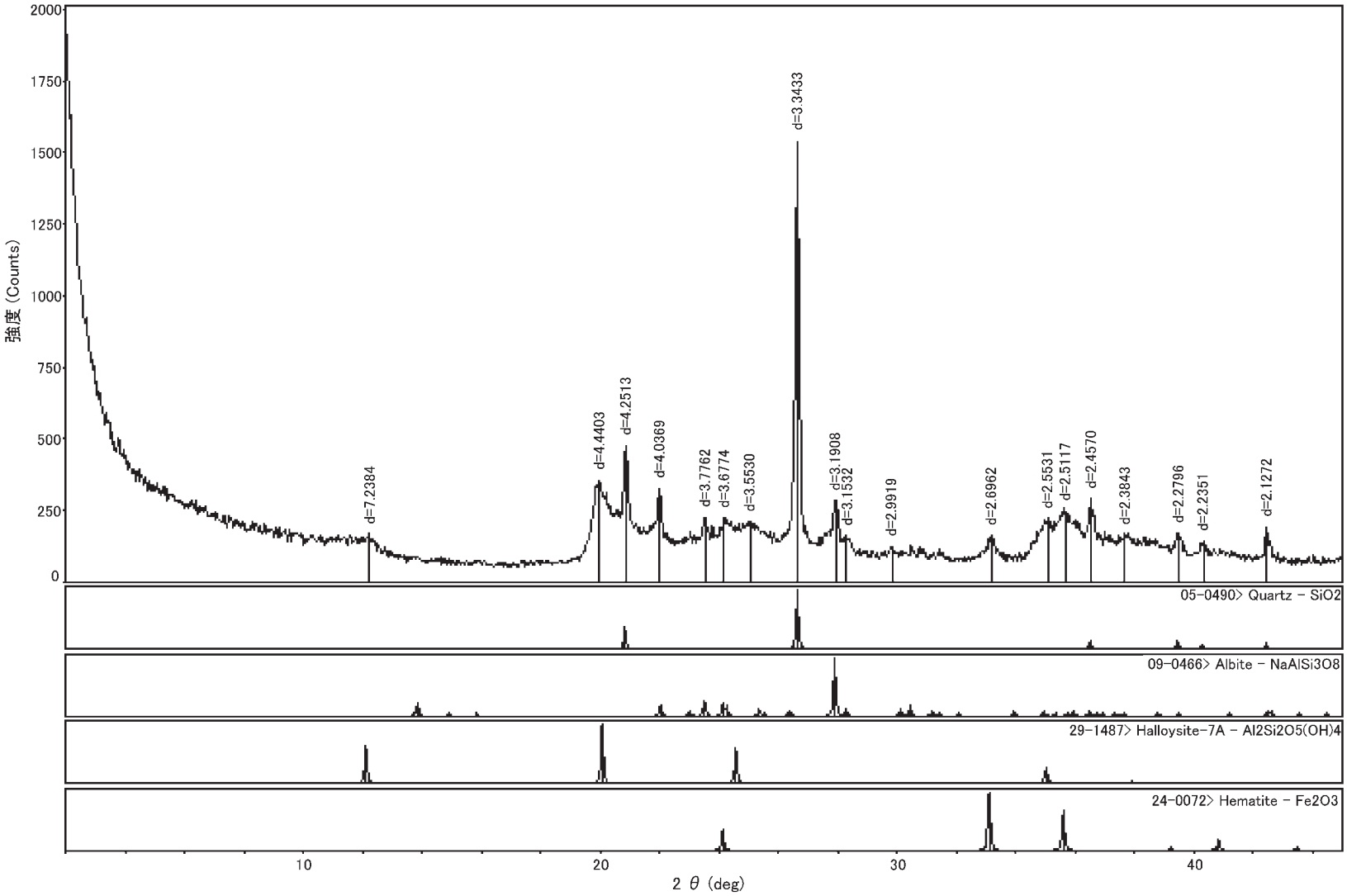
４．考察

一般に遺跡などで検出される代表的な赤色顔料にはベンガラ（赤鉄鉱；hematite[α－Fe_2O_3]）のほか、水銀朱（辰砂；cinnabar[HgS]）、鉛丹（鉛丹；minium[Pb_3O_4]）などがある。今回の分析では赤鉄鉱が検出されていることから、赤色物質は、赤色顔料のベンガラである可能性がある。なお、同時に検出された石英やハロイサイトは試料採取時に混入した土壌由来の鉱物と考えられる。

電子顕微鏡観察で認められた結晶は、酸化鉄に由来する可能性があるが、詳細は不明である。ベンガラには、赤鉄鉱等の鉱物を用いたものの他に、鉄バクテリアの生成物を利用したものがあることが報告されている（岡田,1997;織幡･沢田,1997)。後者は、生成時にパイプ状の構造が作られ、赤色顔料に精製された後も構造が残存するために、顕微鏡観察などで確認することができる。今回の試料中には、パイプ状構造が認められないため、少なくとも鉄バクテリアによる生成物を用いたベンガラではないと考えられる。

文献

足立吟也（1980）　６章 粉末Ｘ線回折法　機器分析のてびき３.64-76, 化学同人.
日本粘土学会編（1987）　粘土ハンドブック　第二版.技報堂出版, 1289p.
岡田文男（1997）パイプ状ベンガラ粒子の復元.日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, 38-39.
織幡順子・沢田正昭（1997）　酸化鉄系赤色顔料の基礎的研究.日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, 76-77.


強度 (Counts)
2000
1750
1500
1250
1000
750
500
250
0
d=7.2384
d=4.4403
d=4.2513
d=4.0369
d=3.7762
d=3.6774
d=3.5530
d=3.3433
d=3.1908
d=3.1532
d=2.9919
d=2.6962
d=2.5531
d=2.5117
d=2.4570
d=2.3843
d=2.2796
d=2.2351
d=2.1272
05-0490> Quartz - SiO2
09-0466> Albite - NaAlSi3O8
29-1487> Halloysite-7A - Al2Si2O5(OH)4
24-0072> Hematite - Fe2O3
10
20
30
40
2 θ (deg)

第１図　Ｘ線回折図

付載２　金井戸・北溝手遺跡出土須恵器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所　白石　　純

分析目的

金井戸遺跡より出土した外面に格子タタキが施され須恵器甕（試料番号１）は、層位的な出土状況により平安時代の遺物と想定されているが、器形や調整技法から初期須恵器の可能性も考えられている。この分析では、金井戸遺跡や北溝手遺跡から出土している初期須恵器、平安・中世の須恵器と想定されているものが、自然科学的な胎土分析で、胎土に差異があるかどうか検討した。

分析方法と試料

分析方法は、蛍光Ｘ線分析法で検討した。この分析法は、胎土の成分（元素）量を測定し、その成分量から胎土の違いについて調べた。測定した成分（元素）は、SiO_2、TiO_2、Al_2O_3、Fe_2O_3、MnO、MgO、CaO、Na_2O、K_2O、P_2O_5、Rb、Sr、Zrの13成分である。測定装置はエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析計（セイコーインスツルメンツ社製SEA2010L）を使用した。分析試料は、乳鉢で粉末にしたものを加圧成型機で約15ﾄﾝの圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。従って、一部破壊分析である。分析試料は、第１表に示した11点である。内訳は初期須恵器と考えられる土器５点、平安時代の須恵器３点、中世の須恵器３点である。また、中世須恵器の生産地である亀山遺跡から出土した須恵器を比較試料とした。

分析結果

測定した13成分のうち、分析試料に顕著な差が見られたのはTiO_2、CaO、K_2O、Rb、Srの５成分であった。このうちCaO、K_2O、Rb、Srの成分を用いて散布図を作成し、胎土の違いを検討した。

第１図CaO-K_2O散布図では、中世須恵器の亀山焼分布範囲に試料番号１、３、６（初期須恵器？）と５、８（平安時代）と９、11（中世）が分布し、２、４、７、10はこの亀山焼の分布域にははいらなかった。

第２図Rb-Sr散布図では、２、４、７、10、以外に１、８が亀山焼分布域に入らず識別できた。

まとめ

この散布図結果から、以下のことが推定される。

・１の外面格子タタキの初期須恵器？は、第２図の散布図で中世須恵器の亀山焼とは、胎土が異なりまた、他の初期須恵器？とも異なっていた。

・２と４の初期須恵器？は胎土的に類似していた。

・３（初期須恵器？）、５（平安）、６（初期須恵器？）、９（中世）、11（中世）の各須恵器は胎土が類似していた。

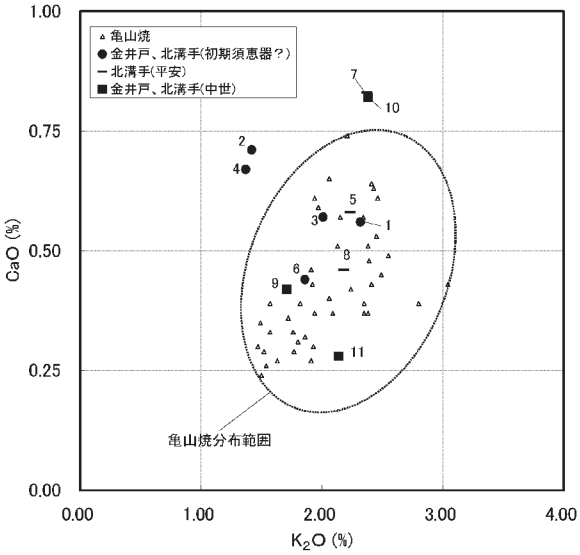
特に９と11は、外面に格子タタキが観察され、亀山焼分布域にも入ることから、亀山焼と推定される。

・７（平安）、８（平安）、10（中世）の須恵器は、単独で分布し、亀山焼の分布域にも入らない。

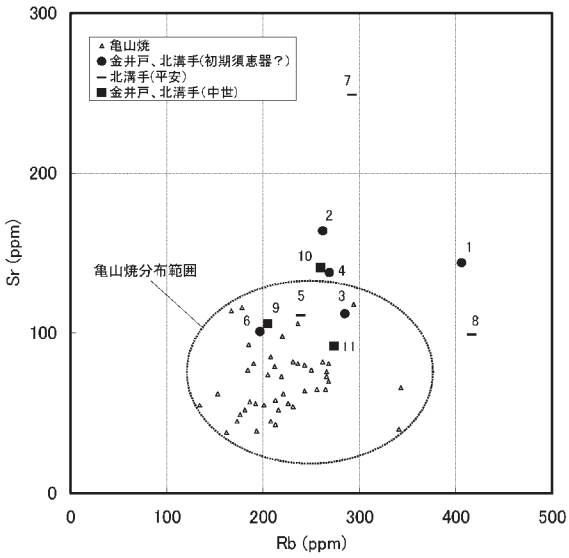
このように、初期須恵器？、平安、中世と分類された試料は、時期ごとには分類されなかった。各時期とも生産地試料との比較が必要であるが、複数の生産地から入ってきていることが推定される。

第１表　胎土分析試料一覧表　　単位：SiO_2～P_2O_5（%）、Rb ～ Zr（ppm）

番号	遺跡名	出土地点	掲載番号	器種	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	Rb	Sr	Zr	備考
1	金井戸遺跡	遺構に伴わない	245	甕	67.06	0.75	19.72	4.75	0.05	1.90	0.56	2.55	2.32	0.11	406	144	297	?
2	北溝手遺跡	河道１	240	甕	64.73	0.86	21.30	7.05	0.08	1.85	0.71	1.69	1.42	0.12	262	164	337	初期須恵器？
3	北溝手遺跡	Ⅴ区表土		甕	62.99	0.52	21.33	3.61	0.03	2.68	0.57	5.96	2.01	0.11	285	112	244	初期須恵器？
4	北溝手遺跡	河道１	248	甕	61.84	0.83	21.42	6.45	0.07	2.51	0.67	4.57	1.37	0.08	269	138	302	初期須恵器？
5	北溝手遺跡	Ⅰ区包含層		甕	69.09	0.74	20.01	2.51	0.05	1.80	0.58	2.67	2.23	0.17	239	111	429	平安？
6	北溝手遺跡	河道１	241	甕	61.56	0.83	19.01	7.76	0.10	2.56	0.44	5.59	1.86	0.10	197	101	377	初期須恵器？
7	北溝手遺跡	土器溜まり２	321	甕	62.96	0.99	21.60	6.01	0.09	2.08	0.83	2.60	2.37	0.15	292	249	400	平安
8	北溝手遺跡	溝２	296	甕	67.25	0.65	22.07	3.37	0.03	1.90	0.46	1.80	2.18	0.11	417	99	260	平安
9	金井戸遺跡	土壙１		甕	63.68	0.59	22.29	5.44	0.08	2.00	0.42	2.81	1.71	0.57	205	106	367	中世
10	金井戸遺跡	土壙１		甕	65.84	0.77	19.50	6.10	0.08	1.91	0.82	1.71	2.38	0.72	260	141	347	中世
11	北溝手遺跡	河道３		甕	69.9	0.64	17.77	4.62	0.05	1.80	0.28	2.36	2.14	0.22	274	92	270	中世



第１図　亀山焼との比較（K_2O-CaO 散布図）



第２図　亀山焼との比較（Rb-Sr 散布図）

遺構一覧表

表４　掘立柱建物一覧表

金井戸遺跡

遺構名	規模	棟方向	柱間距離（cm）		桁行	梁間	面積	主軸	柱掘形形状	備考
			桁	梁	(cm)	(cm)	(㎡)			
掘立柱建物１	２×２	東西	184 ～ 233	230 ～ 290	417	539	22.5	N-28゜50′-W	円	
掘立柱建物２	２×３	東西	192 ～ 207	167 ～ 327	399	798	31.8	N-22゜80′-W	円	
掘立柱建物３	１×４	南北	180 ～ 206	192 ～ 236	386	884	34.1	N-28゜30′-W	円	両庇、南全面にも庇か
掘立柱建物４	１×３	南北	358 ～ 372	232 ～ 257	372	737	27.4	N-27゜50′-W	円	
掘立柱建物５	１×３	南北	183 ～ 390	185 ～ 216	395	641	25.3	N-17゜50′-W	円	
掘立柱建物６	２×１	東西	376 ～ 378	292 ～ 303	378	606	22.9	N-17゜80′-W	円	
掘立柱建物７	１×１	東西	204 ～ 207	246 ～ 247	207	247	5.1	N-21゜-W	円	
掘立柱建物８	２×４	南北	171 ～ 201	142 ～ 284	397	909	36.1	N-32゜-W	円？	柱穴底に根石あり
掘立柱建物９	１×	南北	334	193 ～ 377	334	759	25.4	N-23゜80′-W	隅丸方	北側調査区外へ
掘立柱建物10	２×２	東西	204 ～ 248	433	472	433	20.4	N-28゜59′-W	円	溝１伴うか
柱穴列１		南北	210 ～ 290		500			N-31゜70′-W	円	
柱穴列２		南北	166 ～ 167		333			N-23゜80′-W	隅丸方	
柱穴列３		東西	148 ～ 170		318			N-23゜80′-W	円	

遺物一覧表

表５　土器観察表

総社遺跡

掲載番号	遺構名	種別	器種	状態	計測値cm 口径	底径	残高	外面色調	備考
1	土壙8	弥生土器	壺	欠	11.6		4.2	橙	
2			甕	欠	14.4		1.8	橙	
3			壺	欠	16.2		2.9	橙	
4			壺	欠		8.2	8.6	にぶい橙	
5			高杯	欠			3.5	橙	
6			高杯	欠		8.1	3.4	橙	
7			壺	欠			7.1	灰黄	
8			甕	欠		4.9	3.0	橙	
9			台付鉢	欠		10.8	8.9	にぶい橙	
10			器台	欠			10.0	橙	
11	溝4		壺	細			3.0	橙	
12			鉢	欠	15.0		10.3	にぶい褐	
13	溝6	須恵器	杯身	欠	12.8		4.6	灰白	内面当て具痕
14	溝5	土師器	甕	欠	16.7		14.6	浅黄	
15	溝7	弥生土器	甕？	欠	17.7		3.5	明赤褐	
16	柱穴3	弥生土器	甕	欠	(14)		3.3	橙	
17	柱穴1		高杯	欠	19.4		13.7	橙	
18	柱穴2		甕	欠	(15.1)		5.9	橙	
19	柱穴3		甕	欠	16.2		8.4	灰黄	
20	遺構に伴わない	縄文土器	鉢	細			3.3	褐灰	
21			深鉢	細			3.9	にぶい橙	
22			深鉢	細			3.6	灰黄	
23			深鉢	細			13.2	にぶい橙	
24		弥生土器	高杯	欠	21.0		2.7	にぶい橙	
25			器台	欠	(38)		8.0	橙	
26	堀1	染付	碗	欠	10.0		2.5	灰白	肥前1650～60
27		灰釉	椀	欠		4.5	2.2	にぶい黄橙	肥前1610～30
28	堀2	土師器	灯明皿	欠	8.0	4.5	1.7	にぶい黄橙	底部ヘラキリ
29			椀	欠		7.0	1.1	橙	
30		灰釉陶器	溝縁皿	欠	14.0		2.4	灰オリーブ	1610～30、底部ヘラケズリ
31		亀山焼	擂鉢	細	(40.4)		5.8	灰黄	
32		備前焼	擂鉢	欠	24.8		4.8	灰赤	
33		青磁	碗	細			2.4	灰オリーブ	貫入有
34		染付	碗	細			4.7	青灰	貫入無
35	堀3	白磁	碗	細	(18.0)		2.0	灰白	
36		白磁	碗	欠		7.0	1.8	灰白	
37		備前焼	甕	細			5.8	にぶい赤褐	
38	堀4	亀山焼?	擂鉢	欠	32.0	16.0	12.6	にぶい橙	被熱、内外ハケ目、軟質
39	堀5		擂鉢	細	34.2	17.0	11.2	にぶい黄橙	
40	溝9	白磁	碗	欠			2.2	灰白	
41		土師器	碗	細		6.5	1.3	にぶい黄橙	
42	土塁	備前焼	甕	欠	(35.0)		8.1	黒褐	口縁部ヨコナデ
43			甕	欠			9.2	黒褐	口縁部ヨコナデ
44			甕	細	(35.5)		7.8	にぶい赤褐	口縁部ヨコナデ

掲載番号	遺構名	種別	器種	状態	計測値cm 口径	底径	残高	外面色調	備考
45	土塁	備前焼	甕	欠		32.0	6.7	灰赤	底部ヘラケズリ
46			擂鉢	細	(43.6)		5.6	にぶい赤褐	
47			擂鉢	細	(39.5)		5.9	にぶい赤褐	口縁部ヨコナデ
48			擂鉢	欠	(25.4)		7.0	灰赤	47と同一？、口縁部ヨコナデ
49			擂鉢	欠	29.6		6.4	灰赤	
50	塚	土師器	皿	欠	8.4	4.2	1.2	橙	底部糸切り
51			皿	欠	9.0	5.9	2.4	橙	底部糸切り
52			皿	欠	9.6	5.9	1.9	にぶい黄橙	底部糸切り
53		陶器	皿	欠	11.0	3.8	2.3	灰黄	胎土目
54			皿	欠		5.8	1.7	黄灰	関西系？1600～30、砂目
55			香炉	欠	9.2	4.7	4.8	にぶい褐	関西系？180終～幕末
56			碗	欠	18.5	5.9	7.2	にぶい黄橙	関西系江戸後期、胎土目
57		染付	小碗	欠	8.7	3.2	4.65	灰白	肥前17C末～18初、放れ砂
58		備前焼	皿	欠	8.0		1.3	にぶい赤褐	灯明皿
59			皿	欠	＋9.0		1.55	にぶい赤褐	灯明皿
60			擂鉢	細	25.0		6.3	灰赤	
61		土師器	羊鉢	欠	44.0		6.0	にぶい黄橙	
62		丸瓦		欠	外径 13.4、厚2.3			にぶい黄橙	左巴・珠文12・巴3
63				欠	外径 13.5、厚2.0			暗灰黄	左巴・珠文12・巴3
64				欠	10.2×9.0、厚2.0			灰黄	
65	下がり	土師器	皿	完	6.7	4.7	1.4	灰黄褐	底部ヘラキリ
66			皿	欠	7.7	6.0	1.8	灰白	
67			碗	欠		5.4	1.8	浅黄橙	
68			碗	欠		5.9	1.9	灰白	
69			碗	完	10.4	4.1	3.8	にぶい黄橙	高台部モミ痕
70			碗	欠	10.5	4.1	4.2	にぶい黄橙	高台部モミ痕、重ね焼き痕
71			碗	欠	11.2	4.0	3.2	灰黄褐	
72			碗	欠	10.5	3.4	3.6	にぶい黄橙	
73		青磁	皿	欠	12		2.5	灰白	龍泉窯14C後半～15C中葉
74		青白磁	碗	細			3.5	灰白	
75		白磁	小碗	欠	7.7		3.6	灰白	肥前18C代
76		灰釉	溝縁皿	欠	(12.7)		2.2	灰黄	肥前1610～30
77		染付	碗	欠		3.4	1.7	灰白	肥前1770～1800
78			碗	欠		3.8	4.0	灰	波左見18C後半、裏：大明年製
79			碗	欠	11.8	6.4	6.2	灰白	広東形碗、1780～1840
80	遺構に伴わない	土師器	碗	欠		5.7	1.5	にぶい黄橙	
81		青磁	皿	欠		5.0	1.0	灰白	劃花文・櫛目文
82		備前焼	小皿	欠	9.0		1.5	にぶい赤褐	
83		土師器	皿	完	12.2	7.8	3.5	にぶい橙	三足
84		瓦	平瓦	欠	8.5×8.0、厚2.2			暗灰	

金井戸遺跡

掲載番号	遺構名	種別	器種	状態	計測値cm 口径	底径	残高	外面色調	備考
1	基盤	弥生土器	甕	欠			2.5	橙	
2		須恵器	杯蓋	欠	14.0		3.5	灰	
3			杯蓋	欠	(9.8)		2.8	灰	
4	建物1	土師器	皿	欠	10.0	8.0	1.3	灰黄褐	
5	建物2	土師器	椀	欠		(5.0)	2.0	にぶい黄橙	
6	建物3	瓦		欠	6.6×4.3×厚1.6			灰	内布目、外ナデ
7	建物4	土師器	椀	欠		(6.0)	2.0	にぶい黄橙	
8	建物10	土師器	杯	欠	(10.6)	(7.6)	2.9	にぶい黄橙	
9	柱穴列2	土師器	皿	完	18.7	11.1	1.95	にぶい黄橙	底部ヘラ描文(×)
10	柱穴列3	土師器	杯	欠	11.0	8.0	2.3	にぶい褐	
11	土壙1	土師器	椀	欠	(10.6)	4.7	3.7	灰白	
12			椀	欠	(11.5)		2.5	灰白	
13			椀	欠		(5.0)	2.7	灰白	
14			椀	欠		(4.8)	1.4	灰白	
15			皿	欠	(6.9)	(5.6)	1.25	灰白	
16			皿	欠	(7.3)	(5.6)	1.1	灰白	
17			皿	欠	(7.8)	(5.6)	1.15	灰白	
18			鍋	欠	31.3		(13.5)	にぶい黄橙	煤付着
19			鍋	欠	32.4		(15.3)	にぶい黄橙	煤付着
20			鍋	欠	33.3		(11.2)	にぶい黄橙	煤付着
21			鍋	欠	34.0		(11.9)	にぶい橙	煤付着
22		亀山焼	甕	欠	(25.4)		(6.8)	灰	
23			甕	欠	(33.0)		(9.1)	灰白	
24		土師器	竈	欠	(幅43.0)		32.7	明赤褐	内面上半煤付着
25	土溝2	亀山焼	甕	欠			(5.4)	黄灰	
26	土壙3	黒色土器	椀	完	14.9	6.9	6.2	にぶい黄橙	内黒
27			椀	完	15.5	7.0	6.3	にぶい黄橙	内黒
28	土壙7	土師器	杯	欠	11.8	8.5	3.6	橙	内外面丹塗り
29			杯	欠	13.7	9.6	2.6	にぶい黄橙	
30			椀	欠	15.3	9.0	4.5	にぶい橙	
31			甕	欠	(30.7)		(4.4)	にぶい黄橙	
32	土壙8	黒色土器	椀	欠		7.8	(2.5)	橙	内黒
33	土壙9	土師器	杯	欠	12.0	9.15	3.45	にぶい黄橙	周縁ヘラキリ、中央ユビオサエ
34			杯	欠	12.5	8.0	2.95	にぶい橙	中央ユビオサエ
35			杯	欠	12.5	9.1	3.2	にぶい黄橙	周縁ヘラキリ、中央ユビオサエ
36			杯	欠	13.0	8.3	3.3	にぶい黄橙	周縁ヘラキリ、中央ユビオサエ、内外丹塗
37			杯	欠	12.7	9.1	3.2	にぶい黄橙	中央ユビオサエ
38			杯	欠	(13.5)	(9.2)	3.0	にぶい橙	周縁ヘラキリ、内外丹塗
39			杯	欠	(12.8)	(6.2)	2.6	にぶい橙	周縁ヘラキリ、内外丹塗
40			杯	欠	(12.8)	(9.2)	3.1	橙	
41			杯	欠	(13.0)	(7.0)	2.95	にぶい橙	周縁ヘラキリ
42			皿	欠	(11.8)	(10.8)	1.1	にぶい黄橙	周縁ヘラキリ、中央ユビオサエ、外丹塗
43			皿	欠	(13.2)	(12.4)	1.1	にぶい黄橙	内外丹塗
44	土壙10	土師器	皿	欠	13.2	12.0	1.0	にぶい橙	
45		丸瓦		欠	12×16.7×厚8.6			にぶい黄橙	内面に線刻(九)
46	P1	土師器	杯	完	9.8	5.9	2.7	橙	底部ヘラキリ→オコシ
47	P2		杯	欠	11.9	9.6	2.85	橙	周縁ヘラキリ、中央ユビオサエ
48	P12		皿	完	8.2	6.4	1.2	にぶい橙	底部ヘラキリ→オコシ
49	P13		皿	欠	(8.4)	(7.6)	1.85	灰白	
50	P9		皿	欠	(9.0)		1.7	灰白	
51	P15		皿	欠		(5.2)	1.7	にぶい橙	
52	P8	黒色土器	椀	欠	(13.8)		3.5	灰白	内黒
53	P10		椀	欠		5.9	(2.0)	灰白	内黒
54	P14	土師器	椀	欠		6.8	(1.5)	にぶい橙	内面ヘラミガキ
55	P6		椀	欠		5.4	(2.2)	にぶい橙	
56	P12		椀	欠	(10.8)		3.7	灰白	
57	P4		椀	欠	(11.6)		2.7	灰白	
58	P11		椀	欠		5.9	(1.7)	灰白	
59	P5		椀	欠		4.2	(1.3)	灰黄褐	
60	P7		椀	欠		(5.2)	1.05	灰白	
61	P15	平瓦		欠	(9.2)	(8.2)	3.0	灰白	須恵質、内布目、外ナデ
62	P24	土師器	杯	欠	9.0	6.0	2.1	橙	底部ヘラキリ
63	P21		皿	完	10.3	7.6	1.8	灰白	底部ヘラキリ
64	P17		皿	欠	(9.4)	7.4	1.0	にぶい黄橙	
65	P20		皿	欠	(10.2)		1.5	灰白	
66	P23	黒色土器	椀	欠		(6.6)	1.7	灰白	内黒
67	P22	土師器	椀	欠		6.2	(2.0)	にぶい黄橙	
68	P18		椀	欠	(14.0)	(6.2)	4.8	にぶい黄橙	
69	P24	黒色土器	椀	欠	14.8		(3.9)	にぶい褐	内黒
70	P25	土師器	椀	欠	(14.0)		(2.2)	灰白	
71	P23	平瓦		欠	12×9.5×厚2.6			灰黄褐	内布目、外ナデ
72	P28	土師器	杯	欠	12.1	7.3	2.6	にぶい黄橙	中央ユビオサエ
73	P48		杯	欠	12.0	8.7	(2.6)	にぶい褐	
74	P43		杯	欠	10.0	6.9	1.95	にぶい黄褐	
75	P36		杯	欠		7.8	(2.4)	にぶい黄橙	ヘラキリ→ナデ
76	P46		皿	欠	11.8	9.3	1.0	橙	
77	P32	黒色土器	椀	欠	(14.75)		(3.25)	橙	内黒
78	P40	土師器	椀	欠		8.95	(2.1)	にぶい黄橙	
79	P31		椀	欠		8.5	(2.5)	灰白	
80	P50		甕	欠	18.6		(10.0)	赤褐	煤付着
81	P47		甕	欠	(36.4)		(5.9)	にぶい褐	
82	P37	灰釉陶器	壺	欠	17.0		(3.6)	灰	美濃?

掲載番号	遺構名	種別	器種	状態	計測値cm 口径	底径	残高	外面色調	備考
83	P29	灰釉陶器	壺	欠	胴部径23.0		(9.3)	灰	美濃四足壺?(9C後半)
84	P42	平瓦		欠	11.5×12×厚3.2			にぶい橙	内布目、外ナデ
85	P44			欠	9×5.5×厚2.2			灰	須恵質、内外布目
86	P27			欠	10×8.5×厚2.1			灰	瓦質、内布目、外縄目
87	溝1	土師器	杯	欠	13.0	9.0	3.0	橙	周縁ヘラキリ、中央ユビオサエ
88			杯	欠	11.9		(2.4)	にぶい橙	
89			杯	欠	13.4	8.6	2.1	橙	
90			椀	欠	12.3	6.9	4.1	にぶい橙	
91		黒色土器	椀	欠		7.9	(2.8)	にぶい橙	内黒
92			椀	欠		7.6	(3.6)	にぶい橙	内黒
93		須恵器	皿	欠	14.5	11.5	1.9	灰	底部ナデ
94	溝10	土師器	皿	欠	12.9	11.1	1.6	橙	中央ユビオサエ
95	溝12	土師器	皿	欠	(13.8)	(12.2)	1.1	にぶい橙	周縁ヘラキリ?内外丹塗
96	河道	土師器	杯	欠	(16.0)	(12.5)	3.2	橙	内外面丹塗
97			杯	欠	(13.0)	8.3	3.0	灰白	
98			杯	欠	11.7	8.0	3.1	橙	
99			杯	欠	12.0	9.2	2.2	灰白	
100			皿	欠	(15.8)	(13.4)	0.9	にぶい黄橙	
101			皿	欠	(10.0)	(7.2)	1.2	橙	
102			皿	欠	(10.2)	(8.0)	1.65	橙	
103			皿	欠	9.6	7.2	1.6	灰黄	
104			皿	欠	9.6	8.0	1.5	灰黄	
105			皿	欠	8.8	7.0	1.4	橙	
106			皿	欠	8.4	6.7	1.3	灰白	
107			高杯?	欠		(23.2)	3.8	橙	丹塗?
108			椀	欠	21.3	10.5	7.0	橙	
109			椀	欠		(7.0)	(3.0)	浅黄橙	
110			椀	欠		5.5	(2.3)	褐灰	
111		黒色土器	椀	欠		6.6	(4.5)	灰白	内黒
112			皿	欠	11.7	7.9	2.0	にぶい黄橙	内黒、外面丹塗か
113			椀	欠		6.2	(1.4)	黒褐	内黒
114		須恵器	杯	欠		10.0	(1.5)	灰	
115			椀	欠		(6.8)	2.1	灰白	
116			高杯	欠			5.4	灰	
117		瓦質土器	捏鉢	欠	(29.4)		(3.3)	灰	
118		土師器	竈	欠	27.0		(11.3)	にぶい黄橙	
119			椀	欠	(16.6)		4.4	灰白	
120			椀	欠		6.1	1.75	灰白	
121			椀	欠		(6.6)	1.5	灰白	
122			椀	欠		6.6	(1.7)	灰白	
123			皿	欠	(7.6)	(6.4)	1.25	灰白	
124	遺構に伴わない遺物	土師器	甕	欠	13.8		(1.6)	灰黄褐	
125			杯	欠	(7.6)		2.65	灰白	内外面丹塗
126			杯	欠	14.7	10.0	3.1	灰黄褐	丹塗
127			杯	欠	13.7	10.0	2.35	橙	
128			杯	欠	12.9	7.4	2.6	にぶい橙	内外面丹塗
129			杯	欠	12.95	8.6	3.35	にぶい黄橙	内外面丹塗
130			杯	欠	12.4	9.8	3.0	にぶい橙	内外面丹塗
131			杯	欠	(12.8)	(8.8)	3.0	浅黄橙	
132			杯	欠	12.6	9.4	2.8	にぶい橙	内外面丹塗
133			杯	欠	13.2	9.0	(3.0)	明赤褐	内面丹塗
134			杯	欠	12.9		(3.0)	にぶい黄橙	丹塗
135			杯	欠	12.4	8.3	2.9	灰黄褐	丹塗
136			杯	欠	12.6	8.1	2.5	にぶい黄橙	
137			杯	欠	(12.2)	(8.1)	2.8	にぶい黄橙	
138			杯	欠	(12.0)	(8.4)	2.7	にぶい橙	外面丹塗
139			杯	欠	(11.6)	(7.4)	3.1	にぶい黄橙	
140			杯	欠	12.2	8.0	2.9	にぶい黄橙	
141			杯	欠	(14.0)	(8.3)	3.2	灰白	
142			杯	欠	12.1	8.0	2.7	にぶい黄橙	
143			杯	欠	11.2	8.3	2.4	橙	
144			杯	欠	11.8	8.8	(3.3)	明赤褐	
145			杯	欠		11.0	(1.8)	にぶい黄橙	丹塗
146			皿	欠	(12.0)	(10.4)	1.55	にぶい橙	
147			皿	欠	13.4	11.6	1.35	にぶい橙	丹塗
148			皿	欠	13.3	12.0	1.7	浅黄橙	丹塗
149			皿	欠	12.4	9.9	1.35	浅黄橙	内外面丹塗
150			皿	欠	(14.1)	(13.4)	1.25	にぶい橙	外面丹塗
151			皿	欠	13.9	12.0	1.5	橙	
152			皿	欠	(11.9)	(10.5)	1.8	橙	
153			皿	欠	8.6	6.2	1.2	灰白	
154			皿	欠	(9.3)	(7.6)	1.95	灰黄褐	
155			皿	欠	(8.9)	(6.5)	1.2	灰白	
156			皿	欠	9.2	7.2	1.3	橙	
157			皿	欠	8.8	7.4	0.9	にぶい黄橙	
158			皿	欠	8.9	7.6	1.2	灰白	
159			皿	欠	(8.5)	(7.0)	1.15	にぶい橙	
160			皿	欠	(8.4)	(6.4)	1.3	にぶい黄橙	
161			皿	欠	8.2	5.8	1.0	明赤褐	
162			皿	欠	9.0	5.5	0.8	橙	
163			皿	欠	8.6	6.0	0.8	灰白	
164			椀	欠	15.7		(4.5)	明赤褐	外面丹塗
165			椀	欠	(14.8)	(8.6)	5.05	橙	
166			椀	欠	15	8.8	5.2	明赤褐	

掲載番号	遺構名	種別	器種	状態	計測値cm 口径	底径	残高	外面色調	備考
167	遺構に伴わない遺物	土師器	椀	欠	11.8	6.1	4.1	にぶい橙	
168			椀	欠	(14)	11.4	3.25	灰白	外面丹塗
169			椀	欠		9.2	(3.1)	浅黄橙	外面丹塗
170			椀	欠	13.8		(3.7)	灰白	
171			椀	欠		7.6	(2.2)	にぶい赤褐	
172			椀	欠		5.9	(2.3)	浅橫橙	
173			椀	欠		(5.6)	2.4	灰白	
174		緑釉陶器	椀	欠			(2.2)	濃緑色	硬質、10C後半近江
175		青磁	碗	欠	(12.8)		(3.2)	オリーブ灰	越州窯
176		黒色土器	皿	欠	(11.8)	(5.7)	(2.2)	橙	内黒
177			椀	欠	13.4	6.8	5.2	にぶい黄橙	内黒
178			椀	欠	13.3	7.5	3.7	橙	内黒
179			椀	欠		(8)	3.15	にぶい橙	内黒
180			椀	欠		7.2	(2.4)	橙	内黒
181			椀？	欠		7.3	(1.5)	明赤褐	内黒
182			壺？	欠		(11.7)	12	にぶい橙	
183		須恵器	杯蓋	欠	(14.8)		(2.1)	黄灰	
184			杯	欠		7.4	(1.65)	灰白	
185			杯	欠		8	(2.8)	灰	
186			杯	欠		9.3	(1.2)	灰白	
187			椀	欠	13		(4.5)	灰	
188			椀	欠	(16.6)		(4.5)	灰	
189			鉢	欠	(16.8)		(5.1)	灰白	
190			杯	欠	11	6.6	(3.5)	灰	
191			椀	欠	(6.2)		2.6	灰	
192			壺	欠	12.6		(5.3)	灰	
193			壺？	欠		11.6	(2.9)	灰	内面カキメ
194			壺	欠		(15.2)	10.2	灰白	外面カキメ
195			甕	欠	27.9		(8)	にぶい黄橙	
196			甕	欠	(29.8)		7.2	灰白	
197		土師器	甕	欠	(23.2)		4.5	にぶい黄橙	
198			甕	欠	21.8		(7)	にぶい褐	
199			杯	欠	(13.6)	(9.4)	3	橙	内面丹塗、周縁ヘラキリ、中央ユビオサエ
200			杯	欠	13.2	9.6	3.3	橙	周縁ヘラキリ、中央ユビオサエ
201			杯	欠	(12.3)	(8.3)	2.7	にぶい黄橙	周縁ヘラキリ、中央ユビオサエ
202			杯	欠	13	9	(2.8)	橙	
203			皿	欠	17.8	8.6	2.3	橙	
204			杯	欠	9.6	5.9	3.7	灰黄褐	中心までヘラキリ
205			杯	欠	9.9	7.5	2.3	にぶい橙	ヘラキリ→ナデ
206			杯	欠	8.4	5.7	2.3	浅黄橙	ヘラキリ→ナデ
207			皿	欠	(13.6)	(13)	1.4	灰白	内面丹塗
208			皿	欠	13.2	10.8	1.45	灰黄	内外面丹塗、周縁ヘラキリ、中央ユビオサエ
209			皿	欠	12.4	11.2	1.6	にぶい赤褐	内外丹塗？
210			皿	欠	11	9.6	1.2	明赤褐	ヘラキリ→ナデ
211			皿	欠	9.4	7.6	1.5	灰白	

掲載番号	遺構名	種別	器種	状態	計測値cm 口径	底径	残高	外面色調	備考
212	遺構に伴わない遺物	土師器	皿	欠	9	6	1.3	橙	
213			皿	欠	8	7	1.05	橙	ヘラキリ→オコシ
214			皿	欠	8.9	7	1.2	橙	ヘラキリ
215			皿	欠	(7.1)	(5.2)	1.1	灰白	ヘラキリ
216			皿	完	8.8	6.1	1.2	橙	ヘラキリ
217			皿	欠	(12)		(1.9)	浅黄橙	重ね焼き痕
218			皿	欠	10		(2.1)	橙	
219			皿	欠	8.8	6.2	2	灰白	板目痕
220		黒色土器	皿	欠	(11.8)	7.6	2.4	にぶい橙	
221			椀	欠	16.7		(3.2)	にぶい橙	
222			椀	欠	13.8		(4.1)	にぶい橙	
223			椀	欠		7	(1.3)	灰白	
224		土師器	椀	欠	15.8		(4.9)	灰白	
225			椀	欠	(14.8)		(2.8)	灰白	
226			椀	欠		10.8	(3.8)	にぶい橙	
227			椀	欠		7.4	(2.8)	にぶい黄橙	
228			椀	欠		5.6	(2.7)	浅黄橙	
229			椀	欠		5.6	(1.8)	灰白	
230			椀	欠		5.9	1.6	灰白	
231			甕	欠	17.8		(8.7)	橙	
232			甕	欠	(35.5)		(17.8)	にぶい黄橙	
233			甕	欠			(15.2)	にぶい褐	
234		手づくね	鉢	欠	3.5		2.4	灰白	ユビオサエ
235		須恵器	杯	欠		8.8	(1.6)	灰	
236			杯	欠		(9.3)	(2.5)	灰	
237			杯？	欠		11.4	(1.6)	灰白	
238			椀	欠	(16.2)		3.6	灰白	
239			椀	欠	(13.8)		2.4	灰白	
240			杯?	欠		5.8	(2.15)	灰白	ヘラキリ
241			皿	欠	(12.8)		2.3	灰白	
242			壺	欠	(14.2)		(2.9)	灰	
243			人甕	欠	(24)		3.95	灰	
244			甕	欠	(33.8)		(8.6)	灰	
245		須恵器？	甕	欠	25		(16)	灰	内ナデ、外格子叩き
246		緑釉陶器	輪花椀	欠			(2.1)	濃緑色	硬質、10C後半近江
247		青磁	碗	欠			(2.9)	薄灰オリーブ	
248		丸瓦		欠	5.5×6.4×厚1.6			灰	外ナデ
249				欠	17.5×13.3×厚2.3			灰白	内布目、外ナデ
250		平瓦		欠	11.2×5.3×厚1.75			灰	須恵質、内布目、外縄目
251				欠	13.1×8.65×厚1.9			暗灰	須恵質、内布目、外縄目
252				欠	11×11.5×厚2			にぶい褐	内布目、外縄目
253				欠	18×14×厚2.5			にぶい褐	内布目、外縄目
254				欠	12.2×11.7×厚2.1			灰	須恵質、内布目
255				欠	7.5×15×厚2.3			にぶい黄橙	内布目、外縄目
256				欠	8.8×9.8×厚1.9			にぶい黄橙	内布目、外縄目
257				欠	9×12.5×厚1.8			灰褐	内布目、外縄目
258				欠	5.8×5.13×厚2.0			灰白	須恵質、内布目、外格子タタキ

北溝手遺跡

掲載番号	地区	遺構名	種別	器種	状態	計測値cm 口径	底径	残高	外面色調	備考
1	Ⅲ	上壙１	土師器	甕	ほぼ完	15.9		25.6	橙	
2		上壙２	土師器	高杯	完	14.6	10.1	11.8	にぶい橙	
3				高杯	完	15.8	10.3	12.15	にぶい橙	
4				高杯	欠	15.9	12.4	14.6	にぶい橙	
5				甕	ほぼ完	18.0		31.6	にぶい黄橙	
6				甕	完	12.8		21.2	にぶい黄橙	
7		河道１	弥生土器	壺	欠	15.0		(5.0)	褐灰	
8				壺	欠	13.6		(6.2)	明赤褐	
9				壺	細			(5.6)	にぶい黄橙	
10				甕	欠	15.8		(7.7)	にぶい黄橙	
11				甕	欠		3.3	(5.0)	浅黄	
12				甕	細			(6.5)	にぶい黄橙	外面タタキ
13				甕	細			(3.7)	にぶい黄橙	外面タタキ
14				高杯	欠		12.0	(4.5)	にぶい橙	
15				器台	欠		29.0	(12.6)	橙	
16			土師器	直口壺	欠	11.2		(12.4)	にぶい橙	
17				小型丸底壺	欠			(5.5)	にぶい黄橙	
18				甕	欠	16.0		(11.7)	にぶい褐	
19				鉢	欠	14.4		(4.3)	橙	
20				高杯	完	14.0	9.3	12.2	橙	
21				高杯	欠	14.9		(7.4)	橙	
22				高杯	欠	22.6		(7.5)	にぶい黄橙	
23				高杯	欠	15.2	11.2	13.1	橙	
24				甕	欠	14.1		(16.4)	にぶい黄橙	
25				甕	欠	26.8		26.8	にぶい橙	
26	Ⅳ	河道１	弥生土器	壺	細	35.7		(5.65)	浅黄	
27				壺	欠	25.0		(7.7)	にぶい赤褐	
28				壺	欠	17.4		(5.0)	にぶい橙	
29				壺	欠			(11.1)	橙	
30				壺	欠	14.0		(8.15)	橙	
31				壺	欠	17.6		(6.8)	橙	
32				壺	欠	21.7		(4.25)	にぶい黄橙	

掲載番号	地区	遺構名	種別	器種	状態	計測値cm 口径	底径	残高	外面色調	備考
33	Ⅳ	河道１	弥生土器	壺	欠	16.0		(8.1)	橙	
34				壺	欠	20.0		(5.4)	にぶい橙	
35				甕	細			(9.4)	にぶい赤褐	
36				甕	欠	24.9		(4.0)	にぶい黄橙	
37				甕	欠	16.5		(5.5)	にぶい黄橙	
38				甕	欠	14.2		(11.5)	橙	
39				甕	欠	13.7		(6.8)	橙	
40				甕	欠	19.6		(5.1)	浅黄橙	
41				甕	欠	17.9		(4.5)	にぶい橙	
42				甕	欠	14.0		(3.9)	橙	
43				甕	欠	12.6		(4.4)	にぶい橙	
44				甕	欠	14.5		(5.8)	にぶい橙	
45				甕	欠	11.7		(7.5)	にぶい橙	内外ケズリ
46				甕	欠	9.0		(8.0)	にぶい橙	ユビオサエ
47				甕	欠	7.0		(5.8)	にぶい黄橙	
48				器台	細			(4.0)	橙	線刻弧帯文
49				特殊器台	細	(6.0)	(7.0)		橙	
50				高杯	細	(26.6)		(5.7)	にぶい褐	
51				高杯	細	(25.0)		(7.8)	にぶい黄橙	
52				高杯	細	(23.8)		(3.8)	にぶい橙	
53				高杯	欠	20.65		(3.6)	橙	
54				高杯	欠	14.5		(6.0)	にぶい橙	
55				高杯	欠		13.0	(6.2)	にぶい橙	
56				鉢	欠	(41.2)		(14.8)	にぶい黄橙	
57				鉢	欠	10.0	5.4	4.9	にぶい橙	
58				鉢	欠	12.7		5.0	にぶい橙	
59				台付鉢	欠		10.1	(5.6)	明赤褐	製塩土器か
60				台付鉢	欠		11.6	(4.5)	にぶい黄橙	
61			土師器	直口壺	欠	9.3		15.3	橙	
62				小型丸底壺	欠	7.8		(6.7)	にぶい黄橙	
63				甕	欠	11.1		(4.2)	にぶい黄橙	
64				甕	欠	15.2		(10.9)	橙	

掲載番号	地区	遺構名	種別	器種	状態	計測値cm			外面色調	備考
						口径	底径	残高		
65	Ⅳ	河道1	土師器	甕	欠	14.8		(17.0)	明黄褐	
66				甕	欠	17.0		26.8	橙	
67				甕	細	(24.0)		(10.4)	にぶい黄橙	
68				甕	欠			(10.0)	にぶい黄橙	
69				甕	欠	15.0		(9.0)	橙	
70				甕	欠	12.7		(9.2)	浅黄橙	
71			弥生土器	甕	欠	13.8		(7.9)	にぶい橙	
72			土師器	甕	欠	(13.8)		(5.9)	橙	
73				甕	欠	(16.1)		(5.3)	にぶい黄橙	
74				鉢	ほぼ完	12.4		6.3	にぶい黄橙	
75				高杯	欠	17.3		13.0	橙	
76				高杯	欠	15.0		(5.8)	にぶい橙	
77				高杯	欠		12.8	(7.3)	橙	
78			弥生土器	壺	欠	17.4		(5.6)	橙	
79				壺	細			(1.7)	明赤褐	
80				壺	細			(4.1)	にぶい黄橙	
81				無頸壺	細	12.0		(4.0)	にぶい黄橙	
82				壺	欠	9.6		4.7	にぶい黄橙	
83				長頸壺	欠	19.0		(12.5)	橙	
84				壺	欠	(15.8)		(8.7)	にぶい黄褐	
85				長頸壺	欠	12.9		(10.5)	にぶい橙	
86				壺	欠	19.8		(6.8)	にぶい黄橙	
87				壺	細	(17.2)		(4.0)	橙	
88				壺	欠	21.6		(4.9)	橙	
89				壺?	細			(7.5)	明赤褐	
90				壺	欠	29.6		(4.2)	橙	
91			弥生土器	壺	欠	(29.9)		(6.3)	にぶい橙	
92				壺	欠	45.9		(5.3)	橙	
93				壺	欠			(19.7)	橙	外面ハケ下にタタキ痕
94				長頸壺	欠			(14.5)	橙	
95				壺	細	(10.4)	(7.7)		にぶい黄橙	外面鹿線刻
96				壺	欠		3.2	(8.4)	橙	
97				壺	欠		4.4	(6.6)	にぶい赤褐	
98				壺	欠		(5.4)	(11.8)	にぶい黄橙	
99				甕	細	(26.0)		(6.8)	にぶい赤褐	口縁部貼付突帯
100				甕	欠	21.9		(5.55)	にぶい橙	
101				甕	欠	15.0		(6.4)	にぶい橙	
102				甕	欠	14.2		(8.9)	にぶい黄橙	
103				甕	細	(24.0)		(8.7)	橙	
104				甕	欠	22.2		(8.3)	橙	
105				甕	欠	14.3		(7.6)	にぶい橙	
106				甕	欠	17.8		(6.2)	にぶい橙	
107				甕	欠	15.6		(5.2)	にぶい黄橙	
108				甕	欠	17.8		(6.3)	橙	
109				甕	欠	15.2		(9.2)	にぶい黄橙	
110				甕	欠	15.5		(8.5)	橙	
111				甕	欠	15.0		(8.8)	橙	
112				甕	欠	13.75		(8.3)	にぶい褐	
113				甕	欠	16.4		(4.7)	にぶい橙	
114				甕	欠	15.6		(5.2)	にぶい黄橙	
115				甕	欠	15.0		(8.0)	にぶい橙	
116				甕	欠	14.7		(4.9)	にぶい橙	
117				甕	欠	11.6		(12.4)	明赤褐	
118				甕	欠	15.0		(3.7)	にぶい橙	
119				甕	欠	14.0		(3.5)	にぶい橙	
120				甕	欠	11.9		(4.8)	橙	
121				甕	欠	14.3		(7.0)	橙	
122				甕	欠	15.0		(8.1)	橙	
123				甕	欠	16.0		(4.2)	にぶい橙	
124				甕	欠	13.8		(5.8)	灰黄褐	
125				甕	欠	13.1		(6.9)	にぶい橙	
126				甕	欠	16.0		(5.7)	橙	
127				甕	欠	18.6		(7.0)	にぶい橙	
128				甕	欠	(14.6)		(5.7)	にぶい橙	
129				甕	欠	13.6		6.1	にぶい黄橙	
130				甕	欠	13.6		(5.4)	にぶい黄橙	
131				甕	欠	10.5		(4.7)	橙	
132				甕	欠	11.4		(6.8)	にぶい黄橙	外面櫛状工具によるナデ
133				甕	欠	11.0		(5.9)	灰褐	
134				甕	欠		3.9	(4.0)	灰褐	
135				甕	欠		6.0	(2.8)	にぶい黄橙	
136				甑	欠		5.6	(7.3)	にぶい黄橙	
137				甕	欠		4.4	2.25	灰黄褐	
138				甕	欠		3.9	(5.4)	にぶい橙	
139				甕	欠		4.2	(7.0)	にぶい黄橙	
140				甕	欠		2.9	(3.3)	にぶい黄橙	
141				鉢	欠		3.5	(5.8)	にぶい橙	外面ユビオサエ
142				鉢	欠	11.6		(6.5)	にぶい黄橙	
143				鉢	欠	12.7		(5.5)	にぶい橙	
144				鉢	欠	(17.4)		(5.5)	にぶい赤褐	
145				鉢	欠	21.9		(6.0)	にぶい橙	
145				甕	欠		5.0	(1.7)	にぶい橙	
146				鉢	欠	12.0	3.5	7.6	橙	
147				鉢	欠	16.4	5.8	8.0	にぶい黄橙	
148				鉢	欠	6.7	3.1	5.2	にぶい橙	
149	Ⅳ	河道1	弥生土器	鉢	欠	16.6		(7.5)	にぶい橙	
150				鉢	欠	9.9		(6.0)	にぶい黄橙	
151				鉢	欠		3.9	(7.4)	橙	
152				鉢	細	(34.8)		(6.3)	にぶい橙	
153				鉢	細	(31.6)		(9.7)	橙	
154				鉢	細	(37.8)		(8.8)	にぶい橙	
155				鉢	細	(38.5)		(10.0)	橙	
156				鉢	細	37.4		(13.8)	にぶい橙	
157				鉢	欠		8.75	(4.8)	にぶい黄橙	底部葉脈痕
158				鉢	欠	11.9	3.0	9.2	にぶい黄橙	
159				鉢	欠		3.7	(7.65)	浅黄	ユビオサエ成形
160				鉢	欠	14.7		(8.1)	にぶい褐	ユビオサエ成形
161				鉢	欠	11.8	4.0	5.1	黄灰	ユビオサエ成形
162				台付鉢	欠		14.5	(15.6)	橙	
163				台付鉢	欠	9.7		(8.0)	にぶい黄橙	
164				台付鉢	欠		6.4	(3.4)	にぶい黄橙	
165				台付鉢	欠		13.2	(4.8)	にぶい橙	
166				台付鉢	欠		6.0	(4.3)	にぶい橙	製塩土器か
167				高杯	欠	20.8		(4.0)	にぶい橙	
168				高杯	細	(18.6)		(3.3)	にぶい橙	
169				高杯	細	(外) 20.0		(4.0)	橙	
170				高杯	欠	23.0		(4.3)	橙	
171				高杯	細	(21.6)		(3.6)	にぶい黄橙	
172				高杯	細	(19.6)		(5.0)	明赤褐	
173				高杯	欠	17.8		(5.2)	橙	
174				高杯	欠	21.0		(4.1)	橙	
175				高杯	欠			(16.2)	橙	筒部のみ
176				高杯	欠			(7.3)	にぶい黄橙	矢羽根状透かし
177				高杯	欠		12.7	(5.5)	にぶい黄橙	
178				高杯	欠		(14.2)	(5.1)	にぶい褐	
179				高杯	欠		13.4	(5.0)	にぶい橙	
180			弥生土器	高杯	欠			(4.6)	にぶい黄橙	
181				高杯	欠			(6.9)	にぶい橙	
182				高杯	欠	17.1		(8.1)	にぶい橙	
183				高杯	欠	16.8		(9.7)	にぶい橙	
184				高杯	欠	18.4		(9.35)	橙	
185				高杯	欠	10.2		(5.8)	にぶい褐	
186				高杯	欠		10.15	(4.2)	にぶい橙	
187				高杯	欠		10.4	(4.5)	橙	
188				高杯	欠	9.7		(2.3)	黄灰	
189				高杯	欠		12.5	(5.4)	橙	
190				高杯	欠			(5.0)	橙	
191				器台	欠		22.1	(8.0)	にぶい黄橙	
192				器台	欠		32.6	(7.5)	橙	
193			土師器	壺	欠	18.0		(5.9)	橙	
194				壺	欠	19.6		(7.5)	にぶい橙	
195				壺	欠			(6.7)	橙	屈曲部刻目突帯
196				直口壺	欠	10.9	3.9	12.5	橙	
197				直口壺	欠	(11.2)			にぶい黄橙	
198				小型丸底壺	完	8.2		11.5	橙	
199				小型丸底壺	完	8.8		9.5	橙	
200				小型丸底壺	1/5	10.0		(7.6)	橙	
201				甕	欠	(11.0)		(4.6)	橙	
202				甕	欠	11.7		(4.6)	にぶい黄橙	
203				甕	欠	12.9		(5.8)	橙	
204				甕	欠	14.8		(3.9)	にぶい橙	
205				甕	欠	15.0		5.5	にぶい黄橙	
206				甕	欠	15.0		(7.7)	橙	
207				甕	欠	(12.0)		(3.3)	にぶい橙	
208				甕	欠	13.0		(3.9)	にぶい橙	
209				甕	欠	(13.4)		(3.8)	橙	
210				甕	欠	9.6		(5.8)	橙	
211				甕	欠	10.6	4.8	(10.3)	にぶい黄橙	
212				甕	完	7.2		12.6	にぶい黄橙	
213				甕	欠	13.0		(4.4)	にぶい橙	
214				甕	欠	13.6		(4.6)	にぶい橙	
215				甕	欠	17.0		(4.3)	にぶい橙	
216				甕	欠	16.4		(10.6)	にぶい橙	
217				甕	欠	15.9		(8.0)	橙	
218				甕	欠	14.0		(7.2)	橙	
219				甕	欠	14.0		(6.7)	にぶい黄橙	
220				甕	欠	14.8		(7.1)	にぶい黄橙	
221				甕	欠	15.7		(8.9)	にぶい黄橙	
222				鉢	細	(21.6)		(9.2)	橙	
223				鉢	細	19.9		(6.2)	にぶい橙	口縁内面擬凹線
224				高杯	欠	15.0		(7.6)	橙	杯部下半ケズリ
225				高杯	欠	16.6		(5.8)	にぶい黄橙	
226				高杯	欠	14.6		(4.9)	橙	
227				高杯	欠			(6.3)	橙	
228				鼓形器台	欠			(3.8)	にぶい黄橙	
229				甕	完	5.4		5.2	にぶい黄橙	手捏ね
230				鉢	欠	6.8		(4.3)	にぶい黄橙	手捏ね
231				鉢	欠	6.8		(3.3)	にぶい黄橙	手捏ね
232				鉢	欠	4.8		(2.5)	橙	手捏ね
233			弥生土器	鉢	完	4.3		2.3	にぶい褐	手捏ね

掲載番号	地区	遺構名	種別	器種	状態	計測値cm 口径	底径	残高	外面色調	備考
234	Ⅳ	河道１	土師器	高坏	欠			(4.9)	にぶい橙	手捏ね
235			弥生土器	台付鉢	ほぼ完	5.9		4.55	にぶい黄橙	手捏ね
236			土師器	甑	欠			(16.7)	にぶい黄橙	
237				甑	欠		(4.5)	(9.4)	にぶい黄橙	
238				甑	細	(5.5)	(4.1)	(2.2)	にぶい橙	
239				甑	細	(4.4)		0.9	橙	
240			須恵器	甕	細					内外ナデ
241				甕	細		6.6			内外ナデ
242	Ⅴ	河道１	弥生土器	無頸壺	欠	11.7		11.3	にぶい黄橙	
243				壺	細			(4.1)	橙	粘土紐による貼付文
244				鉢	欠	19.0	3.2	(5.1)	にぶい橙	
245				製塩土器	欠			(4.5)	にぶい黄橙	外面指ナデ
246			土師器	鉢	欠		12.3	(5.2)	にぶい黄橙	
247				高杯	欠			(8.1)	橙	
248			須恵器	甕	細					初期須恵器
249	Ⅲ	遺構に伴わない遺物	須恵器	杯蓋	欠	13.5		4.1	灰黄	
250	Ⅳ			杯身	欠	12.0	13.3	5.2	灰白	
251	Ⅰ			杯身	欠	11.2	5.4	(3.0)	灰	
252	Ⅲ	土壙墓１	青磁	碗	完	15.4	5.4	6.8	釉：灰白	龍泉窯系12~13C
253				碗	完	15.9		7.0	釉：灰白	
254			青白磁	合子蓋	完	6.6	5.0	2.2	釉：灰白	同安窯系12～13C、裏面「段?家合子品」
254				合子身	完	5.8		2.8	釉：灰白	
							5.1			
255			青磁	皿	完	10.1	5.1	2.1	露：浅黄	龍泉窯系12~13C
256				皿	完	10.2	4.6	2.0	露：灰白	
257				皿	完	10.4		2.1	露：灰白	
258				皿	欠	11.75		(2.15)	露：灰白	
259				碗	細		6.7	(2.0)	露：灰白	
260			土師器	皿	欠	8.3	6.0	1.3	にぶい黄橙	
261				皿	欠	7.5	5.35	1.4	浅黄橙	
262				皿	欠	7.2	5.2	1.25	浅黄橙	
263				皿	欠	7.6	8.8	1.6	にぶい黄橙	
264		土壙墓２	土師器	皿	欠	11.8		(2.6)	にぶい橙	
265	Ⅰ	土壙４・５	土師器	高杯	欠	22.0		(4.7)	橙	303と接合
266			平瓦		破片	9.7×14.4×厚2.8			にぶい黄橙	内布目、外縄目
267		P4	土師器	杯	欠	13.8	7.8	3.4	明赤褐	
268		P4		杯	欠	11.0	6.0	(2.9)	橙	
269		P3		杯	欠	10.3	11.7	3.3	にぶい橙	
270		P4		皿	欠	14.1		1.2	橙	
271		P5	黒色土器	椀	欠	13.9		(4.6)	にぶい橙	内黒
272		P2	土師器	椀	欠		8.0	(3.1)	にぶい橙	
273		P4		甕	欠	17.6		(5.9)	橙	
274		P6	丸瓦		破片	(10.2)	(9.2)	3.25	灰白	
275		溝１	土師器	杯	ほぼ完	13.0	9.0	3.4	にぶい橙	
276				杯	ほぼ完	13.4	10.2	3.6	橙	
277				杯	欠	13.2	9.5	2.9	橙	
278				杯	ほぼ完	12.6	8.9	3.3	にぶい橙	
279				杯	欠	12.4	8.8	3.1	にぶい黄橙	
280				杯	欠	11.7	8.5	3.1	にぶい橙	
281				杯	欠		8.0	(2.0)	にぶい橙	
282				皿	欠	15.4	13.0	1.5	にぶい橙	
283				皿	欠	15.0	13.1	1.5	浅黄橙	
284				皿	欠	14.9	13.1	1.5	にぶい橙	
285				皿	欠	14.6	13.0	1.7	にぶい黄橙	
286				皿	欠	13.8	12.5	1.8	橙	
287				皿	欠	14.0	9.0	2.2	にぶい橙	
288				皿	欠	17.6	13.2	2.15	にぶい橙	
289			黒色土器	皿	欠	13.7	7.9	1.9	にぶい黄橙	内黒
290				椀	欠	16.4	6.8	4.0	にぶい黄橙	内黒
291			須恵器	杯蓋	細			(1.9)	灰	
292		溝２	土師器	高杯	細			(2.2)	明赤褐	
293			須恵器	杯	欠	19.0	12.8	6.5	褐灰	324と接合
294				杯	欠	12.8	10.0	3.6	灰白	
295				平瓶	欠	10.8		(7.8)	灰白	
296				甕	欠	34.4		(10.7)	灰	
297		土器溜まり１	土師器	椀	欠	16.2	6.6	6.5	灰褐	
298				椀	欠	14.0	6.5	5.2	にぶい橙	
299				皿	欠	8.6	5.8	1.6	にぶい褐	
300		土器溜まり２	土師器	蓋	細		2.1	(2.1)	にぶい橙	
301				杯	欠	14.0	9.2	2.7	にぶい黄橙	
302				杯	欠	10.8	8.8	3.2	明赤褐	
303			緑釉陶器	椀	欠	12.45	5.6	4.15	灰白	京都、9C中頃~後半、硬質、円盤状高台
304			土師器	皿	欠	14.0	13.3	1.6	橙	
305				皿	欠	14.4	13.5	1.1	にぶい橙	
306				皿	欠	12.1	10.3	1.2	にぶい黄橙	
307				椀	欠			(3.0)	橙	
308				椀	欠			(2.3)	橙	
309			黒色土器	皿	欠	12.1	6.0	2.6	橙	内黒
310				椀	欠			(1.2)	にぶい橙	内黒
311				椀	欠			(5.0)	明赤褐	内黒
312			土師器	甕	欠			(3.6)	にぶい黄橙	
313				鍋	欠	(8.0)	(10.9)		にぶい橙	
314			灰釉陶器	椀	欠			(2.7)	灰白	K90（9C後半）、刷毛塗り、重ね焼き

掲載番号	地区	遺構名	種別	器種	状態	計測値cm 口径	底径	残高	外面色調	備考
315	Ⅰ	土器溜まり２	須恵器	杯蓋	欠			(2.25)	灰白	
316				平瓶？	欠	8.1		(6.1)	灰	
317				壺	欠			(5.4)	灰	
318				壺	欠			2.3	灰白	
319				壺	欠		11.3	(5.4)	灰	
320				壺	欠			(8.3)	灰白	
321				壺	欠		13.2	(9.7)	灰	
322				壺	欠			(5.9)	灰	
323				壺	欠			(7.2)	灰	
324				甕	欠	27.8		(7.1)	灰	
325				甕	欠	(21.9)		(6.4)	灰	
326				高杯	欠			(9.9)	灰	長方形透孔
327				硯	欠	10.6	(7.5)	1.5	灰	須恵器杯転用
328			丸瓦		破片	10.8×7.8×厚2.9			灰黄	内布目
329			平瓦		破片	15.4×10.6×厚1.8			灰白	縄目、内布目、外縄目
330					破片	11.5×11.9×厚3.3			黄灰	内布目
331					破片	12.2×11.3×厚2.4			灰白	縄目、内布目、外縄目
332					破片	9.9×6.6×厚2.2			灰白	縄目、内布目、外縄目
333					破片	8.4×6.3×厚1.65			にぶい黄橙	内刷毛目
334	Ⅲ	土器溜まり３	土師器	椀	欠	15.0	6.7	5.4	灰白	
335				椀	欠	14.5	6.2	5.1	にぶい黄橙	
336				椀	欠	14.0	6.1	4.9	にぶい黄橙	
337				椀	欠	13.9	5.8	4.8	灰白	
338				椀	欠	12.9	5.0	4.8	にぶい黄橙	
339				椀	欠	14.9		(4.7)	灰白	
340				椀	欠	14.8		(4.1)	にぶい黄橙	
341				椀	欠	14.1		(3.6)	灰白	
342				椀	欠		5.9	(3.4)	にぶい黄橙	
343				椀	欠		7.0	(2.6)	灰黄橙	
344				椀	欠		6.3	(2.4)	灰白	
345				椀	欠		6.1	(2.2)	灰白	
346				椀	欠		6.8	(3.0)	灰白	
347				椀	欠		6.1	(2.0)	灰白	
348				椀	欠		6.3	(1.4)	にぶい黄橙	
349				皿	完	7.8	6.2	1.3	浅黄橙	抜目
350				皿	ほぼ完	7.8	6.1	1.3	灰黄褐	
351				皿	ほぼ完	7.6	5.7	1.2	灰白	ヘラキリ
352				皿	ほぼ完	8.0	5.6	1.4	灰白	ヘラキリ
353				皿	欠	7.9	6.1	1.65	灰白	ヘラキリ
354				皿	欠	7.7	6.2	1.35	灰白	ヘラキリ
355				皿	欠	8.4	6.6	(1.6)	にぶい黄橙	ヘラキリ
356				皿	欠	9.7	6.1	2.0	灰白	ヘラキリ
357				皿	欠	9.0	6.0	2.45	灰白	糸切り
358				鍋	欠	45.4		(20.0)	にぶい褐	
359	Ⅰ	河道２	須恵器	杯蓋	欠				灰	
360				杯蓋	欠			(1.3)	灰	
361				杯蓋	欠			(2.3)	灰白	
362				杯蓋	欠	22.7		(2.5)	灰白	
363				杯蓋	欠	19.8		(1.7)	灰白	
364				杯蓋	欠	19.5		(1.65)	灰白	硯転用か
365				杯蓋	欠	15.7		(2.0)	灰	硯転用か
366				杯	欠	(14.8)		(1.9)	灰	
367				杯	欠	15.8	12.3	3.5	灰白	
368				杯	欠	12.8	10.0	3.85	灰白	
369				杯？	欠	11.75	6.75	(3.55)	灰白	
370				杯	欠	12.1		(4.6)	黄灰	
371				杯	欠			(3.3)	灰白	
372				皿	欠			(1.75)	灰白	
373				皿	欠	17.7	16.1	1.95	灰白	
374				皿	欠			(1.3)	黄灰	
375				皿	欠	15.2	14.2	2.2	にぶい黄橙	
376				壺	欠	(13.3)	11.7	1.35	灰	
377				壺	欠	5.2		(6.5)	灰	
378				壺	細	5.2		(2.8)	灰白	
379				壺？	細			(2.3)	灰白	
380			灰釉陶器	壺	細	(17.0)		(1.5)	灰	美濃か
381			須恵器	壺	細			(3.0)	灰	
382				壺	欠			(3.1)	灰	
383				壺	欠	11.8		(6.2)	灰	
384				壺	欠		11.0	(5.2)	灰	
385				壺	細			(1.6)	灰	
386				壺	破片	(4.8)	(2.2)	1.3	灰	飾耳
387				鉢	細	(20.5)		(5.3)	灰白	
388				甕	細			(7.3)	灰	
389				甕	欠		16.7	(4.4)	灰白	
390			土師器	杯蓋	細			(1.3)	にぶい褐	
391				杯蓋	細			(0.75)	にぶい黄橙	
392				蓋	欠	16.8		2.1	にぶい褐	
393				蓋	欠	15.2		(1.45)	にぶい褐	
394				杯	欠	16.2	12.0	3.2	橙	
395				杯	欠	13.1	9.5	3.35	灰黄褐	
396				杯	欠	12.8	9.4	3.0	明赤褐	
397				杯	欠	12.7	9.4	3.0	にぶい橙	
398				杯	欠	12.85	9.3	3.95	橙	
399				杯	欠	12.7	9.0	(2.6)	橙	

掲載番号	地区	遺構名	種別	器種	状態	計測値cm 口径	底径	残高	外面色調	備考
400	Ⅰ	河道２	土師器	杯	欠	12.4	8.7	2.7	橙	
401				杯	欠	12.0	8.1	2.9	橙	
402				杯	欠	11.9	8.3	(3.2)	にぶい橙	
403				杯	欠	11.3	7.8	3.2	橙	
404				杯	欠	9.4	7.0	2.0	にぶい橙	
405				杯	ほぼ完	11.3	6.6	2.4	にぶい橙	
406				杯	完	9.8	5.8	2.5	にぶい黄橙	
407				高杯	細			(2.1)	にぶい赤褐	
408				高杯	細			2.8	橙	
409				高杯	細			(2.15)	にぶい黄橙	
410				Ⅲ	細			(0.7)	橙	
411				Ⅲ	欠	15.2	13.7	1.7	明赤褐	
412				Ⅲ	欠	13.2	10.2	1.2	にぶい橙	
413				Ⅲ	欠	14.0	11.8	(1.3)	橙	
414				Ⅲ	欠	13.5	12.0	1.3	にぶい橙	
415				Ⅲ	欠	12.9	11.4	(1.7)	橙	
416				Ⅲ	欠	12.8	11.1	1.4	橙	
417				Ⅲ	欠	13.0	11.7	1.8	橙	
418				Ⅲ	欠	11.8	9.5	1.4	橙	
419				Ⅲ	欠	11.8	9.5	1.4	橙	
420				Ⅲ	完	9.2	6.2	1.9	にぶい黄橙	
421				Ⅲ	欠	10.0	6.2	1.3	にぶい橙	
422				椀	欠	(19.9)		6.7	にぶい橙	
423				椀	欠	14.3	7.5	4.0	灰黄褐	
424				椀	欠	11.8		4.3	灰黄	
425				椀	欠		7.6	(3.2)	橙	
426				椀	欠			(3.7)	にぶい黄橙	
427			緑釉陶器	椀	細			(1.7)	濃緑色	硬質，近江10C後半
428			黒色土器	Ⅲ	欠	12.7		2.05	にぶい黄橙	内黒
429				Ⅲ	欠	12.4	8.0	2.1	にぶい橙	内黒
430				椀	欠		7.2	(4.7)	にぶい赤褐	内黒
431				椀	欠	14.0		(3.9)	にぶい黄橙	内黒
432				椀	欠	15.0		(4.0)	にぶい橙	内黒
433				椀	欠	14.0	10.2	(3.8)	にぶい黄橙	内黒
434				椀	欠	11.8		4.85	にぶい黄橙	内黒
435				椀	欠	12.4	6.0	4.3	にぶい黄橙	内黒
436				椀	欠			1.5	にぶい橙	内黒
437			土師器	椀	欠	15.5		5.75	灰白	
438				椀	欠	15.8	6.2	5.4	にぶい黄橙	
439				椀	欠			2.9	灰白	
440				椀	欠			(1.9)	灰白	
441				椀	欠		6.2	(1.5)	灰白	
442				Ⅲ	欠	13.65	8.3	2.7	浅黄橙	
443				Ⅲ	欠	9.0	6.6	1.2	灰白	
444				Ⅲ	欠	8.8	8.2	1.2	浅黄橙	
445			須恵器	椀	欠	16.8		(3.3)	灰ｙ白	
446				捏ね鉢	細	(31.0)		(5.3)	黄灰	
447			土師器	甕	欠	19.7		(5.65)	にぶい黄橙	
448				甕	欠	16.4		(3.5)	にぶい黄橙	
449				甕	欠			11.0	にぶい褐	
450				鍋	細				にぶい黄橙	
451				竈	細	(6.5)	(6.0)	2.0	黒褐	
452				竈	細	(10.4)	(7.4)		にぶい橙	
453				竈	細	(7.8)	(11.2)	2.4	にぶい橙	
454			丸瓦		破片	5.7×7×厚3.5			灰白	
455					破片	18.6×7.7×厚2.8			灰	
456					破片	17×8.3×厚2.9			にぶい黄橙	
457					破片	9.5×12×厚3.3			灰	
458			平瓦		破片	5.7×6.2×厚2.6			灰	須恵質
459					破片	16.4×15.4×厚3.2			灰白	
460					破片	14.0×11.9×厚1.8			灰ｙ白	
461					破片	14.6×13.0×厚2.68			灰白	
462					破片	12.2×14.1×厚2.45			にぶい黄橙	
463	Ⅱ	河道２	須恵器	杯	欠	15.6	10.8	6.1	灰	
464				椀	欠		7.4	(2.8)	褐灰	
465				壺	欠		5.8	(3.8)	灰	
466				壺	細			(3.4)	灰黄	
467				鉢？	細			(2.2)	灰	
468				Ⅲ	欠	15.0	13.3	1.3	にぶい橙	
469			黒色土器	椀	欠			(1.85)	浅黄橙	
470			緑釉陶器	椀か皿	欠		7.0	(1.3)	濃緑色	近江10C末，段状高台，硬質
471				椀	欠		5.8	(2.2)	濃緑色	近江11C後半，段状高台，硬質
472			青磁	碗	欠		7.7	(2.1)	露：灰白	越州窯9C後半～10C前半
473			土師器	椀	欠	15.2		(4.6)	淡橙	
474				椀	欠	12.8	5.0	5.2	灰白	
475				椀	欠	11.6		3.7	灰白	
476			白磁	碗	欠	(15.7)		(2.2)	ｙ：灰白	

掲載番号	地区	遺構名	種別	器種	状態	計測値cm 口径	底径	残高	外面色調	備考
477	Ⅱ	河道２	土師器	Ⅲ	欠	9.0	7.0	1.1	灰ｙ白	
478				Ⅲ	欠	7.8	5.9	1.2	灰白	
479				Ⅲ	欠	7.3	5.7	1.05	浅黄橙	
480			青磁	碗	細			(3.4)	露：灰	
481				碗	欠			(2.8)	露：灰	
482	Ⅲ	河道２	須恵器	杯蓋	欠			(2.15)	灰	
483				甕	欠	(20.0)		(8.0)	灰	
484			土師器	杯	欠	14.8	13.8	2.6	橙	
485				杯	ほぼ完	13.5	12.4	3.3	橙	
486				椀	欠		8.0	(3.7)	にぶい橙	
487			黒色土器	椀	欠		9.1	(2.0)	にぶい黄橙	
488			土師器	椀	欠	15.0		(4.7)	灰白	
489				椀	欠	14.0	6.0	5.2	にぶい黄橙	
490				椀	欠	13.6	(6.8)	(4.5)	灰白	
491				椀	欠	14.8		(5.0)	灰白	
492				椀	欠	14.8		(3.6)	浅黄橙	
493				椀	欠	10.75		3.95	灰白	
494				椀	欠				灰白	
495				椀	欠			(1.85)	灰白	
496				Ⅲ	欠	7.6		2.35	淡黄	
497				Ⅲ	欠	(9.6)	6.7	1.8	浅黄橙	
498				Ⅲ	欠	7.8	6.2	1.4	灰白	
499				Ⅲ	欠	7.5	6.3	1.35	にぶい橙	
500				Ⅲ	欠	6.4	5.4	1.6	にぶい橙	
501			白磁	碗	欠	(15.8)		(4.3)	露：灰白	
502				碗	欠	15.0		(4.3)	露：灰白	
503				碗	欠	14.8		(4.05)	露：灰白	
504				碗	欠			(3.2)	露：灰白	
505				碗	細	(14.05)		(2.8)	露：灰白	
506				Ⅲ	欠	9.0		(1.3)	露：灰白	
507				Ⅲ	細			(1.9)	露：灰ｙ白	
508			青磁	Ⅲ	細			(0.8)	露：灰白	
509			須恵器	こね鉢	欠	(21.4)		(4.1)	灰	
510				椀	細		9.6	(4.2)	灰	糸切り
511				椀	細		6.0	(1.9)	灰白	糸切り
512			軒丸瓦瓦当		破片	8.8×8.7×厚2.7			にぶい黄橙	
513			丸瓦		破片	7.9×6.1×厚2.0			にぶい黄橙	
514					破片	11.5×9.2×厚3.2			灰白	
515			平瓦		破片	8.1×12.6×厚2.0			灰黄	
516					破片	10.0×9.8×厚1.95			淡黄	
517	Ⅴ	河道３	土師器	Ⅲ	欠	9.0	5.6	2.2	にぶい橙	
518				Ⅲ	欠		4.9	(1.3)	にぶい橙	
519				Ⅲ	欠	8.0	5.1	1.2	にぶい橙	
520				Ⅲ	欠	10.6		(2.0)	灰黄	
521			白磁	碗	欠	17.3		(4.5)	露：灰白	
522				碗	細		5.8	(2.1)	露：灰ｙ白	
523				碗	細	(16.8)		(2.4)	露：灰白	
524				碗	細	(17.0)		(2.8)	露：灰白	
525				碗	細			(4.0)	露：灰白	
526			須恵器	捏ね鉢	欠	21.0		(4.6)	灰	
527				鉢	欠	21.0	7.2	6.6	灰	
528			軒平瓦瓦当		破片	7.0×11.9×厚4.1			にぶい橙	
529			平瓦		破片	5.9×9.1×厚2.8			灰	須恵質
530					破片	5.6×7.2×厚1.5			灰白	
531					破片	9.3×7.3×厚2.3			青灰	須恵質
532			丸瓦		破片	17.3×11.5×厚2.4			灰白	
533	Ⅳ	遺構に伴わない遺物	土師器	椀	欠	9.7	4.1	4.1	浅黄橙	
534			須恵器	壺	欠	8.0		(3.6)	黄灰	
535			土師器	鍋	欠	37.6		(10.9)	黄灰	
536			平瓦		破片	(15.1)	(16.5)	3.6	にぶい褐	
537	Ⅴ		染付	碗	欠			(2.95)	露：灰ｙ白	
538			陶器	椀か皿	欠			(3.3)	露：灰	
539			染付	仏飯器	欠			(4.75)	露：灰白	
540				箱形湯呑	欠	7.6		(4.7)	露：灰白	
541				碗	欠	8.1	3.0	4.2	露：灰	
542				紅猪口	欠	7.2		(3.0)	露：灰白	
543				紅猪口	欠	6.9	2.6	3.1	露：灰白	
544			白磁	碗	欠	8.0		(4.6)	露：灰白	
545				紅猪口	欠	5.5	2.6	1.5	露：灰白	
546				紅猪口	欠	4.1	2.4	1.2	露：灰白	
547				紅猪口	欠	4.5	1.5	1.6	露：灰白	
548					欠	8.9		(5.9)	露：灰白	
549					欠			(2.65)	露：灰白	
550					欠		7.9	(3.3)	露：灰白	
551			陶器	Ⅲ	欠	11.6	5.4	2.4	露：灰白	
552	Ⅲ		ｙ白磁	Ⅲ	欠		3.2	(2.0)	露：灰ｙ白	
553			陶器	Ⅲ	欠		3.45	(2.7)	露：灰黄	唐津
554	Ⅴ		陶器	椀	欠		5.0	(1.8)	露：灰白	
555			備前焼	擂鉢	欠		(15.2)	(3.3)	灰赤	
556			陶器	鉢	欠		7.8	(3.2)	にぶい褐	

表６　石製品一覧表

総社遺跡

掲載番号	遺構名	地区	器種	計測値（mm）			重量（g）	材質	残存状態	掲載番号	遺構名	地区	器種	計測値（mm）			重量（g）	材質	残存状態
				最大長	最大幅	最大厚								最大長	最大幅	最大厚			
S1	溝１	Ⅱ	石鏃	18.5	11.5	2.5	0.52	サヌカイト	完	S14	遺構に伴わない	Ⅴ	石鏃	25.5	15.5	5.5	1.82	サヌカイト	ほぼ完
S2		Ⅱ	石鏃	16.0	15.0	2.7	0.49	サヌカイト	ほぼ完	S15		Ⅵ	石鏃	21.5	12.5	2.5	0.41	サヌカイト	ほぼ完
S3		Ⅱ	石鏃	17.0	14.5	3.0	0.65	サヌカイト	ほぼ完	S16		Ⅵ	石鏃	25.0	17.0	3.0	0.98	サヌカイト	ほぼ完
S4		Ⅱ	石鏃	20.5	13.8	3.0	0.57	サヌカイト	ほぼ完	S17		Ⅷ	石鏃	24.5	17.0	3.0	1.03	サヌカイト	完
S5		Ⅴ	石鏃	20.5	15.5	3.7	0.93	サヌカイト	欠	S18		Ⅱ	石鏃	27.0	14.0	3.0	0.73	サヌカイト	ほぼ完
S6		Ⅱ	石鏃	32.3	25.0	5.0	3.7	サヌカイト	欠	S19		Ⅰ	石鏃	26.5	15.0	2.8	0.75	サヌカイト	ほぼ完
S7		Ⅴ	石鏃	28.3	11.5	3.6	1.14	サヌカイト	完	S20		Ⅰ	石鏃	35.5	16.0	3.2	1.34	サヌカイト	ほぼ完
S8	溝４		石鏃	18.0	15.0	3.0	0.59	サヌカイト	ほぼ完	S21		Ⅷ	打製石包丁	82	55.0	12.0	73.41	サヌカイト	欠
S9	遺構に伴わない	Ⅰ	石鏃	24.0	16.0	3.5	0.75	サヌカイト	ほぼ完	S22		Ⅵ	スクレイパー	49.5	33.5	7.5	9.79	サヌカイト	欠
S10		Ⅰ	石鏃	14.0	10.0	2.0	0.28	サヌカイト	完	S23		Ⅵ	スクレイパー	30.0	29.0	3.6	3.38	サヌカイト	欠
S11		Ⅴ	石鏃	2.0	14.0	2.3	0.6	サヌカイト	ほぼ完	S24	塚	Ⅵ	玉	18.0	径14.0		5.31	メノウ	完
S12		Ⅴ	石鏃	23.0	13.2	2.8	0.71	サヌカイト	完	S25		Ⅱ	玉？	21.5	6.0	5.0	1.32		未製品
S13		Ⅴ	石鏃	24.0	15.5	3.0	0.99	サヌカイト	ほぼ完	S26	塚主体部	Ⅵ	石臼		径143	108		花崗岩	欠

金井戸遺跡

掲載番号	遺構名	地区	器種	計測値（mm）			重量（g）	材質	残存状態	掲載番号	遺構名	地区	器種	計測値（mm）			重量（g）	材質	残存状態
				最大長	最大幅	最大厚								最大長	最大幅	最大厚			
S1	遺構に伴わない		石帯	25.7	31.7	5.4	9.4	石英脈	完	S3			砥石	131	48.5	30	297.25	砂岩	欠
S2			？	53.13	54.47	33.31	147.4	流紋岩	欠										

北溝手遺跡

掲載番号	遺構名	地区	器種	計測値（mm）			重量（g）	材質	状態	掲載番号	遺構名	地区	器種	計測値（mm）			重量（g）	材質	状態	備考
				最大長	最大幅	最大厚								最大長	最大幅	最大厚				
S１	河道１	Ⅲ	砥石	146.5	64.5	36	488.81	流紋岩	完	S６	河道２	Ⅰ	台石	120.2	91.5	90.0	1512.3		完	
S２	河道２	Ⅰ	鋳型	43.9	49.3	16.0	34.74	砂岩	欠	S７		Ⅱ	砥石	23.32	19.5	19	10.1	流紋岩	欠	微粒
S３			鋳型	38.7	36.8	17.4	26.74	砂岩	欠	S８			砥石	52.95	46.4	18.4	10.1	流紋岩	欠	斑晶なし
S４			鋳型	25.0	10.9	18.6	5.87	砂岩	欠	S９		Ⅲ	石鍋	75.0	55.8	28.0	10.1	滑石	欠	破面研磨
S５			砥石	122	67.2	54	590.3	流紋岩	欠											

表７　金属製品一覧表

総社遺跡

掲載番号	遺構名	地区	器種	材質	計測値（mm）			重量（g）	状態	備考	掲載番号	遺構名	地区	器種	材質	計測値（mm）			重量（g）	状態	備考
					最大長	最大幅	最大厚									最大長	最大幅	最大厚			
M1	堀2	Ⅵ	鉄板	鉄	73.0	52.0	7.0	35.99	欠		M18	塚埋土上半	Ⅵ	釘	鉄	42.0	4.5	4.8	2.79	欠	
M2	堀4		釘	鉄	47.0	5.5	6.0	3.82	欠		M19	塚北斜面表土		釘	鉄	76.0	4.0	4.0	6.5	欠	
M3	堀6　下半		釘	鉄	28.0	4.1	4.0	1.34	欠		M20	塚北斜面表土		釘	鉄	73.0	4.0	4.0	9.14	欠	
M6	土墨北斜面土面		釘	鉄	67.0	6.0	6.0	8.16	欠		M21	塚南窪地		釘	鉄	56.0	13.5	8.0	27.57	欠	
M7	土墨東南流土		釘	鉄	58.0	4.2	4.2	5.22	欠		M22	塚		煙管	銅	67.3			7.64		吸口
M8	土墨盛土下焼土炭層		釘	鉄	33.0	4.0	4.0	2.64	欠		M36	遺構に伴わない		釘	鉄	44.3	5.0	4.8	4.65	欠	
M9	土墨南流土		鉄板	鉄	32.0	17.0	4.5	6.33	欠		M37			釘	鉄	46.5	4.5	4.5	4.62	欠	
M10	土墨北裾		鋤先	鉄	75.0	43.0	8.0	70.41	欠		M38			釘	鉄	53.0	5.0	5.5	3.54	完	
M11	土墨北斜面		煙管	銅	70.0	10.5	2.0	15.69	欠	吸口	M39			釘	鉄	83.2	4.5	6.0	9.64	欠	
M12	土墨盛土		目貫	銅	33.0	12.0	4.0	2.43	完	鍍金	M40			釘	鉄	119.0	7.0	7.0	16.03	欠	
M14	塚南窪地		釘	鉄	47.4	4.0	4.5	3.76	欠		M41			簪	銅	113.0	4.0	1.0	1.92	完	
M15	塚土手南半		釘	鉄	59.0	4.3	4.0	4.1	ほぼ完		M42			簪	銅	129.5	6.0	2.0	5.09	完	
M16	塚北斜面表土		釘	鉄	69.0	4.0	3.0	4.8	欠		M43			刀	鉄	52.5	25.3	24.5	15.63	欠	柄部
M17	塚北斜面表土		釘	鉄	66.0	4.0	3.0	6.06	欠		M44			小柄	銅	95.0	15.0	1.0	15.04	欠	柄

金井戸遺跡

掲載番号	遺構名	器種	材質	計測値（mm）			重量（g）	状態	備考	掲載番号	遺構名	器種	材質	計測値（mm）			重量（g）	状態	備考
				最大長	最大幅	最大厚								最大長	最大幅	最大厚			
M1	建物6		鉄	53.5	38.5	3.1	24.8	欠	板状	M19	遺構に伴わない	釘	鉄	59.08	6.5	5.0	15.2	欠	
M2		釘	鉄	31.5	4.5	2.0	1.3	欠		M20		釘	鉄	29.3	5.0	5.0	4.7	欠	
M3		釘	鉄	51.5	10.3	3.6	5.7	ほぼ完		M21		釘	鉄	27.6	4.1	4.1	2.8	欠	
M4	土壙1	釘	鉄	47.8	10.1	6.8	12.4	欠		M22		釘	鉄	21.74	6.4	5.9	8.2	欠	
M5	炉3	釘	鉄	14.89	3.5	2.3	0.4	欠		M23		釘	鉄	55.63	4.0	5.0	6.1	欠	
M6	柱穴16	釘	鉄	68	11.8	6.1	23.2	欠		M24		釘	鉄	56.29	7.7	6.3	3.9	欠	
M7	柱穴22	釘	鉄	72.44	5.5	5.6	12.4	ほぼ完		M25		釘	鉄	48.26	5.3	5.0	6.3	欠	
M8	柱穴35	釘	鉄	23.25	4.0	4.0	1.4	欠		M26		釘	鉄	52.46	8.9	9.4	18.1	欠	
M9	柱穴29	釘	鉄	33.06	6.2	4.2	2.3	欠		M27		釘	鉄	39.77	8.4	3.9	4.9	欠	
M10	柱穴36	釘	鉄	35.6	5.2	4.0	4.0	欠		M28		釘	鉄	40.7	15.5	8.8	9.5	欠	
M11	柱穴26	釘	鉄	91.58	8.0	8.5	23.3	欠		M29		海老錠	鉄	88.8	27.6		67.3	欠	
M12	柱穴3	毛抜き	鉄	81	25.1	2.0	8.0	欠		M30		斧？	鉄	31.9	25.2	8.3	11.1	欠	
M13	柱穴22	紡錘車	鉄	98.03	47.0	6.0	29.2	欠		M31		斧？	鉄	36.5	21.0	1.9	5.5	欠	
M14	河道	刀子	鉄	87.7	12.0	3.1	12.6	欠		M32		刀子	鉄	33.39	4.3	11.5	3.0	欠	
M15		釘	鉄	32.3	6.0	6.0	5.0	欠		M33		刀子	鉄	63.3	12.0	3.2	9.8	欠	
M16		釘	鉄	51	6.5	5.5	4.5	欠		M34			鉄	28.1	4.6	3.5	2.4	欠	
M17		釘	鉄	65.2	8.2	7.0	18.5	欠		M35			鉄	28.9	4.0	3.1	1.2	欠	
M18	遺構に伴わない	釘	鉄	57.89	7.9	5.1	7.4	欠											

北溝手遺跡

掲載番号	遺構名	地区	器種	材質	計測値（mm）			重量（g）	状態	備考
					最大長	最大幅	最大厚			
M1	河道２	Ⅰ	鏃	鉄	37.53	15.3	3.43	2.9	欠	
M2			釘	鉄	48.6	29.45	6.07	13.91	欠	
M3			釘	鉄	71.26	10.12	7.23	11.32	欠	
M4			釘	鉄	39.36	7.92	7.71	9.54	欠	
M5			釘	鉄	35	11.2	6.8	6.14	欠	
M6			釘	鉄	28.88	8.84	5.03	2.7	欠	
M7			釘	鉄	36.7	8	5.7	3.27	欠	
M8			釘	鉄	47.3	8.72	6.12	4.28	欠	
M9			釘	鉄	49.3	7	7	8.37	欠	
M10			釘	鉄	58.47	11.14	9.98	9.02	欠	
M11			釘	鉄	46.9	9	8.1	6.74	欠	
M11			釘	鉄	31.7	7.7	6.5	3.45	欠	
M12			釘	鉄	111	9.8	6.7	25.19	欠	
M13			釘	鉄	65.5	12.8	7.9	22.3	欠	
M14			刀子	鉄	92.9	11.2	4.6	7.32	欠	
M15			刀子	鉄	70.0	21.0	4.1	16.77	欠	
M16			鎌	鉄	67.3	18.8	2.1	10.18	欠	
M17		Ⅱ	釘	鉄	40.4	9.3	7.8	7.63	欠	
M18			釘	鉄	47.1	9.7	5.9	4.11	欠	
M19			?	鉄	39.9	34.7	8.9	6.89	欠	
M20			釘	鉄	51.3	5.4	5.6	1.65	欠	
M21			釘	鉄	53.8	8.0	7.0	7.07	欠	
M22			釘	鉄	57.7	12.9	11.4	12.4	欠	
M23			鎹？	鉄	58.0	6.0	6.3	8.15	欠	
M24			釘	鉄	73.2	9.2	9.6	16.64	欠	
M25			?	鉄				12.04	欠	鉄片

掲載番号	遺構名	地区	器種	材質	計測値（mm）			重量（g）	状態	備考
					最大長	最大幅	最大厚			
M26	河道２	Ⅱ	鏃	鉄	85.7	17.4	9.3	10.65	欠	
M27			鎌	鉄	25.1	13.6	3.9	2.86	欠	
M28			刀子？	鉄	29.1	10.4	4.0	2.56	欠	
M29		Ⅲ	滓	鉄	42.1	57.2	15.5	61.33	欠	椀形
M30			鏃	鉄	50.1	16.7	6.5	8.1	欠	
M31			鉄片	鉄	25.0	38.0	4.2	4.76	欠	
M32			釘	鉄	61.5	8.5	6.4	5.7	欠	
M33			釘	鉄	48.4	9.3	6.3	6.5	欠	
M34			釘	鉄	35.9	6.9	5.0	3.09	欠	
M35			釘	鉄	29.8	7.5	4.1	2.94	欠	
M36			釘	鉄	119.0	12.8	13.5	44.11	欠	
M37	遺構に伴わない遺物	Ⅲ	釘	鉄	37.1	7.4	2.8	1.32	欠	
M38			釘	鉄	40.2	9.6	4.5	3.03	欠	
M39			釘	鉄	39.5	4.9	5.3	2.18	欠	
M40			釘	鉄	26.5	7.7	4.0	1.78	欠	
M41		Ⅳ	釘？	鉄	29.0	12.7	13.8	7.05	欠	
M42			釘	鉄	31.2	6.0	4.5	1.83	欠	
M43			鏨？	鉄	62.0	15.0	9.2	25.1	欠	
M44		Ⅲ	釘	鉄	51.6	14.7	4.9	6.19	欠	
M45			雁又鏃	鉄	58.3	21.7	6.3	5.71	欠	
M46			雁又鏃	鉄	45.4	23.0	5.5	5.2	欠	
M47			石突？	鉄	56.1	14.6	10.0	17.22	欠	
M48			?	鉄	29.2	4.9	5.4	4.67	欠	
M49			刀子？	鉄	49.2	15.0	8.8	10.54	欠	
M50		Ⅰ	キセル（吸口）	銅	69.0	10.9	10.4	11.68	欠	線刻あり

表８　銭貨一覧表

総社遺跡

掲載番号	遺構名	地区	器種	材質	計測値（mm）		重量（g）	状態
					最大径	最大厚		
M4	溝9	Ⅵ	天聖元宝	銅	24.5	1.3	2.78	完
M5			熙寧元宝	銅	24.0	1.5	2.12	ほぼ完
M13	土塁	Ⅵ	新寛永通宝	銅	25.5	1.1	3.64	完
M23	塚	Ⅵ	新寛永通宝	銅	24.1	1.0	2.16	完
M24			新寛永通宝	銅	25.0	1.1	3.04	完
M25			新寛永通宝	銅	24.8	1.2	3.49	完
M26			新寛永通宝	銅	22.9	1.0	2.08	完
M27			新寛永通宝	銅	24.5	1.0	2.28	完

掲載番号	遺構名	地区	器種	材質	計測値（mm）		重量（g）	状態	備考
					最大径	最大厚			
M28	塚	Ⅵ	開元通宝	銅	24.0	1.0	2.19	完	
M29	塚主体部	Ⅵ	祥符元宝	銅	25.1	1.1	3.51	完	
M30	下がり	Ⅷ	寛永通宝	銅	24.7	3.07	2.96	完	鉄銭癒着
M31			寛永通宝	銅	25.0	1.2	2.89	完	鉄銭癒着
M32			寛永通宝	鉄	25.1	1.98	1.29	完	
M33			至道元宝	銅	24.4	1.2	3.19	完	
M34	遺構に伴わない	Ⅵ	新寛永通宝	銅	23.5	1.0	2.35	完	背佐
M35			新寛永通宝	銅	25.0	1.2	4.01	完	

北溝手遺跡

掲載番号	遺構名	地区	器種	材質	計測値（mm）		重量（g）	状態
					最大径	最大厚		
M51	遺構に伴わない	Ⅳ	雁首銭	銅	17.6×21.2	2	2.07	完
M52		Ⅲ	元豊通宝	銅	24.5	1.2	1.62	完

掲載番号	遺構名	地区	器種	材質	計測値（mm）		重量（g）	状態	備考
					最大径	最大厚			
M53	遺構に伴わない	Ⅲ	?	銅	24	1	1.06	完	
M54		Ⅲ	元豊通宝	銅	23.4	1.5	1.57	完	

表９　土製品一覧表

総社遺跡

掲載番号	遺構名	地区	器種	状態	計測値（mm）			重量（g）	色調
					最大長	最大幅	最大厚		
C1	堀2	Ⅵ	土錘	完	64.0	21.7	6.5	27.52	にぶい黄橙
C2	溝9	Ⅵ	おはじき	半	59.0	(33.0)	9.0	25.04	灰
C3	遺構に伴わない	Ⅵ	土錘	完	63.4	15.5		15.02	にぶい黄橙

掲載番号	遺構名	地区	器種	状態	計測値（mm）			重量（g）	色調
					最大長	最大幅	最大厚		
C4	遺構に伴わない	Ⅶ	不明	欠	65.2	67.9	25.5	91.66	灰黄褐
C5				欠	66.7	68.5	41.8	110.59	橙

金井戸遺跡

掲載番号	遺構名	器種	状態	計測値（mm）			重量（g）	色調
				最大長	最大幅	最大厚		
C 001	建物6	羽口	欠損	113.2	78.9	32.0	394.43	褐色
C 002	建物10	土錘	ほぼ完	58.8	14.5	4.2	9.16	にぶい黄橙
C 003	土壙1	土錘	完	39.5	9.5	3.5	3.85	にぶい黄橙
C 004	土壙7	土錘	完	55.3	20.6	4.3	18.42	灰黄
C 005			ほぼ完	46	18.1	3.9	10.85	灰黄
C 006			完	47.3	16.3	3.7	10.19	灰黄
C 007			ほぼ完	46.1	14.5	3.6	6.80	灰黄
C 008			ほぼ完	45.5	16.3	3.8	10.11	にぶい橙
C 009			ほぼ完	44.2	18.5	4.0	11.50	にぶい橙
C 010			ほぼ完	46.1	15.2	3.7	8.09	にぶい黄橙
C 011			欠	21	10.6	2.7	1.61	灰黄褐
C 012	土壙10	土錘	完	46	17	3.9	10.95	にぶい黄橙
C 013	柱穴49	土錘	完	48.5	17.7	4.5	11.38	にぶい黄橙
C 014	柱穴35	土錘	ほぼ完	54	13.2	3.5	6.54	灰白
C 015	柱穴33	土錘	ほぼ完	48	12.4	3.2	6.75	灰白
C 016	柱穴39	土錘	完	49	10.8	3.5	4.18	灰白

掲載番号	遺構名	器種	状態	計測値（mm）			重量（g）	色調
				最大長	最大幅	最大厚		
C 017	柱穴30	土錘	完	34	11	3.6	3.74	黄灰
C 018	柱穴31	土錘	欠	36	12.4	3.2	5.10	黒褐
C 019	柱穴23	土錘	欠	40	8.9	2.8	3.00	にぶい黄橙
C 020	柱穴45	土錘	欠	26	11.2	3.2	1.96	橙
C 021	柱穴38	土錘	欠	16.5	9.7	3.8	1.03	灰白
C 022	柱穴41	土錘	欠	13	7.5	3.1	0.56	浅黄橙
C 023	柱穴19	土玉	完	21.7	22.1		10.13	にぶい橙
C 024	河道	土錘	完	52.8	18.6	4.3	15.43	にぶい黄橙
C 025			完	49.3	19.6	3.9	15.14	にぶい橙
C 026			完	48.7	16.2	3.3	10.65	にぶい黄橙
C 027			完	49.2	16.8	3.4	11.04	にぶい橙
C 028			完	47.6	16	3.9	8.72	にぶい黄橙
C 029			完	47.1	17.4	3.9	10.90	橙
C 030			欠	45.9	16.5	3.9	8.73	にぶい褐
C 031			ほぼ完	56.4	11.8	3.5	6.75	灰黄褐
C 032			ほぼ完	56.8	13.4	3.5	8.51	黒

掲載番号	遺構名	器種	状態	計測値（mm）			重量（g）	色調
				最大長	最大幅	最大厚		
C 033	河道	土錘	ほぼ完	54.9	13.5	3.3	8.60	にぶい黄橙
C 034			完	51	7.5	3.0	6.55	にぶい黄橙
C 035			完	49.4	15.8	4.4	9.92	黒
C 036			ほぼ完	50	12.2	3.2	6.60	にぶい黄橙
C 037			ほぼ完	46	12.1	3.3	4.65	褐灰
C 038			ほぼ完	45.2	12.9	3.4	6.68	褐灰
C 039			ほぼ完	44.2	12.5	3.1	6.29	灰白
C 040			完	43.9	13.1	3.9	6.70	にぶい黄橙
C 041		羽口	欠	53.2	48.1	30.0	79.67	灰
C 042	出土土錘	土錘	完	46.2	13.7	2.7	6.45	にぶい橙
C 043			完	45.6	12.7	3.0	5.10	灰白
C 044			完	44.1	13.6	3.0	5.86	灰白
C 045			完	43.5	13.3	3.0	5.43	黄灰
C 046			完	43.3	12.7	3.0	5.20	灰白
C 047			完	43	14.8	3.2	6.51	灰白
C 048			完	42.9	12.8	2.8	5.51	灰黄
C 049			完	42.7	12.4	3.0	4.61	にぶい黄橙
C 050			完	42.2	12.7	2.8	4.74	灰白
C 051			ほぼ完	42	12.6	3.2	4.63	灰白
C 052			完	42	13.3	3.1	5.25	灰白
C 053			完	41.8	13.6	2.8	5.47	灰白
C 054			ほぼ完	41.8	13.2	2.8	4.57	灰白
C 055			完	41.8	13.7	2.8	5.30	にぶい黄橙
C 056			ほぼ完	41.5	12.7	3.3	5.13	灰白
C 057			完	41.3	12.6	3.0	4.59	灰白
C 058			完	41.2	14.2	2.9	5.58	にぶい黄橙
C 059			完	41	11.8	3.2	4.24	灰白
C 060			完	41	13.5	2.7	5.07	明褐灰
C 061			完	40.9	13.1	2.9	4.95	灰白
C 062			完	40.6	13.1	2.9	5.01	にぶい黄橙
C 063			完	40.3	12.9	3.0	5.21	にぶい黄橙
C 064			完	40.2	13.4	2.7	5.22	にぶい橙
C 065			欠	40.1	12.6	2.7	4.05	灰白
C 066			ほぼ完	40.1	13.8	3.3	5.24	灰白
C 067			完	40	12.3	3.0	4.35	にぶい黄橙
C 068			完	40	12.1	2.9	4.73	灰黄
C 069			完	40	12.4	3.1	4.66	にぶい黄橙
C 070			完	40	13.3	2.9	5.28	灰白
C 071			完	39.5	12.7	3.5	4.47	灰白
C 072			完	39.5	13.2	3.3	4.90	灰白
C 073			完	39.5	12.5	2.7	4.60	灰白
C 074			完	39.5	12.3	2.9	4.42	灰白
C 075			完	39.5	13.8	3.1	5.50	灰白
C 076			完	39.4	12.7	3.0	4.95	灰白
C 077			完	39.3	11.8	2.8	4.10	灰白
C 078			完	39.3	13	2.8	4.74	にぶい黄橙
C 079			完	39.3	12.4	3.1	4.29	にぶい黄橙
C 080			完	39.3	12.6	2.6	5.19	にぶい黄橙
C 081			ほぼ完	39.2	12.7	3.2	4.34	灰白
C 082			完	39.1	12.2	2.9	4.52	にぶい黄橙
C 083			完	39	13.3	2.9	4.66	にぶい黄橙
C 084			完	39	12.5	2.9	4.82	にぶい黄橙
C 085			完	39	11.9	2.9	4.73	灰白
C 086			完	39	13.2	3.3	5.24	にぶい黄橙
C 087			ほぼ完	39	12.1	3.1	3.94	灰白
C 088			完	39	12.9	3.3	4.88	灰白
C 089			完	39	14.2	3.2	5.21	浅黄橙
C 090			完	39	11.4	2.7	3.62	灰白
C 091			完	38.9	12.9	3.4	4.42	灰白
C 092			ほぼ完	38.9	11.5	2.8	3.70	灰黄
C 093			完	38.9	12.3	2.9	4.06	にぶい黄橙
C 094			完	38.9	13.6	2.7	4.96	灰白
C 095			完	38.9	11.5	2.9	3.94	灰白
C 096			完	38.9	13	3.0	4.80	灰白
C 097			完	38.8	13	2.8	5.25	にぶい黄橙
C 098			完	38.7	13.5	2.7	5.05	にぶい黄橙
C 099			完	38.6	12.9	2.9	4.45	にぶい橙
C 100			完	38.5	13.6	3.1	4.57	灰白
C 101			完	38.5	11.9	2.8	4.31	褐灰
C 102			完	38.5	11.9	2.9	4.36	灰白
C 103			完	38.5	13.5	2.5	5.08	明褐灰
C 104			完	38.4	13.3	2.9	4.72	にぶい橙
C 105			完	38.4	12.1	2.8	4.51	灰白
C 106			完	38.3	13.1	3.1	4.74	にぶい黄橙
C 107			完	38.2	14	2.7	5.72	にぶい橙
C 108			完	38.1	13	2.9	4.47	灰白
C 109			完	38.1	12.9	3.2	4.43	にぶい黄橙
C 110			完	38	13.1	3.3	5.04	にぶい黄橙
C 111			完	38	12.9	2.9	4.54	灰白
C 112			完	38	12.2	3.2	3.80	灰白
C 113			ほぼ完	38	14	3.2	5.16	灰白
C 114			完	37.9	11.7	2.8	3.74	にぶい橙
C 115			完	37.7	12.7	2.9	4.18	にぶい橙
C 116			完	37.6	12.5	3.3	4.30	灰白
C 117			完	37.6	12.5	2.7	4.14	灰白

掲載番号	遺構名	器種	状態	計測値（mm）			重量（g）	色調
				最大長	最大幅	最大厚		
C 118	出土土錘	土錘	完	37.6	11.8	2.8	3.68	灰白
C 119			ほぼ完	37.5	13.2	3.2	4.56	灰白
C 120			完	37.4	15.2	2.9	7.27	にぶい黄橙
C 121			完	37.4	12.6	3.0	4.07	にぶい橙
C 122			完	37.3	12.1	2.8	3.81	灰褐
C 123			完	37.3	12.5	3.0	4.21	にぶい黄橙
C 124			完	3.73	12.6	3.0	4.06	浅黄橙
C 125			完	37.2	11.8	3.0	4.45	にぶい黄橙
C 126			ほぼ完	37.2	13	3.0	4.46	灰白
C 127			完	37.1	12	3.0	3.80	にぶい黄橙
C 128			完	37	13	3.1	4.52	灰白
C 129			完	37	12.4	3.0	4.30	灰白
C 130			完	37	12.6	3.0	4.33	にぶい黄橙
C 131			完	37	12.5	3.2	4.33	灰白
C 132			ほぼ完	37	13.1	3.1	4.58	にぶい黄橙
C 133			ほぼ完	37	11.6	2.95	3.69	にぶい黄橙
C 134			ほぼ完	37.3	12.9	2.8	5.10	にぶい橙
C 135			完	36.9	12.1	3.3	3.91	にぶい橙
C 136			完	36.9	12.4	2.9	4.05	灰白
C 137			完	36.9	12.3	3.4	3.92	灰白
C 138			完	36.8	12.2	2.9	4.59	灰白
C 139			完	36.8	12.3	2.9	4.22	灰白
C 140			完	36.8	12.8	2.9	4.27	浅黄橙
C 141			完	36.6	13.6	2.7	5.08	にぶい黄橙
C 142			完	36.8	13.8	2.9	5.65	にぶい橙
C 143			完	36.7	13.5	3.2	4.93	灰白
C 144			完	36.5	11.3	2.7	3.69	にぶい黄橙
C 145			完	36.5	11.8	3.0	3.98	褐灰
C 146			ほぼ完	36.5	13.3	2.7	4.86	にぶい橙
C 147			完	36.3	11.5	3.2	3.46	灰白
C 148			完	36.3	11.6	3.2	3.88	灰白
C 149			完	36.2	11.6	3.0	3.90	にぶい黄橙
C 150			完	36	10.6	3·1	3.36	灰白
C 151			完	35.6	12.9	3.3	4.03	灰白
C 152			完	35.6	12	3.0	3.55	灰白
C 153			完	35.5	12.5	2.7	4.28	明褐灰
C 154			ほぼ完	35.4	10.5	2.8	2.73	灰白
C 155			完	35.3	11.8	3.0	4.47	灰白
C 156			完	35	11.8	2.8	3.67	灰白
C 157			完	35	11.7	2.8	3.45	灰白
C 158			ほぼ完	35	12.8	3.5	4.08	灰白
C 159			ほぼ完	35	11.2	2.8	3.45	にぶい黄橙
C 160			ほぼ完	32.8	12.5	2.8	3.71	にぶい橙
C 161			ほぼ完	37	12.7	3.2	4.02	灰白
C 162			欠	35	11	3.1	3.03	灰白
C 163			ほぼ完	37	12	3.1	3.53	にぶい黄橙
C 164			ほぼ完	37	13.5	3.3	4.14	灰白
C 165			欠	37.9	12.3	3.0	3.70	にぶい橙
C 166			ほぼ完	38	12	3.3	3.82	灰白
C 167			ほぼ完	38.7	11.7	3.1	3.75	にぶい黄橙
C 168			欠	40	12.8	3.1	4.17	灰白
C 169			欠	42	11.9	3.4	5.00	黒褐
C 170	遺構に伴わない遺物	土錘	完	51.8	16.3	3.2	11.61	橙
C 171			欠	50	19	4.1	14.13	黄灰
C 172			欠	47.8	18.8	3.7	13.17	にぶい橙
C 173			ほぼ完	47.9	17.3	3.5	12.53	にぶい黄橙
C 174			欠	43.1	16.5	3.6	10.46	にぶい黄橙
C 175			完	45.5	11.4	3.7	10.20	橙
C 176			完	42.1	16.7	3.7	10.31	にぶい黄橙
C 177			ほぼ完	43	17.5	4.1	10.26	灰黄褐
C 178			完	68	15.9	4.2	17.31	橙
C 179			ほぼ完	61.7	11	3.0	7.36	灰黄褐
C 180			完	61.6	13.3	3.3	9.78	にぶい黄橙
C 181			完	56.8	10.7	3.2	5.55	黄灰
C 182			完	52.5	11.5	3.2	6.71	黒
C 183			ほぼ完	51	14	3.6	7.83	にぶい橙
C 184			ほぼ完	56	11.9	4.0	6.42	浅黄橙
C 185			完	53.2	9.1	3.2	4.14	にぶい黄橙
C 186			ほぼ完	50	11.6	2.9	5.51	にぶい黄橙
C 187			ほぼ完	51.2	10.3	3.2	4.85	橙
C 188			ほぼ完	49	10.5	3.1	4.87	灰白
C 189			ほぼ完	47.9	11.4	3.5	6.67	灰黄
C 190			完	47.8	12.5	3.4	6.61	灰白
C 191			完	47.1	10.5	2.7	5.04	黒褐
C 192			ほぼ完	47.4	10.6	3.3	4.83	灰白
C 193			ほぼ完	44.7	10.7	2.6	4.75	灰褐
C 194			欠	57.1	12.7	2.8	8.77	灰黄褐
C 195			欠	53.8	11.2	3.2	5.90	灰黄褐
C 196			欠	55.1	12	3.3	6.78	にぶい黄橙
C 197			欠	51.7	13	3.2	7.80	にぶい橙
C 198			欠	52.2	12.3	3.2	6.19	灰白
C 199			欠	51.4	10.5	4.2	5.24	にぶい黄橙
C 200			欠	49.5	10.9	3.0	4.94	灰白
C 201			欠	46.3	10.2	2.7	3.42	灰白
C 202			完	42.1	10.5	3.1		黒褐

掲載番号	遺構名	器種	状態	計測値（mm）			重量（g）	色調
				最大長	最大幅	最大厚		
C 203	遺構に伴わない遺物	土錘	完	45.1	11.2	3.4	4.57	灰白
C 204			ほぼ完	42.7	10.8	3.1	4.40	黒
C 205			ほぼ完	40.3	12.2	3.3	5.56	灰黄
C 206			完	44	12.6	3.6	6.14	にぶい橙
C 207			ほぼ完	43.3	11.2	3.3	5.07	黒
C 208			完	41.7	10.4	3.1	4.20	灰褐
C 209			完	41	10.4	3.0	3.49	黒褐
C 210			完	40.3	10.3	3.3	4.14	灰黄
C 211			完	39.5	11.5	3.1	4.34	黒
C 212			完	39.1	10.5	3.0	4.40	灰褐
C 213			完	35.4	11.3	3.1	4.71	黒
C 214			ほぼ完	35.9	10.7	2.9	3.82	橙
C 215			完	36.8	11.5	3.5	5.22	にぶい黄橙
C 216			ほぼ完	34	11.1	3.6	3.78	橙
C 217			ほぼ完	34	11.6	3.2	4.23	褐灰
C 218			ほぼ完	34	13.3	3.4	5.27	橙
C 219			完	34	12.9	3.8	5.63	にぶい黄橙
C 220			完	34	10.8	4.4	4.19	灰白
C 221			完	33.5	12.6	3.8	5.54	褐灰
C 222			欠	33.6	10.7	2.9	3.61	にぶい黄橙
C 223			完	34.7	11.4	2.8	4.16	黒褐
C 224			完	34.7	10.3	2.8	3.60	黒褐
C 225			ほぼ完	34.9	11.9	2.9	4.43	にぶい黄橙
C 226			完	58	13	2.8	8.09	褐灰
C 227			ほぼ完	60	13.5	3.7	8.02	褐灰
C 228			完	58.6	15	3.8	10.20	灰白
C 229			ほぼ完	52.7	13.3	3.0	8.96	にぶい黄橙
C 230			ほぼ完	53	15.6	4.1	10.29	にぶい橙
C 231			ほぼ完	49.9	14.8	4.0	9.00	灰黄
C 232			完	50.5	14.7	3.9	10.28	灰黄
C 233			完	49.4	13.2	3.8	7.82	灰白
C 234			ほぼ完	49.6	13.5	2.7	7.22	にぶい黄橙
C 235			完	48.1	14.7	3.9	8.02	灰黄
C 236			完	47.8	15.3	3.5	8.66	灰黄褐
C 237			ほぼ完	47	14.6	3.1	7.14	浅黄橙
C 238			ほぼ完	46.4	14.7	4.4	7.86	にぶい黄橙
C 239			完	46.1	12.7	3.2	7.30	浅黄橙
C 240			完	45.4	13.8	3.3	7.26	灰白
C 241			ほぼ完	45.3	13.9	3.2	6.30	灰白
C 242			ほぼ完	40.2	11.3	3.4	5.01	褐灰
C 243			ほぼ完	44.7	14.8	3.6	7.61	褐灰
C 244			完	45.2	15.6	3.6	10.40	にぶい黄橙
C 245			ほぼ完	44	12.8	3.7	5.74	褐灰

掲載番号	遺構名	器種	状態	計測値（mm）			重量（g）	色調
				最大長	最大幅	最大厚		
C 246	遺構に伴わない遺物	土錘	完	40.1	12.9	3.5	5.64	灰白
C 247			完	40.2	15.1	3.6	7.80	灰白
C 248			完	38	13.3	2.9	4.91	灰白
C 249			完	39	13	3.0	5.67	灰白
C 250			ほぼ完	37	11.7	3.2	3.87	灰白
C 251			ほぼ完	37.5	13.7	3.3	5.76	浅黄橙
C 252			ほぼ完	37	11.9	3.7	4.95	褐灰
C 253			ほぼ完	37	12.5	3.4	4.30	にぶい黄橙
C 254			ほぼ完	35.9	12	2.8	4.51	灰白
C 255			完	35.7	11.9	3.5	4.02	灰白
C 256			ほぼ完	35.6	12.9	3.0	5.49	灰白
C 257			ほぼ完	33.7	12.5	4.3	4.20	にぶい黄橙
C 258			欠	45	10.4	3.0	4.70	にぶい黄橙
C 259			ほぼ完	41.7	12.2	2.9	5.57	にぶい黄橙
C 260			欠	3.75	8.9	2.7	2.57	にぶい黄橙
C 261			欠	35.5	9.1	3.5	2.85	灰黄褐
C 262			欠	38	9.2	2.9	1.92	にぶい黄橙
C 263			欠	41	9.2	2.8	3.15	褐灰
C 264			欠	37.3	10.3	2.8	3.70	灰白
C 265			欠	44	10.7	3.1	4.31	褐灰
C 266			欠	46.6	16.8	3.1	11.48	橙
C 267			欠	41.7	15.3	3.7	8.45	灰黄褐
C 268			欠	51.3	11.8	3.2	5.14	灰白
C 269			欠	47.3	13.8	2.7	5.92	灰白
C 270			欠	43.6	14.7	3.3	8.04	灰白
C 271			欠	45.3	13.4	2.8	5.949	にぶい黄橙
C 272			欠	45.6	12.7	3.1	5.97	にぶい黄橙
C 273			欠	45	12.7	3.4	7.01	灰黄褐
C 274			ほぼ完	41.8	13.3	2.6	5.71	にぶい黄橙
C 275			ほぼ完	46.4	12.9	4.1	6.37	灰白
C 276			欠	41	15.2	3.7	8.43	浅黄
C 277			欠	39.6	12.2	3.4	5.69	褐灰
C 278			欠	37.4	11.8	3.4	4.01	灰白
C 279			欠	39.8	13.9	3.7	6.42	橙
C 280			欠	38.8	11.3	2.6	4.13	にぶい黄橙
C 281			欠	32	10.9	3.0	3.64	灰褐
C 282		紡錘車	欠	35.7	30.3	21.6	18.67	灰褐
C 283		羽口	欠	4.8	5.9	1.6	67.18	灰白
C 284		羽口	欠	31	39	24.0	27.16	にぶい黄橙
C 285		羽口	欠	38.9		29.0	21.79	にぶい橙
C 286		土錘？	欠	61.9	31.3	7.2	56.06	浅黄
C 287		磚	欠	100.3	54	44.0	189.10	にぶい橙
C 288		磚	欠	80.5	77	30.1	224.41	にぶい橙

北溝手遺跡

掲載番号	遺構名	地区	器種	状態	計測値（mm）			重量（g）	色調
					最大長	最大幅	最大厚		
C 01	河道１	Ⅳ	分銅形土製品	欠	30.7	58.0	10.3	17.21	橙
C 02			分銅形土製品	欠	75.0	96.0	13.0	112.13	にぶい橙
C 03			羽口	欠	54.9	67.2	24.2	94.71	にぶい橙
C 04	杜穴１	Ⅰ	土錘	欠	25.2	10.1	2.7	2.36	黒褐
C 05	溝１	Ⅰ	土錘	ほぼ完	46.2	13.5	2.2	7.13	にぶい黄橙
C 06				欠	38.2	11.3	2.9	4.39	にぶい黄橙
C 07	土器溜まり２	Ⅰ	土錘	ほぼ完	57.0	13.8	3.2	8.98	灰黄褐
C 08	河道２	Ⅰ	土錘	完	60.0	15.4	3.2	12.63	褐灰
C 09				ほぼ完	57.2	13.7	3.5	7.42	灰
C 10				ほぼ完	52.8	11.2	3.3	5.78	にぶい黄橙
C 11				ほぼ完	52.3	10.7	3.4	4.72	浅黄橙
C 12				完	47.7	9.1	3.1	3.93	黒褐
C 13				完	48.2	11.5	3.7	5.53	にぶい橙
C 14				ほぼ完	49.7	11.3	3.7	5.31	黒褐
C 15				ほぼ完	51.2	12.8	3.1	7.54	にぶい橙
C 16				ほぼ完	51.5	15.5	4.0	9.77	橙
C 17				ほぼ完	48.8	15.4	4.4	9.4	黒褐
C 18				完	46.2	12.5	2.9	6.44	にぶい橙
C 19				ほぼ完	46	11.9	3.3	5.63	黒褐
C 20				ほぼ完	45.1	11.8	3.0	4.67	にぶい黄橙
C 21				ほぼ完	44.2	10.0	2.5	4.21	褐灰
C 22				ほぼ完	43.8	8.4	2.7	2.72	にぶい赤褐
C 23				欠	44.6	12.2	3.0	5.75	橙
C 24				欠	42.0	14.2	3.8	6.08	にぶい橙
C 25				欠	43.5	13.8	3.1	7.62	にぶい黄橙
C 26				ほぼ完	42.2	14.9	4.0	7.01	にぶい黄橙
C 27				完	41.0	10.9	3.5	3.88	橙
C 28				完	39.2	10.4	3.2	3.75	橙
C 29				ほぼ完	40.36	10.8	3.7	3.78	にぶい黄橙
C 30				欠	35.1	10.1	2.8	3.53	にぶい橙
C 31				ほぼ完	38.9	11.3	3.2	4.27	黒褐

掲載番号	遺構名	地区	器種	状態	計測値（mm）			重量（g）	色調
					最大長	最大幅	最大厚		
C 32	河道２	Ⅰ	土錘	ほぼ完	37.6	11.5	3.7	4.89	にぶい橙
C 33				完	35.4	12.5	2.8	5.21	にぶい褐
C 34				完	33.5	11.1	3.1	3.86	にぶい褐
C 35				ほぼ完	34.2	12.0	2.9	4.75	灰褐
C 36				完	31.4	11.3	3.5	4.01	黒褐
C 37				ほぼ完	31.3	11.5	3.8	3.6	黄灰
C 38			羽口	欠	70	67.2	25.5	108.39	-
C 39				欠	31	52.5	10.0	39.51	-
C 40			おはじき？	完	23.0	24.4	19.0	13.05	にぶい橙
C 41				完	24.5	20.5	22.2	11.61	にぶい橙
C 42			磚	欠	(112.0)	73.0	53.0	396.02	にぶい橙
C 43	河道２	Ⅱ	羽口	欠	67.5	62.0	26.0	80.19	-
C 44				欠	58.0	54.0	80.0	62.3	-
C 45			土錘	完	47.1	11.2	3.3	5.78	にぶい黄橙
C 46				完	43.1	17	4.0	10.02	にぶい黄橙
C 47				ほぼ完	55	12.9	2.8	7.91	灰黄
C 48	河道２	Ⅲ	おはじき	完	52.0	47.0	14.8	46.93	灰赤
C 49			土錘	ほぼ完	50.5	12.5	4.4	7.72	黒褐
C 50				ほぼ完	52.0	13.8	4.2	7.79	橙
C 51				ほぼ完	48.4	14.1	3.3	8.68	にぶい黄橙
C 52				ほぼ完	45.2	10.0	2.2	4.42	橙
C 53				ほぼ完	38.8	9.8	2.7	3.54	黒褐
C 54				ほぼ完	37.0	14.6	2.6	6.47	にぶい橙
C 55			磚	欠	86.2	62.5	50.0	192.91	灰褐
C 56	河道３	Ⅴ	磚	欠	57.0	77.0	27.0	132.36	暗赤灰
C 57				欠	60.0	75.0	59.0	265.31	にぶい黄橙
C 58				欠	74.5	80.0	54.0	301.99	灰黄
C 59			羽口	欠	62.5	47.2	23.9	68.45	にぶい黄橙
C 60	遺構に伴わない遺物	Ⅱ	土錘	ほぼ完	37.2	12.0	2.8	4.57	灰褐
C 61		Ⅴ	？	欠	43	79	12.5		

表10　新旧遺構名称対照表

総社遺跡

新遺構名	旧遺構名称	時期
土壙１	№９	弥生～古墳時代
土壙２	№23	弥生時代前期後葉
土壙３	№33	弥生時代
土壙４	№30	縄文時代晩期以降
土壙５	№34	縄文時代晩期
土壙６	金井戸遺跡№７	弥生時代後期
土壙７	金井戸遺跡№９	弥生時代後期
土壙８	金井戸遺跡№６	弥生時代後期
土壙９	№16	中世
土壙10	№26	中世
土壙11	金井戸遺跡№３	中世
土壙12	金井戸遺跡№４	中世
土壙13	金井戸遺跡№11･12	近世
溝１	№１・８	弥生時代中期前半
溝２	№３・７	弥生時代中期前半
溝３	№２	弥生時代中期前半
溝４	№４	弥生時代中期前葉
溝５	№５	６C後葉
溝６	№６	６C紀後葉
溝７	№35	古墳時代後半以降
溝８	金井戸遺跡№８	弥生時代後期
溝９	№22	中世～近世
溝10	№27	中世～近世
堀１	№12	中世～近世
堀２	№14・17	中世～近世
堀３	№20	中世～近世
堀４	№28	中世～近世
堀５	№25	中世～近世
土塁	№15・24	中世～近世
塚	№10	近世
トがり	金井戸遺跡№1･2･10	近世
柱穴１	金井戸遺跡P24	弥生時代後期

北溝手遺跡

新遺構名	旧遺構名称	時期
土壙１	№11	５C前半
土壙２	№12	５C前半
土壙３	№24	平安時代
土壙４・５	№27	８C後半～９C前半
土壙６	№15	近世
土壙７	№14	近世
土壙墓１	№７	12C後半～13C
土壙墓２	№５	鎌倉時代
炉１	№19	平安時代
炉２	№22	平安時代
溝１	№17	10C
溝２	№26	８C後半
土器溜まり１	№20	13C
土器溜まり２	№23	８～10C
土器溜まり３	№８	13C
河道１	№1･2･13	弥生～古墳時代
河道２	№21	古代～中世
河道３		古代～中世

金井戸遺跡

新遺構名	旧遺構名称	時期
掘立柱建物１	№49	13C
掘立柱建物２	№15・16	平安時代
掘立柱建物３	№11・13	平安時代
掘立柱建物４	№14	平安時代
掘立柱建物５	№31	平安時代
掘立柱建物６	№30	平安時代
掘立柱建物７	№19	平安時代末～中世
掘立柱建物８	№８	平安時代
掘立柱建物９	№50	平安時代
掘立柱建物10	№３	10世紀
柱穴列１	№38	平安時代
柱穴列２	№51	９C後半
柱穴列３	№28	10C後半～11C前半
土壙１	№48	13C
土壙２	№１	14C
土壙３	№24	10C
土壙４	№46	平安時代
土壙５	№40	平安時代
土壙６	№６	古代～中世
土壙７	№36	10C
土壙８	№42	10C
土壙９	№41	10C
土壙10	№39	10C
炉１	№27	平安時代
炉２	№29	平安時代
炉３	№34	平安時代
炉４	№35	平安時代
溝１	№１	9C後半～10C前半
溝２	№10	平安時代
溝３	№12	平安時代
溝４・５	№17	平安時代
溝６	№25	平安時代
溝７	№45	平安時代
溝８	№47	平安時代
溝９	№44	平安時代
溝10	№43	平安時代
溝11	№４	平安時代
溝12	№７	平安時代
溝13	№33	平安時代
河道	№５	古代～中世
土師集積	№20	平安時代
柱穴１	P21	10C前半
柱穴２	P108	9C後半

1　塚
（西南から）

2　塚断ち割り
（南から）

3　塚主体部
（南東から）

図版２

総社遺跡

１　堀１
（南東から）

２　堀３
（西から）

３　溝１・２・４
（南西から）

1　溝５・６西半
（北東から）

2　溝７
（西北から）

3　Ⅷ区弥生時代全景
（北西から）

図版４

総社遺跡

１　土壙１（南から）

２　土壙３（南西から）

３　土壙５（南西から）

４　土壙９（南東から）

５　土壙 10（西から）

６　土壙 11（南西から）

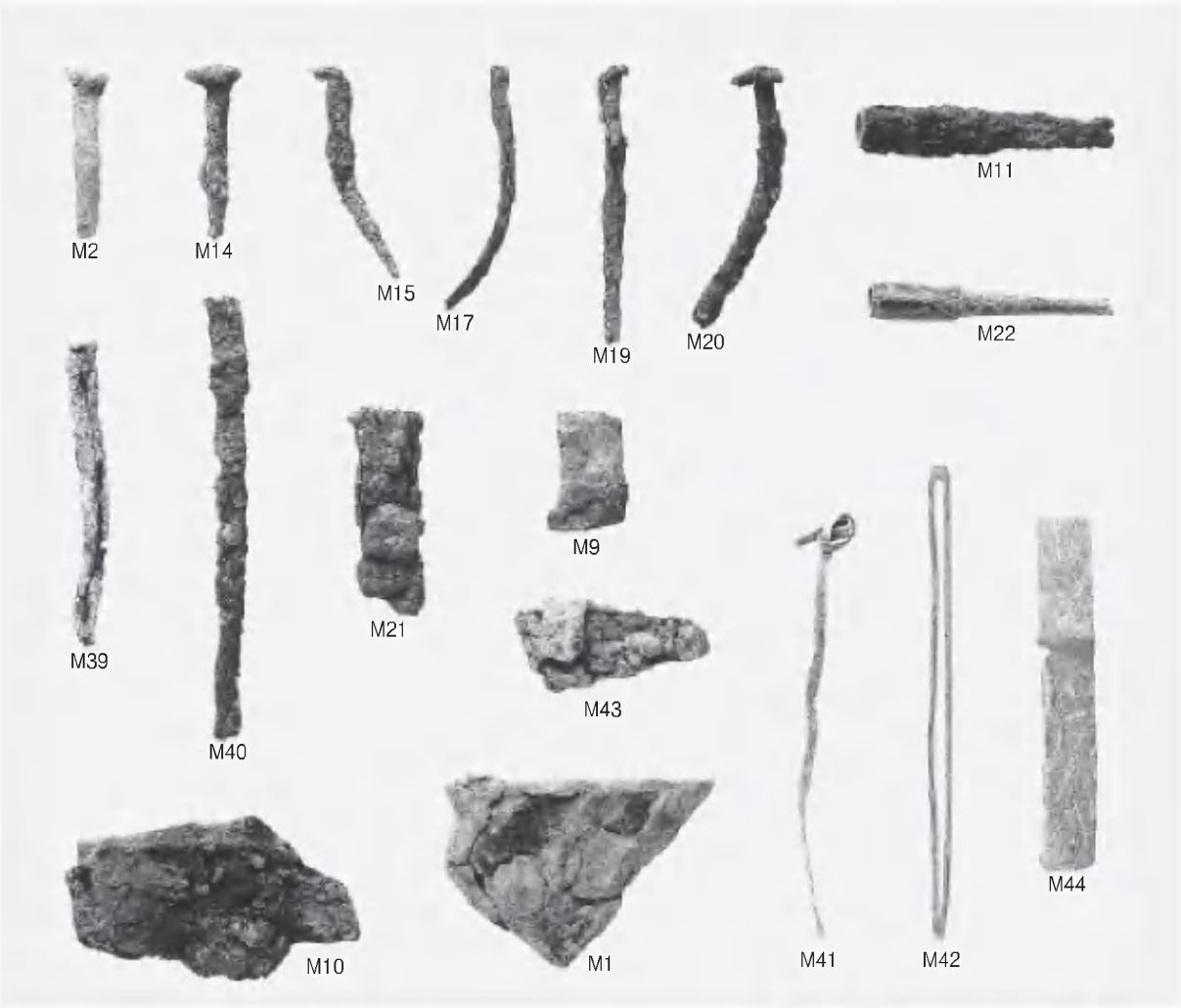
1　縄文土器・弥生土器

2　石製品

図版 6

総社遺跡

遺構内出土土器・陶磁器



M1：堀2　M2：堀4　M9～11・13：土壙　M14・15・17・19～28：塚　M32：下がり　M34・35・39～44：遺構に伴わない

1　鉄・青銅製品

C1：堀2　C2：溝9　C3～5：遺構に伴わない

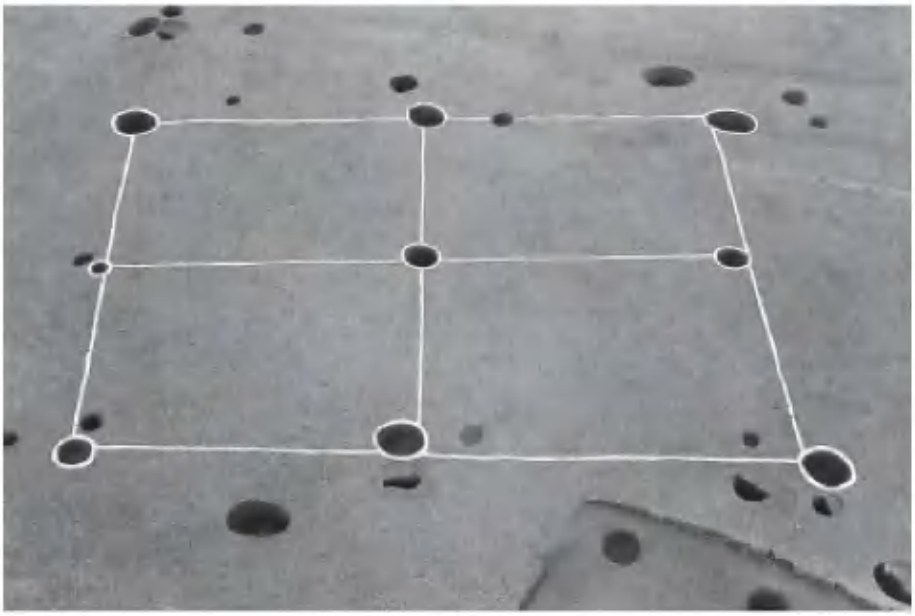
2　土製品

下がり

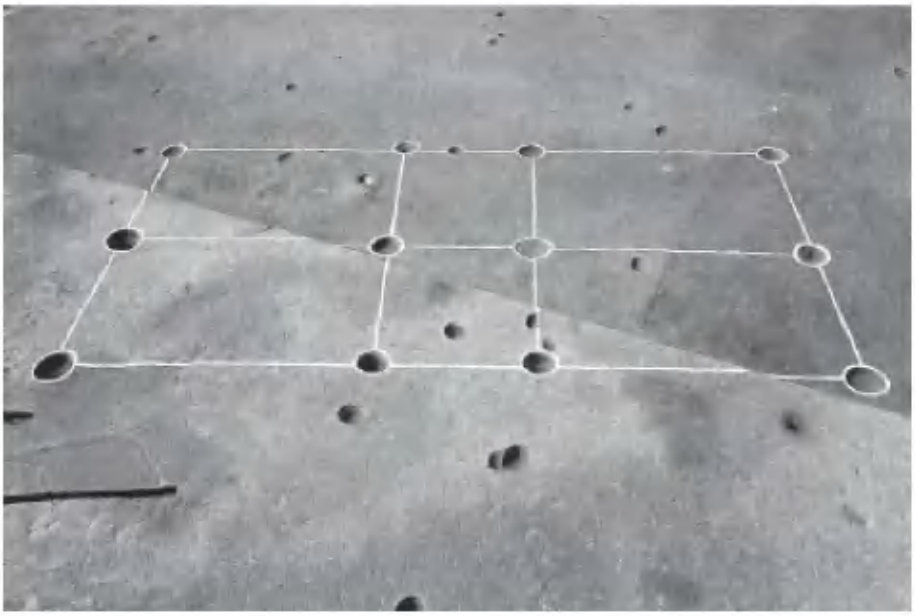
3　木製品

図版 8

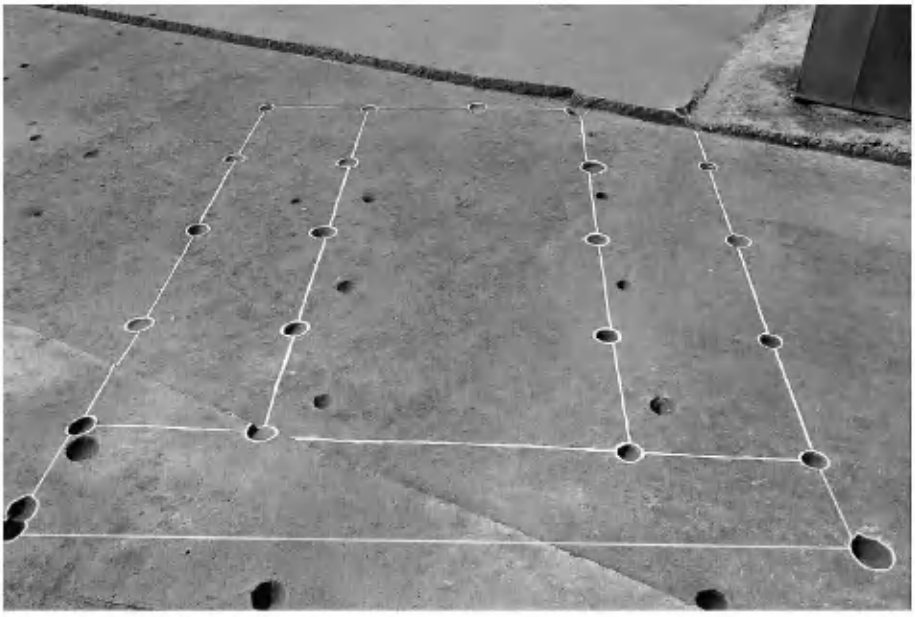
金井戸遺跡



1　掘立柱建物１
（東から）

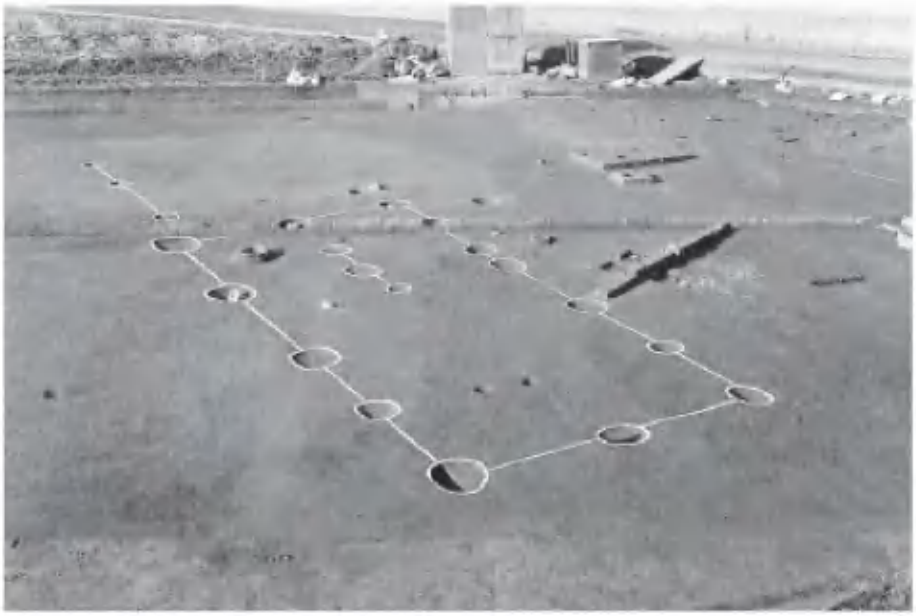


2　掘立柱建物２
（南から）



3　掘立柱建物３
（南から）

金井戸遺跡



1　掘立柱建物８
（南から）

2　掘立柱建物９
・柱穴列２
（南から）

3　掘立柱建物 10
（南から）

金井戸遺跡

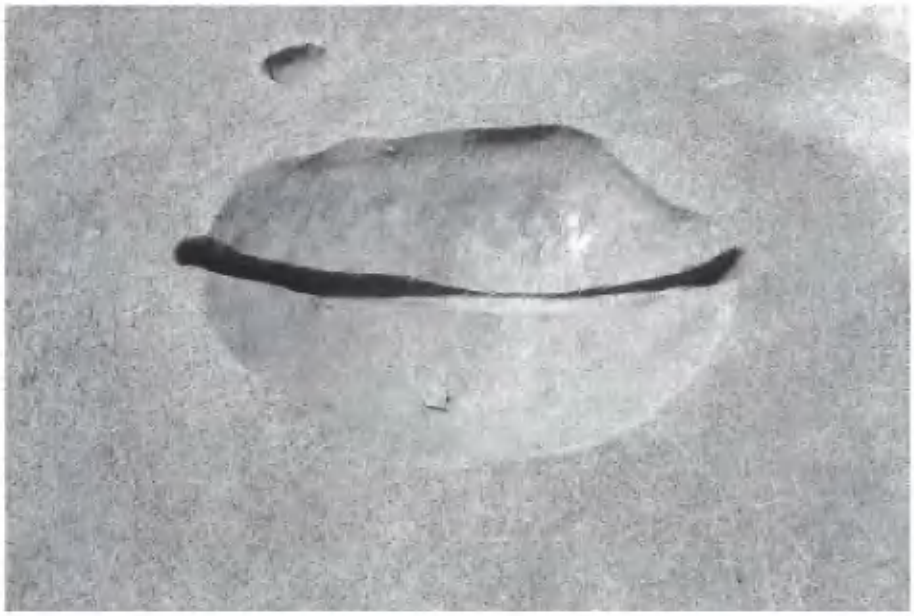
1　溝 1
（西南から）

2　溝 2 ～ 5
（南東から）

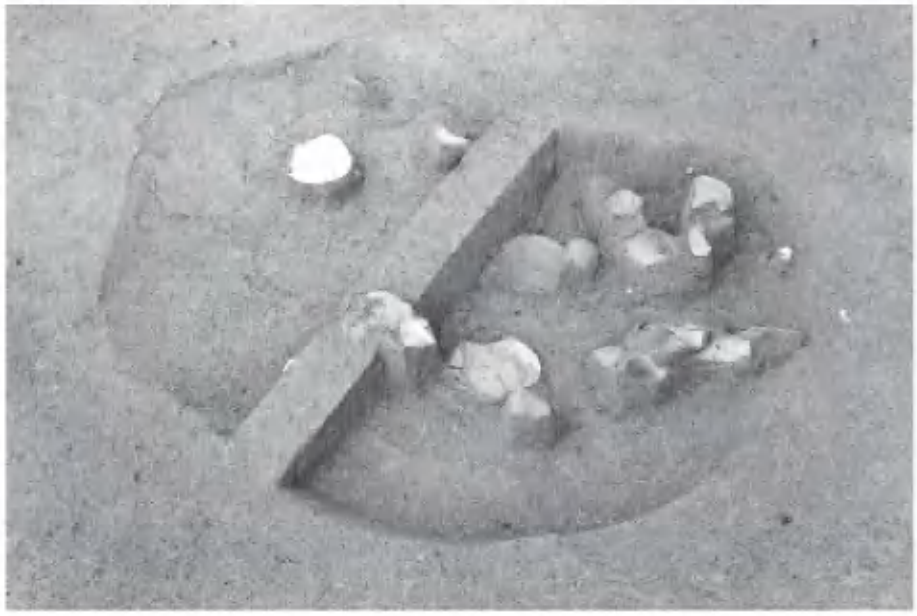
3　溝 11 ～ 13
（南東から）

金井戸遺跡

1　土壙１
（南東から）



2　土壙２
（南から）



3　土壙９
（南西から）

金井戸遺跡

1　土壙３（東から）

2　土壙５（南西から）

3　土壙８（西から）

4　柱穴列２－Ｐ２（南から）

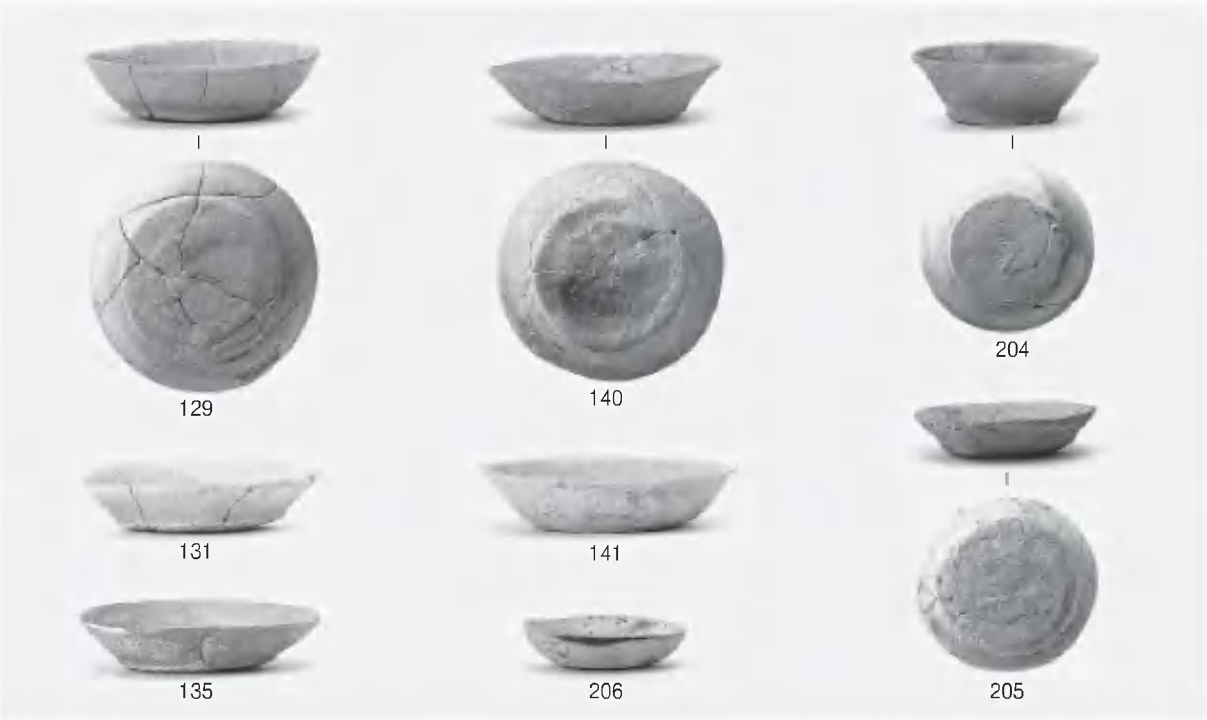
5　土錘出土状況（南から）

1　土壙 1 出土土器

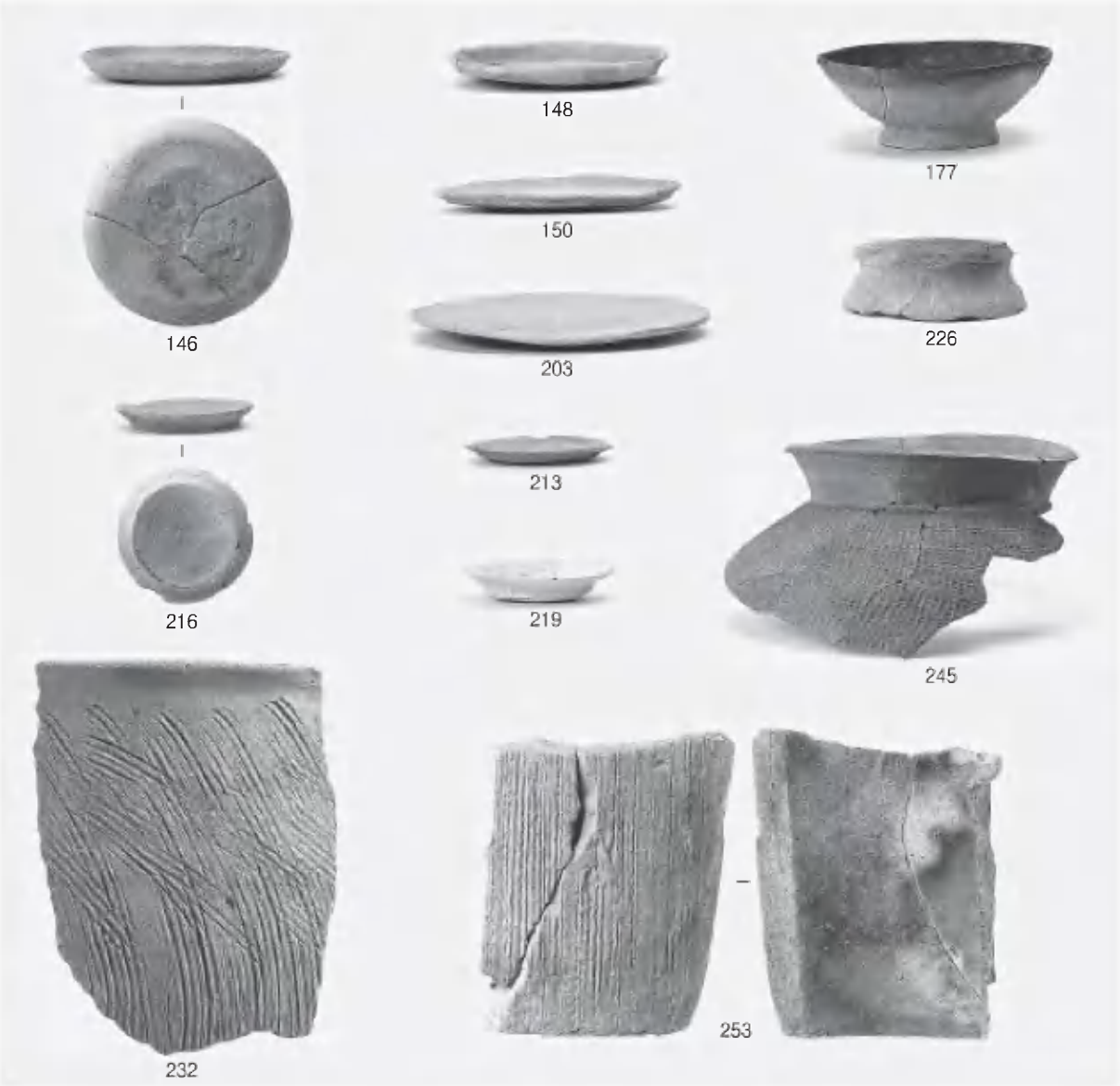
2　遺構内出土土器・瓦

金井戸遺跡

1　遺構内出土土器

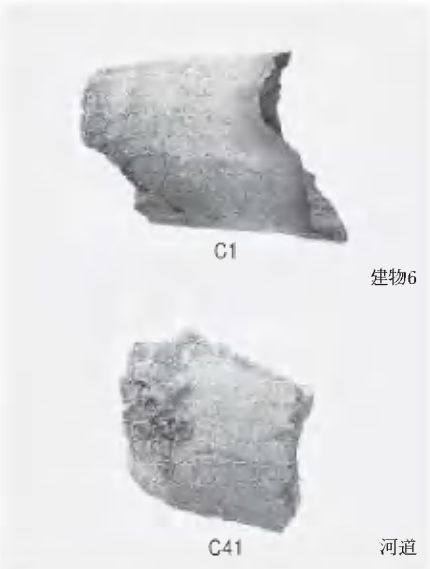


2　遺構に伴わない遺物①



1　遺構に伴わない遺物②

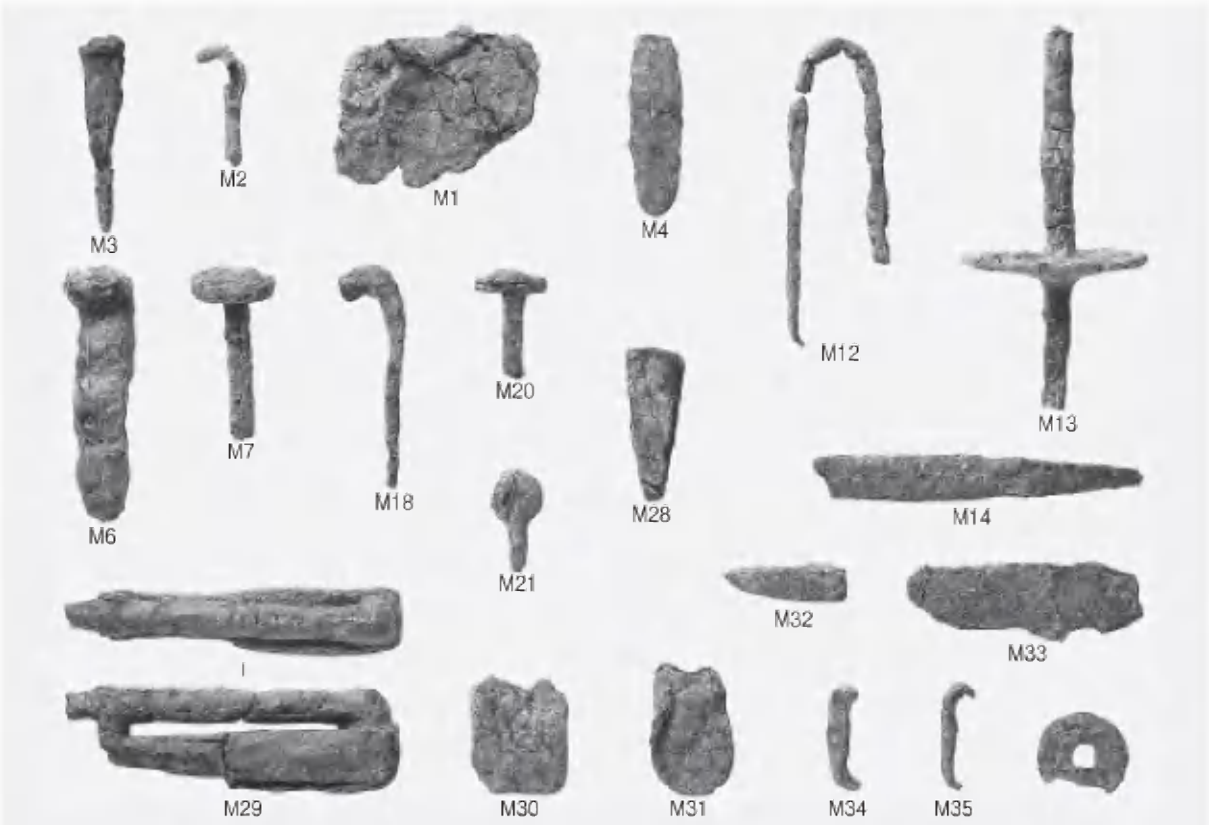
2　土錘



3　羽口

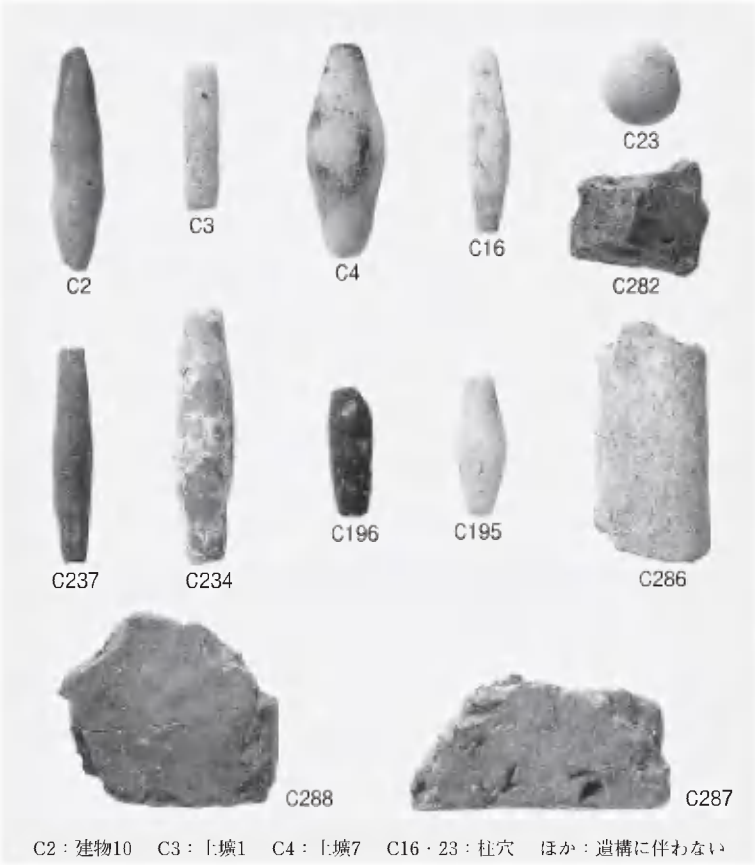
図版 16

金井戸遺跡



M1～3：建物6　M4：土壙1　M6・7・12・13：柱穴　M14：河道　M18・20・21・28～35：遺構に伴わない

1　鉄製品



C2：建物10　C3：土壙1　C4：土壙7　C16・23：柱穴　ほか：遺構に伴わない

2　土製品

遺構に伴わない

3　石製品

1　Ⅰ区古代全景
（東から）

2　Ⅲ区北半完掘状況
（南西から）

3　Ⅴ区完掘状況
（南から）

北溝手遺跡

1　土壙墓１
（南東から）

2　土壙１
（南西から）

3　土壙２
（西から）

北溝手遺跡

1　溝１
（西から）

2　溝２
（南東から）

3　土器溜まり２
（南から）

北溝手遺跡

1　土器溜まり３
（南から）

2　河道２　Ⅰ区北壁
（南東から）

3　河道２　Ⅲ区北壁
（南西から）

河道１出土　弥生時代の土器・土製品

北溝手遺跡

古墳時代の土器

1　土壙１・２出土土器

2　遺構内出土土器・土製品

北溝手遺跡

遺構内出土土器

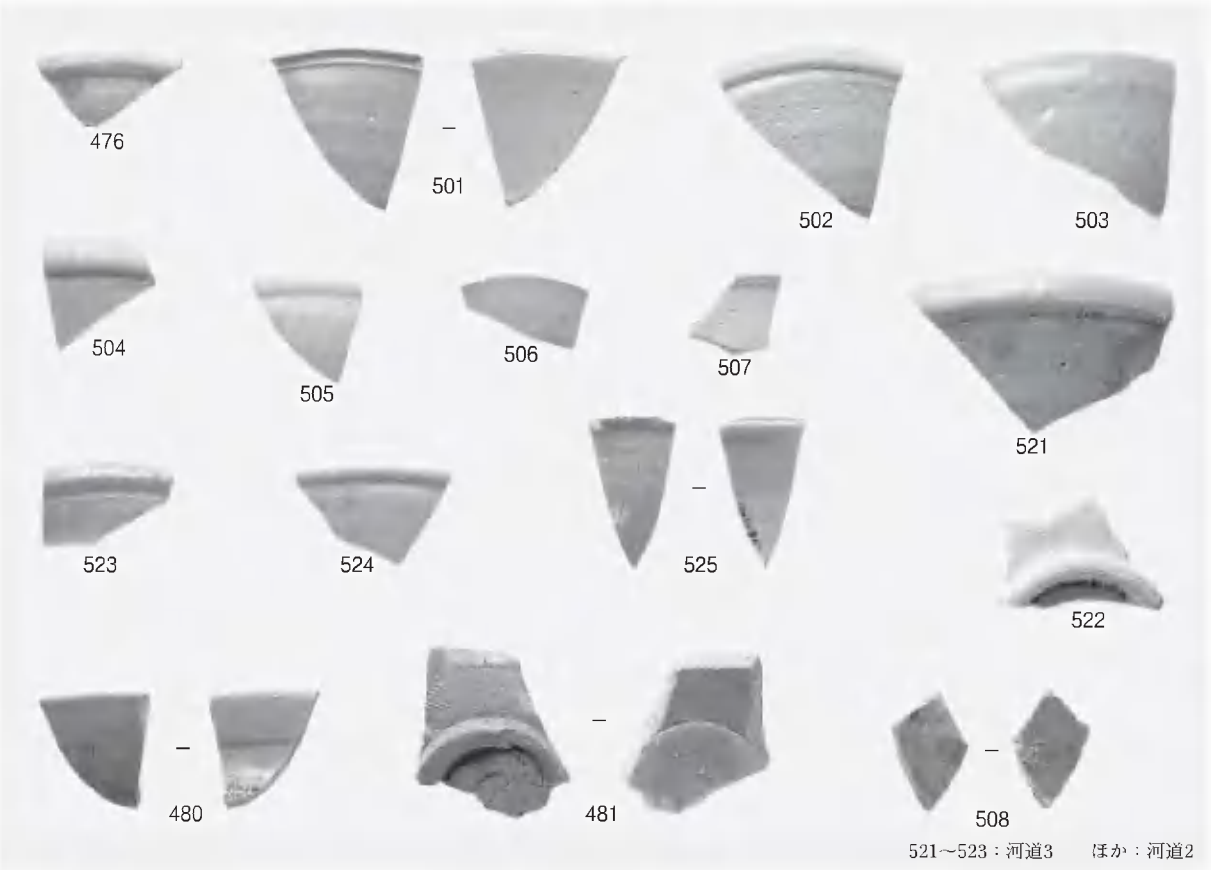
1　河道２・３出土瓦（上 1/2・下 1/3）

2　河道２・３出土石製品・土製品

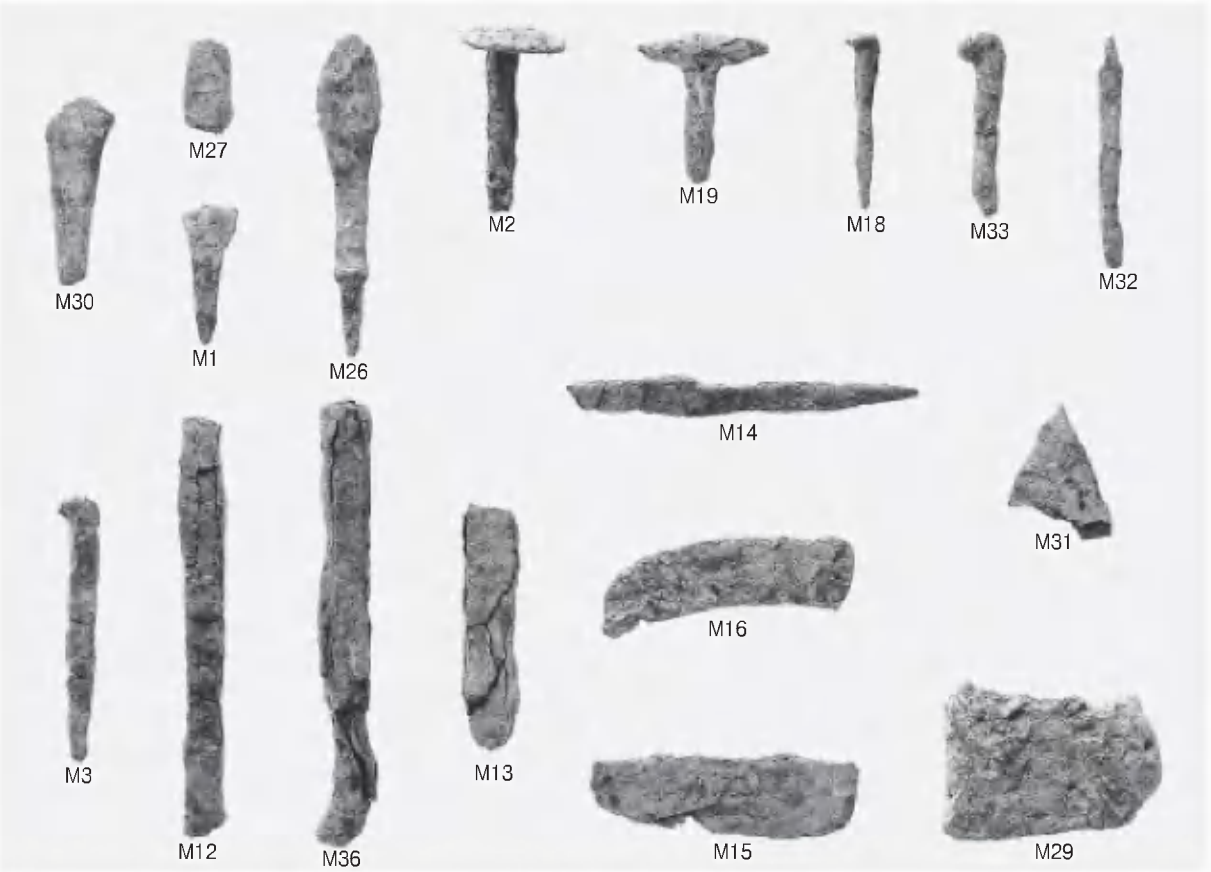
北溝手遺跡

1　土壙墓１出土青磁・青白磁

2　土器溜まり３出土土器



1　河道 2・3 出土青磁・白磁



2　河道 2 出土鉄製品

1　近世の陶磁器　　2　近世の土製品

3　近世の鉄・青銅製品

報告書抄録

ふりがな	そうじゃいせき　かないど いせき　きたみぞて いせき
書名	総社遺跡　金井戸遺跡　北溝手遺跡
副書名	一般国道180号総社・一宮バイパス建設に伴う発掘調査
巻次	1
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	２０９
編著者名	渡邉恵里子・宇垣匡雅・物部茂樹・石田爲成・白石純
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136　岡山市西花尻1325-3　TEL086-293-3211
発行機関	国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所 岡山県教育委員会
所在地	〒700-8539　岡山市富町2丁目19-12　TEL086-214-2220 〒700-8570　岡山市中山下2-4-6　TEL086-224-2111
発行年月日	西暦2007年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
	岡山県総社市（おかやまけんそうじゃし）	市町村	遺跡番号					
総社遺跡（そうじゃいせき）	総社（そうじゃ）ほか	33208	332080852	34°41′15″	133°46′15″	2001.4～2003.12	7,148	一般国道180号総社・一宮バイパス建設
金井戸遺跡（かないどいせき）	金井戸（かないど）		―	34°41′10″	133°46′23″	2002.12～2003.6	3,265	
北溝手遺跡（きたみぞていせき）	北溝手（きたみぞて）		332080806	34°41′12″	133°46′30″	2001.7～2002.1	7,378	

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
総社遺跡	集落	縄文時代	土壙・土器溜まり	縄文土器	
		弥生時代	土壙・溝・河道	弥生土器・打製石包丁・石鏃	
		古墳時代	溝	須恵器・土師器	
	居館	中世～近世	土塁・堀・塚	土師器・陶磁器・備前焼・土錘・古銭・鉄製品	国府氏居館
金井戸遺跡	集落	古代～中世	掘立柱建物・土壙・鍛冶炉・溝・河道	須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・石帯・海老錠・羽口・土錘・瓦	
北溝手遺跡	集落	弥生～古墳時代	土壙・河道	弥生土器初期須恵器・須恵器・土師器・分銅形土製品・砥石	
	集落	古代～中世	土壙墓・土壙・鍛冶炉・溝・河道	須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・青磁・白磁・青白磁・羽口・土錘・瓦・石鍋	

要約

総社遺跡では二重の堀と、堀に挟まれた土塁が検出され、地元に伝えられていた戦国武将国府市正の居館の一部である可能性が一層高まった。

金井戸遺跡は古代～中世の集落で、平安時代の掘立柱建物群が検出されたが、両庇建物が存在し、古代～中世の河道から石帯や海老錠、越州窯青磁などが出土していることから、官人層の居宅や官衙に準ずる公的施設の可能性が考えられる。

北溝手遺跡は金井戸遺跡の微高地の東端から低位部に位置し、金井戸遺跡の集落の縁辺が確認された。その縁辺部で検出された中世の土壙墓には中国製磁器が豊富に副葬されていた。一方、基盤層から弥生時代から古墳時代の土器が多量に出土し、全域が自然河道の流路内と想定される。特に初期須恵器の存在が、地域性も併せて注目される。

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 209

総 社 遺 跡
金井戸遺跡
北溝手遺跡

一般国道180号総社・一宮バイパス建設に伴う発掘調査１

平成19年３月20日　印刷
平成19年３月31日　発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市西花尻1325-3

発行　岡山県教育委員会
岡山県岡山市内山下2-4-6

印刷　サンコー印刷株式会社
岡山県総社市真壁871-2

古紙配合率100%再生紙を使用しています